
東方典型録

葛城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方典型録

【Nコード】

N77690

【作者名】

葛城

【あらすじ】

東方でエロハーレム書く。それだけ。東方熱が冷めるまで書きま
す。

エロはエロで別で投稿します。とりあえず、この話は高くて15R
まで。ハーレムです。それ以外はありませんが、ハーレムまでの道
は長いです。

ノクターンにも押話的なものを投稿しました。

ね。PV400万突破したみたいですね。これが貯金だったらいいのに

プロローグ（前書き）

ときどきグロテスクな描写が入ったりしますが、あくまでアクセントです。

プロローグ

今……俺は猛烈に後悔している。それはもう、義憤のあまり激怒したメロスのように猛り狂って夕日に向かって走り出してしまわくらいだった。激流の川、襲いかかる山賊、心を打ち砕くセリヌンテイウスの弟子にだって、これほどのダメージを負わせられないだろう。そう思える程だ。

多分、俺と同じ境遇になったやつは、同じことを思うだろう。だって、そうだろう？

エロ本買った帰りにトラックにはねられたんだから。

しかも買ったエロ本が、女子高生万歳とかいうタイトルだという、いらぬオマケまで付いていたりする。

……まあ……あれだ。
うん。

これが先日買った、パンチラ万歳だったら後悔と自責で3回ぐらい自分から命を落としかもしれん。いや、落とすね。

……あ、いや、違う。言いたいことはそういうことじゃないんだ。うん。別にパンチラだとか女子高生とか、そういう話をしたいわけじゃない。好きだけど、今はそのことじゃない。

俺、トラックにはねられたんだ。

……いや、嘘じゃないって。夢でもないって。

見てしまったんだもの。こう、血だらけで倒れている自分とか、手足があらぬ方向に曲がってる自分とか、仰向けになっているのに後頭部しか見えない姿とか、見てしまったんだもの。

……これが幽体離脱なんだなって思ったら、視界がぼやけてきてさ。

そうするとき、色んなことを思い出してくるわけ。とつくの昔に死んだ親父のこととか、昨年先立った母ちゃんのこととか、半年前に逝った祖母のこととか。

みんなで行った遊園地のこととか、泳ぎを覚えてもらったこととか、誕生日に作ってもらった特性おはぎとか、色んな事が頭に浮かんできて……。

ああ、そうか。俺も親父や母ちゃんや婆ちゃんのもとに行くのか……って、不思議と達観した思いで流れに身を任せていたら……。気付いたら今の状況になってしまったわけ。

え、今の状況？

右、岩。

左、森。

後ろ、森。

前、平原。

地面、土と雑草。

空、雲一つない晴天。

俺、すっぱんぼんの泥だらけ。

……うん。意味が分からない。今もし、俺のものをしているやつがいたら、まず俺の状況を把握出来ないだろう。俺だって出来ない。出来たら凄い。

本当なら俺自身夢だと思いたいけど、これって夢じゃないんだよね。

今、こうやって誰かに話すようにしているけどさ、実際は土に書いているんだぜ。こう、木の枝でガリガリって……傍には誰もいないんだぜ。

本当は紙に書きたいけど、紙が無いんだから仕方がない。

まあ、何が言いたいかって言うただね……。

「……」

どうやら、俺はまだ家族の元へ行くことはないみたいだ。

プロローグ（後書き）

15分で書いたプロローグ。

あんまり東方知らないけど、慧音のおっぱい揉むまで頑張る。

そのあとは輝夜のちっぱい揉むまで頑張る。

次に早苗のおっぱい揉むまで頑張る。

おっぱい頑張る。

超古代編 二二二、と二二だ？（前書き）

とりあえず、きょうは二二二まで。

とりあえず、いつまでも現実逃避するのは止めよう。

そう考えた彼は、地面に書きなぐった自己逃避から腰を上げた。

そして露わになる男の証。英和語で書くとペニス。日本語で書く
とちんこ。ば、じゃないよ、こ、だよ。

隅々まで解放された自らの身体を見下ろして、彼はため息を吐いた。

正直、彼は今、自分が置かれている状況が分からなかった。トラ
ックにはねられ、走馬灯らしきものを拝見し、死後の世界へ……と
覚悟を決めた瞬間、この状態だ。夢にしては現実的で、現実にして
はあまりに非現実的。裸足から感じる生温かい土の感触と、肌に感
じる太陽の暖かさが、かろうじて彼の判断を、ここが現実である
と思わせた。

はつきり言って、パニックを起こさなかったことが奇跡に近かつ
た。かろうじてパニックを起こさなかったのは、ひとえに命の危険
を感じさせる危険性を感じなかっただけではなく、彼が大人でも子
供でもない半端な年齢であったと同時に、平和ボケした日本人だっ
たからだろう。凝り固まった頭でもなく、柔らかすぎる頭でもない、
グミ程度に柔らかい頭だったことが幸いし、またパニックを起こし
たところでどうにかなる状況ではないと判断できる程度に年齢を重
ねることが出来たのが要因だった。

「それにしても、ここはどこだろうか？」

遠い、遮るものが無い、彼方まで見通すことが出来た地平線は、
まるで一本の線を境に別の世界のように彼の眼には映った。水平線
からは水色。そこから下は土色の大地がどこまでも左右に広がっ
ており、見続けている吸い込まれそうな程に美しかった。

そして茶色の大地。よく見れば、ところどころに見える緑色の植
物……大きいもの、小さいもの、花を咲かせているもの、種らしき

ものを出しているもの、数えきれない緑が彼方まで広がっていた。身体に感じる生ぬるい風。ときおり感じる冷たい風は思わず身震いしてしまうほどで、おそらく温められた地面の空気に混ざりきれなかった大気の風が、この不思議な風を生みだしているのだろう。

「……綺麗だ」

地平線。言葉にすれば、たった三文字だ。だが、彼の頭にはそれ以上の文字で埋め尽くされていた。

「……綺麗だ……」

今まで写真と言葉ぐらいしか知らなかったが、この日、彼は初めて、言葉に表せられない、美しさを、その目で見る事が出来た。

美しい。

その言葉だけが、彼の胸にあつた。

その言葉以外に、彼の胸の内にあるものを、脳裏を埋め尽くすものを表現できることが出来なかった。

この光景を。この景色を。この美しさを、どう表現すれば良いのだろうか。

美しい。

その三文字以上に、想いを現すことが出来る言葉を、彼は見つけられなかった。美しい、その言葉では足りず、その言葉以上にじっくりくる言葉が見つからない。もどかしさが、とても堪らなかった。

そんなときだった。ポーン、とクイズ番組で使われそうな効果音が耳に飛び込んできたのは。

『美しいと思えるモノを30分見続けました。洞察力、美感力のレベルが上がりました』

機械音声というのだろうか。抑揚のないその言葉が頭の中を反響

した。背筋に走った悪寒に思わず肩をすくめた。

「だ、誰だ！」

振りかえって、左右を確認する。何も、いない。

『ステータスを確認しますか？』

「！？」

だが、声は確かに存在した。またも頭に響く抑揚のかけらもない声。

「どこだ、どこにいる！？」

返事は返ってこなかった。闇雲に腕を、足を振りまわして右に左に上下に視線を向けるも、それらしいものは何も無かった。

なんだ……？

額に噴き出た脂汗を手で拭いつつ、彼は首をすくめた。痛いくらいに高鳴る心臓が、煩い。自然と震えてくる両足に力を入れつつ、彼は辺りの様子をうかがった。

油断した。そう、彼はまさしく油断していた。凶器もない。被害を被りそうなモノもない。だからひとまず安心した……なぜ？

知らない場所に知らないうちに居るということそのものが、まず非常事態なのだ。知らない場所に知らないうちに居るということは、知っている場所、地理が分かる場所に移動することが困難だということだ。

しかも、今の彼は裸だ。つまり、身を守るものどころか、連絡手段を取ることが出来ない。助けを呼ぶことが出来ないのである。ということとは、これから起こる何らかの事象を自らの力のみで対処しなくてはならないのである。

そのことによろやく思い至った彼は、両手の拳を握りしめて、腰を下げた。いつでも攻撃できるように、いつでも逃げられるように。ろくに鍛えたことのない身体ではまともに行動できるかは分からないが、やらないよりはましだ。彼は大きく息を吐いて、次を待ち構えた。

……5分。

…… 10分。

……時間だけが過ぎていく。

そして、頬を伝った汗を四回拭ったとき、彼はほっと肩の力を抜いた。

「……はあ、びっくりした」

恐る恐る腕をまわして固く硬直した四肢を解しつつ、彼は大きくため息を吐いた。

「なんだったんだろう……あの声……姿は見えなかったし……日本語だったし……」

考えてみると、声も何だか変だった。何と云うか、人の声……には聞こえなかった。聞こえてきた言葉は人の言葉だったが、どう言えればいいか……そう、アナウンスだ。あの機械音声のような抑揚のなさ、妙に気持ち悪かったような……。

そういえば、あの声って、なんて言っていたっけ？

ステータスを……なんだっけ

「ステータスを……ステータスを……確認……だって、うあわ!？」

その瞬間だった。彼の眼前に半透明の文字が現れたのは。

……どうやら、まだナニかあるようだ。

超古代編 二二二、どこだ？（後書き）

おっぱいまで頑張る。

何が何だか分からない。(前書き)

典型って、つまりテンプレート。

このお話は、テンプレートです。王道ではないよ。

何が何だか分からない。

彼には何が起きたのか分からなかった。というより、今の状況そのものが分からないので、何かあった、というより、また、の方が正しいのかもしれない。

それは、なんというか……文字だった。もつと正確に表すならば、半透明な板にこれまた半透明の黒文字が、書かれていた、ということだ。

パソコンのディスプレイだけを抜き出したような、SFじみた光景が、眼の前に存在していた。もし、これが人で溢れかえっている東京ビッグサイトだったら、話は変わっていただろう。2D、3Dを超えた、特殊メガネを使用せずに3Dに捉えることが出来る立体映像……彼がもしそれを住み慣れた自分の家で知ったら、驚いて、興奮しただろう。

それはそうだ。なにせ、いまだ3D技術は特殊メガネを通さないと3Dとして見る事が出来ない技術なのである。そんなフィクションの産物が目の前に現れたら、驚きに目を見張ったに違いない。そして、そのフィクションは、間違いなく彼の目の前にあった。

「……………」

彼には首を傾げることしか出来ず、傾げたところで目の前の光景が変わることもなく、半透明のディスプレイの向こうに見える雑草が風に揺られていた。呆けているこちらを馬鹿にしているように見えた。

「……?」

考えたところで答えは出ない。もとより、答えになる基準も無ければ知識もないのである。答えが出ないのは当たり前で、考えるだけ無駄だった。

けれども、彼は考えた。それは、あまりにいまさら過ぎる行動だったが……。

非常事態に次ぐ異常事態。そして極めつけのコレ、だ。いくら平和ボケした日本人とはいえ、さすがに不用意に手を出さず、近づかない程度の警戒心は湧きあがってくる。

ここにきてようやく彼は、事象を思考して考えることに思い至ったのである。

「……………」
目線だけは決して目の前のディスプレイから離さずに、腰を下ろす。手探りで小石をそっと拾い上げると、彼はディスプレイに向かって小石を投げた。

スウット、小石は吸い込まれるようにディスプレイに溶け込んで……………。

そのまま突き抜けて、向こう側の地面を転がった。

「……………？」

「だい……………じょうぶ、か？」

……………変化は、無い。小石が跳ね返ることもなければ、弾かれることもない……………はず。

じりじりと擦り足忍び足で、ディスプレイへ足を進める。

もうちょっと、あと少し、もうすぐ……………手が、届く……………届いた。

伸ばした指先が……………ディスプレイ……………らしきものに、触れた。

その瞬間、ポーンと電子音が耳の奥で反響すると同時に、表示されていた文字が変わった。指先からの感触は無かった。触れた場所から広がった波紋が、指がディスプレイに触れたことを教えてくれた。

「ひい」

ただ、変な声が出てしまったことは仕方ないだろう。たとえばそれが死に掛けたひな鳥のように気持ち悪く目障りだったとしても。

飛び上がって……………文字通り、物理的に30センチ程飛び上がった彼は、首を竦めて距離を取った。

し、心臓に悪い！

せつかく落ち着いてくれた心臓が、再び元気になってしまった。適度に頑張るのなら彼自身大歓迎だが、頑張りすぎるのはお断りしますと言いたいと、彼は混乱した頭で思った。

触れた指先を何度も見つめて異常が無いかを確認しつつ、彼はもう一度歩を進めて、ディスプレイへと歩み寄った。怖い、というより、驚きが彼の歩を鈍らせた。

人間、想定外の出来事には弱いものだ。とくに、また声でするのではと身構えていた分、それ以外の音がしたので余計だった。

「……あれ、俺の名前が書いてある」

恐る恐るディスプレイに顔を近づけた彼は、そこに書かれていた自分の名前に眉根をしかめた。

なぜ、ここに自分の名前が書かれているのだろうか？

しかも、名前だけではなく、その下にも幾つかの項目らしきものが表示されていた。

【体力	：	76 / 83	】
【気力	：	0 / 0	】
【力	：	7	】
【素早さ	：	4	】
【耐久力	：	5	】
【装備・頭	：	なし	】
【　・腕	：	なし	】
【　・身体	：	なし	】
【　・足	：	なし	】
【技能	：	なし	】
【スキル	：	洞察力 レベル1	】
【	：	美感性 レベル1	】

……なんだ、これは？

首を傾げつつ、彼は表示された文字を見つめた。この日彼が何度首を傾げたのかは分からないが、おそらく生涯最多だろう。

「……ううん？」

ふと、彼はデジャビュを覚えた。

前にも……ずっと昔、どこかでコレと似たようなものを見たことがあるような気がする……そんな違和感が、彼の脳裏を薄霧のように湿らせていき……、洗った。

あ！

声が出なかつたのには、とくに意味はなかつた。ただ、驚きのあまり手を口元に当てただけで、もし当ててなかつた確実に大声を出していただろう。

「これ……」

思いだした。これって確か、小学生のとき遊んだゲームのステータス画面と全く同じだ。毎日毎日怒られるまで熱中したゲームの形式と全く同じだ。

脳裏に広がっていた薄霧は晴れ渡っていく。理解すれば瓦解は早く、むしろなぜすぐに思いだせなかつたのかが分からないくらいだった。

その冴えた頭が、ふとした疑問を打ち出したのは、当然だったのかもしれない。

「装備ってことは……えっと、確か……」

このステータス画面に描かれているのは自分だ。その自分が裸なのは、身体の項目に何も装備していないからで、装備さえすれば服を着ることが可能なのではないか、ということ、ならば、装備を変更できるのではないか、ということに思い至ったのは。

彼が熱中したゲームは、当時にとっては珍しく……というより、今も珍しいが、音声認識をゲームの設定入力方式に採用された規格外のもので、装備画面やウィンドウ画面を声でスクロールさせたり出来るものであった。

当時は専門雑誌などで大々的に広告されていたが、当時は音声入力自体がめずらしく、技術も見発達で、スクロールそのものもコントローラのAボタンと同じようなものでしかなかった。結局、音のON/OFFで判断する程度のものしか実装されなかった為、えらく購入者から不評を買ったというエピソードがあるのだが、今は余談だろう。

彼は、声を出した

「装備変更、身体、足」

【装備・身体	:	トレーナー	】
【	:	Tシャツ	】
【	:	足	】
【	:	ジーンズ	】
【	:	スニーカー	】

文字に変化が現れた。

「えっと……とりあえず、全部装備……って、うわ！」

音も無く、それどころか気配すら感じず、気付いたら彼は衣服を身に纏っていた。足の裏に感じていた砂粒の感触はなく、まるで初めから靴を履いていたかのような状態になっていた。しかも、靴下まで装備されている。けっこう、融通も利くようだ。

まじまじと自身の身体を見下ろしつつ、彼は再びステータス画面を見つめた。

【体力	：	7	8	9	2
【気力	：	0	/	0	
【力	：	7			
【素早さ	：	4			
【耐久力	：	5	+	3	
【装備・頭	：	なし			
【腕	：	なし			
【身体	：	トレーナー	+	Tシャツ	
【足	：	スニーカー			
【技能	：				
【スキル	：	洞察力		レベル1	
【	：	美感力		レベル1	

「……あゝ、うん……つまり……」
 どういうこと？

当たり前だが、彼の零した嘆きに、返事は無かった。

何が何だか分からない。(後書き)

はい、冒険フラグと勇者フラグが立ちました。嘘です。

テンプレートですので、俺TUEEEEEEEEEとかありません。
厨二病ではありません。あくまでテンプレートです。

結局、何もわからない。(前書き)

長いプロローグは終わります。

結局、何もわからない。

変化が無いように思えた景色も、時間と共にそれは現れる。例えば、空の色だったり、照りつける太陽の位置だったり、様々だ。

真上に輝いていた太陽は次第に角度を緩やかにしていき、晴天という言葉が似合う青空は、太陽が向かっていく西側から次第に鮮やかに燃えていく。

それがどんどん地平線に近づくとつれて辺りを赤く染め上げていく。

もうすぐ夕暮れ、という時間になったときには、衝撃的な出会いから、数時間が経過していた。

「よし、だいたい分かった」

彼はひとつ、パンと膝を叩いて、気合を入れた。

正解……という確証は持てなかったが、おおよそ、こうだろう、こうではないか、程度のことを知ることが出来た。

「ステータス表示、俺」

ポーン。電子音が脳裏に響いた。同時に現れるステータス画面。

この音は、ステータス呼び出し画面の時に流れる効果音、的なのだ。それが自分の頭中から聞こえることに気づくのに、いくらかの時間を費やしたのは、彼の秘密だ。

【レベル	： 1	】
【体力	： 40 / 92	】
【気力	： 0 / 1	】
【力	： 8	】
【素早さ	： 5	】
【耐久力	： 6 + 3	】
【装備・頭	： なし	】
【　・腕	： なし	】

- 【 ・ 身体 : トレーナー + Tシャツ 】
- 【 ・ 足 : ジーンズ + スニーカー 】
- 【 技能 : 】
- 【 スキル : 洞察力 レベル1 】
- 【 : 美感力 レベル1 】
- 【 アイテム : アイテム使用 】

「まず、ステータス表示、何々、で、対象のステータスを表示する。そして、気力……というのはよく分からないが、他はだいたい想像がつく。体力は文字通り……で、傷を負ったり、疲れると数値が減る、と」

視線を手元に向ける。そこには、血の滲む血線がいくつも肌の上を滑っていた。ポツポツと湧き出たいくつもの血流が、重力に従って肌の上を流れ落ちていく。怪我自体は大して酷くなく、傷口も深くないので、既に血はほとんど止まっていた。

といっても、怪我を負った当初はぼたり、ぼたりと流れ落ちる血液に、少し気分を悪くしてしまったのは、仕方が無かっただろう。あまりこれといって大きな怪我をしたことがない彼にとって、血が垂れて地面に落ちる程の出血でも、十分重症に思えた。

そして、その怪我を負った経緯だが、ステータス画面……これは、名前が無いのは不便なので、最もしっくりくる名前を考えてたら、便宜上、これが最もイメージに合ったことから彼が付けた表示された文字盤の名称である。

そのステータス画面を彼なりに調べた時、それは起こった。

「うわぁ！」

突如生じた右腕の激痛。衝撃が身体を動かし、思わずたたらを踏む。ズシンと腕に掛る重みを感じると共に、彼は痛みの元へ視線を

向けた。

「…………ウサ…………ネコ？」

そこにあつたのは、動物だった。ウサギとも見えるし、ネコにも見える、小動物が彼の右腕に噛みついていたのである。ウサギの顔に、ネコの身体、ウサギの尻尾を想像すれば、分かりやすいのかもしれない。

彼はステータス画面を調査することに熱中するあまり、まわりへの警戒を怠った。そのため、この小動物の接近に気付かず、あまつさえ噛みつかれるという愚行を犯してしまったのである。

「いたたたた！……！」

昔あつた脱臼など目ではないレベルの激痛が走る。爛々と鈍く輝く動物の瞳が、ちろりと彼を見つめる。途端、噛みちぎらるばかりに食いしばっていた歯が、さらに皮膚へ食い込み、ところどころむき出しになっていた動物の口元から鮮血が零れ落ちた。

く、食いちぎられる！

決断は、一瞬だった。彼は目の前の動物の首元へ左手をかけると、力いっぱい握りしめた。手加減など、全く考えなかった。手のひらに感じる体毛をかき分け、血管の脈動がある場所へ、思いっきり力を込めた。

「いだだだ！……！」

「…………！」

「ぐ、ぐうづう！……！」

「…………！」

「うづう！……！」

「…………！」

「んんん！……！」

「…………！」

「はあはあはあ…………！」

動物に噛みしめられた顎から力が抜けるまで、彼はひたすら首を絞め続けた

腕に出来た傷を眺めつつ、溜息を吐いた。血はようやく止まったが、見ていて気分の良いものではない。しかも、今は満足に治療を受けられる状況ではない為、万が一この傷が化膿して高熱を出してしまつたら、ひとたまりもない。

「体力がさつきより減つたのは、この動物に噛まれたことと、無理して絞め殺したからか……これが0になつたりすると、動けなくなるのだろうか」

最悪、死ぬかもしれない。

そんな言葉が脳裏をよぎつたが、声には出さなかつた。出すのが怖かつた。

その恐怖から逃れるように彼はわざと言い聞かせるように続きを口に出した。

「そんでもって、アイテムは、『使用する』」

ふわつと、彼の腕の中に、先ほど絞め殺した動物が現れた。

「なぜかは分からんが、殺した生き物は、『アイテム所有』で、消える。そんでもって、消えたアイテムを思い出しながら、『使用する』と唱えると、また現れる」

これは偶然分かつたことなのだが、生物は所有出来ないということ。それと、無機物でも土、とか石、とかでは漠然と過ぎるのか所有できず、手に持っている石、手に持っている土、など具体的にしないと所有出来ないことの二つ。

「所有物はステータス画面でアイテム欄で確認できる。次に、レベルは、おそらくゲームのやつと同じようなものだろう。多分、レベルが新しく表示されたのは、この動物を殺したことによって経験値が手に入ったことによつて、レベルアップしたから……ということか？」

なにぶん、答えと言える情報が何一つ無いので全て憶測にすぎなかつたが、おおよそ当たっているだろうと彼は自身を納得させた。

「状況を整理するとだな」

ちろりと唇を舐める。汗の塩っ辛さが舌先を痺れさせた。

「俺はトラックにはねられた後、幽体離脱的な経験をし、走馬灯らしきものを観覧し、その後はなぜか意識を持つて見知らぬ場所を目を覚まし、なぜか良く分からない力が能力かそんなものを手に入れて、これまたなぜか色々な偶然が重なって手に入れた動物を捌いて食べなくてはならない……ということ……に、なるのかな」

「ごそごとポケットを漁る。取り出したのは、どこにでも売っている100円ライター。」

「助けは期待できそうにない……そしてなぜか、俺は不思議と冷静を保っている。もう、本当になぜなぜが多すぎてわけわからなくなりそうだが……」

動物をアイテム所有で消して、振り返る。

とりあえず、腹ごしらえをしなくてはならないかもしれん。

彼は燃料になる枯れ枝を探す為、森へ向かって一歩踏み出した。

この日から20年。年を取っていないことに気づくのに掛った時間。

そののち幾年。彼の彼方の旅が始まることを、彼はまだ知らない。

結局、何もわからない。(後書き)

さあ、突然手に入れる超能力、伏線もなしに出る不老状態、なぜか超冷静。

テンプレートのオンパレードです。ここらへん、厨二表現するなら、ひゃっほう、もしかして俺ってトリップ！やった〜！でしょうけど、そんなことはありません。

分からないものは分からないです。なぜか冷静なもの、特別悲しい過去があるとかそんなんじゃないやありません。そういうものです。でないと話がいつまでたっても進まないのです。

そろそろ、キャラクターを出さないで。

それから……（前書き）

フビビ、サーセンw

それから……

「……うん」

そこらに落ちていた枝を使って、地面に数字を書いた。その文字、二十万。

思えば、長いようで、やっぱり長い日々だった。彼はこぼれそうになる涙を堪えて、そっと目元を拭った。

彼が浦島太郎のごとく、流浪の旅を始めてから、夕に20年は経った。

経ったといつても、正確な経過時間は分からない。なにぶん、時計は持っていないし、それに準ずるものも見つからなかったのだ。

一日一回。地面に数字を書く。一日経ったら、一つ足し。一日経ったら一つ足す。それを繰り返して、早20年。10、20、もしかしたら50ぐらい誤差があるかもしれないが、だいたい20年程……このよく分からないファンタジーのような馬鹿げた世界で、彼は当てもない旅をしていた。

その間に様々な困難が彼を襲った。

何日も続く寒波に文字通り冷凍されかけたり、日照りによって干物にされそうになったり、頭が二つある虎のような獣に食われそうになったり、崖から落ちたり、彼自身、よく今まで生きてこられたと疑問に思えてしまうぐらいの日々だった。

そして今日。彼は、自身が、かつての己よりもはるかに遅く、異質なものになってしまっていることに、薄々気づいていた。

まず、自身が年を取っていないことに気付いた。

切掛けは、見つけた川で身体を洗っているときだった。

必然だが、生きている限り、必ず排泄物が出る。オーラとか吸収して生きているとか、酸素だけで生活できるとかなら話は別だが、大多数の生物と同じく、食物を食べて水分を補給し、それらを消化及び吸収を行っていれば、残るは廃棄物。

まあ、うんこだ。

文明溢れる時代のように毎日身体を洗うことなど出来ない彼の、最も手早く確実に身体を綺麗にする方法は、水浴である。

そこでいつものように身体を洗っていた時、澄んだ水ときらめく太陽光が反射する自分の裸身を見て、彼は愕然とした。当時、彼がこの世界へ来てから数年の月日が経っていたというのに、皮膚のたるみや皺など、記憶にある自身の顔とほとんど相違が無かったのである。

もちろん、ここに鏡のような自身の姿を映し出す便利なものはない。ないが、それでも小じわの一つは出てもおかしくない程度の年月は、生きてきたつもりだ。これが彼の思い違い、恐ろしく長い夢でなければの話だが。

次に、各ステータス数値の上昇……レベルアップだ。

彼は今まで、数々の果物、植物、小動物、猛獣、化け物と戦って生き延び、その血肉を食らうことで、生き延びてこられたのである。その結果、彼の肉体は体脂肪18パーセントの中背中肉だったのが、ドン・ハワース並みの肉体になっていたのである。もはや、親が見ても同一人物だと思えない姿だ。

ステータスを見れば、その違いは顕著だ。

【レベル	：	37	】
【体力	：	178 / 212	】
【気力	：	50 / 57	】
【力	：	46	】
【素早さ	：	58	】
【耐久力	：	70 + 3	】
【装備・頭	：	なし	】
【	：	なし	】
【	：	なし	】
【	：	なし	】

【 ・足	：ジーンズ + スニーカー	】
【技能	：獣の本能・踏みとどまる	】
【スキル	：洞察力 レベル20	】
【	：美感性 レベル9	】
【	：逃げ足 レベル44	】
【	：自己再生 レベル3	】
【	：毒解能力 レベル15	】
【	：フラグ 時々発動	】
【アイテム	：アイテム使用	】

これである。自己再生は、負傷の治る早さだ。まあ、傷の治りが早くなつたな、と思う程度。逃げ足が一番高いのは、それだけ猛獣から逃げまくつたからである。

だが、決して彼を責めてはいけない。自分の10倍以上デカイ化け物に襲われれば、逃げ足ぐらいは速くなる。というより、速くならなければ食われて死ぬだけだ。

閑話休題。話がそれたので、そろそろ話を戻そう。

最初、彼が涙を流すことになつた原因。それは……。

「……村が……人がいる！」

ついに零れた涙を拭いつつ、彼は鼻をすすった。

そう、ついに彼は、人を見つけたことが出来たのだ。たとえそれが、葉っぱとか藁とかで出来た屋根だとか、全て木造建築どころか豎穴住居的なものだったとしても、彼には関係なかった。

それ以上に、彼は嬉しかった。自分以外の知性があるものに、飢えていた。動物に知性が無いとは言わないが、言葉を交わすことは出来ない。それが何より辛いことだった。

そして今、彼は村へと足を進めた。ある、一つの思いを胸にして。

「どうか……言葉が通じますように……」

間違つても、ウホ、ウホ、とか返されたら対応に困る。そんな、

どこか間違った思考を持ってしまったのも、20年間が彼を蝕んでしまったから。

そして、村についてから40分。とりあえず、言葉は通じなかった。最悪、ウホウホ言おうかと考えていた彼だったが、彼らは独特のイントネーションがある唸り声で会話をしているようだった。どうやら、言語というものは無いらしい。

しかし、今の彼にはそんなものはどうでもよかった。

桃源郷というものを、彼は真の意味で知った。

「は、鼻血が……うう、し静まれ、む、息子よ……」

あふれ出る鼻血を手で押さえつつ、彼は痛みを訴える下腹部に手を当てて隠した。そこは邪魔をするジーンズに抗議するように、ズキン、ズキンと脈動して痛みを訴えていた。

考えてもみてほしい。時代は堅穴住居だ。まだ、言語というものが無い。それどころか、住居……に関する知識も無く、せいぜい雨風を凌げる程度の粗末なものだ。裏を返せば、それしか作れない程度の知識レベルなのである。

人数は30人程度。子供：大人の割合が2：8。男：女の割合が4：6。

……もう、勘の良い人は気付いているのかもしれない。

「……乳……尻……毛が……ふるんふるん……ふささ……」

そう、丸出しである。

もう一度言おう。丸出しだ。包み隠さない、フリーダム状態。自身の人生でも数えるぐらいしか見たことが無い神秘の姿を、彼は眼を血走らせて見ることが出来る。

それは桃源郷。それは天国。

女性……名も知らない彼女達は、まだ羞恥心というものを持っていないのか、豊かに膨らんだ胸も、涼しげに繁茂した場所も、全く隠さないのである。

それから数週間。彼は村へ足を踏み入れなかった。

その理由は、凄まじい罪悪感と、次に目を合わせたとき、暴走してしまいかもしいれないと思った為だったりする。

それから……（後書き）

思いつきりセーブして書いた。後悔しかしていない。せいぜい、1
2Rぐらいかな。

まだ、まだエロは書けない。今書いたら、オリジナルエロだ。東方
キャラを出さなきゃ、話にならん。

時代の流れは速い(前書き)

小さいのは守備範囲外。やっぱり、大きい人じゃないと。

時代の流れは速い

数週間ぶりに村を訪れたら、竪穴住居から弥生時代になっていた。これを見ている人がいたなら、きつと何を言っているのか分からなくて彼に怒っただろう。だが、彼を責めるのは少し待つてほしい。だって、彼はそれ以上に分からなかったのだから。

考えてみてほしい。ちよつと国を離れて戻ってきたら、文明開化が始まっていた。そんなの、誰だって混乱する。彼も、当たり前のように混乱した。

上手い例えが思いつかなかったが、それ以上に上手い例えが思いつかなかったのを、許してほしい。

「……これは、夢、か？」

呆けた頭を二、三回叩いて、頬を抓る。だが、頬が赤くなるまで気合いを入れても、眼の前の光景が変わることは無かった。

「……どうみても、田んぼだよ……ねえ？」

彼の眼前。そこには、縄文時代には無かったもの……田園が広がっていた。

しかも、変化があるのはそれだけではない。農具として今まで使われていたものは、ただの木の棒であったが、彼の目に映っているのは、どう見てもクワとスコップだった。

さすがにまだ鉄製のものは作られていなかったようだが、現代知識を有する彼から見ても、はつきりそれが稲作等に使われる農具であることが分かった。

それだけではない。作物の貯蔵庫である高床倉庫がちらほら建造されているだけにとどまらず、弥生時代を象徴する、銅鐸らしきものが、作られていたのである。

稲作が始まるということは、つまり、縄文文明から、弥生文明まで、少なくとも見積もつても2000年以上の月日が流れた計算になる。

2000年。これがどれだけの年月か、分かるだろうか。隣の村

へ挨拶しようと思つたら、数週間はかかる程度の文明。西暦2000年は、地球の反対側へ10秒で連絡が取れて話が出る時代だと考えたら、その文明レベルの違いが顕著に分かるだろう。

この2000年自体、あくまで予測であつて、確実なものではないが、石から青銅器、鉄器に移行し、稲作文明を築き上げるまで、それだけの時間と知識を結集しなければならぬことに他ならない。けれども、やっぱり彼にはそんなことは関係なかった。そんなことよりもはるかに大きな問題が、彼の前に立ちはだかつたのである。「……ちくしょう、なんてこつた……」

地面に膝をつき、肩を落とす。傍目には土下座しているように見えたと、今の彼には構つていられる余裕はなく、ただただ胸に沁みる諸行無常を噛みしめていた。

「……あいつら、服を着ていやがる。お。俺の、乳、尻、ふとももが……ふささが……桃源郷が……癒しが、俺のユートピアが、消えてしまった……」

断じて、彼のものではない。そう、誰のものでもない。みんなのものでもない。彼女達のものである。どうやら、長い一人身生活は、不思議な妄想を彼にもたらししてしまったらしい。

彼のその苦しみにも似た悲しみは、誰にも理解されることはない。だが、決して非難されるものでもない。考えるだけなら、罪ではないのである。

そうして地面に額を擦りつけるように倒れていること、20分。大きな期待が去つた後に残されたのは、むなしい性欲だけだった。というか、もはやそれは性欲だったのだろうか。彼にも、それが性欲なのかどうか、分からなくなつていた。

……せつかくだから、行こう。

いつまでも土下座していても、変わらない。これでもし、桃源郷に変わるのなら彼はそれこそ餓死寸前まで土下座するだろうが、真似をしてはいけない。彼は長年の生活で疲れてしまったただだから、そつと生温かい目でみてやろう。

そう思い至った彼は、肩を落としつつ、物々交換用の食肉をステータス画面を使ってどこからともなく取り出しつつ、弥生文明へ重い腰を上げた。

不思議と、言葉は通じた。なぜか分からなかったが、彼は気にしないことにした。

食肉は思っていたよりも高く売れた。この時代に貨幣があることに驚いたが、物々交換では足元見られるかもしれないし、よそ者である自分に対して何かしらの弊害があると予測していた彼にとって、貨幣があるのは安心する出来ごとだった。

少なくとも、貨幣は一定の価値として、対価の代わりに支払われるものだ。これなら、よそ者である自分でも、この貨幣さえあればある程度の弊害を受けなくて済みそうだと、彼は思った。もつとも、お金の単位はいくつか食べ物を買ったおかげで分かったが、物価が良く分からなかった為、ぼったくられた可能性は否定できなかったが。

「服は着たし、恰好もOKだし、身体も洗ったし、髪はなぜか伸びていないし、髭はまあ、そんなに伸びていない。うん、それなりなみてくれかな」

身振り手振りとおまけの胡散臭い笑顔で何とかこの時代の衣服を手に入れた彼は、さっそく着てみることにした。

ここに、弥生バージョン、俺。が、完成した。

「それにしても、あの店のお姉さん、美人だったな……胸もでかかったし、揉みたい、と真剣に思ったよ。実際に揉んだら、袋叩きになっただろうけど」

彼は凄く機嫌が良かった。それはもう、他人から見たら迷惑にしか思えないぐらいに、機嫌が良かった。

なにせ、20年だ。生まれてから大人まで、一通りこなしてしまっくらいの年月を、一人で過ごしてきたのである。

誤解の無いように言うておくが、彼は決して一人が好きでもなければ、今のように女と見れば興奮して固くなってしまふ男でもない。どちらかといえば奥手で、異性に対して消極的な態度しか取れない、いわゆる草食系男子というやつだった。

だが、月日が変わった。思い返してみてもほしい。彼は、何の予告もなくこの縄文もとい弥生時代みたいな世界に来たのだ。それこそ、別の世界に行つてハーレム築いてエロエロしてやるぜ、とか、考えてしまいがちな中学生でもない彼は、ことさら人の情に……他人との触れあいに飢えていたのである。

今までは良かった。生きるか死ぬか、食うか食われるかのハイパーサバイバルタイムを過ごしてきた分、そんな寂しさを感じることはことのほか無かった。

けれども、他人を見て、会話して、笑顔を交わせば、忘れていた寂しさと孤独が湧きあがってくるのが自然の道理。

そんな寂しい日々を過ごしていた彼にとって、久方ぶりに出会う他人。それも、異性は、他人に対する無意識の壁を捨てるには十分過ぎるものであった。しかも、美人なのだから余計に壁が薄くなる。そんな彼である。キョロキョロと田舎者のごとく周囲を見回し、ニヤニヤ笑つていけば、自然と他人は気味悪がつて距離を取る。

そのことに全く気付かない彼は、右に左に人の波を通り抜け、住居を抜け、森を抜けて、我に返つたときには、今まで見てきた住居よりもはるかに大きく、はるかに豪華な竪穴住居が眼前に広がっていた。

「うへへ、でかいなあ……」

そう感想を漏らした瞬間だった。彼の脳裏に閃光が走つたのは、ゾワツと冷や汗が背筋を流れおちていく。思わず、肩を震わせた。

「……帰ろつ」

獣の本能、発動。

この技能の全容は、まだ彼にも分かつていない。いつのまにか身につけていたこの技能は、あらゆる事態の前に必ず現れる、警告の

ようなものだ、彼は思っている。

あるときは横から飛び出してきた毒蛇の牙。

あるときは突然起きる突発自身による地割れ。

それらの気象的、故意的な災害、敵意に直面するとき、それは起こる。自身に危険に近いものが近づいたとき、この技が発動し、彼に危険を知らせるのである。

ナニか、嫌な予感がする。そう、ナニか、とてつもなく面倒な事態になりそうなの……。

「もし、その方」

踵を翻してまわれ右しようとしたとき、その声が静かに響いた。

鈴を転がすような、耳触りの良い、女の子の声だった。

失礼に感じるぐらい、彼の肩が上下する。獣の本能は、自身へ激しくアラートを鳴らしている。

外れてください、と願いつつ彼は自分以外の誰かを探して首を振った。だが、辺りに人の姿はなく、それどころかネズミの気配すら感じなかった。

「こら、貴方以外の誰が居るといふの。そんなくだらないことしてないで、こつちを見なさいな」

少女の……おそらくだが、この声の主は少女だ。それに、少し力が入っている。

元来奥手で臆病である彼は、慌てて背後へ振り返った。

「あ、やっと振り返りましたね」

そこには、美少女が居た。白銀というのだろうか。艶のある青みがかかった白髪が、身じろぎのたびにわずかに揺れる。彼が今まで見てきた中でも断トツで一位になれそうな美少女だ。適度に高い鼻、遠目からでも分かる滑らかな肌はどこまで美しく、ほんのり赤く染まった頬があまりに愛らしかった。

少女は、ニコリと笑って、軽く頭を下げた。

「こんにちは、旅のお方。私の名は、八意永琳。そんなところで立ち話もなんでしょう、茶を用意させますので、旅の話をお聞かせく

ださい

「そう一息に話した彼女、八意永琳は、ちよい、ちよい、と手を振った。」

時代の流れは速い（後書き）

やっとえーりん登場。ちびえーりん……お断りします。
こまちち……いつになったらたどり着けるのやら。

女性に年の話は禁物です（前書き）

もはや、完全オリジナル。

女性に年の話は禁物です

どうしてこうなった。どうしてこうなった。

彼は今、馬鹿になれば楽になれるかもしれないと、わりと真剣に考えていた。人生、いかに馬鹿になれるかが、幸せの道だと、どこかの本で読んだことがあることを、思い出していた。

ああ、懐かしい現代文明の記憶。毎日シャワーを浴びて、お腹がすいたらご飯を買いに行き、週3回はカップラーメンを食べていたあの頃。思い返してみると、食べ飽きていたラーメンの味が、こんなにも心を慥らせる。

ほぼ原始人レベルの生活をしていた彼は、改めて現代の食文化の素晴らしさと、日本食の素晴らしさを深く噛みしめていた。

そう、あれは……

「そう、あの猛獣を倒すことが出来る者がいると、風の噂で聞きましたが、まさか貴方だとは……もし、それはやはり、お強いのですか？」

過去を回想していた彼の耳に、心地よい鈴音が響いた。

顔をあげると、口元に手を当てた永琳が、大きく見開いた眼を向けていた。

興味津津。目は口ほどに物を言うところがあるが、確かに永琳の瞳には無邪気な色が宿っており、好奇心の塊が水晶体の代わりに入っているのではないかと、彼は思った。

永琳に現代のことを隠しつつ、こちらへ来てからの日々を話してから、早3時間。少しずつ長くなっていく並木の影に目をやりつつ、彼は答えた。

「はい、大変お強いです。それはもう、対面したら3回ぐらい走馬灯を垣間見ってしまうぐらいの強さです」

「まあ、走馬灯を？ ふふふ、旅人様は面白い例えを致しますのね。家臣のものに見習ってほしいわ」

「……うん、それは止めた方がよろしいかと」

「あら、どうして？」

「私のような臆病者で無学な者の真似などしては、それこそ収集がつかなくなるではありませんか。それに、あなたのようなお人の部下になる人が、私のようになっては色々困ります」

「良いのです。どうせ、政など私一人で動かしているようなものです。彼らは私の言葉を聞いてそのまま動いているにすぎません」

「……そうなの？」

ピシヤリと言い放つ永琳の言葉を耳にして、彼は思わず聞き返した。

「ふふふ」

だが、彼女は彼の言葉に返事は返さず、蕾だった花が咲き誇るような、可愛らしくも美しい笑みを浮かべた。

……この、笑みが曲者だった。目の前の人物になぜか感じる警戒心に身震いしつつ、さっさとお暇しようとした彼だったが、気付けば住居の中に連れられ、気付けば彼女特性のお茶だという不思議な臭いのする飲み物を出されてから、幾ばくか。

そうして昔の話をしている途中、漠然とではあるが、彼には、なぜこの永琳という少女を警戒しているのか分かった。

この少女。とにかく頭の回転が速い。それでいて、自分が美人であることを理解し、それを最大限に利用しているのである。

こちらが帰ろうと思ったら、目ざわりにならない程度に近寄り、立ちふさがって、そつと住居へ案内する。こちらが何か話そうとする前に、はい、いいえ、で返答する言葉を投げかけ、一瞬思考を逸らしたときに、すつとお茶を目の前に置く。

会話をしている最中でも、ほんのわずかでも帰ろうとするそぶりを見せれば、そつと膝の上に手を置いて、それでいて身体は離す。内容を変えて質問し、時にはこちらから質問するよう会話を誘導する。

極めつけに、こちらの一拳一拳に身振り手振りで驚き、笑い、う

なずく。彼女から持ちかける話題の内容も簡単明瞭とくれば、はっきり言つて、下手な押し売りより性質が悪い。

なぜならば、帰ろうとする気力を根こそぎ奪っていくのである。それでいて、もう少し、もう少しだけ話したいと思わせてしまうのである。これが何一つ強制されているわけではないのだから恐ろしい。

「……さつきから何度か笑つておられますが、私に何かおかしいところはありましたか？ なにぶん、私は他人を笑わせることなど、とんと出来ない不器用な男です。何か理由があるのでしたら、教えてくださいださらないでしょうか？」

「ああ、御免なさい。怒らせてしまつたかしら？」

「いえ、そういうつもりではありません。ただ、不思議だな、と……」

彼なりに怒つたつもりはなかつたが、相手はそう取つたのだろう。さつきまで笑つていた永琳は、えくぼの浮かんだ頬を戻しつつ、眉根を下げた。

「御免なさいね。ここに来てから、ずっと貴方は私に対して畏まつた喋り方だつたでしょう？ ですから、貴方が碎けた返事を返してくれたのが嬉しくて、笑つてしまったのです。お気を悪くしませんでしたか？」

「……ああ、そういうことでしたか？」

「ほら、また」

永琳の頬がぷくりと膨れた。そんな顔ですら、愛嬌があつて可愛い。この村の美的感覚がどうなっているのかは彼は知らなかつたが、将来、そんじやそこの女性よりもよほど上等な美人になるだろうと、彼は思った。

服装を見ても、その美しさは際立っている。衣冠束帯という、彼の知識にある弥生時代の服装ではなく、プリーツスカートに近い衣装だった。紅色の模様が可愛い。

また、思考の奥へ入る。彼の悪い癖だ。20年程一人で暮らして

いた彼にとって、思考の渦に入るのは、寂しさで参らないようにする自己防衛だ。自然と、自分の世界に入る癖がついてしまったのである。

「もう、また」

ぷに、と、唇に柔らかくも固い、暖かい感触が、唇に触れた。

「……………」

「うふふ、柔らかい」

ぷにぷにと、押される唇。見ると、彼女の細くも白やかな指が、自身の唇に伸びていた。

……………。

「すぐまた畏まって……………普段通り話してくださいと言っているのに、どうしてそう畏まるのかしら」

「いや、だって、永琳さん僕より、うん千年は年上じゃないでふは？」

永琳の指が音も無く彼の口に潜りこんだ。

甘くて、しょっぱい。それが、彼の感想だった。これが人間の指なのだろうかと疑問視してしまうくらいに滑らかで、爪の固さが、ああ、これは彼女の指なのかと実感させた。

その指が、口腔内を縦横無尽に泳ぐ。上あご、下あご、歯の内側外側を磨くように、指の腹が滑って行く。頬を内側からツンツンと突くと、その形に浮き出る。それがおかしいのか、永琳は捉えどころのない、表情を浮かべた。

「女の……………」

目を白黒させる彼を尻目に、永琳は二本目の指を素早く口の中へねじ込む。そのまま舌を指で挟み、ギユツと引っ張った。

「年に関することで、いちいち言葉にすることじゃありませんよ」

「いふああふあつふああふああふああふああ！！！！」

「え、なんですか？ もっとしてほしい？ そうですか、頑張ります」

「ひはう、ひは、ふん！！」

右往左往した彼の舌は、最後に一際強く引つ張られると、ようやく解放された。

痺れにも似た痛みが、走る。舌の付け根部分が引きつる。涙で滲んだ瞳を永琳へ向けると、怒りで燃える瞳で返された。彼は目を逸らした。

そう、何を隠そう、目の前の少女は、実は彼よりも2000年以上長く生きているのである。ついさっき、永琳の口から直接そう言われたので、そうですか、としか答えられなかったが、それにしては見た目も雰囲気も、あまりに若々しすぎる。

見た目の年齢は、彼の目から見ても14〜5歳程度。雰囲気も、せいぜい20歳前半ぐらい……高くて、後半ぐらい。

いくらなんでも、それは嘘だろう。そう思った彼は、自身も20年程不老だったことを忘れたまま、永琳へ尋ねた。

「ああ、それは、住人の中に、あらゆる事象を加減速する力を持つた人がいるのです。その人の力で、私達が年を取るスピードを限りなく減速し、思考速度など、様々なことを加速させているのです」

私は、この力のことを、加減速する程度の能力と、名付けておりますが。

そう話す永琳の目に、ふと、哀愁のような何かが見えた……ような気がした。

「ふ〜ん、それでは、永琳さんにも、何か、その……能力とかはあるのですか？」

「……また、畏まって……畏まって話される必要性も分かってはおりますが、あんまり、畏まって話されるのは好きではありません」

そう言われても、こればかりは彼も譲れなかった。なんとというか、年上には敬意をはらえと教わった世代というべきか、ふとした時以外では、年上には自然と敬語でしか話せなかった。

そういった自分の考えを永琳に話したところ、永琳は少し悲しそうに眉根をしかめながらも、頷いた。

「まあ、仕方ありません。ところで、能力でしたね」

「はい。あるんですか？」

「知りたいですか？」

「教えてもらえるのなら、知りたいです。あ、教えたくないなら、無理にとはいけません」

途端、プクツと餅のごとく、永琳の頬がまた膨れた。

「……んもう」

「……なんですか？」

「そうやって、すぐ奥手になるのは駄目ですよ。もっと積極的に行かないと」

「……そう」

「そうです。そんなのですから、私みたいに一目惚れしてくれなきゃ、誰も相手にしてくれませんよ」

「ははは、それは手厳しい」

「ふふふ」

「ははは」

……ふと思っただが、どうして永琳は俺のことをこんなに好意的に扱うのだろうか。出会ってからまだ数時間だというのに。まるで2、3年程付き合った恋人同士の会話みたいだ。

そう、思ったが、言葉には出さなかった。永琳が何か聞き捨てならないことを話した気がしたが、そんなことはなかった。そのことで、永琳の口から思いため息が吐かれたことも、気にしなかった。

「ありますよ」

「……あ、能力？」

「はい。あらゆる薬を作る程度の能力、それが私の力です」

「……あらゆる薬？ 病気とか治せるの？」

「はい。薬なら、時間さえあれば何でも作れますよ」

ところで、惚れ薬なんてどうですか？

そう口にした彼女の目は、笑っていなかった。

女性に年の話は禁物です（後書き）

東方キャラって、一目惚れしたら遠まわしに告白したりしそう。それで、こっそり外堀を埋めて、気づいたら周りを囲まれていたとかそれなんて、うわ、なにをす

……………？（前書き）

これぐらいならKENZENかな？

直接的な描写はないし、せいぜい12Rぐらいだろう。

……………？

「はい、どうぞ」

「……………うん、ありがとうございます」

永琳から茶碗を受け取る。茶碗には、炊きたての白米が湯気を立てていた。手のひらにじんわりと伝わってくる暖かさが、嬉しい。

こういうとき、日本人として生まれてきたことを、深く感謝する。身の安全など、数え上げればきりがなが、白米が食べられること自体、嬉しい。

「みそ汁です」

「……………うん、いただきます」

「はい、いただいでください」

同じく渡された茶碗を、受け取る。それに息を吹きつけながら、そっと啜った。人によりけりだが、彼は汁から食べる派だった。

程良く熱された味噌汁が、舌の上を転がる。最初に、鰹だしの風味が口いっぱい広がる。次に、味噌の甘辛さが静かに広がっていき、時折大根と豆腐の風味を感じる。それらを堪能してから、一息に呑みこむと、その熱が喉元から胸へと落ちていき、お腹の辺りが、ほっ、と温かくなった。

美味い。一つ一つ手を抜かず、しっかり手間暇かけて作られたのが良く分かる味だった。

「アジです。今が旬ですので、とっても美味しいですよ」

「……………ありがとう」

そっと差し出された器を受け取る。そこにはきつね色に焦げ目を付けたアジが、載せられていた。丸々と太った魚の表面には薄くあら塩が振られており、質の良い魚脂の溶ける良い香りが食欲を誘った。

くう、とお腹が鳴った。聞こえてか、と彼が顔を上げると、そこには可笑しそうに笑っている永琳の姿があった。どうやら、ばっち

り聞こえていたようだ。

「大根おろしです。お醤油をどうぞ」

ちよこん、と器に盛られた大根おろしを善の上に置かれる。醤油の黒と大根の白のコントラストが美しい。一切れを箸で掬ってアジの上に載せる。じんわりと、大根おろしが焼き魚の熱で溶けて、一筋の水滴が流れた。

「……………」

視線を、感じる。魚を見つめていて永琳の顔を見ることが出来ない彼だったが、手元に注がれる凄まじい熱視線。その熱量は、能力「獣の本能」を使わなくても分かるぐらいだった。

一口分、大根おろしを崩さないよう気を付けながら、アジの肉を口の中へ放り込んだ。

美味い。思わず、彼の目が軽く開かれた。

同時に、永琳の目が眠そうに細まった。

ほとんど臭みのないその味は、この魚が新鮮であると同時に上質であることを明確に語る。頬が落ちるとはこのことで、絶品といえる美味しさであった。

「美味しいですか？」

電子ジャーから自身の器にご飯を盛った永琳が、彼へ尋ねた。

「美味しいです」

「そう、それは良かった」

「この味噌汁も出しが効いてて……何か特別な出しを使っただんですか？」

「あら、分かる？ 今日はいつもの鰹だしとは別に、鯖だしも混ぜてみたのよ」

「そうなんですか。いや、いつもの味よりも、後味に甘みがあったように思いました……いつもの好きですけど、こういうのも好きです」

「うふふ、そこまで喜んでくれるなら、作った甲斐があったというものよ。あ、そこのお醤油取ってください」

催促された醤油を永琳へ手渡す。

その時、永琳の手と彼の手が触れ合った。

「あ……」

思わず……といった調子で漏れる永琳の吐息。桜色に色づいていた頬が紅潮する。つややかな唇が結ばれると、掴まれた指先にきゅつと力がこもる。それはほんのわずかな違いではあったが、彼にはそれが良く分かった。

涙で潤んだ瞳が、彼へ向けられた。

まるで恋に恋する女子だ。ササユリの模様があしらわれた着物が、よく似合う。少女のように繊細で、見た目は淑女な永琳の姿は、彼の心拍サイクルを加速させるには十分過ぎる。

彼は、つられて紅潮してしまった自身の頬に恥ずかしさを感じつつも、そつと片手を醤油へ添えた。

「……醤油、落としますよ」

「あ、は、はい、すみ、すみません」

ハツと気を取り直した永琳は、慌てて醤油を受け取った。だが、その醤油を使う様子はなく、今しがた触れあった自らの手元を見つめて、うつとりと陶醉していた。

……その姿を見て、彼は改めて思った。

今日、ご飯の用意を頼んだかしら？ ということ。

なし崩し的に永琳の住む村へ定住してしまっただけから幾月か。文明の発展スピードは凄まじく、彼も200歳を超えるほどにまで年を取った。ただ、見た目と中身は変わらなかつたが。

時代もあつという間に進み、気付けば、文明は昭和レベルまで進み、最近では今のよう同じ釜の飯を食べ合う仲にまでなった。外出するときは必ず二人で行動し、それどころか外出しないときも、たいてい一緒の部屋で生活するぐらいまで親密になった。

今では町一の、おしどり夫婦と呼ばれる程なのだから、その関係は言わずもがな。実際、二人は初心な子供でもなく、彼とて永琳の味を知っているし、永琳とて彼の肌だつて知っていた。

だがしかし。そう、だがしかしである。

たとえ傍目には仲が良さそうに見えても、実は………というのは、良くある話だ。そしてそれは、彼と永琳の間でも同様だった。

「……………ずずず」

味噌汁を啜る。やっぱり美味いと、彼は思った。

……………実は、彼は永琳にご飯を作ってくれと頼んだことがない。

気付いたら、本当に、気付いた時、永琳がまるで妻のようになっていて、彼が夫のような位置づけになっていたのである。それこそ、彼は了承したことはないし、そもそも同居を許可した覚えはない。

だが、気付いたときには永琳の私物が住居の半分を占拠し、永琳の首には家の合鍵がぶら下がり、洗面所には永琳の歯ブラシが彼の隣に並んでいた。

おまけに周り近所全員が彼と永琳を夫婦と呼び、役所に行けば名字が八意になっているという、ある種のホラーみたいな状態になっていたりする。

永琳との関係……………それとて、彼は告白したこともないし、告白されたこともない。親密な運動を行うときとて、なぜかその日は身体が高ぶって妙に意識が朦朧となり、気付いたときには永琳と蛇のように絡み合うことになってしまう。

唯一、彼から永琳の手を握ったときは、凄かった。その日の夜はもう、くんずほぐれつ、手を、足を、身体を、唇を、舌を、全てを一つにせんばかりに互いを求め合った。こればかりは、夕食に出されたスツポンの生き血が悪かったと、彼は考えている。

そのときはスツポンパワーがあまりに効きすぎて身動きが出来なくなり、永琳の調査してくれた鎮静の効果がある香を焚いた程だ。結局間に合わなくて永琳に襲いかかってしまったのだが、これはあまり覚えていない。永琳もこのときはあまり覚えておらず、しばらく気まずい日々を過ごしてしまったことも、彼の記憶には新

しい。

ただ、気まずいと思っていたのは彼だけで、永琳が彼の知らぬところで舞い上がるぐらいに機嫌が良かったことを、彼以外の近所の人が知っているのだが。

だが、実際問題、悪い話ばかりではない。というより、悪い話はない。

年月が経てば経つほど永琳の頭脳は磨きが掛り、作れる薬の種類も今では万を超えてしまった。小さな頭に詰まった知識量は恐ろしく膨大で、奥が深い。1の疑問に、10の答えと100通りの道筋を教えてくるぐらいだから、その凄さが分かる。

交渉術など、もはや魔術のレベルだ。百戦錬磨の狸ですら永琳の前では融通の利かない幼子でしかない。

こうして永琳とご飯を食べ、どうしてこんな関係になったのかと思いついても、気付けば成るようになったと納得してしまうようになったのも、永琳との会話のせいだと彼は思っている。

なにか、自分は何か大きなことを見逃しているのではないだろうか？ そう例えば、永琳がおそろしく狂愛的なお人であるとか……。

永琳から差し出された箸を啜えつつ、彼は今日も永琳お手製の出し巻き卵を噛みしめた。

……………？（後書き）

永琳はきつと言葉で気持ちを表したりしないと思うんだ。

そう、綿で首をしめるがごとく、じわじわとその愛を染み込ませていく……………そういう乙女なお人であると私は思う。

というか、東方キャラはたいていそんな感じだとおもっかな。

どうやら、盛大な引っ越しが行われるらしい（前書き）

急展開なのは仕様です。いまだ東方キャラクターとか、どんだけ……。

どうやら、盛大な引越しが行われるらしい

道路が地面を走るものではなく、空中を走るものになったのは何時からだっただろうか。

クリーンエネルギーが消費エネルギーを賄える程に技術が発展したのは、何時からだっただろうか。

彼の住む町が、他の国と比べて桁違いの科学力を誇り、無限に思える寿命を持ったことを知ったのは、何時だっただろうか。

消費される全ての食糧、資材が、錬金術を応用した秘術によって生成できるようになったのは、何時からだっただろうか。

永琳があらゆる組織に呼ばれるようになったのは、何時からだっただろうか。

テレビの向こうにひっきりなしに現れるようになったのは何時だっただろうか。書店に永琳著作の本が並べられるようになったのは、何時からだろうか。永琳の作ってくれた出し巻き卵を最後に食べたのは、何時だっただろうか。

……最後に永琳と会ったのは何時だっただろうか。久しぶり過ぎて、彼にはすぐに思いだせなかった。

最近になって、他の国の人々を軽視する人たちが増え、逆に自分たちを神聖視する人が多くなった。そう彼が思い始めたのは、永琳と出会ってから、かれこれ数千年の月日が流れ、テレビの向こうに映る永琳の着る服が個性的になり始めたあたりの頃だった。

藍色と赤色が交互になった衣服とスカート。星座らしきものをあしらった模様と、博士を意味するらしい赤十字のマークが入ったキヤップは、この頃妖艶さを増した永琳には良く似合っていた。が、彼にはどうも、コスプレをしているように見えて、あまり彼女の服装に好評価はしなかった。

といっても、それはあくまで彼の感性から見てであって、むしろ永琳の服装は、流行の最先端であるらしい。

なんじゃそりゃ、と彼は思ったが、口にも態度にも出さなかった。もう、自分の年すら分からなくなるほどに長生きした彼は、年若い見た目とは裏腹に、ある程度空気というものを読めるようになっていたのである。

そんな彼の勘が、こう囁いている。褒めておけ、と。別に似合っていないわけでもないし、わざわざ悪く言う必要はない。それが、彼の結論だった。

思えば、最初の切っ掛けは、永琳の出した月移住計画なる眉つば的な、論文とすら呼べない空想話を聞いた役所の偉い人が訪ねてきたことがきっかけだった。

その日は、今でも彼は覚えている。小雨の降る、いやに寒い日だった。この日を境に、彼と永琳の関係は変わったのだらうと、彼は思った。

次第に、次第に増えていく役所の人たちに比例するように、永琳は彼の傍から離れていった。

最初はぬくもりを与えあう回数が減ったぐらいだった。次に、互いの唇が触れ合わなくなり、次に手が離れていった。柔らかかった永琳の声が思い出せなくなり、永琳の髪の毛の匂いを忘れたのは、玄関から永琳の靴が消えて2年が過ぎたあたりだった。

今では永琳と彼の家は、実質彼の家になっている。最後に永琳が使った歯ブラシも不衛生な為、捨てた。永琳が使っていたマグカップも、時々取り出しては洗ったりしている。

といっても、別段疎遠になっただけではない。永琳が受け持つ仕事の量が増えた為であって、永琳と喧嘩したわけでもなく、別れを切り出されたわけでもない。

ただ、ふと、一人家でお茶を啜っている時、彼は考えてしまう。もしかしたら、これが元々の関係なのかもしれない、と。

思い返せば、永琳と彼の関係を示す確固たる証は何一つなかった。繋がっているときも名前こそ呼ぶも愛を綴ったことはなく、証を送ったこともない。永琳とて、彼の名前を呼びこそすれ、それらしい

言葉を永琳から聞いたことが無い。

何ヶ月かに一度、永琳が帰ってくる日も同じだ。それこそ玄関を開けると同時に貪るように舌を絡め、彼の衣服を破り捨てて上に乗ってくることはあっても、はつきりと口に出されたことは無かった。この星に隕石が接近していることが分かり、月移住計画が現実のものとしてプロジェクトが結成され、永琳が計画推進チームのリーダーとして、家を離れざるを得なかったときも、同様だった。

最後の最後まで暴れて、泣いて、縋って、離れたくないと彼に号泣して喚いたのは、何時だっただろうか。傍目にも愛する人から離れたくないと言外に述べる彼女を見て、彼は思いで胸が張り裂けそうになった。

あのときは本当に大変で、彼も彼女を説得するのには時間が掛った。結局、地球脱出のときには、彼を永琳の次の便に連れていくと政府が約束してくれたおかげで、永琳を宥めることに成功した。順番が変わるだけで隕石自体衝突するわけでもないから、大した違いはないのだが、永琳はそれで涙をひっこめたみたいだった。

それから幾ばくか。彼は、永琳の顔を見ていない。永琳も、彼の元へ訪れることは無くなった。

もちろん、だからと言って彼は永琳に対して愛情を持っていないのかと問われたなら、彼ははつきり愛していると答えただろう。

何分、彼は元来不器用である。長生きしたところで、それが改善されるわけがない。それが女性に対する恋愛感情かと問われれば、はつきり返答出来なかったが、大切な人と答えられれば、はつきりと大切な人と言える程度には自分の心が分かっていた。

その愛情を、そっくり永琳から求めようとは、彼は思わなかった。まあ、一日平均八通、最多で一二通も手紙を送られてくることを考えれば、それなりには愛されているかな、と彼は考えている。ちなみに、手紙の内容は歯が浮くどころか溶け落ちて虫歯菌で死亡してしまいそうなくらい、甘ったるい文章であったりする。

元々自分に自身の無い男であったし、年月を経た永琳は、それこ

そ高嶺の花。

彼女と一緒に過ごせたことが一種の奇跡だったのではないかと、彼は一人家でお茶を啜りながら思った。

ふと、点けっぱなしにしていたテレビから、歓声が響いた。彼はリモコンに手をかけた。ぽちぽちとボタンを押すと、アナウンサーの声が大きくなった。

「ついに、地球を脱出する宇宙船が完成したと、地球脱出プロジェクトの担当大臣から報告がありました。皆さんには見えるでしょうか、この大歓声と人の波を。今、歴史が変わろうとしています。我が国は、これから穢れた地上を離れ、穢れの無い永遠の世界である月へと移住し、新たな文明を築いていくのでしょうか。今、歴史が動きました！」

興奮で頬を赤くしたアナウンサーの嬌声が、スピーカーから響き渡る。彼はその金切り声のようなアナウンスに辟易しつつ、テレビの音量を下げた。

テレビには、なんとというか、彼がまだ現代世界に居た頃、SF小説の押し絵にあったものとよく似ていた。ただ、彼の記憶にあるスペースシャトルよりもはるかに大きく、どこか未来チックな外見だった。

これが、宇宙へ移住する船……通称、ノアの方舟か。

これから、少しずつ住人達は月へと移住を開始する。遅かれ速かれ、彼も月へと向かうだろう。

それはとても喜ばしく、誉れ高いことで、誰も彼もが最初に月へ行ける人たちを尊敬の目で見つめていた。

けれども、どうしてか彼はそう思えなかった。小心者なのか、新しいもの受け入れられない頭の固い人間なのか判断出来なかったが、土から離れて生きること、本能的な忌避感を抱いていた。

地球の大地から離れることに一抹の寂しさを感じる。不思議な倦怠感を覚えていると、久しく鳴らなかつた電話がけたたましく鳴った。

「誰からだ？」

この日初めての肉声が、これだった。彼自身どうかと思ったが、何分人づきあいが必要な彼にとって、自然と一日家でジツとしている方が多いので、仕方がない。

彼はすっかり温くなった湯呑から残った茶を飲み干すと、ゆっくり立ち上がって電話機から子機を取った。

「もしもし？」

『あら、声に元気がないわね。寝起き？』

一瞬、誰か分からなかった。だが、すぐに声の主が永琳であることが分かった。忘れていた永琳の声が、自然と湧きあがってくる。こうしてみると、どうして彼女の声を忘れていたのか、彼には分からなくなった。

気恥ずかしさにも似た思いを誤魔化すように、彼は口を開いた。

「……永琳？」

『そうよ、私。もしかして、私の声を忘れていたのかしら？』

「いや……忘れてはいないけど……どうした、いきなり」

『テレビは見た？ 今ニュースになっているでしょう、完成したのよ、宇宙船が。同時に月へ建設された移住施設もね。もう、私たちの出番は終わったし、その報告と挨拶も兼ねて、ね。良かったわ、敬語に戻ってなくて。ちよっと心配していたのよ』

「……それって、どういうことだよ」

『そういうことよ。貴方はすぐ敬語で話すんだから。その敬語を止めるようにしたのに、どれだけ労力を掛けたと思っているのよ。宇宙船開発なんて、目じゃないわ』

どうやら、永琳にとって、宇宙船を開発するより彼の敬語を捨てさせる方が大変だったらしい。

なんて無駄な努力と思いつつも、彼は頬を掻いた。

「そうか……でも、いいのか？」

『なにが？』

「なにして、祝賀会とかするんだろ？ 電話して大丈夫なのか？」

「……その、シユクガカイっていうのは良く分からないけど……あなたは、時々良く分からない言葉を口走るわね」

「あ、えっと、要は」

「要は完成披露宴を抜け出して大丈夫なのかってことで、いいのね？」

そう、と彼は頷いた。今みたいなことは、ときどきある。こちらの世界には無くて、彼がいた世界には有る言葉だ。今のように意味が伝わらなかったときは、永琳が言葉のニュアンスや前後の脈絡から言葉を発するので、とくに困ることはない。

「お偉い方と集まって披露宴するんだろ？」

「残念だけど、それはないのよ」

「……そうなのか……ていうか、お前、あんまり残念とは思っていないだろ」

「バレた？」

クスクスと受話器から聞こえてくる永琳の笑い声。初めてあったときと変わらず、どこか鈴の音を思わせる、耳触りの良い声だ。

「私達、開発チームと政府の偉い人たち、そして月夜見とその親族及び一族が、これから月へ向けて出発するのよ。この電話は、出発前の報告も兼ねているの」

「……あ、そうなの？ 急だね、随分」

「月夜見一族や政府の重鎮が、そんな表立って動くわけがないですよ。少ないとはいえ、テロの可能性だって考えなきゃいけないんだから」

「ああ、そうか」

「そうよ、ふふふ、貴方は何時になっても抜けているわね」

そりゃ、永琳に比べられれば、誰だって抜けているだろうよ。

喉まで出かかった言葉を、彼は呑みこんだ。

「それじゃあ、そろそろ出発時間だし、一旦切るわね。どうせあなたも明日にはこっちに来るんだから、そのときゆっくり話しましょ」

「それもそうだね。いや、永琳と顔を合わせるのは何時以来かな…
…なんだか随分会ってないような気がするよ」

『気がする、じゃなくて、本当に会っていないのよ。正確に言えば、
23年と4ヶ月と18日と3時間17秒ね。あ、今20秒になった
わ』

思わず、細かすぎ、と突っ込んでしまいそうになったのは、彼だ
けしか知らない。こういうとき、永琳の頭の回転の速さを実感する。
よくもまあ、即興であそこまでバラバラな時間や言い回しやら出
来ると、彼は内心舌を巻いた。

「ははは、もうそんなにか、道理で長く思えるわけだ」

『ふふふ、そうね……あ、そうそう』

「うん？」

『こつちに着いたら、貴方に言っておきたいことがあるのよ』
言っておきたいこと？

「なに？」

『こつちに着いたら教えてあげるわ』

「なんだよ、電話では言えないのか？」

『無理ね。ずっと言おう言おうと思っていたことですもの。電話な
んかで伝えるのは勿体無いわよ。こういうことは、直接伝えなきゃ、
ね』

「ふ〜ん。まあ、楽しみにしているよ」

『ええ、せいぜい楽しみにしておきなさい』

……一瞬、静寂が彼を包んだ。

「……次に会うときは、月の上だろうね」

『……ええ、そうね。月に着いたら、一緒に餅でもつきましよう』

「お休み」

『お休み』

プツリと回線が切れた。そつと、子機を元の場所に戻した。充電
を開始する音が、妙に空々しかった。

明日……月へ向かう。月までどれくらい掛るか知らないが、どっ

ちにしろもつすぐ永琳に会える。

遠くに聞こえる爆音に顔を上げると、ヘランダの窓ガラスの向こう、青色の大空に、一筋の飛行機雲が宇宙へ向かって伸びていった。

翌朝。空は昨日に引き続き、快晴であった。風も無く、穏やかな気候で、絶好の移住日和である。

誰もかれもが、月への話で持ちきりになっていたときに、それは起こった。

そのとき、彼は身支度を整えていた。いつものように食事を終え、ステータス画面を確認していたときだった。

「ステータス確認」

【レベル	：	88	】
【体力	：	450 / 450	】
【気力	：	170 / 170	】
【力	：	99	】
【素早さ	：	133	】
【耐久力	：	110 + 38	】
【装備・頭	：	なし	】
【	：	なし	】
【	：	TFジャケット	】
【	：	TFバロ + TFシューズ	】
【技能	：	獣の本能・踏みとどまる	】
【	：	衝撃の称号	】

【スキル	洞察力	レベル25	】
【	美感力	レベル13	】
【	逃げ足	レベル120	】
【	自己再生	レベル4	】
【	毒解能力	レベル30	】
【	フラグ	時々発動	】
【アイテム	アイテム使用		】

「あれからえらい年月が過ぎたというのに、全然成長していないな…… やつぱり、週二回町から離れて恐竜と対決しているくらいではこれぐらいかな…… 唯一、衝撃波を出せるようになったのは助かったけど」

そう、呟いて、ステータス画面を閉じたときだった。

ゾワツと背筋に悪寒が走ったのは。

獣の本能、発動。

その瞬間、彼が半ば無意識に張った衝撃波のバリアが、彼の生死を分けた。

その直後、彼は見た。

はるかビル群の向こうに見える、空から降り注ぐ巨大な隕石群を。

その一発が、雲を吹き飛ばして地表へ向かう。

その一発が、飛行していた旅客機を吹き飛ばして地表へ落ちる。

その一発が、轟音と共に山を消し飛ばし、森を根こそぎ剥いでいく。

その一発が、文明の象徴として建てられたビッグツリーをバターのように溶かしていくのを、彼は見た。

凄まじい衝撃の中、彼は聞いた。どこか遠い、誰かの悲鳴を。薄れゆく意識の中、彼は見た。どこか遠い、誰かの泣き顔を。命が消えていく中、彼は思った。ああ、永琳……！

この日、栄華を誇った文明が、終わりを告げた。

後の調査で分かったことだが、この大災害は、地球に接近するだけで決してぶつかるはずが無かった巨大隕石が、別の隕石と衝突して軌道が変わったことが原因だった。

それが10の52乗分という天文学的確立だったことは、このときには誰も知らなかった。

そして、奇しくも、この日が永琳と出会った日と同じ暦日だったことを、彼は知らない。

同時刻。移住施設『月の都』

地球の様子を映した超大型スクリーンの前で、血が出るほどに頭を掻き毟り、血だらけになった銀髪の女性が、狂乱して理解不能な悲鳴を叫び続けていた。

従業員から鎮静剤を撃ち込まれる、1分前の出来ごとだった。

どうやら、盛大な引っ越しが行われるらしい（後書き）

さて、だれしもが想像付いていたであろう、落ち。

ここから、ようやく彼の長い長い旅が始まります。

長いものです。ここまで来るのに3万文字とか、遅速にも程がある。
おお、テンプレ、テンプレ。

古代編最終話・今を生きるということ(前書き)

これにて、古代編えいだいはおしまい。

古代編最終話：今を生きるということ

最初、彼にはそれがなんなのか分からなかった。無音のそれは、時折姿を変えながらも、大部分は変わらずにその姿を彼に見せ続けていた。

音は、無い。何も聞こえない。

感覚は、無い。暑いのか寒いのか、はたまた痛いのか気持ちいいのか、それとも寂しいのか楽しいのか、彼には分からない。

……時間。ただ、時間だけが過ぎていく。

……どれぐらいの時間が流れたのだろう。ふと、気付いた時には彼の耳はその機能を取り戻し、彼に世界の音を伝達させる。だが、いつもと同じようにはしなかった。

風の、音がする。嵐の……風が、荒れ狂う音が。ああ、煩い。これは、この音は、なんだ？

まるで竜巻。爆風が耳元でダンスを踊っているかのように、激しく、騒がしく、鬱陶しい、音の雨が脳を揺さぶった。

……また、幾ばくかの時間が流れた。そして、ふと、我に返ったとき、彼は目の前に広がっている景色が、雲で覆われた空であることとを、思い出した。

晴天の、あの水色の絵の具で静かに、優しく、丁寧に塗り重ねたような空は、もう彼の眼には映っていなかった。あるのは、黒く、悲しく、それでいて儂い、見ているだけで気が滅入ってくる、灰色の空だけだった。

……雲が……出てきている。

雨が……降るかもしれない。起き、上がらなくては……！

だが、そうして身体を起こそうにも、彼の身体はピクリとも動かなかった。それどころか、痛みも、何も感じない……！

瞬間、ズキンと身体が悲鳴をあげた。思わず息を呑んだ彼を襲ったのは、痛みの波状攻撃だった。右手、腹、左足、腹、胸、頭、右

足、腹、左手、頭……内臓が、骨が、筋肉が、体中から、主へダメージを受けていると訴えてきた。

(……………はあ)

大きく吸って、息を吐く。たったそれだけのことで、彼は数十秒全力で走ったぐらい、消耗した。

だが、効果はあった。混乱していた意識が、一息吸うことに鮮明になっていき、しばらく深呼吸を繰り返していた彼は、どうにか現状を把握する程度には回復出来た。

だが、声は出せない。焼けるような喉の痛みが、彼から声を奪っていた。

(……………どうやら、生き残ったみたいだ。前に覚えた衝撃波が、俺を助けた……………そうだ、ステータス画面で……………確認を)

ぼーんと、馴染みの効果音が頭に響く。そんな何でもないことが、酷く辛かった。

【レベル	…	88	】
【体力	…	11 / 450	】
【気力	…	3 / 170	】
【力	…	99 - 95	】
【素早さ	…	133 - 130	】
【耐久力	…	110 - 108	】
【装備・頭	…	なし	】
【…腕	…	なし	】
【…身体	…	なし	】
【…足	…	TFバロ + TFシューズ	】
【技能	…	獣の本能・踏みとどまる	】
【…	…	衝撃の称号	】
【スキル	…	洞察力 レベル25	】
【…	…	美感力 レベル13	】

【	逃げ足	レベル120	】
【	自己再生	レベル4	】
【	毒解能力	レベル30	】
【	フラグ	時々発動	】
【アイテム	アイテム使用		】

(ははは……ほとんど死に掛けたな)

思っていたよりも、酷い。いや、むしろ、軽かった、の方が正しいのだろう。

なにせ、隕石衝突地点に居たというのに、生き延びたのである。生きている方がおかしく、生きているだけで幸運だ。

彼はふう、と溜息を吐くと、ステータス画面を消した。

(ここは?)

仰向けになったため、辺りをうかがうことが出来ない。雷鳴のように走る痛み能耐えつつ首を左右に振っても、黒く焦げた瓦礫が邪魔をして、何も分からなかった。

ゆっくり、ゆっくり、身体へ意識を向ける。ともすれば痛みでかき消えてしまいそうな集中力だが、それでも少しずつ混乱していた神経網が、彼の手中へ戻っていく。

まず、右手を。

そう思い、彼はうつ伏せになろうと右手に力を込めて……激痛が走った。

文字通り、瞼の裏で閃光が走った。痛みで滲んでくる涙を瞬きで誤魔化しつつ、今度は逆側から寝がえりをうった。

今度も痛みは走ったが、右腕程ではなく、我慢できる程度だ。だが、痛みの感覚は強いものの、それ以外の感覚は鈍く、重い……まるで、血液の代わりに鉛を流し込まれたみたいだ。

のろのろと、見ていて欠伸が出そうなくらいにゆっくりとうつ伏せになり、そこからまたゆっくりと身体を起こして、その場に立ち

あがった。

途端、頬を撫でる熱風。フワツと目の前が暗くなり、意識が遠のきかける。その場でたたらを踏んで持ちこたえてから、彼はようやく顔をあげた。

そして、息を呑んだ。

(なん……だ……これ、は)

言葉に表せられなかった。

彼の眼前に広がっていたのは、大きな、クレーターだった。

だが、その大きさと深さが異常だった。クレーターの端が恐ろしく遠く、目測でも5キロメートル以上、深さなど、数百メートル以上ありそうな、巨大な深遠が目の前に形成されていた。

どこにも、文明の跡はない。あるのは、巨大な力によって粉微塵にされた土と石ころだけが、そこにはあった。

(……隕石衝突の影響が、これほどとは……よく、死なずに済んだものだ)

けれども、無事ではない。痛みが強い右腕に目をやると、目に見えて青黒く内出血を起こし、一回り大きく膨れ上がっていた。どうみても、骨折していた。

身体も、いままでの経験から、骨折、あるいは内蔵裂傷にまでの怪我は無いと判断できる。だが、受けたダメージは無視出来ない。今の自分では、こうして立っているだけでも死ねる程だった。

とにかく、治療が必要だった。

彼は一つ、呼吸を整え、自己再生能力をフル運転させた。これは体力を消耗するかわりに傷を治すスキルで、レベルが高ければ高いほど、少ない体力で傷を治すことが出来る。今の消耗した彼にとつて、腕の怪我を治すには非常に辛いものがあつたが、この痛みではまともに動くこともできず、下手に動物に襲われたとき、弱点である怪我場所を狙われる場合があるので、ここは我慢するしかない。

擦り傷、切り傷、火傷、打撲、内出血、ありとあらゆるダメージが身体中に広がっていた。まず、このままでは死ぬ。骨折一つ直し

たところで、それは変わらない。ただ、待ち受ける未来がほんの少しだけ遠のくだけだ。

けれども、彼にはそれがしなくてはならない、何か尊いもの思えた。誰に強制されたわけでもなく、教えられたわけでもない。仮に生き延びたとしても、これから訪れる苦難の未来を思えば、今ここで迎えるエンディングの方がはるかに容易く、また優しい。

でも、選ぶわけにはいかなかった。不思議と、まだ、選ぶときではないと思った。

……死ぬわけにはいかない。そう、俺は、きっと、まだ死ぬわけには、死んではいけないんだ。

腕の骨折が治癒していくにつれ、彼は、ふと、思い出していた。

この世界に来てから、常々考えていたことがあるということ。

自分は、何のためにここへ来たのかということ。

元の世界に居た時も、時折似たようなことを考えたことはあった。だが、それはあくまで暇つぶし。すぐに別のことが始まれば、そんなことを考えることすら忘れていた。

だが、こちらに来てからは違った。右も左も分からなかった世界。与えられた力、与えられた不老、全て、何か意味がある。彼には、そう思えた。

そう、彼がこうして立っていられるのも、幾重にも重なった奇跡のおかげだった。

まず、都市の防衛機能が働いたこと。軌道を変えた隕石を寸前で迎撃し、わずかではあるが隕石の破壊力を軽減したことが、一つ。

月からの迎撃があったこと。これも、地球へ向かうはずだった小体の隕石を破壊し、地表へ落ちる隕石の数を減らしたのが一つ。

彼の体調が万全であったこと。ほんのわずかでも本調子でなかったら、起き上がるだけの体力すら残らず、あのまま死んでいただろ

う。

隕石の落ちた位置。大小様々な隕石が落ちた場所は、都市の中でも最新技術をかけて作られた巨大ビルが並んでいた。それらが盾となり、彼への爆風と土砂をほんのわずかだけ和らげた。

そして、彼が住んでいた住居。そこは、永琳が己の知識と資金を投じて建設された、特殊な造りになっていた。

私がない間に地震に見舞われたらどうしよう。

火事に襲われたら？

テロに襲われたら？

雷が直撃したら？

竜巻が襲ったら？

幾つものどうしよう、幾つものもしもを防ぐために、永琳が彼に黙ってオプションを付け足したその家が、彼をほんのわずかではあるが、守った。

肌を忘れても。

髪の毛の匂いを忘れても。

声を忘れても。

出し巻き卵の味を忘れても。

永琳の面影を想い続けた彼と同様に、彼女もまた、彼を想い続けていたのである。

肌を忘れても。

髪の毛の匂いを忘れても。

声を忘れても。

不器用な賛辞を忘れても。

彼の面影を想い続けて、ただただ彼が平穩無事に居られるように、せめて外的災害に襲われても平気なようにしていたのである。

そして今、傷だらけのぼろ雑巾になり果てても、彼は生き延びた。彼女が、永琳が、最後の最後で受け止めたのである。

(行こう……まだ、俺は生きている。まだ、もがけるんだ)

これから訪れる極寒の時代を思って、彼は一つ、大きなくしゃみをした。

古代編最終話：今を生きるということ（後書き）

えーりんは一時的に退場。だが、またどこかで出てくるだろうと思います。

とりあえず、次は一気に年月が経ち、日本神話編に話が進みます。だいたい、紀元前数百年ぐらいまえあたりかな。

次はあれです。もうちょっと明るくなると思います。

あと、えーりんは実はとっても優しいに一票。きっと彼女はひどく不器用で、それだからどこか方向性を間違ってもそれに気付かず、気づいても頑張るのだと私は思います。

ああ、速くおっぱいを書きたい。

日本新話編・明けない夜はない（前書き）

はいはい、テンプレテンプレ。みなさん予想通りのあの方が登場です。

日本新話編：明けない夜はない

終わらない今日はない。誰かの言葉。

どれだけ足もがいても、どれだけ泣き叫んでも、明日は平等にやってくる。

永い、永い時間が流れた。

最初にやってきたのは、蒸し返すような熱波だった。衝突した岩石と岩石、そのエネルギーの一部が熱に代わり、膨大な熱波が地上を覆った。灰色の空なのに、大地は灼熱のごとく暑く。生物達の苦難の時代の訪れだった。

次に訪れたのは、雨だった。熱せられ、蒸発した海水が雨水となり、何日も、何日も降り注ぐ豪雨が、あらゆるものを舐めつくし、あらゆるものを洗い流す。人も、恐竜も、猛獣も、文明も……命も。

次に来たのは、凍えるような寒波だった。あの暑さが嘘のようにどこかへ行き、あらゆるものを凍らせてしまう、氷河時代の始まりだった。

最初に力尽きたのは、恐竜達だった。変温動物である彼らは、恒温動物と比べて体温を一定に保つ力に欠けており、急激な気候の変化に耐えきれなかった。

恐竜達が地上から姿を消し始めた頃、大型の肉食猛獣もその後を追った。彼らは常に一定以上の体温を保つ為に、大量の食糧が必要であった。気候の急激な変化によって激減した草食恐竜の影響が、彼らを絶滅まで追いやった。

植物も例外ではなかった。さすがに一気に全滅してしまうことなく、中には適応するものもあったが、それでも絶対数があまりにも少なすぎた。ただでさえ少なくなつたうえに、植物を求める生物によって食い荒らされてしまい、絶対数が増加することはなかった。生き残ったのは、それらの植物を食べる小さな生物と、氷河時代に適応した新しい生物、新たに知能を手にした人の祖先。

そして、その中に、彼の姿はあった。

………永い、想像すら出来ない時間が流れた。
終わらない今日はない。誰かの言葉。そう、終わらない今は、ない。

一万年。これは彼が後ほど知ったことなのだが、地球がその凍った身体をゆつくり温め始めたのは、あの隕石衝突からおおよそ一万年以上の時間が経過していた。

彼が永かった極寒の時代が終わりを迎えたことを知ったのは、珍しく吹雪が止んだお昼のことだった。

お昼と言っても、それはあくまで感覚の話だ。隙間なく満たされた分厚い雪雲が、宇宙から注がれる光を遮っていたあの時代。夜はもちろんのこと、昼間も薄暗く、すこし岩陰に隠れると、それだけで手元すら見えない程度の明るさだ。

彼はその日も食糧を求め、歩き続けていた。身に付けているのは、マンモスから切り出した毛皮だけ。あの頃身に着けていたものは当の昔に捨ててしまった。

彼は死に物狂いで生きた。木の根を齧り、虫を噛みしめ、動物の生き血も啜って、今日まで生き延びた。そして、件の日、彼はふと地面に広がった光に目をやった。

………なんだ、これは………雪が、光っている………なぜ………！？
顔を上げる。そのときの光景を、後々彼はこう語っていた。

あの瞬間のことは、実はよく覚えていないんだ。それが綺麗だったのか、それとも大したものでもなかったのか、あるいは忘れてしまったのか、今でも思い出せない。

ただ………なんていうのか、不思議な感覚があった。それと、これだけは覚えているんだ。ああ、この光景を彼女に見せたかったって………でも、思うんだ。この光景は、もし、この光景をもう一度見ることが出来たとしても、あの時のようには思えないだろうって。

なんて言うのかな………多分、あの時だけだと思う。あのときを生きて、あの大地を歩いて、あの瞬間に立ち会えたものだけが、あの

感覚を感じられるのかな……って、そう思っただ。

そして今日。彼はしぶとく生き残っていた。今日もいつもとおなじく、狩ってきたイノシシの肉を適当な木枝に刺し、焚火の火が直接当たらない位置に突き刺した。

その数、10本。一本一本の量は多く、一人4〜5本も食べれば腹いっぱいになれる量が用意された。

もちろん、肉は既に血抜きはしてある。これをする、しないでは、驚くくらい肉の味が変わってくるのである。

「……………」

パチパチと、飛び散る火花に気を付けつつ、彼は肉を見つめた。秋の肌寒い北風が、彼の身体を吹き付けた。ブルリと身体を震わせて、彼は服の袂を合わせた。落ち葉の臭いと、肉の焼ける良い匂いが辺りを漂う。本当なら匂いに釣られた猛獣の襲来を警戒しなければならぬが、ここにはまず猛獣が来ることは無い。

赤いイノシシ肉が、じつくりと色を変えていく。表面全体の色が変わったのを目で確認してから、火傷しないようにそっと枝を取り外した。

「……よし、焼けた……食べよう」

肉を味見して、十分に火が通つたのを確認した彼は、赤く燃える焚火に新しく薪をくべた。下火になっていた炎は薪の表面を舐めるように覆っていく。ゆっくりと全体を覆うと、その下で燻っていた熱灰の火力を受けて、瞬く間に炎を吹き上げた。

彼はさらに火を強める為、木の枝を加工した作った木筒で炎の根元に息を吹き込んだ。

一回、二回、三回。ぼう、ぼう、ぼう、と燃えあがる炎を見て、彼は木筒を手元に置いた。

ふう、ふう、と肉に息を吹きかける。白い蒸気がふわっと焚火の上を通った。

「……………」
ふと、彼は肉から顔を上げて、振り返った。
「肉、焼けたぞ」

その言葉に、縁側に座っていた少女が顔をあげた。彼よりも頭一つ分以上小さい少女は、軽やかに庭に降り立った。黄金色の髪を持つ、その少女は、個性的な帽子を被りなおして、大きく欠伸をした。さらに、両手を上に伸ばして伸びを一つ。そんな彼女が、実は近隣どころか大陸で恐れられている存在だと誰が思うだろう。

事実、過去に一度戦った彼も、いまだに彼女のことを恐ろしいとは思えなかった。それが、たとえ自分よりもはるかに強い相手だとしても、だ。

「……………いらんか？」
「いるよ」

少女は慌てて彼の傍へ腰を下ろすと、彼へ手を差し出した。どうやら、自分で取る気はないらしい。彼は、別の枝に刺さった焼き肉を差し出した。

「ほら」

「あいよ」

「熱いぞ」

「知ってる」

「そういつて火傷したのは誰だ」

「誰の話さ？ 私は知らんね」

ふう、ふう、と小さな口を尖らして肉を冷ます少女を見て、彼は改めて思った。

俺、どうしてこいつと一緒に飯を食べているんだろう。そんな仲良くなるようなことした覚えはないのに。

なんか、前にも似たようなことを考えたような気がする。あれは……。

「こら」

ブスツと、少女の地獄突きが炸裂した。

いくら鍛えられた肉体を持つ彼とて、急所は急所。不意を突かれれば苦しいものは苦しいし、何より少女の力は見た目とは裏腹だ。思わず、彼はせき込んだ。持っていた肉を落とさなかったのは、せめてもの意地だった。

「ぜえ、ぜえ、な、何を……」

「こんな美少女が傍にいるっていうのに、何をまあ、他の女のことを考えているのさ」

「……美少女？ 幼女の間違いじゃないのか？」

「おっと、手が滑った」

少女の言葉が言い終わると同時に背後へ迫る何か。彼は腕だけをそちらへ向けて、衝撃波を放った。

一瞬後、土が爆発する音と共に、気配が消えた。彼は頬に流れた冷や汗を拭いつつ、肉にかぶりついている少女を睨んだ。

「……諏訪子よう……」

「何さ？」

「……いきなり祟るのはどうかと思うのだが」

「ふんだ。どうせ衝撃波で吹き飛ばすんだ。男ならこれぐらいで愚痴を吐くんじゃないよ」

そう言っつて二本目の枝に手を伸ばす少女、諏訪子を見て、彼はため息を零した。

はたして、この食い意地のはった少女が、土地神の頂点と同時にミシヤグジ信仰を束ねる祟り神、諏訪子神だと、誰が思うだろうか。きっと思わないだろうな。俺だっつて思わないもの。

そう考えた彼の喉へ、今日二回目の地獄突きが炸裂したのは、も

うまもなくのことであつた。

日本新話編：明けない夜はない（後書き）

はい、ケロちゃん登場です。この話のケロちゃんは、あんまり神様らしくないのかもしれない。なにせ、私自身が東方ゲームを持っていないからです。

持っているのはえーりんさんが出るやつだけだったり。

いや、テンプレは話を作るのが楽で助かる。

そんな関係（前書き）

長ったらしい。

そんな関係

ちよつと寝るわ。

一日3回寝る諏訪子が、今日二度目の床に就いたのは、お昼を回ったあたりだった。

することも無かった彼は、傍に居るのが仕えるものの義務だという諏訪子の横暴により、寝静まった彼女の隣で腰を下ろす羽目になった。

「……ふう」

……時折聞こえる隙間風以外、何も聞こえない。

ああ、退屈だ。そう思っても、暇をつぶすものは何もない。参拝客が訪れる本堂ならまだ退屈を紛らわせただろうが、ここは諏訪子と彼しか入れない離れの部屋である。

結界を張って万が一にも参拝客が入らないような作りになっている為、盗み聞きすることも出来ない。彼は、ひとつ、大きな欠伸をした。

諏訪子の家はかなり広く、また、豪華だ。というのも、家というのは彼の間違いで、本当は諏訪子そのものを祭る神社である。そのため、指定された時刻に参拝客が訪れるときは、本堂である一番豪華な大広間に案内し、信仰を受けるといふ形になっている。

信仰とは、神にとつては力の源。それは、崇り神である諏訪子ですら例外ではない。いや、むしろ諏訪子程の知名度のある神ともなれば、信仰がなければ自身の姿すら維持できなくなり、枯れれば消滅してしまうのである。

そのため、信者を確保する為に実は色々苦心していたりする。この神に任せれば安心だ、この神を信仰すれば、いざという事態に力を貸してくれる。そう、思わせる努力を日々行っている。

諏訪子が住む神社が必要以上に豪華で威かな外装、内装をしているのも、それだけ威厳があり、格式高い神であると形として現す為

だ。

人間とは複雑な部分を持ち合わせながら、意外と単純な部分もある。例えば、人間は驚くほど見た目で判断する。例え諏訪子自ら力を宿した道具を信者に手渡したとしても、道具の見た目がみずばらしいものなら、例え諏訪子の力をよく知っている信者ですら、心のどこかで疑心を抱いただろう。

これは、本当に力があるのだろうか、と。

逆に、実は力が無いのに見た目が儼かな道具を渡されれば、人間とはあつさり騙されてしまうものである。それらしい外見で、それらしい雰囲気のものであれば、それがまさか偽物だとは疑わない。

まあ、実際に力を見せて、信仰を集めるといふ手もあるが、それは既に天候を操れる程度に力を持っている場合にだけ許される為、消耗したくない神はあまりその手を使わないのだが。

そんな諏訪子の密かな努力と信仰集めも、彼は無宗教だったせいで、大して気にも留めていなかったりするのは、諏訪子にとっては納得がいかなかっただろう。

閑話休題。

諏訪子が使っている寝床……着ている衣服もそうだが、布団もそれに応じて質が良く、寝心地も良い。内心、彼もあの布団なら、そんなに昼寝してもおかしくないだろうな、と考えている。

そういえば、諏訪子は良く寝るのもそうだが、よく遊ぶな、と彼は思った。そう考えていることを諏訪子が知ったら、おそらく彼は地獄突きを食らっていただろう。

彼は知る由もないのだが、正確にいえば、彼女は遊んでいるのではない。姿を見せて周囲の魑魅魍魎どもを威嚇し、敬意を示せと言外に言い放っているのである。

要は、マーキング。臭い付けみたいなもので、ここら一帯は自分の縄張り、お前ら黙って入ってくるんじゃないやねえ、暴れでもしたらぶち殺すぞ、と態度で示しているのである。

ちなみに、彼が諏訪子と出会ったのも、このマーキングが原因で

あつたりする。彼からすれば原因だが、諏訪子から言わせれば切掛
けだと思つてゐるのは、神と人との見解の相違というやつか。

事の発端は、諏訪子の縄張りに彼が不用意に侵入し、あまつさえ
イノシシを殺して食べたことが始まりだった。しかも、そのイノシ
シは諏訪子へ奉納する為に特別に飼育されていた家畜で、諏訪子も
それが来るのを楽しみにしていた。神の供物をどこのものとも知れ
ない人間が勝手に食べた。言葉にすればただの窃盗だが、実際はも
つと重い。

はつきり言えば、諏訪子に喧嘩を吹っ掛けたも同然。

これには諏訪子も激怒した。いや、激怒どころではない。彼女に
報告した信者がその怒りに触れて寿命を縮めたのだから、その怒り
の程が知れる。

彼にしたら知らなかっただけで、悪気があつたわけではない。そ
れに供物と言つたつて、神に捧げる供物は人の施しを受けてはなら
ないという信者独自の考えから、放牧されていたもので、むしろ供
物であると分かるようにせず、村の中へ置かなかつた信者の責任で
ある。

だが、諏訪子にとってはどうでもいい。とにかく自分のものを盗
んで食べた不届き者を、どうにかしたい。それ一心で彼を探し、見
つけたのが最初の出会いだった。

もちろん、事情を知つた彼は謝つた。それはもう、額を地面に擦
りつけて謝つた。持っていた食糧を全て差し出して、許しを願つた。
少なくともこの時代、大の男が頭を下げて謝るなど、とんでもない
ことである。

その姿に、怒りに祟り神の力であるミシャグジを出していた諏訪
子も、面喰つた。なにせ、彼の見た目は筋肉隆々の男である。背は
それほど高い方ではないが、この時代では大男と言つていい背丈だ。
そんな男が身を縮むように丸めて土下座をする光景は、不気味以外
の何ものでもなかつただろう。

……なんだこいつは。

彼を見て、諏訪子の初見の感想は、こうだった。

本気で謝っているのは、明白だった。その性質上、人を見る目には長けている彼女は、眼の前の男が心の底から悔いており、難を逃れようとするあまりの行動ではないということは、すぐに分かった。

この男……何者？

しかし、それだけではないと諏訪子は見抜いていた。その内に宿る力……自身には劣るものの、人間の範疇を大きく超える力を持っていることに、彼女は気付いた。

それはそうだ。氷河期を生き抜いた人間である。普通である方がおかしいし、普通だと思つたら人を見る目が無いと自分から言うのと同じだ。

さすがにそこまではさすがの諏訪子も気付かなかつたが、見た目通りの年齢ではないことには気づいていた。

……うん、まあ、いいかな。

面白い。諏訪子の次の感想は、これだった。

人間を大きく超える力を持つ人間。それでいておごることもなく、無法になるわけでもない。ただ、あるがままに、人として生きていく……ように見える彼に、彼女は興味を抱いた。

瞬間、彼が背筋を震わせたことを、彼女は知らない。

諏訪子は思った。

しかも、しかもだ。顔は……まあ、不細工ではない。決して美丈夫でもない。だが、退屈を紛らわせる程度には遊べそうだと。

そうなれば、話は早かつた。彼女はさっそく自分の神社へ来て、自分に仕えれば許してやると言った。

もちろん彼は断ろうとしたが、その食料ではつり合いが取れないだの、神の物を盗んで許しを請うだの、思いつく限りの足元を見られれば、断れるはずもなく。

結局、言われるがまま、彼は諏訪子の元へ仕えることになったというわけである。

ちなみに、どうして彼が逃げなかつたのか、疑問に思う人がいる

のかもしれない。
答えは簡単だ。

【レベル	：	160	┌
【体力	：	980 / 999	┌
【気力	：	400 / 400	┌
【力	：	200	┌
【素早さ	：	170	┌
【耐久力	：	180 + 10	┌
【装備・頭	：	なし	┌
【　・腕	：	毛皮の腕巻き	┌
【　・身体	：	貫頭衣	┌
【　・足	：	なし	┌
【技能	：	獣の本能・踏みとどまる	┌
	：	衝撃の称号	┌
【スキル	：	洞察力	┌
	：	レベル80	┌
	：	美感力	┌
	：	レベル20	┌
	：	逃げ足	┌
	：	レベル170	┌
	：	自己再生	┌
	：	レベル5	┌
	：	毒解能力	┌
	：	レベル50	┌
	：	フラグ	┌
	：	時々発動	┌
【アイテム	：	アイテム使用	┌

これが、当時の彼のステータスである。

実はこの能力、他者のステータスを見ることが出来る。彼が動物だのを最初の頃から狩れたのも、このステータス画面を見て、レベルの低いやつを狙ったり、体力が弱っているやつを狙ったからだ。でなければ、この世界に来てすぐに命を落としただろう。

そして、これが諏訪子のステータスだ。

【レベル	：	690	】	
【体力	：	2800 / 3120	】	
【気力	：	1800 / 1800	】	
【力	：	950	】	
【素早さ	：	1000	】	
【耐久力	：	780 + 200	】	
【装備・頭	：	ケロ帽子	】	
【　・腕	：	なし	】	
【　・身体	：	ケロセーター	】	
【　・足	：	ケロスカート+ケロシューズ	】	
【技能	：	崇り・ミシヤグジ召喚	】	
【	：	神様の威厳・雨にも負けず	】	
【スキル	：	洞察力	レベル200	】
【	：	美感力	レベル80	】
【	：	神通力	レベル851	】
【	：	自己修復	レベル17	】
【アイテム	：	なし	】	

……もはや、大人と子供どころではない。像とアリだ。勝てる勝てない以前の問題だ。というか、これで勝てると思える人はいるのだろうか。彼は思わない。

このステータスの前には、彼も大人しく従うしかなかった。いつでも、元々行くあてもなく、用も無かったので、あんまり嫌とは思わなかったのだが。

「ん……」

ふと聞こえた声に、彼は記憶の彼方からふっと我に返った。

見ると、布団からはみ出た手が、彼の人差し指を握っていた。ギョツと力を込められたそれは、痛くはなかったが、離さないぞと言わんばかりに握りしめていた。

……小さい。自身の手よりも二周りも小さく、温かい。そっと片手を当ててやると、諏訪子の片目がわずかに開いた。

「ん……」

「……どうした」

「……お前も……」

「ん？」

「……寝ろ」

「眠くないから、寝ません」

「……ん〜」

「ごそごそと動いた諏訪子は、握った手を解いて彼の手を掴むと、それを自分の頬に当てた。ほんのりの汗ばむ手のひらの臭いに、彼女はほう、と息を吐いた。

「……お前の手、ごつごつしているな……」

「まあ、手が荒れるようなことばかりしているからな」

主に風呂の用意とか、食器洗いとか、洗濯物とか、水仕事系のことかな。

そのことに関して口にはしなかったが、目には現れたのだろうか。諏訪子はふふふっと、笑った。

「ねえ……」

「……なんだ」

「……ありがとう」

「……」

「ふふふ……」

「……何がおかしい？」

「だって……ふふふ……」

「……おい」

「……ふふふ、熱々……」

「……っ!？」

「お休み」

そう言った諏訪子は、寝息を立て始めた。

……今度こそ、寝入ったみたいだった。

彼はため息を吐くと、軽く、諏訪子の頬を撫でた。

「……そういえば、最近寝る回数が増えた……かな？」

本堂から聞こえる参拝客の賑わう声を尻目に、静かに眠る諏訪子を見て、彼はもう一度大きな欠伸をした。

そんな関係（後書き）

主人公が強くなったと思ったか？
残念。上には上がいます。

ケロケロ王国（前書き）

もう、13話目か。なのに、まだ東方キャラ二人とか……けーねさに到達するまで、何話必要になるのやら。

ケロケロ王国

神社が改築された。彼が諏訪子に仕えて、早4回目のことだった。行つたのは信者の人たち。彼らは諏訪子の指示で鳥居を設け、近隣の道路を整理し、また結界を張った。

さすがに信者の数が多いと、掛る時間も大幅に短くて済む。しかもそれだけ人が多いと、中には農民をやらせるには惜しいぐらいの知性を持った者も何人か……。

諏訪子はその人たちに目を付けた。というより、目を付けざるを得なかった。

何分、信者が増えるのは彼女とて喜ばしいことではあるが、増えすぎれば手が足りなくなる。力はあるし、民草に信仰のお返しをしようと思っただけでも、信者の住む場所があまりに遠くは、上手く力が届かない。

そのうえ、数が増えれば増えるほど、諏訪子に届けられる願いの種類も増える。信仰する者へのお返し、魑魅魍魎への威嚇、敵対する異教徒への対応……その他数え上げれば切りがない。

文字通り、寝る間も惜しんで働いても手が足りないのである。もちろん、彼もおよばずながら助力はした。諏訪子が直接信者の前で彼を召使として仕えると宣言し、公に姿を出して、負担のいくらかを回したのだが、所詮焼け石に水。

さすがに神といえど、無限に続く体力は持ち合わせてはいない。近隣国まで信者が増えていったあたりで、ついに疲労の限界を迎えた諏訪子は、新たな打開策を打ち出した。

それが、件の内容。信者の中で最も知性に溢れ、霊的能力を有した乙女を選び出し、その人間を自身の仕事の一部を肩代わりさせたのである。

その乙女の名は、洩矢もじやと言った。諏訪子は彼女に自身の力の一部を与え、雨風を操る秘術を授けた。そして彼女に、雨を操り風に祝

福された者……洩矢風祝もりやかぜはふりという名前を与える。

さらに、巫女へ向かう信仰を自身へ向ける為に、自身の名を洩矢諏訪子と改めた。

かぜはふり後に風祝と呼ばれる洩矢の現人神の誕生であった。

一人を決めれば、後は早い。二人、三人と、ミシヤグジを信仰する霊格がある女性……現人神の手足となり、公私に渡ってサポートをする者を次々と選抜していった。

また、これらの女性は男を知らない少女であり、処女であることを条件にした。比較的、強い野心を持つ男から余計な入れ知恵を入れられたくないという、諏訪子の思惑が、そこにはあった。

同時に、幼い時から教育して洗脳することで、万が一にも謀反を起こさないようにする必要もあった。年若いのも、余計な悪知恵を持たないうちに……というそれらの理由から、年若い少女で、処女であることを条件にしたのである。

この少女達は後に、神霊となる現人神に仕える女子ということから、巫女と呼ばれるようになり、その数を徐々に増やしていった。

そして、ミシヤグジ率いる諏訪子達は、次々と近隣諸国を呑みこみ、信者としていくことによって、その勢力を爆発的に拡大していった。

西暦267年。諏訪子は自身を国王とし、洩矢王国を建国した。

ここに、永年と続くことになるミシヤグジ信仰の基礎が、確立した。

【レベル	：	2660	】
【体力	：	12068 / 13500	】
【気力	：	7000 / 7000	】
【力	：	3999 + 2000	】
【素早さ	：	4677	】
【耐久力	：	2900 + 1555	】
【装備・頭	：	ケ口帽子	】

【腕	・ 洩矢の鉄輪	】	
【身体	・ ケロ洩矢	】	
【足	・ ケロスカート+ケロシューズ	】	
【技能	・ 崇り神・ミシャグジの王	】	
【	・ 神様の威厳・嵐にも負けず	】	
【スキル	・ 洞察力	レベル400	】
【	・ 美感力	レベル100	】
【	・ 神通力	レベル2200	】
【	・ 自己修復	レベル25	】
【アイテム	・ 彼の手ぬぐい	】	

まじ震えてきやがった……怖いです。彼はゴクリと唾を呑みこんだ。

なんか最近諏訪子の雰囲気変わってきたな……オーラというか、気迫というか、覇気というか……目に見えて威圧感が増したな……と日ごろ思っていた彼が、ステータスで覗いてみた結果がコレであつた。

はつきり言つて、彼は落ち込んだ。落ち込みようのあまり、原因である諏訪子から休めと厳命されるぐらいなのだから、それはもう、凄い顔色だったのだらう。おかげで、巫女頭の女の子からは、ちゃんと療養してください、め！と指を立てて怒られてしまったくらいだ。

しかし、それも致し方ないことなのかもしれない。彼とて、プライドはあるのだ。

いくら相手が神であり、自分よりはるかに強いと分かっているても、見た目は女の子だ。しかも、見返してやろうと人知れず訓練していたのだから、そのダメージも大きい。なにせ、血のにじむような鍛錬を行い、最近になってようやくレベルが200を超えた辺りだというのに。普段信者の前で威張っている以外では、ダラダラと彼に

あーだこーだ我が儘を言いたい放題しているだけで、コレだ。信仰パワーとは、これ程なのか？

それなのに、ああ、それなのに、この差である。優に10倍以上も差がついていたのである。もはや像とアリどころではない。光とカメだ。太陽と動物プランクトンだ。勝負にならないどころか、勝負（笑）とか言われてもおかしくない実力差だった。

「……さすがに、これはヤバいのかもしいないな」

自室に用意された布団の中で温まりながら、彼は深いため息を吐いた。もちろん、部屋の外にいる巫女達に聞こえない程度の音量で一応部屋の周囲は襖……に似せた板で覆ってはいるが、防音は期待してはいけない。諏訪子が下手に巫女を部屋に連れ込まないようにという名目から、そうなっているらしい。ちょっと傷ついたのは、彼だけの秘密である。

まあ、かれこれ幾年の月日を過ごした部屋である。多少改築やら新築やらを行ったが、自分の部屋のことは自分が一番よく分かっている。質素で、静かで、集まって騒ぐには狭い……そんな場所が、彼の自室であった。

「……………」

遠くから、参拝する信者の笑い声が聞こえてくる。ふと、右へ首を向けた。そこには、衣服を入れている青銅器が置いてあった。

左を見る。廊下と自室を分ける板がズラリと並んでいた。普段、大して気にも留めないが、こういうとき、不思議とこの板が酷く鬱陶しいものに思えた。

……暇だ。彼は一つ、欠伸をした。

正直言つて、眠くは無い。最近は彼がやっていた仕事を巫女達がかわりに務めるようになり、専ら今では昼寝と巫女達の遊び相手が仕事である。

その内の一つである巫女達との遊びが中止になったので、後残っているのは昼寝だが、これはもう既に1回行っている。なので、彼は全く眠くなかった。

「……………」
遠くから、鳥のさえずりが聞こえてくる。

……抜け出そう。そうしよう。

そう思い至った彼は、さっそく布団から身を起こし、部屋を隔てる板を開けた。

「め」

愛らしい瞳と目があった。

「……………」

先に居たのは、巫女だった。長い黒髪を後ろで束ねたその巫女は、彼の手を掴むと、彼を部屋の中へ引つ張った。そして、踵を伸ばして彼の頭をポンと叩くと、もう一度、め！と指を立てて、部屋を出て行った。

ガタゴト、建てつけの悪い板が閉められると、部屋の中には静寂が戻った。

「……………」

なかったことにしよう。そう思った彼は、反対側から部屋を出た。

「……………」

「……………」
そこには、これまた巫女がいた。今度の子はさっきの子よりも表情に乏しく、声も消え入りそうなくらいに小さかった。彼女は巫女服の上からでも視認出来る大きな胸を彼の身体へ押し付けると、そのままぐいぐいと身体を前に突き出した。

弾力に押されるがまま、またもや部屋の中へ押しやられると、その巫女は一礼して部屋を出て行った。

ガタゴト、建てつけの悪い板が閉められると、部屋の中には静寂が戻った。

「……………」

しばしの時間が流れた。残された部屋の出口はあと一つ。もしかしたら、そこにも巫女がいるのだろうか……いや、いるだろうな。

そう確信した彼は、抜き足、差し足で、残った出口へ近付くと、

板へ手を掛けた。そして、わずかに開けた。

「やつほ。ちょう」

特徴的な帽子を被った少女を視認した瞬間、ほとんど反射的に彼は板を閉めた。それはもう、凄まじい反射速度を発揮した。

途端、眼前の板が激しく軋んだ。彼は慌てず騒がず、板に掛けた手に、全力を注いだ。ぎりぎり盛り上がる自身の筋肉を横目に、彼はさらに腕を太くさせた。

「ちよつとく、いきなり閉めることはないじゃないか」

「……………」

「せつかく時間を作った様子を見に来たんだから、姿くらい見せてくれたっていいじゃないのさ」

「……………」

扉の向こうから気安く声を掛けてくる諏訪子の様子を考えて、彼はさらに力を込めた。

少なくとも、彼の知る諏訪子は、彼の部屋に入るときにいちいち挨拶したりはしない。それこそ自分の部屋に入るがごとく、当たり前のように彼の布団で寝ていたりするぐらいである。

それをわざわざ挨拶するということは……………。

「ところで……………」

来た！ 彼は思わず唇を舐めた。

「私は休めって言ったよね……………どうして、部屋を出ようとしているのかな？」

「……………ちよつと用を足しに」

「それなら、20分前に済ませているでしょ」

「なんで知っている？ その言葉を、彼は寸前で呑みこんだ。」

「……………実は大きい方で……………」

「それも、今朝したでしょ……………確か大きさは……………」

「そうですね、しました。忘れていません。俺の勘違いでした」

「だから、なんで知っている？ 彼は少しずつ開き始めた板に両手を掛けつつ、そう思った。」

ふと、彼はわずかに開いた板の隙間に目をやった。

そこには、丸く見開かれた瞳が彼を見つめていた。彼と目があつたことに気付いたその目は、ニヤリと弧を描いた。蛇に睨まれた蛙いや、この場合は蛙に睨まれた蛇……いや、虫か。

「ひい！」

思わず漏れた悲鳴を、彼は寸前のところで噛み殺した。よくもまあ、称賛に値する胆力だったが、その言葉はしっかりと諏訪子へ届いていた。見え始めた頬は踏ん張りの為か赤く染まっており、うっすらと額に汗が浮いていた。

「ひい、だつて……可愛いなあ、もう」

「か、可愛いとか言うな！自分で考えても気色悪い！」

可愛い自分。それを想像した彼は、身震いした。

そんな彼を尻目に、既に腕一本通るまで開かれた板から、諏訪子の細い腕がにゅつと差し込まれた。その手には、美しい文様が書き込まれた青銅器が握られており、ちゃぷちゃぷと中に液体が入っていることを伝えられた。

「ねえねえ、もう元気になったことだし、お酒飲もうよ、お酒」

「……いや、俺お酒弱いから。飲みたいなら、一人で飲めよ」

「一人で飲んだつて美味しくない。こういうのは一緒に飲まなきゃ」

「……ていうか、俺酒癖悪いし」

「それぐらい、なんとかするつてばあ」

「おま……そう言つて、何度俺を酔い潰すつもりだよ」

諏訪子の気楽な言い草に、彼はため息を吐いた。

実は、彼はお酒が弱い。といつてもそれこそ一口飲んだだけで潰れるという程弱いわけでもなく、酒が嫌いというわけではない。

ただ、酒癖が恐ろしく悪いのだ……という話を、彼は諏訪子から聞いているのである。

その酒癖の悪さを知った上で、彼がそれを嫌がっているのを分かった上で酒に誘うのだから、性質が悪い。

そういえば、確か、永琳も似たようなことを話していた気がする、

と彼はふと、昔を思い返した。

「大丈夫、大丈夫。それに、酔った男一人取り押さえられないで、何が巫女か。そんなんじゃ、魑魅魍魎を退治することなんて無理だし、この私の巫女を務めるなんて、夢のまた夢。むしろ、ちょうどいい訓練さね」

「そんなわけあるか」

「そんなわけあるのさ」

既に顔が少し入るまでに開かれた隙間から、諏訪子が顔をのぞかせた。

「……なにより、その巫女さん達が辛そうにしているのが、嫌なんだよ。誰が好き好んで自分のせいで覚束ない足取りになっている人を見たいと思う？」

「なあに。一種の通過儀礼だよ。お前さんを取り押さえられて、ようやく巫女として半人前つてところさ。あんたが潰れた翌日は、だれか一人が大人になったつてことなのさ」

……確かに、言われてみれば。潰れた翌日、よく自分に懐いていた子が、覚束ない足取りをしていたような。秀囲気もなんとというか子供っぽさが抜けたし、何かあったのかなって思っていたけど、まさか自分の酒癖がそんなことに利用されているとは。時折頬を染めてモジモジする子がいたりしたが、もしや半人前に達したことを、思い返していたのだろうか。

諏訪子のそんな豪快な性格に、彼は今更ながらため息を吐いた。

「それに、酒で酔っているときは気持ちいいだろ？ 腰とか胸とか、気持ちいいんだし、疲れも吹っ飛ばはすよ」

「まあ、確かに気持ちいいけど……あれ？ 諏訪子、なんでそんなこと知っているんだ？ 俺、そのこと誰にも話してないぞ」

「え、あ、あ、そ、それは、お前さんが酒で酔っているときに、頼んでもないのにベラベラ喋ってくれるからね。それぐらい知っているよ」

口ごもった諏訪子を見て、彼はそんなものかな、と思った。

「……それに、起きたら体中ベタベタしているし、お前何かしたか？ 妙に部屋が血なまぐさいし、なんというか、独特な臭いだぞ、あれは」

「あ、ああ、それなら、お前さん酔っていて手元が覚束ないからね。口元どころか、体中が酒塗れになるからねえ……服くらは着替えさせるけど、それぐらいは残るだろうね。血なまぐさいのは……知らん。一日経った酒だし、匂いも変わるだろうよ。ほら、もう開けるよ」

「……これが最後なんだが、お前、どうして俺の手ぬぐ「ほいさ！」

その言葉と共に、彼の部屋に諏訪子が滑りこんできた。

翌日、表情に乏しい巫女が、ウツトリと頬を染めているのを見て、彼は人知れずその巫女へ合掌した。

ちなみに、なぜ諏訪子が彼の手ぬぐいを持っているのか、彼には最後まで分からなかったし、諏訪子も決して教えなかった。ただ、まるで獲物を前にした虎のような目で見られることが多くなったと、彼は巫女の一人に愚痴を零していた。が、その巫女が自分よりも倍以上のステータスだということを知った彼は、その後不貞寝した。

ケロケロ王国（後書き）

残しておいたケーキが兄に食べられた。大好きなレアチーズのやつ。

……ウソダンドドコドーン！

さて、次にはようやく話が進みます。

諏訪大戦（前書き）

あんまりだらだらしていても仕方がないので、さっさと終わらせま
す。

諏訪大戦

「どうだい、私の軍門へ下るつもりはないかい？」

「抜かせ。神である私が、大陸の神の下へ即けと？」

「別に、謙る必要はない。お前達とて、いたずらに信者を死なせてしまつのは避けたいところだろう？」

「は！ 何を言うと思つたら、信者を死なせる？ 私が？ 寝言は寝てから言つものさ。はて、起きて言つのは戯言だ。さて、お前さんはどちらだろうかね？」

「……ほう、言つじゃないか。小さな体を使つて繰り出す言葉は随分と棘がある。こちらの大陸では、ちんちくりんの神様が統治しているようだね」

「……なに、どこその後は老けるだけのババアと違って、私はより美しく変わるだけ。ああ、本当、どこその誰かが可哀そうだ。そのうち小じわでも作つて来そうで、心配で堪らない」

「……そうだね、そいつは可哀そうだ。私も、若づくりし過ぎて気持ち悪いやつを知っている……本当、見ていて気味が悪い。変に若い子ぶるババアは気持ち悪くて仕方がない。年上なら年上らしくふるまえばいいものを……」

「……ははは、どでかい柱担いで来た女に言われたら、そいつも形なしだな。本当、何を血迷つて柱なんて担いで来たのやら」

「……ふふふ、つまらん男を閨に引つ張り込んで乳繰り合っている神に言われたら、そいつも終わりだな」

「……あ？」

「……お？」

「……年増……」

「……若作り……」

「……やるか」

「……やるぞ」

「.....」
日差しが暖かくなってきた、ある春の日。諏訪子へ信仰を捧げに来た信者達と、それに対応する巫女達の喧騒をよそに、その空間は混沌を極めていた。

その空間とは、神社の奥の奥に用意されている秘密の部屋……諏訪子と彼と、そして巫女頭しか入れないその場所には、今、二つの超存在が対決していた。彼は矛先が自分へ向かないように、部屋の隅で、自分を消していた。

机を境に對に分かれて座った二つは、互いに凄まじい気迫を放ち、その威力は彼の精神力を根こそぎ奪い去る程の圧力だった。

部屋の周囲どころか近隣一帯に生息していた野鳥が住みかを飛び立つ。それを追いかけるように野獣と魑魅魍魎が走りだしていった。けれども、その恐ろしい空気を信者達へ一瞬たりとも行かないようにしているのだから、凄まじい。しかし、その分の余波が彼に向かっているあたり、多少の無理はしているのだろう。

だが、彼には堪ったものじゃなかった。

想像して欲しい。自分よりも10倍以上強い奴が本気で怒りを放っているのである。例えそれが自分へ向かっていなかったとしても、恐ろしいことこの上ない。なにせ、自分で止める手段が何も無い。爆発したら最後、自分のみならず、周囲の生物が根こそぎ滅ぶ。しかも、その相手が知り合いなのだから、手が付けられない。

超存在の一つ、名を、洩矢諏訪子と言う。

彼に見せるダルイ、疲れた、肩揉んで、酒に付き合えなどのおちやらけケロちゃんではない。信者に見せる諏訪王国の国王の顔でもない。

一つの神として、ミシヤグジを率いる土着神の頂点として、彼女は大陸からやってきた戦いの神……八坂神奈子を見据えた。

その視線に対し、大和からやってきた神は、頬に余裕を張りつけて答えた。

大和を束ねる神にして、戦を勝利へ導く軍神、八坂神奈子。紫色に近い青髪に、思わず見惚れてしまいそうな顔立ちに、特徴的な赤を中心とした衣服。首に掛けられた銅鏡を押し上げる双山と、スカートから伸びた両足はあまりに女性として魅力に溢れている。

だが、彼女が放つ強大な神気が、それらの魅力を相殺していた。かつて、幾多も諏訪王国へ戦いを挑み、散っていったどの神々、魑魅魍魎よりも力に溢れていた。

その身体から放たれる神気は、おそらく全く本気を出していない。事実、諏訪子も視線を厳しくはさせるが、ミシャグジを操ろうとしない。

しかし、彼には荷の重い重圧だった。

滝のように噴き出してくる冷や汗。ガチガチに硬直した四肢。瞬きすら忘れた瞼に入る汗が痛む。噛みしめ過ぎた唇から鮮血が滲み、彼の口元を赤く汚した。固く握りしめた指は手のひらに食い込み、皮膚を破る。

涙と汗で滲んだ視界が、神奈子を捉える。出来ることなら逃げ出したいと、彼は思った。走って、走って、走って、眼前の軍神が捕まえることのできない場所へ、手の届かない場所まで逃げたかった。ふと、神奈子の視線が彼へ向けられた。といつても、一瞬、彼へ視線を向けた程度。眼球がわずかに彼を捉えた程度の時間だ。

だが、たったそれだけでも彼には辛かった。その一瞬だけで、彼の残った精神力を根こそぎ奪い取る。

おそらく、神奈子は分かっている。自分が、この重圧に消耗しているということに。そのことを、一瞬の視線の交差だけで、彼は悟った。

同時に、彼は思った。この戦い、諏訪子が負けるということに。彼は絶対に物音を立てようとはしなかった。なぜならば、彼には諏訪子が神奈子に気押されかけていることに気づいていたからだ。

諏訪子は神奈子の一瞬の視線の動きに気付かなかった。そして、今も彼の様子に気づくことなく、神奈子へ鋭い視線を投げつけてい

る。本来の諏訪子なら、例え相手が軍神であっても、その不審な一瞬の動作に気付き、視線の先に居る彼の様子を確認するだろう。

だが、今はそれすら出来ない。余裕が無い証拠なのであった。

室内の空気はさらに重圧を増し、二人が放つ神気はさらに濃厚になっっていく。

彼は奥歯を噛みしめて耐えた。かつて味わった、氷河期の苦しみを骨の髄まで味わった彼だったが、それでも辛いものは辛い。今まで幾度となく体験してきた、自分よりも強い相手との睨み合い。その中でも最大級の相手は、今の彼には大きすぎた。

少しずつ神気を高めていく二人に反比例するように彼の疲労は蓄積し、彼の意識を奪っていく。

……あと、どれほど続くんだ。

何度目かの覚醒と消失を繰り返したとき、突然神奈子の神気が消えた。

「ふう、止めよう」

神奈子は疲れたように肩を鳴らすと、大きくその場で伸びをした。その様子を見て、ようやく諏訪子も神気を収めた。ただ、臨戦態勢だけは解かなかったが。

「……あれ、こいつはどういう風の吹きまわし？ 私はこのまま戦うのかと思っただけだね」

その諏訪子の言葉に、神奈子は鼻を鳴らした。

「私もそれで構わんが、このまま戦い合おうものなら、後ろの男が先にくたばるぞ」

「え……あー！」

ようやく、彼の存在に気付いたのである。既に昏倒していた彼を慌てて諏訪子は抱きかかえると、その小さな胸に頭を抱きとめた。

「ごめんよう、ごめんよう。気付かなくて、ごめんよう。こんなに苦しんで、こんなに唇を噛みしめて、こんなに我慢させて……ごめんよう」

諏訪子の両目から流れ落ちる幾重もの涙。それらは滴となって彼

の頬に当たって、弾けた。汗で濡れた前髪を、そつと指で払う。裾で唇についた血を拭き取り、噴き出した汗を優しく拭いた。

涙を流しながらも、甲斐甲斐しく彼の介抱をする土着神の頂点を見て、神奈子は面白そうに眼を細めた。

軍神である神奈子には、数々の神々と戦った経験がある。民を大事にする神、逆に蔑ろにして恐怖で支配する神、色々な神が居た。

だが、その記憶の中でも、諏訪子のような神はいない。本当に、珍しく思えた。人間を助けることはあっても、世話をすることはない。神奈子は、そんな諏訪子の姿を眩しそうに見つめた。

「……諏訪の」

「ぐす……な、なんだ、大和の」

「どうして、お前は……いや、聞く必要はあるまい。そんな姿になつてまで、お前の傍に居ようとするのだ。私も、その奴のような男が傍にいたら、お前のようになっているのかもしれない」

「……な、何が、言いたい」

「さあ、私にも、何が言いたいのかわからない」

ポンポンと優しく彼の頭を叩く諏訪子は、首を傾げた。

「諏訪の」

「なんだ、大和の」

「どつちみち、もはや戦いは避けられん。遅かれ早かれ、いずれは雌雄を決さねばならん」

「……そうだね」

「その男は、人間にしては強いように見える。私とお前の神氣に一時とはいえ耐えられるし、何かしらの能力を持っているのかもしれないが、私とお前の戦いには力が足りなさ過ぎる」

「……能力？」

「……ええい、そこに食いつくか。私だけが持つ力、お前だけが持つ力のことさ。そいつにも、おそらくそいつだけの力があるのかもしれない。お前にも、思い当たる節があるのだろうか？」

「……うん」

「その能力がなんにしる、力不足であることは否めない。決戦は次の満月を迎えた日の朝だ。その日は、何か適当な理由を付けて、そいつを遠くへ逃がしてやれ」

「……大和の……」

「……なに、たまにはそんなことがあってもいいと、私は思う。さあ、用は済んだ。私は、帰る。決戦の日まで、勝負は預けた」

「ああ、分かった……また、会おう……大和の神」

「……こちらこそ、諏訪の神」

その会合から、ひと月。互いの軍を結集させたその戦は、後に諏訪大戦と呼ばれるようになり、日本神話のひとつとして、数えられるようになった。

彼は決戦の日、諏訪子から敵命を受け、遠く離れた土地で骨休みしていた。全てを知ったのは、諏訪子が神奈子に敗れてから、二日が経った後のことであった。

黙って事を行った腹いせに、彼は神奈子と諏訪子の戦いで出来た湖に名前を付けた。

その名も、諏訪子が戦って湖が生まれたから、諏訪湖。あまりに捻りの無いその名前は諏訪子には不評だったが、意外と信者の間では人気が広がってしまい、その湖も後の世では諏訪湖と呼ばれるようになった。

西暦342年。諏訪王国は、大和の軍神に敗れ、その軍門に下った。しかし、根強いミシャグジ信仰は民から引き離すことが出来ず、神奈子の頭を悩ませてしまうことになるのは、また、別の話。

諏訪大戦（後書き）

ようやく、主人公の能力に関するフラグが経ちました。

ですが、まだ能力が使われる予定はありませんし、覚醒する展開もありません。

どんなに頑張っても、人間は人間です。それが不老だろうが、万年を生きようが、種族の差をうち破るのは並大抵のことではないでしょう。

まあ、才能に溢れた俺TUEEEEEなら、話は別ですが。この話は、彼でも普通に蚊帳の外にされたりしちゃいますが、それでも彼の物語です。全部が全部、彼の周りで物事が起こることはないでしょう。それよりも、彼の知らないところで、彼の行動を決定される。その方が、多いのかもしれないね。

ああ、眠い。寝よう。

新神編最終話・いい日旅立ち（前書き）

超展開お疲れさまでした。

新神編最終話：いい日旅立ち

神奈子が諏訪神社に住み着いてから、また幾ばくかの月日が流れた。やれ信仰をどう神奈子へ移すのか、あーうー、ミシヤグジ様の信仰はちよつとやそつとじゃ解けないとか、それで喧嘩が勃発とか、巫女頭の死去とか、色々なことがあった。

あるとき、新参の神に敗れたという噂を聞きつけた不屈き者が、諏訪子を打ち破ろうと徒党を組んで、諏訪王国に押し寄せてきたことがあった。日ごろ、眼の上のたんこぶ的な相手が、大陸からやってきたよく知らない神によって敗れたと思えば、自分も……と考えってしまうのは、人ならざるものでも同じなのだろう。

この時代では、神はココと決めた場所から、あまり移動しない。信仰する神がころころ移動されると果たして本当に神はいるのだろうか、疑われてしまうからだ。本当にやむおえない事情があるときだけ、土地を変え、新天地で力を蓄えるのである。

そのやむおえない事情とは、他の神、魑魅魍魎に敗れてそこから逃げざるをえなかったということ。ということは、逃げざるをえなかった神に敗れた諏訪子は、それ以上に弱い……弱くなっているのではないだろうか。

おそらく、その者はそう考えたのではないだろうか。遠い場所からやってきた新参の神に敗れるなど、下手をしなくても信仰が無くなってしまうほどのことなのである。

普段から自分達のことを馬鹿にして、眼中にない諏訪子への、下剋上の時。そう、考えたのであろう。

その者の考えは分かる。分かるのだが、相手が悪かった。それに誤った情報を信じ込んでしまったのも、悪かった。

なにせ、大陸からやってきたのは諏訪子以上の力を持つ軍神である。しかも、諏訪子は全く弱まっておらず、むしろ徒党を組んだもの達が戦いを挑んだときよりもはるかに強大になっていた。

そんな二人に戦いを挑んだのは、はつきり言って馬鹿としか言いようがない。

結局、不届き者どもは二人の怒りを買って、塵一つ残さず消滅させられてしまったのであった。

そんな戦いの最中、彼はどうしていたかというところ……。

そんなとき、彼は諏訪子をなだめたりとか、神奈子をなだめたりとか、二人から絡まれたりとか、肩揉めとか腰揉めとか足揉めとか胸揉めとか、とにかくこき使われていた。

女所帯の男というものはとにかく肩身が狭い。自分よりもはるかに年下な巫女達にもこき使われ、背中流せとか頭流せとか隅々まで手洗いしろとか、それはもう、男として見てないんじゃないかな、と思わせてしまうほどの酷使だった。

しかしである。それをあまり苦に思っていないあたり、彼は少し……なのかもしれない。

そして、今日も今日とて彼は神奈子のお尻を揉んでいた。

……あれ、俺ってなんで神奈子の尻揉んでいるの？

いつものようにうつ伏せに寝転がった神奈子の尻たぶをマッサージしていた彼は、ふと今の自分の姿を思い返していた。

その結果、彼はついさっきの現実思い至っていた。

何が悲しくて、神奈子の尻をマッサージしなければならぬのだろうか。いや、マッサージ自体は良い。こんな役得を味わえるようになったのも神奈子が来てからだし、諏訪子の意外な弱点を知れたのも、嬉しい。

だが、よくよく考えてみれば、おかしいことこの上ない。なぜに婚約すらしていないのに尻という女性の秘密をマッサージすることになるのだろうか。それも、諏訪子と一緒に。

最初の頃は、違っていたはずだ。諏訪子も、最初は肩ぐらいしか揉ませなかったような気がする。

それがいつのまにか肩から腕になり、足になり、腰になり、腹になり、裸になり、胸になり、褌がなくなり、全身になり……気付けば平気な顔して神奈子の尻までマッサージしている有様だ。

3年、4年ごとにマッサージ箇所を増えていったように思える。そう考えてみると、ずいぶんと永い時間をかけてこうなったんだな……と思った。止めようとも思ったが、今止めたら何を言われるか分からないし、実はそんなに止めたいとは思えない。

こうして自問自答している今も、信じられないぐらいに瑞々しくも弾力に溢れた尻肉を揉みしだいているという、無意識の自分に、恐れすら抱いた。

それは本当に柔らかかった。お風呂から出たばかりの尻肉はほんのり温かく、汗で湿っている。それを両手で、ぎゅぎゅっとこねていると、ほんのり温かかった尻が、眼に見えて紅潮していく。円を描くようにこねると、時折見える陰りとか皺が、彼の視線の釘づけにした。

「いかん、あぶないあぶないあぶない……………」。

「……………なあ」

「ん、ん、あ、な、なんだい？」

うつとりと彼の手腕に陶醉していた神奈子が、紅潮した頬を彼へ向けた。ほんのり汗ばんだ肌が、健康的に紅潮している。後ろ髪の間からチラリと見えるうなじが、異様なエロさがあった。

「どうして俺は神奈子の尻を揉んでいるんだ？」

「ん、い、いきなり、何を、うん、言うかと思ったら、そんな、んなことか……………」

「そんなことって……………いや、良く考えてみなくても、これっておかしくないか？」

手を止めて、彼は神奈子を見つめた。室内に、神奈子の乱れた息遣いと、諏訪子の寝息が静かに響いた。

「ふう、ふう、ふう。ああ、そのことかい？ それなら、諏訪子の数十年間に及ぶ調教の成果だよ」

「……え？」

神奈子の口から放たれた言葉に、彼は思わず目を白黒させた。

「いや、お前さんって、かなりの奥手らしいじゃないか。諏訪子から聞いているよ。何年も一緒に暮らして、肌の一つや二つ晒しているというのに、寝込みを襲わなかったらしいじゃないか。そんで業を煮やした諏訪子が、お前さんの論理とか常識とかを少しずつ変えていったんだよ」

「……え、なにそれ怖い」

「女の執念は神すら殺すさ」

「……そりゃ、同居しているし、裸ぐらい見る時もあるけど、襲うわけがないだろう。ていうか、なにしてくれてんだ、この蛙は」

むぎゅっと、マッサージされて寝入っている諏訪子の頬を抓った。眉根をしかめて、あーうー唸る彼女を見て、彼はため息を吐いて離れた。

同時に、今まで当たり前のようにあった彼女の素肌を見て、彼は思わず頬を染めた。今の今まで意識していなかったが、なるほど、これが洗脳か。

諏訪子を起こさないようにそっと抱きかかえると、既に用意していた布団の中へ押し込んだ。肩の上までしっかり掛け布団を掛けると、彼は神奈子へ視線を戻した。

「この馬鹿、あほ、ヘタレ」

なぜか罵倒された。

「女が男と同じ屋根の下で酒に誘うつてことは、そういうことだろうが。お前さんはそうやって何年も何年も生殺しにしたっていいのかい？ 諏訪子も私に愚痴をこぼすわけだ」

やれやれと、身体を起こして溜息を吐く神奈子を見て、彼は思った。

いや、だからと言って、人を知らないうちに調教するとか、どうなの？ と。

……確かに、言われてみればそうだ。それらしい節がいくつもあ

る。何度か怪しく輝く諏訪子の目を見て気分が悪くなったことがある。あれがもしかしたら暗示で、時折酒に酔つてもたれかかってくるのはそういう意味だったのだろうか。

だが、それが分かったところで、彼が諏訪子に靡くことはそうそう無い。なぜならば、彼は生粋の巨乳はだからだ。小さなおっぱい、略してちっぱいでも十分許容範囲だが、若いうちにしか成し得ないたゆん、たゆんを堪能出来るのは、持つものだけなのである。

「それなら、どうして神奈子は俺に尻を揉ませるんだ？」

「ああ、それは、私もお前さんに惚れているからだ」

あつさりした口調で、あつさりできない返事が返された。

……なんとなく、そんな気はした。だって、思いつきり乳が見えているというのに、隠そうとするどころか、彼の腕を掴んで胸に押し当てているのである。

諏訪子にはない素晴らしい安心感を前に、彼は神奈子の腕を振り払った。弾みでブルンと跳ねた乳房に目を逸らした彼を見て、神奈子はふふふつと気味の悪い笑みを浮かべた。

「え、なぜに？ 俺って何かしたか？」

「いや、何も。強いていうなら、私を女として見てくれたってことかな。顔つき合わせれば、だいたい分かる。お前さんはそう……いい男ってやつさ」

そう言われても、彼にはよく分からない。もとより、彼は自分が魅力ある男とはこれっぽっちも思っていない。それどころか、むしろマイナスで見た方が早いとすら思っているのである。

それを、いい男と言われても、彼には信じられるはずもなかった。「怒らないんだな」

ポツリとこぼした神奈子の一言に、彼は顔をあげた。

「いや、これぐらい永琳で慣れてるから」

「……色々聞いてみたいことはあるが、止めよう。その、永琳ってというのは、お前さんの、何だい？」

「えっと、妻です。今は離れています」

万年以上前の、了承した覚えが無い妻ですが。その一言は、呑み込んだ。啞然とした神奈子の表情を見て、ややこしいことになりそうだからと判断したからだ。

「……お前、妻がいたんだな。ていうか、その奥さんも不老？」

「ええ、たぶん、永琳も不老なの……かな？ ……言っていないませんでしたっけ？」

「初耳だ！ ……ところで、その話は、諏訪子には……」

「……そういえば、話してませんね。」

「……よかった、本当に、言わないでいてくれてよかった」

噴出した汗を拭いっつ、神奈子は大きく息をついた。

「それで、どうするつもり？ 諏訪子が掛けた暗示も解けたし、あれは元々ちよつとしたことで解けるようなものだったな……で、どうする？ もう十分お前さんは諏訪子に尽くしただろう？ 仕えただろう。雨の日も、嵐の日も、お前さんは頑張つて来た。そろそろ、外へ出てもいいんじゃないのかい」

「……、それって、遠回しに、出ていけってことか？」

鈍い音が脳内を反響した。一瞬どころか数秒程意識を飛ばした彼は、激痛に苛む頭をさすって、犯人を睨んだ。

「馬鹿たれ。誰がそんなこと言った。今なら諏訪子も寝ているし、事情は私から説明しておく。今ぐらいしかないぞ、諏訪子の元から離れられるのは。こいつは蛇のように嫉妬深いからな。それこそ、終わりが来るまですつと」

「……………」

ふふふ、と神奈子の笑い声が静かに室内灯の炎を揺らした。

「そんな顔をするな。お前さんが、諏訪子を嫌って離れようとは思っていないことは分かっている。ただ、ふと、旅に出たくなっただけなのだろう。ちよつと、外を見たくなくなったのだろう。あまり気にしていても、仕方ないさ」

「……………ああ、うん。本当に、済まない……………急なことになって……………俺は、ただ……………」

再び、重い炸裂音が室内に響いた。

「……で、何処へ行く？」

「……とりあえず、都へ」

「都？ 京へ、行くのか？」

「ああ、ちよつと、觀光にな」

「そうか……あそこには、ここらに出る妖怪、魑魅魍魎どもとは比べ物にならない凶悪なやつがごろごろいる。達者でな」

「うん。諏訪子にも、よろしく伝えておいてくれ」

そう神奈子へ伝えると、彼は旅立ちの用意を始めた。

その後ろ姿を見つめていた神奈子は、畳に広がっていた襦袢に袖を通した。そして、火通り身支度を整えると、彼に言った。

「そうそう」

「……ん？」

「次に会ったときは、よろしく頼むよ」

「……あいよ」

振り返らずに、彼は一言そう返した。

そして、彼が旅立った後、神奈子は自身の目でも捉えられないくらい遠くまで、彼の後姿が見えなくなると、ふう、と溜息を零す。

そして顔を上げて、夜空をジッと見つめた。虫の鳴き声が草むらから聞こえてくる。静かに、神奈子の視線が夜の闇へ消えていった。「……どこぞで見ている覗き妖怪。私はいちいち気にしないが、あいつに手を出してみる。そのときは、軍神と崇り神が、きさまの五体を引きちぎることになる。よく、覚えておくがいい」

……返事は、無かった。神奈子も返事を期待していたわけではなかった。気にしなかった。ただ、言うべきことは言った。これ

で何か行動を起こすことはないだろう……おそろくは。

「……ん？」

うん……おい、小腹が空いたよ、何か作って……おい……

今さっきまで彼が居た部屋の中から、彼を呼ぶ声が聞こえる。振り返ると、障子の影に、蠢く二本の足が見えた。どうやら、眼が覚めたらしい。動きから見て、両足をばたつかせているのだろうと、彼女は思った。事実、時折見える白い足が、証明していた。彼の名前を呼んで駄々っ子のように足をばたつかせるその姿は、彼女の姿を知っている神奈子から見ても、可愛く見えた。

「……ああ……」

頭を掻いて、神奈子は唸った。明日まで眠っているだろうと踏んでいた彼女は、一晩かけて諏訪子を宥める言葉を考えようと思っていたのである。

しかし、現実はその上手く事が運ぶことはなく、事態は最悪な流れに向かっていた。

……こいつは……ちょっとばかり、判断を誤ったかな。

そう弱音を吐きそうになった神奈子だったが、仕方ない。彼女は事情を説明する為、諏訪子が居る部屋へ足を踏み出した。

新神編最終話：いい日旅立ち（後書き）

この話では誰が不幸だったのでしょうか。

彼か、神奈子か、諏訪子か。それは誰にもわかりません。

さて、古代編はこれにて終幕。次からは、平安時代編に突入します。ようやく、東方キャラが彼の物語に登場し始めます。ああ、長かったです。

平安編・立ち寄った小屋には……（前書き）

ついに平安時代まで話が進みました。思えば速いものです。まだ熱は冷めていませんので、書き続けます。

平安編：立ち寄った小屋には……

京を目指して、幾日かの月日が流れた。人々の歩みによって生まれた山道を上り、村を訪ね歩く。一日が驚きの連続だった。

時には旅人として、諏訪王国の面白い話を語って路銀を稼ぐこともあれば、獣や魚を狩って干し肉にして売り歩いたこともあった。この時代、まだ物資の運搬に関して盛んに行われておらず、魚を見たことがないという人もざらにいた。中には、魚という言葉すら知らない者も意外と多く、気味悪がって近寄ろうともしないこともあった。そういうときが続いたときは、全て処分するしかなく、おかげで彼の骨密度は 諏訪子の元を離れてから、大幅に数値を増した。そして、二つ、彼を大きく驚かせ、心をかき乱すことがあった。一つ目に彼を驚かせたのは、妖怪の存在であった。

諏訪王国にいたときも、何度か妖怪に遭遇し、また戦ったこともあるが、それらのほとんどは獣と少し外見が異なる程度で、根本はほとんど変わっていないさそうに見えた。事実、少し強いただの獣でしかなく、王国の人民達も大して妖怪に恐れは抱けなかった。

だが、王国を離れてみると、いかに自身の知識が浅く、狭かったかを思い知った。

人の数倍もある巨体を振りまわす蜘蛛。獣の頭に人間の身体を持った化生。夜の闇を駆ける三つ目の巨人。木々の中に溶け込むように姿を消す醜い猿。そのどれもが、彼が居た国にはないもので、そのどれもが、彼の国にはないおぞましさがあった。

妖怪とは、人が生みだした怖れが具現化したもの。実体を持ちながら実体ではなく、命を持ちながら命ではない。かつて、神奈子が自身に零した言葉の意味を、彼は道中何度も身を持って知った。

怖いという思いから生まれたモノ。だから、より禍々しく、より強大で、より多様な姿を持って生まれる。しかも、それらは感情から生まれた存在であるがゆえに、真の意味で実体を持たない。その

ため、物理的な攻撃はあまり効果を成さず、むしろ精神的、呪術的な、よく分からない攻撃の方が効果がある。なるほど、化物、言い得て妙。彼は、何時まで経ってもそれらが理解出来ず、同時に、勿体無いと考えてしまう自分が、時代の観点から見ても、彼には不思議に思えた。

そして、二つ目。

それは、諏訪王国を出てから、飛躍的なレベルアップを果たしたこと。かつての彼からは想像もできない超パワーを手に入れてしまった彼は、それが不思議で仕方が無かった。

なにせ、前はレベルを10上げるのに数年掛けた。それこそ血の滲むような努力を重ね、血の汗が出るぐらい自らを追い込んでも、だ。実際無理を重ねて吐血してしまい、それを諏訪子に見られてとんでもないことにもなった。だというのに、旅立ってから3日でレベルが1上がり、最近では一日で1も上がるようになっていたのである。

この違いが何なのか分からず、彼の頭を酷く悩ませた。

戦った相手？

それとも数？

あるいは種類？

まさか、敵の実力？

……もしかして、環境？

そうしてウンウン唸っていても、結局答えは出なかった。どれもが合っているように思えるし、どれも少し違うような気がする。

そして、今日も彼は無い頭を絞って頭を悩ませている。いまだ、京へ到着していないのは、きっとそのせいなのかもしれない。

よくもまあ、立っていられるな、というのが彼の初見の感想だった。

「……おお、小屋だ」

木陰に入り、残っていた水を飲み干した彼は、ふと、顔を上げた。太い幹に支えられた枝が幾重にも伸び、夕焼け空の赤い光を遮ってくれたおかげで、遠くまでよく見える。

その視線の先に、思わず口にした小屋がポツンとあった。見るからにぼろっちいそれは、日に焼けて汚れており、人の気配が無さそうなのが、ここからでも分かった。

小屋の周囲をうかがうが、民家らしきものは何一つない。井戸もないし、畑もないあたりおそらく、雨風を凌ぐために建てられたものか、あるいはここを通る行商の仮眠場所なのだろう。でなければ、こんな辺鄙な場所に建てるのはあまりに不自然だ。

この時代、家一軒建てるのは、それこそ凄くお金がかかる。木材はいくらでもあるが、機材や道具はおそろしく高価だ。それこそ、大きな町ぐらいにもないと、大工一本でやっているやつなど、まずいないし、そもそも普通の家は村人総出で作るものだ。人手もいるし、お金もかかるのだ。

しかし、ここに小屋があるのは有難い。野宿を覚悟していた彼は、空になった瓢箪を『アイテム所有』で消すと、意気揚々と小屋へと向かった。

ちなみに、今日彼はレベルを2も上げた。ステータス表は、コレである。

【レベル	：	277	】
【体力	：	1001 / 1644	】
【気力	：	999 / 1121	】
【力	：	541 + 50	】
【素早さ	：	300 + 40	】
【耐久力	：	400 + 80	】
【装備・頭	：	なし	】
【　・腕	：	諏訪子ガントレット	】

【	・身体	：諏訪子作の服	】
【	・足	：諏訪子ズボン＋諏訪子靴	】
【技能		：獣の本能・踏みとどまる	】
【		：衝撃の称号	】
【スキル		：洞察力	レベル85
【		：美感力	レベル28
【		：逃げ足	レベル190
【		：自己再生	レベル6
【		：毒解能力	レベル88
【		：フラグ	時々発動
【アイテム		：アイテム使用	】

入口の藁板を除けて中を覗いた彼は、思わず眉根をしかめた。

「酒、臭え……なんつつ臭いだ」

入口を開けたことで室内に新鮮な空気が流れ込む。いや、良く見ると小さな落とし窓が開けられているが、そんな程度ではこの濃厚な酒の臭いを消せるようには思えなかった。事実、酒の臭いはあまりに残っていた。

諏訪子と神奈子の二人にアルコールハラスメントで訴えることが出来そうなくらいの量を神社に運んだこともあったが、それでも臭いだけは耐えられた。それを持ってしても、この酒臭さはどうにも出来ないものであった。

見ると、部屋の中央に設置された囲炉裏には赤く燻った木片がちらほらと燃え残っている。どうやら、既に先客が居たみたいだ。柱から吊るされた鉄鍋には何か入っていたのか、米粒の跡もあった。

何より目を見張ったのは、床一面に転がった空の酒樽だ。大小様々なそれは、一番小さなものでも彼の腹周り程もあり、例外なく蓋が開けられていた。

そして、鼾をかいて寝ている少女と美女が、囲炉裏を囲むように横になっていた。こんな場所で言うのもなんだが、たいそうな美しさだった。

少女、というより幼女に近い少女は、蕾だ。小さな鼻、小さな唇、小さな瞼、亜麻色の小さい着物を身に纏った少女は、そのどれもが幼く、けれども年齢から将来の美貌がうかがい知れた。

美女の方は対照的に、一言でいえば妖艶であった。深緑色の裾から投げ出された四肢は、思わず唾を飲みこんでしまいそうなくらいに白く、肉付きがいい。顔立ちも整っていて、どことなく気だるい胸元から零れ出た膨らみはとても柔らかさそうで、先端の赤みがなにより目の毒だった。彼はそつと手ぬぐいを取り出すと、少女と美女の胸元を隠した。

ただ、落とし窓から差し込む光とは別に赤らんだ酔女達の頬は、一様に緩み、涎を一筋垂れ流していた。1000年の恋も冷める有様だった。

「……この二人が先客……か」

それにしても酷い有様だ。足の踏み場もないとはこのことか。彼は大きいため息を吐いて……酒の臭いにせき込みながらも、室内へ足を踏み入れた。

まずは、腰を落ち着ける場所を用意しなくてはならなかった。いや、物理的な意味で。

燃え残った木片の上に、あらかじめストックしていた薪を、『アイテム使用』で取り出す。それらを手で半分に分けて、空気の通りを意識しながら木片の上に置く。

吊るされた鉄鍋に、とくに気になる汚れがないのを確認した彼は、念のため取り出した綺麗な手ぬぐいで鍋を拭いて、元の位置に戻した。

威力を調節した衝撃波で薪に火を付けて、一気に息を吹き込む。何度かせき込みながらも、火が十分に回復したのを確認した彼は、水入り瓢箪を新たに取り出すと、中身を鍋に入れた。

次に、同じく『アイテム使用』で持っていた米を鍋に注ぎ、お玉杓子で軽く混ぜる。もちろん取り出したお玉で、洗米済みの1時間水に漬けた米だ。一度洗わないで食べたことがあるが、あれは忘れられない味だ。よほどのことがない限り、食べたいものではない。

そこに細かく野草を入れて、軽く塩をふる。取り出した串に今度は新鮮な魚を差し込み、程良く熱が届く位置に串を差し入れた。この工程を3回繰り返した後、木蓋で蓋をした。

「……うん……」

物音に反応したのだろう。何やらギリギリと歯ぎしりしながら寝返りをうった少女と美女は、露わになった腹と太股を搔いていた。うん、ここまでになると、むしろ愛嬌すら覚える。

部屋中に転がった酒樽に目をやる。一応中身が無いのを確認しながら、部屋の隅に積み重ねていく。大きさは形が比較的近いのが多く、しっかりと積み重ねていくことが出来た。ただ、天井付近まで高くなったのには、驚いた。

さて、鍋だ。火傷しないように気を付けながら蓋を開ける。

モワツと蒸気が茸を形作り、天井へ消えていった。お玉杓子で米が十分に柔らかくなったことを確認する。

……うん、大丈夫だ。味噌を取り出して、適量を入れる。ゆつくりゆつくりかき混ぜて味噌を溶かしていく。小さくなっていく味噌に反比例するように、次第に味噌の食欲を誘う香りが室内に漂った。「う、うう……あ、腹減った……」

ふと聞こえた声に振り返ると、先ほどまで横になっていた美女が身体を起こしていた。どうやら、匂いに釣られて起きたみたいだ。掛けていた手ぬぐいが床に落ちて、起きたことで余計に双山の存在感が増した。

起きた反動でかろうじて肩に掛っていた着物が完全にはだける。

だが美女は気にした様子もなく、露わになった乳の下をかりかりと搔いていた。そのたびにプルンプルンと揺れる乳房。思わず見入ってしまったのは、男なら仕方がないことだろう。

寝ぼけていて気付かないのか、美女はさらに大きく欠伸をした。髪をかき分けながら行うその仕種が不細工にならないあたり、美人とは役得だ。より見えるようになった顔立ちは、どこか男性的で、ワイルドな美女、というやつだろう。額に生えた角も、そんな彼女には不思議と似合っていた。

……え？ 角？

彼は思わず目を見張った。この女性、角が……生えている？

さつきは薄暗くて気付かなかったが、確かに美女の額には大きな角が生えていた。見る限り、糊で貼りつけたわけでもなければ、被りものでもなさそうだ。額の淵が盛り上がっているのが、見えた。

「ふあああ……良く寝た……ん？」

ムニヤムニヤと眠気を噛み殺している美女の両目が、彼を捉えた。思わず、彼は肩を震わせた。こんな場所で胸元を露わにして寝ている美女の方が悪いのだが、どこか意気地のない彼は怒られるのではないかと美女を見つめた。

しかし、美女の方かというと、呆けた顔のまま何もしなかった。悲鳴を上げることなければ、着直すわけでもない。ジツと、彼を見つめ続けた。

……しばしの静寂が訪れる。いい加減静寂が辛くなってきた頃、先に口を開いたのは美女の方だった。

「よう」

以外にも、男のような挨拶だった。いや、以外というより、らしかった。

「……お、おう」

反対に、彼の返事はどこか女々しかった。だが、美女は全く気にすることなく、うんと両手を伸ばして胸を逸らした。大きく前に突き出した乳房の大迫力に、逆に彼が視線を逸らした。

そんな彼を見ていた美女は、にやにやと唇に弧を描いた。

「あんだ、何時この小屋に来た？ この辺りじゃ、もうこの小屋に人が近寄ることなんてないと思っただけだね。何時以来だろうね、この小屋に人が入ったのは」

「……はあ、まあ、あんまり目立つところにはないですから……」
「目立つところはない？」

その言葉を言った途端、美女の目が大きく見開かれた。
しまった、何か失言してしまったか？

そう考えた彼が話を変えようと頭を回転させると同時に、美女は大きく口を開けて笑った。

「あははははは！ そりゃそうだ！ 目立つところにはない！ あははははははは！……」

パンパンと太股を叩いて笑っている美女を見て、彼は首を傾げた。
「……あの、俺何か変なこと言いましたか？」

その言葉がさらに壺に入ったのか、美女はそれこそ転げまわるように腹を抱えて笑った。その声は大きく、耳触りのよい音は、小屋の中を反響した。仕舞には呼吸困難になって悶えている美女は、肩を震わせながら体を起こした。

「あははは、いや、笑った笑った。こんなに可笑しかったのは久しぶりだ。うん、ありがとう、名前の知らない誰かさん」

「はあ……」

「ところで、名前の知らない誰かさんでは具合が悪い。どうだい、お前さんの名前を私に教えてくれやしないかい？」

そういえば名乗っていなかったな。彼は彼女に自分の名前を伝えた。

だが、彼女は何度かモゴモゴと口を閉じて唸った後、言った。

「言いくらい」

「……はあ……」

「面倒だから、これからお前さんは、あんだと呼ぶよ」

気持ちいいぐらい一方的だ。だが、彼女の気質か、それともペー

又に巻き込まれたのか知らないが、とにかく気付いた時には美女に、あなた、と呼ばせることを了承していた。

……あ、いけない。晩御飯が。

慌てて鍋に視線を向ける。見ると、多少煮詰まってはいたものの、大丈夫であった。魚もいい具合に焼け上がり、魚の脂がじゅうつと音を立てた。

ふと、背中に気配を覚えた。振り返るまもなく、背中にとんでもなく柔らかい感触と弾力、固い二粒が、むにゅっと服越しに広がった。酒の臭いとともに、両肩が掴まれ、温かい体温が、ふう、と首筋を撫でた。

「お、飯かい？ 私にも少し分けてくれないか？ 酒ばっかり飲んで腹が減ってね。隙っ腹に飲むのも乙なもんだが、やっぱり何か腹に入りたいんだ」

言い終わるが否や、彼の返答を待たずに美女は串を一本抜き取ると、それを齧った。

「……お、美味い。この魚美味いねえ、こんな美味しい魚を食べたのは初めてだ。もう一本貰うよ」

あつという間に身を食べきった魚を囲炉裏の灰に刺すと、彼女の片手が耳横から伸びて、魚を搔つ攫っていった。

そのおかげで、背中に広がっていた弾力が首筋に移動し、彼は生れて始めて谷間に頭を埋めた。後頭部ではあつたが、その感触は言葉に出来ず、彼は両手を握りしめて息を呑んだ。

なにせ、柔らかい。それにくわえて、美女の体臭というのだろうか。意識せずとも鼻をひくつかせてしまう、芳しい芳香が彼の鼻孔をくすぐった。

そうなったら、彼の行動は早かった。残った一本を手にとると、自然な様子で美女の方へ振り返った。

「これ、お連れさんに……」

「お、悪いね」

いえいえ、おっぱいごちそうさまです。そう思った彼には、後悔

は無かった。

美女はこれまたワイルドに魚を口に咥えると、片手で、いまだ寝ている少女の身体を揺すった。前かがみで、そんな動作をすると彼が大変だ。おっぱいぷるんぷるん。

「おい、萃香。いつまで寝ているんだよ、起きな」

5回、6回揺すられて、ようやく少女……萃香は目を開けた。ただ、半分も瞼が開いていなかったが。

「あ……ここ、何処？」

これまた可愛い声だった。見た目相応というべきか、相方の美女とはえらい違いだ。

「いつもの小屋だよ。ていうか、ここで目覚めるたびにそれ言うんだな……ほれ」

差し出された魚を、寝ぼけ眼で受け取った少女は、のっそりとそれを口に運んだ。口がもぐもぐと動く。と、重力に負けかけていた少女の瞼が、一気に勝利をもぎ取った。

「……これ、美味しいね」

身を起こした萃香が、魚にかぶりついた。口いっぱい頬張ったその顔も、やっぱり愛らしく、将来を期待させる。

ただし、頭に二本の角が生えていなければの話だが。

「だろう？ 礼なら、そのやつにいいな。あんたに譲ってくれたんだ」

萃香の視線が彼に向く。人知れず味噌粥を食べていた彼は、とりあえず手を休めて、頭を軽く下げた。

「むぐむぐ、そのやつ？ それと勇儀、胸はだけているよ」

「なあに、お礼だ」

ぶほつと、思わず咽た彼を誰が責められるだろうか。

その彼の様子を見てケラケラ笑った勇儀という名の美女は、ようやく着物に袖を通した。

「ごほごほと器官から押し寄せる苦しみに悶えつつ、彼は二人の女性に首を向けた。」

「……ああ、こほん。ところで、俺もお二人の名前を教えてほしんだけれども……」

「ああ、そうか。そういえば、こっちは名乗っていなかったね」

勇儀は身だしなみを整えると、彼の前に正座した。それに倣うように萃香も串を灰に刺すと、勇儀の隣に正座した。

最初に口を開いたのは、勇儀の方だった。

「私の名前は星熊勇儀^{ほしくま・ゆうぎ}。角を見ての通り、力にはちよいと自慢のある、鬼さ。語られる怪力乱神とは、私のことさ」

次に口を開いたのは、隣の少女だった。

「私の名前は伊吹萃香^{いぶき・すいか}。勇儀と違って、角は二本の鬼だよ。力は及ばないけど、術なら私が上さ。人は私のことを、小さな百鬼夜行とも呼ぶね」

そうどこか誇らしげに自己紹介する二人を見て、彼はただ、気の抜けた返事しか出来なかった。

「……はて、鬼ってなんだっけ？ 確か、諏訪子が何か話していたような……」。

平安編：立ち寄った小屋には……（後書き）

まず、一言謝っておきます。

私はおっぱいが好きです。今まで隠していましたが、実はすごく大好きなんです。

OPENの文字を、OPAIと見間違えてしまうくらいにおっぱいが大好きなんです。

ですので、文章の中におっぱい分が多量に含まれているときがありますが、

これは作者の病気だと思って大目に見てくださいますよう、お願いします。

今回も我慢できずおっぱい分を入れてしまいましたことを、深くお詫び申し上げます。

鬼友達（前書き）

とりあえず、おっぱい分は少し抑えました。

鬼友達

日も落ち、月明かりが無くては手元すら見ることが出来ない深夜。焚火の炎がゆらゆらと木の幹を照らし、周囲に揺らめく影を作りだしていた。時折思い出したように薪がパチンと鳴り響き、炎の中で灰色に変わろうとしていた薪が音も無く崩れた。

繰り返してすっかり慣れた野宿。使い慣れた毛布を地面に敷き、その上で彼らは雑魚寝していた……いや、雑魚寝とは呼べないかもしれない。

彼と、勇儀と、萃香。人間と二人の鬼という、その珍妙な組み合わせは、互いの体温で温まっているのか、互いを抱きしめて眠っていた。

……正確にするならば、彼に、鬼二人が抱きついていて、というのが正しいだろう。しかも彼はしっかりと起きていて、ぐっすり眠っているのは鬼の方であった。

……大変なことを思い出した。

腰に顔を埋めた萃香の頭を撫でつつ、彼は勇儀の双山に顔を埋めながら、諏訪子から聞いた話を思い出していた。何度も何度も口を酸っぱくして、鬼には近づくな、触るな、関係を持つな、という言葉から始まる、伝わってきた鬼の話。

鬼とは、数ある妖怪の中でも最上位に位置する強敵。

その力は人間とは比べ物にならず、単純な腕力は人間が500人力を合わせても勝てないとか。術に長けているものも多く、時には陰陽師を相手に術の勝負で打ち勝つこともある。その肉体の屈強さは他の妖怪に類を見せず、下手な刀では傷を作ることできない。

酒と喧嘩と共にあると言われる程に、酒と喧嘩が大好きだとも聞いた。1樽は余裕で飲み干し、喧嘩と宴会があるところにはどこからともなく姿を現し、騒ぐのだという。

喧嘩など、もはや語る必要がないのかもしれない。1里離れたと

ころからでも戦いの匂いを嗅ぎ分けることが出来るらしく、とくに拳と拳の戦いが大好きらしい。時に、気に入った人間を攫うこともあるらしく、一度目を付けられたら諦めた方が早い。逃げようなどとは考えても無駄。疲れ知らずな鬼は、馬を5頭乗り潰しても笑顔で追いかけてくると言われている。

酒のあるところには鬼が来る。

喧嘩があるところにも鬼は来る。

宴があるところには鬼どもが押し寄せて来る。

まさに最強最悪の妖怪。そのため、鬼が出たという噂が立つだけで、村を棄てて逃げ出す人もおり、鬼を退治するときは決して正面から戦ってはならないと、陰陽師の中では鉄則になっている程であった。

そんな、鬼に、どうして自分は抱かれているのだろうか？ あまつさえ、たわわに実った双球に包み込むように頭を抱え込み、髪にすらつと伸びた鼻先を押し付けている姿など、誰が想像できようか。もちろん、彼にもこういう状態になるなど、想像どころか夢にすら思わなかった。

相手が人間の女なら現在進行形で樂園を味わっているであろう彼は、勇儀から香ってくる甘い汗の匂いに心臓を高鳴らせながらも、居心地悪くため息を吐いた。

途端、その吐息に反応したのか、勇儀はギュツと彼を強く抱きしめた。壊さぬよう、傷つけぬようにするその両腕は、とても優しい。すりすり鼻先を頭に擦りつける勇儀はスーッと深く深呼吸をする。彼の匂いが心地いいのか、目に見えて頬が緩んだ。腰に居る萃香など、何やら寝言を零しながらも男の弱点に頬をぐりぐりと押し付け、にやけた笑みを浮かべて眠りを貪っていた。

彼は窒息しないように気道を確保しながらも、現状を思い返していた。

どうしてこうなった？

一言でいえば、懐かれた。それはもう、肘の裏に張り付いた米粒

ぐらいいべったべたに二人の鬼は彼に懐いた。

自分の何か彼女達の琴線に触れたのかは分からない。あの小屋で出会った日から、あれやこれや言いながら彼と共に行動し、いつの間にかこのような態勢で寝るような仲にまでなってしまうていた。時折感じる寒気は、風邪か。あるいはこの状況による心労か。

最近、押しの弱い男であると自覚し始めた彼は、ふと、このような寝方をするようになった最初の日を思い出した。

縁と言うのは不思議なものだ。本来慣れ合うはずがないものが、何の因果か不思議と顔を突き合わせることがある。

京へ向かってえつちらおつちら歩いてきた彼も、その不思議を身を持って味わっていた。多分、彼だけではないだろうか。鬼二人と肩を並べて歩き、同じ釜の飯を食べて、同じ毛布で寝る。考えれば、本当に不思議な道中だ。

その日は、とても温かかった。照りつける太陽はほんのり身体を温めて、風もほとんどない。行楽日和というやつで、彼は悠々と足を進めていた。

「そういえば、あんた強いのかい？」

そう彼に尋ねたのは、勇儀だった。彼女は萃香が持っていた青色の瓢箪を傾けながら、前を歩いている彼を見つめた。その瓢箪は『伊吹瓢』と呼ばれるもので、酒が無限にわき出る代物らしい。中身は、酒虫という少量の水を多量の酒に変える生物の体液が塗られていて、それが水を酒に変えている。ちなみに、人の飲める度数ではないらしい。

虫の体液が入った酒などよく飲めるなと彼は思ったが、彼女達は全然気にしていないようだった。酒が飲めるなら、そんな細かいことはどうでもいいとのことだ。

その話を聞いた彼は、絶対その瓢箪から酒を飲まないと固く誓ったが、なぜか二人の鬼は率先して彼に酒を飲ませようとするため、そのたびに足を止めて熾烈な戦いが起こる為、彼らの足はあんまり動いていなかった。

「強いんじゃないの？」

答えたのは、彼に肩車された萃香だった。しっかりと両足を彼の首元に巻きつけているため、まったく態勢がぶれる様子はない。両手を彼の頭に添えているその姿は、まるで年の離れた兄弟だ。ただ、来ている服が着物……それも、腰紐で纏めただけの簡素なもので、白く細い両足が露わになっている。萃香の方は気にした様子も無く見る角度によつては太股どころかその奥の陰りまで見えそうなくらいで、逆に彼の方がうなじに感じる生温かい湿り気とぶにとした弾力に、耳を赤くしていた。

「萃香には聞いていないよ。私は彼に聞いているんだ」

「別にわざわざ聞かなくてほしい理想像つくじゃないか」

「たまには想像から外れることはあるだろ」

「その言葉、これで何回目？ 戦うのは好きだけど、弱い奴とやり合うのはあんまり好きじゃないな。つまらないし、張り合いがないし」

あーだ、こーだ言い合う二人を他所に、彼はふと、思った。

そういえば、この二人をステータス画面で確認したことないな。

妖怪の中でも上位に当たるやつらだし、神には劣るにしても、そんなじゃそこの妖怪では太刀打ちできないだろうな。よし、確認するか。

そう思い至った彼は、早速二人の鬼の実力を見ることにした。まずは、萃香の方から。理由はない。ただ、近かったから。

「萃香」

「だから、勇儀は力加減が下手だって……あ、なに？」

萃香は彼の頭にグイッと体を載せる。視界の上半分が萃香の顔で埋まり、山吹色の髪が垂れさがった。おかげで視界が完全に塞がり、

萃香の顔以外、何も見えなくなった。

「ちよつと確認したいことがあるから、降りてくれないか？」

「え、やだ」

速攻で否決された。しかし、ステータス画面は、相手の姿をしっかりと見ないと確認出来ない。今のようには顔だけでは不十分で、最低でも上半身を視界に収めないといけないのである。

「そんなこと言わずに、ちよつとでいいから降りてくれよ」

「やだやだやだ。私、ここが気に入ったんだ。私の指定席はしばらくここにさ」

「すぐ済むから。頼むよ」

「い、やくだ」

「お願い」

「ぶ」。それならいいもん。下ろせるもんなら、下ろしてみろ」
言うがいなや、萃香は身体全体で彼の頭を抱きしめた。ただでさえ密着していた身体が、さらに密着する。そのせいで、うなじにさらなるダイレクトアタックが掛る。思わず、彼は動きを止めざるをえなかった。

どうしたものか。無理やり下ろすにしても、萃香の腕力はこれまでの付き合いでよく知っている。少なくとも、彼の腕力ではどうにもならない。仮に全力で彼女を力づくで下ろしたなら、それこそ面倒な事態になってしまう。

今、こうして行っている肩車だって、元はと言えば、拒んだ彼に不貞腐れた萃香が、自身の能力で彼に悪戯を繰り返したから、今の状態に落ち着いてしまったのである。

彼への悪戯に怒った勇儀に殴られて、涙目になっても止めなかったあたり、その頑固さは鬼というべきか。仕舞には子供みたいに泣き出した為、彼が身を引いてようやく事なきを得たのである。そのおかげで、目に見えて浮かれ萃香に甘えられるやら、萃香以上に目に見えて不機嫌な勇儀に挟まれたせいで、彼はしばらく胃の痛い生活を過ごしたのであった。

そして、今回も二人のやり取りを見ていた勇儀が、黙って萃香の頭を掴んだ。

「いいかげんにしな」

「ちよ、勇儀、痛っ、痛いつて、あだ、あだだだだ！！」

「ふん！」

絡んでいた萃香の身体から、力が抜ける。

同時に勇儀の腕が盛り上がり、萃香の身体がフワツと彼の肩から退かされた。

勇儀はそのまま萃香の身体を地面に投げ捨てると、彼へと振り返った。

「これで、いいかい？」

「あ、ああ。ありがとう」

離れたところで、グエツと、潰れた蛙のような悲鳴が聞こえた。

見ると、うつ伏せになった萃香が四肢を痙攣させていた。駆け寄ろうとも思ったが、鬼だし、大丈夫だろうと思って止めた。決して、眉根を釣り上げた勇儀が怖かったわけではない。

その様子を見て、勇儀はぼつりと零した。

「あんた、萃香には甘いんだな……ちよつとぐらい、私にも分けてくれたっていいじゃないかよ……」

しかし、彼にはその言葉は届かず、何か言ったと聞く彼に、勇儀は何でもないと言った。

とりあえず、これで確認は出来る。萃香はあの様子なので、彼は早速勇儀から見ることにした。そして、思わず噴き出した

【レベル …… 1040】

【体力 …… 18000/18500】

【気力 …… 400/400】

【力 …… 7777】

【素早さ …… 756】

【耐久力	：8777	】
【装備・頭	：紅のかんざし	】
【	・腕	：なし
【	・身体	：麻の着物
【	・足	：麻製の靴
【技能	：怪力乱神	】
【	：美感力	レベル7
【	：妖術	レベル30
【	：自己回復	レベル9
【アイテム	：伊吹瓢	】

なんていう出鱈目だろうか。彼はマジマジと勇儀を見つめた。

神には劣るだろうと考えた数分前の自分を叱咤してやりたい気持ちだった。劣るところの話ではない。素早さこそ彼よりも下回ってはいるが、体力と力と耐久力に関しては、神である諏訪子を大幅に上回っていた。前に見た、神奈子と同等と言っていいパワーだ。

勝負と言うものは、単純なプラスマイナスで勝敗が決まるものではない。全てのステータスが下回っているやつが、上の相手に打ち勝つことは、殺し合いには往々にして起こり得ることだ。それは、ステータスを確認出来る彼には身にしみて分かっていた。おそらく、仮に勇儀が諏訪子に挑んだところで、返り討ちになるだろう。それはなんとなく想像出来た。

だが、そのことを考えに入れても、勇儀の実力の高さはうかがい知れた。諏訪子よりもレベルが半分以下でこれだ。このまま力を付けて行けば、どこまで強くなるのか。妖怪の強さは年齢に比例するというが……彼には想像出来なかった。

最強最悪の妖怪。大げさではない。文字通り、妖怪では『最強』で、人間には『最悪』なのだろう。

だが、そんな彼の様子は勇儀には分からなかったみたいだ。彼女

はモジモジと指を絡ませながら、彼をジッと見つめ返した。

「……うん、分かった」

「な、何がだい？」

だんだん紅潮していく頬を尻目に、勇儀は早口に彼に尋ねた。そっぽを向きながら話すあたり、傍目には大分怪しく映る。

「勇儀の実力」

「……は？」

ポカンと開けられた勇儀の視線が、彼へ向けられる。

「だから、勇儀の実力」

「あ……そ、そうか、そういうことか……あ、お、お前、能力持ちだったのか」

額に噴き出た汗をそのままに、勇儀はまくしたてた。

「……能力持ち？」

それから、勇儀の説明が始まった。能力とは、一部の人間と妖怪、全ての神が持つ力らしく、あらゆる超常事象を起こすことが出来る力のことらしい。能力の強弱は使う者の力や精神力に左右されるもので、年月を経れば強化されたり、発展することもあるらしい。

「私の能力は『怪力乱神』。あらゆる力を操る程度の能力さ」
「程度？」

「スキマが能力のことを、程度の能力って言っているから、私もそう呼んでいるだけだよ。深い意味はない」

スキマって、と聞こうとした彼の首に、少女が齧りついた。言うまでも無く、萃香だ。

放っておかれて涙目になっていた彼女を慰める為に、彼は再び胃を痛めることになる。しかも、なぜか勇儀は今回彼に加勢することなく、舌を出して先を歩いて行ってしまった。

萃香を抱きかかえてえっちらおっちら勇儀の後を追うと、彼女はちようど彼の胸のあたりまである大きな岩に腰を下ろしていた。

せえせえ呼吸を荒げながら勇儀の元へ駆けよる。彼女は彼が傍まで近寄ってきたのを確認してから、岩から降り立った。

「よし、力比べをしよう」

「はあ、はあ、はあ……………はあ？」

彼にはわけが分からなかった。だが、彼の疑問は答えが示されることはなく、いいから！ という勇儀の言葉に押されて、腕相撲をやることになった。萃香も勝負となれば大人しく彼から降りて、成り行きを見守っていた。

「なんでまた急に……………」

「男がごちゃごちゃ言うな。黙ってやればすぐ終わるさ。さっき加勢してやったんだから、嫌とは言わせん」

「むづ……………」

そう返されれば、断ることが出来ない。どこか暗い表情の勇儀を見て、彼は軽く腕を振った。

「ごっごっした岩に腕を置くと、肘が少し痛い。だが、出来ないこととはなく、促されるまま、彼女の手を握りしめた。

「本気でやりな。出ないと、あんたが怪我するよ」

「……………はあ、分かった、分かりました……………やりや、いいんでしょ、やれば」

「よろしい」

その言葉を最後に、会話が無くなった。

……………しばし静寂が訪れる。場が十分に静まったのを見た萃香が、ゆっくり片手を上げた。

獣の本能、発動。

衝撃波を利用した推進力を発動。

そうして彼が準備を整え終わったとき、萃香の腕は一気に下げられた。

「っ！っ！」

「む！？」

声の無い彼の咆哮。爆発的に高められた衝撃波がブースターとな

つて彼の力を底上げし、勇儀の腕を叩きつける……はずであった。轟音と共に、勇儀の華奢な腕が岩を叩き割るはずであった。

「へえ。只者ではないと思っていたけど、大したもんじゃないか」
だが、現実には、彼と彼女の腕は最初からピクリとも動いていない。全く微動だしていなかった。

余裕綽々と言わんばかりに彼の盛りあがった腕を見つめる勇儀。その様子は、小さい子供を相手にしているような印象すら与えた。まるで巨大な岩を相手にしているような感触を、彼は感じた。強いとは、そういう話ではない。話にならないのである。自分の腕力が、全く通用していなかったのだ。

同時に、彼は始めて目の前の鬼を理解した。

これが……鬼か。鬼というものなのか、ということ。

「……あんまり、長引くのもあれだ。一気に終わらせるぞ」
途端、岩が動いた。勇儀の腕が彼の腕を押していき、徐々に敗北へ押しやるうとしている。その光景を横目で見た彼は、思わず舌打ちしそうになった。

強い、圧倒的に強い。だが、不思議と怖いということはない。ただ、悔しかった。目の前で涼しい顔をしている彼女に……自分を見ている勇儀に、せめてひと泡吹かせたかった。

踏みとどまる、発動。

瞬間、勇儀の瞼が大きく開かれた。

「っ！？ おお！？」

体中から汗が噴き出し、地面に黒い跡を作っていく。目を見開いた萃香の様子は、もはや彼の眼には入らなかった。

噛みしめた奥歯が痛む。力みすぎたせいで鼻血が噴き出し、流れた血が彼の唇を赤く濡らした。血管が千切れると言わんばかりに腕に浮き上がり、筋肉が膨張する。

そのおかげで……敗北へ向かっていた彼の腕が、ピタリと一瞬だけ止まり……ほどなくして、手の甲が岩に触れた。

だが、勇儀と萃香から驚愕の歓声を出させるには十分だった。

痙攣する腕を押さえて、必死に呼吸を整えている彼を尻目に、勇儀はジツと今しがた握られていた自分の手を見つめていた。

その顔からは何の感情もうかがい知れない。横から見ていた萃香も、勇儀の顔色をうかがうばかりで、静かに彼の背中をさすっているばかりであった。

そうして、しばらく呼吸を整えていた彼が人心地ついた頃、ようやく場の静寂が打ち破られた。

「ああ、負けた。完璧に負けた」

「……いや、お前は強い。私を相手にここまで粘ったのは、萃香を除いたら二人ぐらいさ。自身を持っていいよ」

彼に視線を向けず、そつぽを向いたまま、勇儀は彼に告げる。腰に下げていた伊吹瓢に口づけて傾けると、彼女の喉が大きく鳴ったふう、と勇儀は伊吹瓢から口を離すと、それを萃香に手渡す。萃香も勇儀に倣って、グイツと口を傾けた。

その様子を見ていた彼は、はあ、と溜息を吐いて、伸びをした。

「次は負けないぞ」

瞬間、勇儀は彼へ勢いよく振り返った。

「……次？」

「そうだよ。勝ち逃げなんてやり方はやめろよ」

そういうと彼はさっさと先へ向かった。ただ、連続する疲労が彼の体力を奪っていき、その足取りは少し、頼りなかったが。

その彼の後ろを、勇儀はジツと見つめる。かすかに、勇儀の唇が動いたのを、萃香は見逃さなかった。

「……そうか……次……か……そうか……そうか……」

……そのとき、勇儀がどんな表情を浮かべていたのかを、彼は知らない。

彼もこのときのことは話にしなかったし、鬼二人も話題にするとはなかった。

ただ、唯一このとき、勇儀の顔を見ていた萃香の口元が笑っていたのは、勇儀すら知らないことであった。

うーん、そういえば、あの腕相撲の後に、こうやって寝るように
なったんだよね……そんなに腕相撲したかったのかな、勇儀は。

変なやつだな、と思いつつ、彼は瞼を閉じた。

しばらくして、彼の寝息が聞こえ出した頃、勇儀の瞼が静かに開
いた。

感じる彼の呼吸は規則正しく、深く寝入っていることがうかがい
しれた。

彼女は辺りの様子をつかがって、不穏な気配を放つ妖怪が近寄っ
てきていないのを確認する。彼を起こさないようにゆっくり腕を解
いて、屈みより……。

彼の額に、優しく口づけた。勇儀はそのままギュッと彼を抱きし
めた後、こんどこそ彼女も寝息を立て始めた。

……………ふふ。

2本角を持つ、小さな鬼の含み笑いが、毛布の中に隠されて、消
えていった。

鬼友達（後書き）

ヒント・平安時代の衣服には、パンツ系の下着はありません（というより、そういう常識そのものがありません）

おいでませ、京都（前書き）

さくさく話を進めたいので、ぐーや様まで一気にいきます。

先に言っておきますが、この話は短いです。あんまり主人公の話をだらだらと書くのもアレですので。

おいでませ、京都

ポツリと、はるか遠くの大地に、都の外観が見える。森を抜け、川を渡り、木端妖怪を勇儀が物理的に二つに叩き割り、猛獣を萃香が物理的に半分折りたたみながら、彼らはようやく都の姿がはっきり視認できる鴨川までやってきたときだった。

勇儀と萃香が前を歩く彼を呼びとめたのは。

「私達は、ここらで分かれるよ」

「私らは鬼だしね……あんまり、というより、人の世界に妖怪が入るのは、ちよつと具合が悪いからね」

「いちいち陰陽師が向かってこられたら、面倒だ」

「というわけで、あんたとはもうお別れ……楽しかったよ。また旅をしたくなったら、私たちの名前を呼んでおくれ。私の能力ですぐに見つけるから」

「変な妖怪に気を付けなよ。萃香の能力でも、都の中央は見れないし……何かあっても、助けに行けないからな。けど、助けが欲しかったら、いつでも呼びなよ」

「小さな百鬼夜行と」

「語られる怪力乱神が、すぐにお前の元へ駆けつけるさ」

「だから、また一緒にお酒を飲もう。いつか……絶対だよ」

「あんたと飲んだ酒の味……忘れないからな」

そう言つて、勇儀と萃香は彼へ手を振った。驚いた彼は、どうせなら一緒に都へ行こうと引きとめたが、彼女達は決して首を縦に振らなかった。

どうして、と彼は思ったが、すぐに理由に思い至った。考えてみれば当たり前だ。

鬼とは、妖怪の中でも最上位に当たる凶悪な存在。普通の弱小妖怪ですら、人が住む村に入れば大騒ぎになるというのに、それが鬼ともなれば大騒ぎどころの話では済まない。

おそらく最初の内は鬼を刺激しないように迂闊に手出しはしてこないだろう。せいぜい酒などを出してお帰り願おうとするが、しかし京は天皇が住む都だ。ほんの僅かでも不審な動きをすれば、たちまち陰陽師が殺到し、彼もろとも抹殺に掛るだろう。

確かに鬼は強い。だが、傍にいる彼は肉体的には普通の人間だ。体力とて無尽蔵にあるわけでもなく、鬼よりもはるかに脆い。

もちろん、勇儀と萃香がそれを許すはずもないが、相手が相手。そんなじゃそこらの村ではない。それこそ、人間最強とも言える奴らが集結していることは予想する必要もない。鬼といえど、まず無事では済まない。

いくら鬼が彼に懐き、彼の為に行動し、危害を加えないと明言したとしても、そう簡単に信用されるわけがない。普通の人たちにとって、妖怪とは恐れる敵であり、倒さなければならぬ相手であり、時に名を上げる為の生贄でしかない。それが鬼であるならば、なおさらだ。

むしろ、鬼と共に旅をする彼こそが異端であり、場合によっては彼すら妖怪の一人と思われても仕方がないのである。

それを彼以上に理解している鬼達は、鼻先を赤くしながら、ただただ首を横に振り続けた。勇儀に至っては時折彼から顔を背けては腕で目元を拭い、また彼へ振り返るといふ行為を繰り返している。萃香は見た目こそほとんど変化はないものの、声は勇儀以上に震えており、伊吹瓢に口づけては傾けるのを止めるという行動を繰り返している。なにより、二人は共通して目元を真っ赤に腫らしていた。そんな彼女達の姿を見て、思いを知って、引きとめるわけにもいかず、彼も寂しさを覚えつつ、彼女達へ手を振って返答した。

彼とて、ここまで一緒にやってきた彼女達と別れるのは寂しい。さりとて、彼女達は彼の為に分かれようと言ってくれている。その気持ちを汲まないわけにはいかなかった彼は、涙だけは見せないようにして、彼女達と別れた。

ただ、時折振り返っては手を振り、振り返っては手を振る鬼の姿

を見て、思わず駆けよりたくなつたは、ご愛嬌というやつだろう。

始めて都に入った彼が最初に思ったのは、都の歪さであつた。

パツと表を見れば、まさに豪華絢爛、雅の文化。条坊制によつて碁盤の目状に建設された住居に、左右対称の姿はまさに圧倒。深紅に塗られた柱と、整備された通路はあまりに美しく、広い。その整備された通路を、貴族が乗っているであろう牛車が、従者達に連れられて平安宮らしき建物へ向かつていく姿は、この時代の文化を想像させた。

だが、良いところばかりではない。表通りから外れたところには浮浪児と思われるやせ細つた子供が数えきれないほどに倒れていた。そのどれもが骨が見えんばかりに痩せ細り、身につけている衣服から、地方から食い扶持を求めてやってきたということが分かる。おそらく、仕事にありつけず、餓死したのだろう。見ると、中には大人も混じつており、その胸には既に白骨と化した赤ん坊らしき白い塊があつた。

それに……臭いも酷い。都の周囲をぐるりと堀で囲っているためだろうが、風があまり流れず、酷く臭う。衛生技術の不備による糞尿の臭いでもない。いや、臭いはあるが、それだけではなく、死体の腐臭……とも、少し違う。

もうひとつ、何かがある。それは、何だろうか？

……しばらく考えたが、それらしいものは思い浮かんでこない。彼は首を傾げつつ、前を歩く牛車の横を通り過ぎた。

瞬間、彼は嗚咽を漏らしそうになつた。

分かつた。その瞬間、臭いの最後の答えを、彼は身を持って理解した。

貴族達、術者達の臭いだ。彼らの身体、衣服、牛車から漂う、夥しい香の香りと、体臭が、この不可思議な臭いの大本であつた。

だが、分かつたところでどうにかなるわけでもない。いくらなん

でも、あなた臭いですよ、なんて言ったら速攻で処刑されてしまう。しかし、彼らの臭いは彼にとって耐えきれない臭いであった。この臭いに比べれば、勇儀や萃香の体臭など天にも昇る芳香だろう。だが、それも仕方がない。

なにせ、この時代にはまだ、風呂に入る習慣が無い。せいぜい月に一回蒸し風呂に入って身体を擦るぐらいで、それ以外は香を焚いて臭いを誤魔化していたぐらいだ。西欧では一生風呂に入らなかつた猛者も存在するぐらいで、毎日風呂に入るように習慣として定着したのは、現代歴史から見て近代に入ってからなのである。

それに比べて、意外な事に、勇儀達は随分と身体を綺麗にする。暇を見つければ身体を洗うと言ってもいい。川や湧水を見つければ、彼を押しつけて浴びる様に水を一身に浴びて身体を清め始めるのはざらであった。

その理由は、彼女達の生活スタイルだろう。妖怪である以上、身体は血に汚れることはざらだ。泥だらけになることもあるが、しかし、待つてほしい。血が身体に付くということは、血が身体に沁みつくことになる。血は空気に触れると酸化を始め、放っておくと血に含まれる菌が悪臭を放ち始める。それはすなわち、自分の場所を相手に知らせることに繋がりかねない。

そのため、彼女達は経験から身体を率先して洗う習慣が付いた。といつても、いくらなんでも現代文明のように毎日洗えるものではない。だが、ある程度定期的に洗っているということは、一定以上は清潔に保たれることになる。

その為、彼女達の体臭はそれほど酷いことはなく、むしろこの時代の衛生レベルから言えば、綺麗に当たるレベルである。その綺麗に慣れされた彼にとって、普通レベルの臭いにはもはや耐えられる状態ではなかつたのであつた。

ちなみに、彼はアイテム使用により特性の簡易風呂を取り出し、それを使って毎日風呂に入っている。衝撃波を利用した垢スリによつて身体を綺麗にし、頭髮だつて同様だ。途中で勇儀と萃香も一緒

に同伴するようになったことで、彼の臭いについての耐性が衰えてしまったことに一役買ってしまったのは、不可抗力としか言いようがない。

かつては諏訪子と神奈子も同様に一緒に同伴しており、基本毎日入っている。衝撃波を使った温水風呂は鬼どころか神にとつても憩いの一時になっていたりする。

閑話休題。

そんなわけで、彼は臭いに内心吐き気をもよおしつつ、そっと従者の一人へ声をかけた。

どうやら、彼らはこれから京を離れて、輝夜姫なるたいそう美しい少女のところへ求婚しに行くらしい。いったい、どれほど美しい少女なのだろうか。帝すら見染めた程の美少女らしく、その美しさに月すら霞、富士ですらその身を小さくするとまで言われているとのことだ。なるほど、実物は分らないが、噂になるほどだ。それほどの美しさなら、求婚したくもなるだろうと、彼は頷いた。

だが、彼らの進んでいる方向はどう見ても平安宮だ。どうして反対方向へ向かっているのか分からなかった彼は、思いつきりみずばらしいオーラを出して、ついさつき田舎から出てきた男を装って彼らに尋ねた。その結果、理由とは別に輝夜姫の居場所まで意外と簡単に教えてもらった。

なぜ平安宮に向かっているかというと、一言でいえば風水にのつとつて、縁起の良い方角を移動しながら輝夜姫の元へ向かっているそうだ。彼にはとんと理解出来なかったが、貴族達にとってはとても大事なことらしく、儀式の邪魔をするなら問答無用でたたき切るとまで言われてしまった。

なぜ輝夜姫の場所まで教えてくれたのか尋ねると、ただの気まぐ

れらしい。

そういうものかと思った彼は、貴族達に深く礼を言った後、その輝夜姫なる少女がいる場所へ向かった。

とくに理由は無かったが、帝すら見染めた美少女というものを、一度拝見して見たいと思った彼は、さっさと姫の住居へと足を進めた。。

決して、臭いから逃れようとしたわけではないことを、ここに記述する。

おいでませ、京都（後書き）

はい。超短い閑話ともいうべき話でした。

ここで痛恨のミス。竹取物語はどうかやら奈良時代の話みたいで、話
が作られたのが平安時代みたいです。なんという……なんという……
…。先に明記しておきますが、輝夜姫に幻想を抱いている方は、次の話
は飛ばしたほうがいいのかもれません。

平安の世は物騒です（前書き）

この話にはグロテスクな描写があります。
注意願います。あと、輝夜は次の話に登場します。

平安の世は物騒です

どうしてこうなった。

近頃よくこのような言葉が口をついて出てしまうことに、彼は青息吐息であった。なぜならば、彼は今、非常事態に直面しているからである。件の輝夜姫なる人物に会う為に、都を一時離れた彼であったが、こう何度もこのようなことがあつては、おちおち旅をすることもできない。

しかしそれは、彼にも落ち度があつたのかもしれない。人里離れた森の奥。周囲は木々で茂り、木を背にすればいくらでも接近できる地形。唯一落ち葉が危険を知らせてくれるが、自分の足音が木々に反響して、方向の特定は難しい。

「大人しくしろ！ なに、命までは取りはしねえ、身ぐるみ置いていきな！」

そう、彼に怒鳴つたのは、麻の服を着た男であった。大きな体格を揺らし、黄色く変色した歯をむき出しにして怒鳴っている様は、とてもではないが子供に見せられないだろう。しかも男は一人ではなく、計7人の集団であつた。

いわゆる、盗賊というやつだ。おそらく、どこから奪い取つてきたのであろう。男達の手には一樣に、粗末な作りの鉄剣が握られていた。ただ、手入れも何もしていないのか、ところどころ欠けており、中には錆びて本当に切れるのか疑わしいものも見えた。

リーダー各だと思われる長髪の男が、皮脂と土汚れで黒く汚れた鼻頭をグイッと彼に向ける。思わず彼は目を逸らした。人間、あまりに醜悪なものがあると、自然と見ないようにしてしまうものだ。

その様子を見た男たちは、下品な笑い声を上げた。

目の前の男は、怯えて目を逸らした。どうやら、今回もあっさり終わりそうだ。

男達の誰かがそう考え、あるいは全員が同じことを考えたに違い

ない。

事実、男達はすぐに行動に移ることはなく、遠回しに彼を見つめていた。中にはこれ見よがしに剣を振るう者もあり、自分達の優位を微塵も疑っていないようであった。

この時代、それこそ数が全てである。武術云々などを習得しているものなど、それこそ100人にも満たないうえに、武術とすら呼べない代物である。

そのため、数さえあればまず負けることはなく、例外が起こらない限り彼らの優位性は揺るぎないものであった。

ただ、例外が起きるまでは。

盗賊の一人が、のしのしと短い足で彼の元へ近付いてくる。その姿にはまったく警戒が見られない。男は舌舐めずりしながら、その姿を大きくしていく。

ふと、彼はその男の姿に目を止めた。違和感、悪寒、嫌悪、それらが混ざり合ったような、不可思議な怖気が背筋を駆けあがっていく。自然と身体が警戒態勢に移り、気付かれないように迎撃出来るよう身構えた。

しかし、なぜこんなに男達を警戒しているのだろうか？

それが彼には分からなかった。ステータス画面で確認すると、『獣の本能』が発動しているのが分かる。しかし、迫ってきている男を見ても、とくに警戒に値する相手とは思えない。何か能力でもあるのかと、彼は男のステータス画面を確認した。

【レベル	：	8	】
【体力	：	50 / 70	】
【気力	：	0 / 0	】
【力	：	1 1	】
【素早さ	：	1 2	】
【耐久力	：	1 5	】

【装備・頭	：なし	】
【腕	：なし	】
【身体	：麻の服	】
【足	：麻製の靴	】
【技能	：両刀	】
【スキル	：なし	】
【アイテム	：なし	】

やはり、弱い。レベル8というと、彼ら一般人から見れば少しは高い方なのかもしれないが、あまりに数値が低い。彼らの栄養状態や、個人差が関係しているとしても、これでは弱小妖怪ですら捕食されてしまうだろう。

ただ、技能の『両刀』というのは気になった為、彼はジツと彼を見つめた。念のため他の盗賊達も確認するが、『両刀』を所持しているのは目の前の男を除いて二人であった。

……あれ、でも俺ってレベル8のときは結構数値高かった気がするけど……ど……！？

男の姿を注意深く見ていた彼は、その瞬間、背筋を走る悪寒の理由に気付いた。

「へへへ、大人しくしなびや」

ほぼ同時に彼は衝撃波を目の前の男にぶつけた。加減すらしなかったその一撃は男の胸を引き裂き、内臓をミンチに変え、全身の骨を砕いた。

思わず竦み上がってしまいそうな酷い音と共に、男の姿は直視出来ない凄惨なものとなる。物に成り果てたその赤い物体は、轟音と共に盗賊達の間をすり抜け、木々の隙間の中へ消えて行った。

だが、放射状に飛び散った鮮血の蒸せる臭いと、赤い道しるべが森の奥へ続いていく様は、ある種の異様な凄惨さを醸し出す。木々の幹にべったりとへばりついた肉片が、どろりと音も無く地面に流

れ落ちた。

後悔は無かった。人を殺したことの罪悪感も……少しはあるが、気にする程でもない。文字通りの弱肉強食世界を生き抜いてきた彼にとつて、生きる為になにかを殺すことは、してはいけないことではない。

もちろん、同じ人を殺すことには躊躇もするし、必要であつてもしたくはない。たとえそれが自分の命を奪おうとする盗賊であつても、出来ることなら殺したくはなかつた。

ただ、殺さなければならぬ理由が、彼にはあつた。

殺してもよい、殺しても罪悪感が湧かない理由が、彼には見えた。彼は目の前で起こつた惨劇を見て、呆気にとられている盗賊達を尻目に、すぐさま右手をもう一人の『両刀』へ向けた。そして、指を溜めて……弾いた。

パチン、と乾いた音が周囲に響く。

その音が鳴りやむと同時に、『両刀』の身体が縦に分かれた。脳天から股間まで、一直線に断られた『両刀』は、断末魔すらあげることなく、その生涯を終えた。ぼとぼとと切断面から滝のように血液と臓器が零れ落ち、びちゃつと別れた身体を支え合うように、折り重なつて倒れる。頭の部分から零れた脳髓が潰れ、赤白く濁つた体液を広げた。

彼は素早くリーダー格であろう長髪の男と、最後の『両刀』へ手を向ける。

途端、長髪は、か細い悲鳴を上げて短剣を落とし、『両刀』は押し上げた股間部分の衣服を沈めた。

彼の衝撃波は、基本的に両手から放つ。体中から放つことも出来るが、威力はそれほどではない。初動作にどうしても溜めが必要であり、場合によっては相手に先制を与えることになりかねない。

しかし、威力を下げて初動作を早くしても、相手の動きを止められなければ意味が無い。一瞬でいい。溜めを作ることが可能な一瞬

の猶予。必要なのは、ほぼ予備動作なく放てる攻撃で、かつ相手の動きを一瞬だけ止めることが可能で、相手より早く放てること。

それらの条件を満たす技を開発するのに、彼は長い時間をかけた。そして、思考錯誤の末、指を弾くという形で衝撃波を放つことを思いつき、それを可能にしたのである。

その威力は見ての通り、一人一人ぐらいなら一撃で真つ二つに出来る殺傷力を誇る。ただ、勇儀達に見せたとき、微笑ましく見られたのは、唯一の汚点ではあるが、それはこの場では彼しか知らない。

もちろん、人間である盗賊達にとって、それはまさしく一撃必殺盗賊達の誰もが声を上げられず、ただただ顔を引きつらせ、短い両足を目に見えて震わせているばかりであった。

「あんたらがどうして俺を狙ったのかは知らんし、知りたいとも思わん」

その静寂の中を、彼の声を通り抜けた。

「ただ、これ以上俺にちよっかいを掛けるならば……」

パチン、と彼の右手が鳴った。と、同時に『両刀』の頬に薄い線が生まれ、そこから滲み出るように血が噴き出した。

「正しく、真つ二つだ」

そのとき、森の中を男達の野太い悲鳴が木霊した。

そのようないざごぎに合いながらも、彼は輝夜姫の元へ向かった。そうして二日掛けた彼を迎えたのは、大きな屋敷であった。寝殿造であるそれは、都に建ち並んでいた屋敷に負けず劣らずの絢爛さであった。

見ると、入口らしき門には見張りらしき男が4人おり、先客らしき牛車が……全部で5台も列を成して並んでいた。そのどれもが金

や紅い塗料、糊によって美しく飾られており、目を凝らして見れば、従者どころか牛ですら身なりが豪華であった。

それだけでなく、屋敷にも貴族の力らしきものが見え隠れしており、屋敷を守るようにぐるりと一定間隔で幾人もの男が並んでいる。そのどれもががちりとした体格をしており、事実、先日遭遇した盗賊よりも数倍レベルが高かった。

さすがは帝すら見染めた女性が住まう屋敷。平安京から離れているというのに、警戒のレベルがほぼ貴族の屋敷と同レベルだ。

「ほほう、これが輝夜姫の家か……やっぱり豪華だな……こういう家に住みたいな……」

「なら、帰ればいいと思うよ」

「ああ、そうだな。帰ればいいのか……って、え!?!」

突然返された返事に目を白黒しながらも、彼は慌てて周囲を見回した。

だが、周囲にそれらしい人影はなく、それどころか彼の様子を見ていた貴族の従者達がほくそ笑んでいたぐらいであった。

……なんだ、今の声は。空耳かな? そうか、空耳か……女の子の声に聞こえたし、こんな場所に女の子がいるわけないしな……。

けど、どこかで聞いたことがあるような……。そう考えた彼の耳に、またしても声が届いた。ただ、今度は男の声で、先ほどよりもはっきりと彼の耳に残るものであった。

「これ、その」

「……………」

「これ、上じゃ、上」

「上……っ!?!」

思わず出そうになった声を、彼は口を手で覆うことで、寸でこのころで我慢した。

その行為は現代から見ても失礼に当たるが、彼にも理由がないわけではない。

「うむ? なぜ口を手で押さえておる。わらわの顔がそんなに面白

いのか？」

じろりと、怒りに満ちた視線が彼へ注がれた。

声の主。それは、牛車のすだれから身を乗り出すように彼を見下ろしていた、貴族の男であった。だが、彼の笑った原因は貴族の言う顔ではない。膨れ上がった腹がすだれを押しつけるようにしている姿が彼の笑いのつぼというやつに入っただけである。

「い、いえ、滅相もございません」

「ならば何故じゃ。理由を答えるのじゃ」

「それは……貴方様が、思わず見惚れてしまうほどの美男子で……驚いてしまったのであります。気を悪くしてしまったのでしたら、お許しください」

そう言って、彼は地面に膝を付けて頭を下げた。こういうプライドは彼にはないので、けっこう抵抗なく出来たりする。

しかし、そのおかげで貴族の男は機嫌を持ちなおした。

「ほう……お主、なかなか良い目を持っておるのう」

「は、お褒め頂きありがとうございます」

「うむ。ところで、お主も、なよ竹の輝夜姫に会いに来たのでおじやるか？」

おじやる。おじやる。おじやる。その時笑わなかったのが、彼は自分が不思議であった。あと、なよ竹、に内心首を傾げた。

「はい。卑しくも、貴族達が恋焦がれる輝夜姫なるお方がどのような人なのか、一目拝見したく思っています……居ても立っても居られず、ここまで駆けつけた所存であります」

「ほう、そうか、そうか。民にもなよ竹の輝夜姫の噂が広まっておるのか」

「はい」

立ちあがって、彼は屋敷へと目をやった。

「貴族様も、輝夜姫に求婚するのですか」

「うむ。通いに通いつめて、ようやく輝夜姫の元へ通されることになったのじゃ」

「おお、さすがは貴族様です。我ら民草には成し得ない情熱をお持ちになつていらつしやるのですね」

「ほほほ、あまり褒めるでない。本当のことでも、少し気恥ずかしいでおじゃる」

「ははは、と内心乾いた笑いをもらしつつ、彼は一礼してから貴族の元を離れようと踵を翻した……その時だった。

「ついでじゃ。お前も輝夜姫に会うでおじゃるか？」

「え!？」

驚いたのは、彼ばかりではない。盗み聞きしていた従者、近くの貴族も、驚いてすだれをかき分けて身を乗り出していた。

「そ、そんな、恐れ多い……」

彼にとつては願つても無いことではあるが、あまりに虫が良すぎる。とくに貴族……上に立つものは含むモノも一つや二つでは収まらない。それこそ、なにか裏がある方が当然だし、それを疑うのも当然である。

それらのことを予想していたのか、原因である貴族は、おっほんと一拍を置いた。

「なに、何もお前のような民草に求婚を許すわけでもない。ただ、我らの引きたて役になつてほしいだけのことじゃ」

「引き立て役……ですか？」

「うむ」

そういうと、貴族はすだれの中へ消えた。それと同時に反対側のすだれが開く音とともに、従者達が屋敷と他の貴族が乗る牛車へ走つて行つた。翁への了承と他の貴族への了承を取りに行っているのは明らかだった。

……なるほど、引き立て役か……。彼は自分の恰好を見て、納得した。どこから見ても民草にしか見えない格好、片や、豪華絢爛な衣装を身に纏つた貴族。しかも、この時代は裕福な身体が美しさの一つ。間違つても太つては見えない彼は、貴族達の美的見方から考えても、不細工に当たる顔立ちなのである。

なるほど、美しい貴族の隣に、不細工な民草。想像すれば、貴族がさぞ美男夫に見えるだろう。

まあ、それも仕方がないかな、と彼は思う。むしろ、幸運とすら考えた。

なにせ、輝夜姫に会うなど、考えていなかったのである。それこそ、遠くから顔ぐらい見えたらラッキーだな……っという程度だ。

それを、ちょっとした貴族の気まぐれで叶うのだから、彼は思わずニヤリと笑った。

平安の世は物騒です（後書き）

お……ま……け

「……」
「お〜い、諏訪子……あの酒はどこに……って、おま、また覗いていたのかい!?」

「っ!? い、いや、そ、し、してないよ、何も!」

「嘘を憑くな! あれほど覗き見は止めると……」

「だって! だって!」

「だってもどうしてもあるか! その神具は没収だ!」

「嫌だ〜! うわ〜〜ん! 神奈子〜〜許して〜〜!」

「駄目だ! お前そう言つて前にも鬼がどうか飛び出していったじゃないか! 連れ戻すのに私がどれだけ苦労したと思っているんだ!」

「鬼だよ! 妖怪だよ! 心配じゃないか! お腹の子供だって、もうすぐ生まれるんだよ!」

「あいつは存外しぶといだろう! ていうか、その子供もあいつの寝込みを襲つてこさえたものだろうが!!! 知らないうちに相手を父親にするとか、私はお前が心配だよ!!!」

「だってえ…… だってえ…… うわああ〜〜ん!!! 寂しいよ〜
~~~~~!!! 会いたいよ~~~~~!!! 帰ってきてよ~~~~~!!!」

「ああ、もう、びーびー泣くな!!! ああ、ちくしょう、本当に面倒なやつだな、お前は!!!」

以上、諏訪子さまが見ている、でした。

五つの難題以前に、あるだろ？（前書き）

輝夜好きなひとはごめんなさい。先に謝っておきます。

## 五つの難題以前に、あるだろ？

讃岐造『さぬきのみやつこ』と名乗る翁に連れられ、屋敷の中を右に左。もはや自分がどこを歩いているのか分からなくなったところで、牛車5台が入りそうな広い部屋に通された。

ここでは香が焚くのが基本である為、中に入ると同時にむせ返るような甘い匂いが鼻孔を満たした。貴族達は平気な顔をして用意された場所に座って正座をしたが、彼はというと、貴族達のむせ返るような体臭と溢れんばかりに焚かれた香のダブルパンチによって、気分的には既に瀕死であった。

朦朧とする意識をなんとか持ち直しながら、用意された場所に腰を下ろす。そうしてジツとしていると、少しずつ体調も回復してくる。いまだ臭いには全く慣れなかったが、我慢出来る程度には嗅覚が麻痺してきていた。

そして、余裕が生まれけると、室内に目をやる余裕が出てくる。室内は広く、彼ら5人が並んで座っても余裕がある。机などの家具は全く置かれておらず、彼らと向かい合うようにして、一面すだれで見えないようになっていた。どうやら、あのすだれの奥に輝夜姫が入るらしく、ここまで来て焦らすらしい。貴族達にとってはそれぐらい慣れているのか平気な顔をしているが、彼はというと、何と云うか、面倒な気持ちになっていた。

改めて室内を見回して見ると、この部屋の主のセンスというのがうかがい知れた。ほとんど日が当たっていないのか、畳はほとんど焼けていなかった。おそらく、求婚しにやってくる貴賤の者や貴族の者から輝夜姫の姿を見させない為に、ほとんど外の光を入れていないのだろつ。

せっかく畳の匂いで癒されようと考えていた彼であったが、そう上手くことは運ばなかった。

「……………」



貴族達5人は、そんな彼の挙動に視線を向けることはなく、先ほどこからひっきりなしに自分達の従者と密談していた。耳を澄ませると、あれでもない、これでもない、従者達が持つてくるものを突き返している。

輝夜姫に渡す貢物を吟味しているのだろう。彼がようやく室内の観察を終えた頃には、既に貴族達は貢物の用意を終えて、彼を横目で見つめていた。

しかし、彼には渡すものもなければ、用意すらしていない。それどころか身につけている衣服は麻の粗末なもので、見た目こそそれほど悪くはないものの、貴族達の衣服と比べればあまりにみずばらしいものであった。

それは貴族達にも分かっている。彼らは恥ずかしげに肩身を狭くしている姿を見たいだけで、彼には全く注意を払っていない。そして、彼が大して気にも留めていない姿を見て、所詮は民草、高貴な貴族の嗜みは理解出来ないか……と興味を失くした。

しばらくして、スツと翁が姿を現し、これから輝夜姫が参られると一言だけ述べると、また屋敷の奥へ姿を消していった。

そうになると、妄想をたくましくするのが男である。それは彼だろうが貴族達だろうが関係はなく、これから姿を現すであろう輝夜姫に胸を高鳴らせていた。

それからまた、しばらく時間が流れた。

「輝夜姫が入室されます」

再び姿を現した翁の声が、室内に響く。それと同時に、すだれの奥に確かな人影が映り、それは静々と足音を立てること移動する。ちょうど中央の位置に止まると、影が小さくなった。

同時に、貴族達の求愛行動が始まった。

よくもまあ、ペラペラと口が回るものだ、彼は思った。

これで彼これ4回目にもなる答弁をした貴族が、絹の反物を持つ

てさらに声を張り上げた。4回目になるというのに、その内容は全て違う。他の貴族達も同じようなもので、なぜ話が被らないのか彼は不思議に思えた。

そして、貴族達の会話が5順目を回ったことだろう。輝夜姫が始めて言葉を発したのは。

「貴方達の気持ち、痛いほどに伝わりました。ですが、そのどれもが魅力的で、また虚偽的に見えてしまいます。そこで、これから私と一人ずつ口説いてもらい、一番素晴らしかったお人の元に向かおうと思えます。それで、よろしいでしょうか？」

その言葉に、いい加減焦れてきた貴族達も賛成し、帰るタイミングを見計らっていた彼も、賛成した。そうなると、新たな場所を設けるらしく、影に映る輝夜姫が静々と部屋の外へ姿を消した。

貴族達も、いくらエロの為とはいえ、疲れるものは疲れるのだろう。皆、足を崩して一様にだらけた姿を見せた。一人5分にしても、かれこれ2時間近く話続けていることになるのである。達磨のような身体をしているのに、大した体力だ。最初の一人が翁に呼ばれて部屋から出るのを、彼は欠伸を噛み殺しながら見つめた。

「それでは、ありがとうございます……次のお方！」

翁の言葉に、彼は腰を上げた。パキパキと骨が鳴る。座り続けたせいですっかり四肢が固まり、彼は大きく伸びをして筋肉を伸ばした。

その様子を見て、貴族達は漏らすような笑い声を出した。貴族達の姿に表情一つ変えなかった翁ですら眉根をしかめているのを見て、彼もさすがに気楽にし過ぎたと反省した。いくら見物だけとはいえ、求婚は求婚。それらしい態度で臨むのが道理である。

彼は一つ翁に頭を下げると、促されるまま翁の後に付いて行った。  
「うっ」

眼球に走った痛みに、彼は思わず目頭を押さえた。暗い室内から、

明るい縁側に出たせいだろう。眼球が突然の光に抗議の声を上げる。ジンジンと走る痒みにも似た痛み顔に顔をしかめつつ、前を歩いている翁を追いかける。

既に昇っていた日が傾き始めていた。後3時間程で夕焼けになる。屋敷の庭は思いの外綺麗に手入れをされており、余計な雑草は全て抜かれていた。見ると、奥の方では岩垣が作られており、そこでは鯉らしき魚が優雅に泳いでいた。

「あの魚は、貴方が世話をしているのですか？」

「……………」

気になった彼は尋ねてみたが、翁は固く口を閉ざし、こちらへ振り返りもしなかった。その間にも翁は迷路のような屋敷を進み、もはや彼には進んでいる心持ちすらなくなっていた。

縁側から見える景色も、少しずつ陰鬱な、外から全く見えないような風景に移り変わっていく。他者から輝夜姫の居場所が分からないようにする為なのか、それとも輝夜姫がこの場所に好んでいるのか、それは分からない。ただ、こんな場所ではあんまり楽しい気分にはいられないな、と彼は思った。

……………しかし、いつになったら到着するのだろうと彼が思い始めた時、ようやく翁は足を止めて、横の襖を静かに開いた。そのままその場で腰を下ろすと、これまた静かに頭を下げた。

「お入りください」

……………彼は翁の言葉に従って、室内に足を踏み入れた。

「……………ん？」

入ってすぐに彼の目に入ってきたのは、最初と同じくすだれであった。違うのは、そのすだれの距離と部屋の広さ。文字通り、目と鼻の先にすだれがあり、よく目を凝らせばすだれの奥から視線を感じる……………と期待させる程度には違っていた。

部屋の広さも先ほどとは雲泥の差で、せいぜい4畳程の広さしかない。まさに、話をするためだけの部屋なのだろう。ここにも香がふんだんに使われおり、彼は眉根をしかめながら、すだれの前で腰

を下ろした。明かりに使われている蠟燭が、ほう、と揺れた。

「そなた、名は何とおっしゃいますか？」

鈴を転がすような、耳触りの良い声。声からして若い。

彼は自分の名を答えた。貴族のように役職についているわけでもないのに、ずいぶん短いその名前を聞いて、輝夜姫は、ふうん、と気の無い返事をした。

「それで、あなたは……私に、何を示してくれますでしょうか？」

「何を……とは？」

「ふふふ、とぼけないでくださいませ」

男心を知りつくした声色が、彼に尋ねた。

「とぼけておりません」

「ふふ、そう、そうですね……では、私へ何か言うことがありますか？」

輝夜姫の質問。普通の貴族であれば、こんな言葉が返されれば、何か落ち度があったのかと躍起になってもおかしくはないし、遠回しにもう帰ってくださいと言われていたようなものである。事実、彼の前にこの部屋を訪れた藤原不比等『ふじわら・の・ふひと』は、似たような返答を返され、すぐごと退室してしまったことを、彼は知らない。

ただ、彼と不比等には大きな違いがあった。それは、輝夜姫に対する好意であった。

「いえ、なにもありません。もう帰りますので」

「……………え？」

彼の言葉に、輝夜姫の声が凍った。それもそうだろう。求婚しに遠方からやってきた相手が、顔を突き合わせてすぐに帰るといっている。これでは逆に、輝夜姫など大したものではない、この話など、こつちからお断りだと言外に述べていると同じ意味だ。

しかも、相手は粗末な麻の服に身を包んだ、見るからに庶民と思われる男。プライドをいたく傷つけられたのもうなずける話で、輝夜姫は怒りを押し殺した声で彼を引きとめた。

「お待ちになつてください」

もしこの言葉を今まで彼女の元を訪れた他の貴族が聞いたら、嫉妬に狂つていただろう。なにせ、彼女が誰かを引きとめたのはこれが初めてのことであったからだ。

しかし、彼にはそんなことは関係なかった。

「いや……顔も見えないし、来る理由がなくなつたから、もう帰りたいんだけど……」

「か、顔ですか？」

「うん、顔。それ以外に何がある」

「何つて……」

そう断言されれば、いくら輝夜姫とて、二の句が告げられない。平安時代では女性の顔を外で見るのはご法度で、それこそ家族の顔すら見たことがないというのもざらな時代なのである。

だが、輝夜姫もただでは終わらない。彼の衣服を見て、貴族の常識は通じないのだろうと考えを改めた。

「顔が……私の顔が見たいのですか？」

「うん。見せてくれるのか？」

「うふふ、よろしい。貴方様は身なりからして、どうやら貴族の嗜みが理解出来ないようですね」

「ほっとけ」

「っ！？ ま、まあ、いいでしょう。それでは、拝見なさいな。そして、決して忘れられない永遠の美というものを、その汚い両目に焼きつけなさい。お爺様！」

あれ、なんか言葉づかい汚くね？ とか考えている内に、翁がそくさと室内に入ってきて、手早くすだれをぱらりとめくり上げて、室内を出て行った。

瞬間、確かに彼は見惚れた。その美しさに。

全てが違う。圧倒的に違う。

目の形、大きさ、色、黒目と白目の割合。

鼻の高さ、大きさ、角度。

唇の厚さ、色、艶。

肌の白さ、きめ細かさ、美しさ。

髪の色、艶、耳の形、大きさ。

顔の輪郭、状態。

全てが違う。全てが調律されたように整っている。

そして、何より違ったのが、彼女が放つ、異質な気配……オーラであった。

この時代にはない……何というか、全く別の存在。まるでこの世には、この地上には存在しないような気配の薄さ。むしろ、宇宙人と言われれば納得できるような、そんな何かを彼女から、彼は感じ取った。

傾国の美女とは、こういう者のことなのだろうと、呆けた頭で思った。

「どう……私の顔を拝んだ感想は？」

勝ち誇った顔で、彼へと問いかける。そんな悪だくみしていそうな表情ですら、綺麗な範疇にあるのだから、美女は本当に得をしている。

そんな、誰もが見惚れてしまう表情を向けられた彼も、呆けたように答えた。

「満足しました。それでは帰らせてもらいます」

その瞬間、彼は世界が凍る音を確認に聞いた。

ビシッと、輝夜姫の動きが止まった。それはもう、ビデオテープで一時停止を押ししたがごとく、寸分も動かずにその位置で停止した。その彼女の異様な雰囲気気押しされた彼は、思わず、と言った調子で彼女へ口を開く。

「あの……どうかしましたか？」

しかし、返答は来ない。さらには輝夜姫の肩が小刻みに震え始めた。

「あの……」

「お……」

「お？」

「おま……の……」

「え、なん」

「お前の血は何色だあああ

！！！！！！」

「ぐはあ！？」

いきなり放たれた輝夜姫の右ストレートに、彼は避ける暇もなく、まともに殴られた。

完全に不意打ちの形になったそれは、寸分狂わず彼の頬を打ち抜き、彼の脳を揺らした。

何事！？ と飛び込んできた翁に、気にしないで！ と怒鳴り返して追い出す輝夜を尻目に、彼は口の中に流れた血をゴクリと呑みこんだ。

「な、なにを！？」

正当な疑問が彼女へ返される。

「なにを、じゃない！ どうして欲情しないの！？」

しかし、正当な返答が返されることは、そんなに無い。

「よ、欲情だと！？」

「そうよ！ 美人でしょ、美しいでしょ、結婚したいでしょ！？ どうしてそんな平気な顔していられるのよ！！ 何故！ 何故！ 何故！？」

興奮してきたのか、彼女の額にはうつすらと汗が浮かび、頬は紅潮している。着ているきらびやかな着物から見える首筋が、ほんのりと湯気を放っているように見えた。

確かに、この時代の人間が見れば、それこそ今の輝夜姫の姿を見れば、一発で理性を飛ばして襲いかかっていただろう。事実、それだけの魅力が彼女にはあったし、それを後押しさせる雰囲気と気配を、彼女が作っていた。

なのに、眼の前の男は襲うどころか、さっさと離れようとする。その行為が今まで男を手玉に取ってきた彼女のプライドに傷を付け、怒りを爆発させた。

もしや、この男、不能か？　そう彼女が考えても、全く不思議ではないのである。

しかし、現実はそのようではなく、むしろさらに彼女のプライドを……いや、女としてのプライドを粉碎する言葉を彼は言い放ってしまった。

「何故って……」

「何故よ！？」

グイツと輝夜姫の鼻先が彼の鼻先に触れる寸前まで近づく。そして、その時がやってきた。

「……あんた、臭いもん」

「……は？」

「だから……臭いんだ、凄く」

「……だ、誰……が？」

「いや、だから、あんたが」

「……臭い？」

先ほどまでの怒りはどこへやら。輝夜姫は呆けた表情で、元の場所まで戻った。声まで力を失っており、まるで死に掛けた蝶のように頼りなく、小さかった。

彼もそんな輝夜の態度に申し訳なさもあつたが、言ってしまったものは仕方がないので、正直に話すことにした。

「……え、臭い……え、私が？」

「うん、凄く臭い」

「……そ、そんなに？」

「まあ、貴族程ってわけでもないし、一般的な人達から見れば身綺麗な方だと思うよ。ただ、俺にとっては酷いってだけ」

「……ひ、酷い、の？」

「うん、いくら見た目が良くても、さすがにそんなに酷いと……ねえ」

「……」

「実は、この部屋入ったときから我慢していた」



もはや、声すら出せない。真つ青とはこのことかと言わんばかりに青ざめた輝夜姫の顔色は、それこそ声すら掛けられなかった。

……と、次の瞬間、その顔に変化が現れる。具体的には、大きく見開いた瞳が水分で潤み始め、整った鼻先がぼつんと赤くなり、小さな唇が静かにへの字に曲がり……。

「ふええ……」

「衝撃波ああああ!!!」

彼は素早く衝撃波のバリアを張って、音が漏れないようにした。

これぞ、彼の隠された技の一つで、範囲内から外への一切の音を遮断する。戦闘ではほとんど役に立たないうえに、永琳とのゴニョゴニョなとき以外使用したことがない極秘中の極秘技である。

ただし、その分だけ、中ではしつかり聞こえる。

「ふええ、ふえええ、え〜ん」

ということとは、泣き声なんかはそれこそサウンドのごとく響くのである。輝夜は先ほどまでの毅然とした態度から一転、幼子のように両手を目に当てて、大粒の涙を流していた。せつかくの着物がどンドン涙で濡れていく。少女特有の甲高い鳴き声はただでさえ響くというのに、ここはバリアの中。あまりの五月蠅さに、彼は両手を耳に当てて叫んだ。

「ちよ、お願いします！ 泣きやんでください！」

「ふええ、ふええ、ふうう、ええ、え〜ん」

「大丈夫、臭くない、臭くないから！」

「ふええ、ふええ、ほ、ぐす、ほん、どお？」

「ああ、本当だ」

涙でドロドロにとけた白粉が、異様な美しさを醸し出す。ただ、その美しさをもってしても、鼻水まで垂れていてはお終いだ。彼は思わず漏れそうになった溜息を呑みこみながらも、手ぬぐい取り出して、そつと輝夜姫の鼻へあてがった。

輝夜姫は泣いたことで一時的に精神が退行しているのか、彼の手に縋るように小さな両手でつかまると、ちーんと鼻をかんだ。

そして、2、3回程彼女が深呼吸するのを確かめてから、ようやく手ぬぐいを離した。

「よし、落ち着いたか？」

「ぐす、ぐす……うん」

「いきなり臭いだなんて言っただけ、悪かった。まずは、そのことは謝る。ただ、それなら風呂に入れば済む話だろ？ 何も泣く事はあるまい？」

「……………入った」

「……………え？」

「昨日、入ったのよ……昨日……入っ……たのお……」

「どうどうどうどう、よしよしよしよし、泣くな泣くな泣くな、とにかく泣くな、いいから泣くな、分かっただけ泣くな。さあ、涙をぐつと堪えて。主に俺の為に」

「またもや涙を充填し始めた輝夜姫をなだめつつ、彼はこの時代の風俗について考えた。

この時代、風呂に入る習慣はない。入るにしても、月に一回程でそれも蒸し風呂になっていて、湯船につかることはなく、身体を垢すりで擦る程度なもので、それほど汚れは取れないのである。

そのことに思い至った彼が輝夜姫に尋ねたら、やはり蒸し風呂であった。しかも、湯は貴重品らしく、彼女を持ってしても週に1回が限度であるらしい。しかし、蒸し風呂では、髪などの汚れを落とさることは不可能に近い。

それが分かっていて彼は、輝夜姫にあることを提案した。

「それなら、俺が風呂を作っちゃる」

「……………お風呂を？」

時折鼻を噤んでいる彼女を尻目に、彼は話を続けた。

「多分、輝夜姫は知らないだろうが、俺がいつも入っているお湯風呂があるんだ。俺はいつもそれに入って身体を綺麗にしている」

「お湯………て、湯船に浸かれるの!？」

身を乗り出して顔を近づいてくる輝夜姫を不思議に思いながらも、

彼は彼女を押さえた。

「お、おう、そうだ。俺の使っているやつでよければ」

「ちようだい！」

「あげねえよ！」

「……でも、薪はどうするの？ 浸かれるだけのお湯を沸かすのも  
そうだけど、水を用意するのは凄くお金が掛るわ」

ああ、それなら。っと、彼は輝夜姫に自分の能力を説明した。ついでに声が漏れないよう、現在進行形で能力を行使していることも伝えた。

便利ね、というのが彼女の感想であった。それは彼も常々考えていたことなので、俺もそう思っていたと同意しておくことにした。

「あとで持ってきてやるし、お湯も沸かしておくから、それで身体を綺麗にしなよ」

本当ならいつでも取り出せるが、なぜかそれを教えたら面倒なことになりそうな予感がしたので、黙っておくことにした。

だが、さすがは輝夜姫。面倒を避けたと思つたら、それ以上に面倒な罫を仕掛けるという、常人には真似できない技を披露した。

彼女はそつと彼の袖を掴むと、上目づかいで口を開いた。

「洗って」

「え？」

「だから……洗って」

「……え、いや……」

「一人じゃ洗えないわ。誰かが手伝ってくれないと……お婆様も、もう年だし、あまり無理をさせられないわ。だから、あなたが洗ってちようだい」

「……いや……だから……」

「……」

「謹んで、お手伝いさせていただきます」

涙目は反則だ、と彼は思ったとか。

その後、しばらくして輝夜姫も調子を取り戻し、彼も疲れた体を引きずりながら、貴族達が集まる広間へ戻された。

そして数分後、再びすだれの奥に姿を現した彼女は、5人の貴族達に五つの難題を持ちかけた。それは、誰もが聞いたことも見たことも無い、謎めいたモノ。

一つは、仏の御石の鉢。

一つは、蓬萊の玉の杖。

一つは、火鼠裘。

一つは、龍の首の玉。

一つは、燕の生んだ子安貝

それらを一番早く持ってきたものと結婚すると明言し、その日は解散となった。そして各々が難題を突破する為に行動を開始しようと動き始めた時、彼はとうとう……。

「……ほら、ちやっとここも洗いなさい」

「……いや、そこは自分で洗えよ」

「男が一度口にしたことなら、責任持つてやりなさい。ほら」

「ああ、もう、分かった、分かったから、片足立ちで股を開くな。

そんなことせんでも分かるから……だからって、尻まで開くな、馬鹿たれ」

「痛い！ ちよっと、お尻叩くことはないでしょ、この筋肉馬鹿」

「馬鹿に馬鹿とは言われたくないね……だから、胸はこれで3回目だろ、輝夜よお。もう十分綺麗になっただろうに、いいかげん俺も疲れてきた……ああ、もう分かった、分かったから、ちゃんと手伝います、手伝いますから……はぁ」

他人の視線が絶対入らない奥深い屋敷のそのまた奥の庭で、輝夜が納得するまで、彼はひたすら彼女の身体を擦り続けていた。彼女を呼び捨てできるまでには仲良くなったが、その分こき使われるようになったのは、もはや宿命なのかもしれない。

五つの難題以前に、あるだろ？（後書き）

こうして彼は、合法的にぐーやのちっぱいをモリモリでみるみつた  
なりました。

めでたし、めでたし。

もこたん、innしたお(前書き)

私は百合には興味がありませんが、キャキャウフフ、は見ていて楽しいです。

## もこたん、innしたお

平安時代は、今とは比べ物にならないくらい空気が澄んでいたらしい。それこそ、黄砂なんて考えられないくらいな時代で、川の水も、赤痢等の病気にさえ気を付ければ、そのまま飲めるくらいに綺麗なのである。現代の飲んだら強制的に体重を5パーセント程減少させる素敵な廃棄水は、せいぜい家から出る汚物が混ざったものか、あるいは泥水ぐらいなものだろう。

話がそれた。要は、それほど空気が澄んでいるのなら、現代では気にならない些細な臭いでも、意外と遠くにまで臭ってしまうということなのである。

ああ臭い、我慢してても、ああ臭い。

初っ端から俳句もどきが出てきてしまったのは、先に謝らなくてはならないだろう。だが、そうしないとやっていられない出来事が、彼を襲っていた。

「あんたが輝夜の召使ね！」

彼の前に現れた少女は、顔を見せるやいなや、失礼なことをのたまった。ここが往来なら人目を集めそうだが、幸いにも彼の居る場所是人通りが少ない。いや、不幸なことに、だろうか。

少女の、長く伸びた艶やかな黒髪がさらりと揺れている。身に纏っている着物は素人の彼から見ても高価なものであることは明白で、それが良く似合っていた。ただ、この時代には珍しい、彫の深い顔立ちをしている。現代の価値観から見れば、それこそスカウトにひっきりなしに誘われそうな勝気な美少女……なのだが、この時代にはどうも合っていないように見えた。

着物の裾から見える手や、外気に晒された首筋は、思わず見とれてしまうほどに白い。生まれつきなのか、それとも白粉を薄く塗っているのかは彼には分からない。

彼が突然のことに呆気を取られていると、それがあつという間に

紅潮していく。

ああ、何か厄介な事が起ころうとしているな、と彼は思った。出来ることなら、何事も無くやり過ごしたい。

そう思った彼は、とりあえず、聞き間違いであることを祈りながら、眼下の少女に尋ねた。

「すまない、俺が何だつて？」

「あんたが輝夜の召使ね！」

「いえ、違います」

なぜそうなる、と内心苦々しい思いで、否定した。

「嘘つかないで。分かっているのよ、私にはね」

「いえ、全く分かっていないように思われますが」

「じゃあ、どうして輝夜の屋敷で暮らしているのよ。それって、誰が見てもそういうことじゃないかしら？」

少女の言葉に、彼の頬が引きつった。その様子を見て、少女の頬が釣り上がった。

少女の言うとおり、彼は今、輝夜の家で暮らしている。だがそれは、決して輝夜の召使として暮らしているわけではない。正確に言えば、輝夜達が住む屋敷の召使なのである。

彼とて、たまにはゆっくり屋根のある場所で休みたいと思う。それで食事と衣服まで出てくれば、もう少し居ようかな……と思っても不思議ではない。ただ、ちょっと一休み……みたいなもので、衣食住を提供してくれるかわりに、労力として輝夜、並びに翁夫婦に提供しているのである。

なので、その仕事内容は様々で、輝夜一人を相手にしていない。輝夜達の食事の用意、屋敷の補修、掃除、備品の整理、衣服の洗濯、お使い、極め付けには、輝夜の入浴手伝い、翁夫婦の入浴手伝までしていたり、なかなかの苦労人である。

輝夜はそれこそ生粹のお嬢様で、自分の身体を自分で洗ったりはしない。それらは全て他人の手でされるもの。けれども、前の蒸し風呂と違って、今は湯船に浸かる。洪る彼を説得して屋敷の敷地内



に移設された特性風呂だが、その使い方には3人とも全く慣れていない。その為、慣れるまで輝夜と翁夫婦の入浴介助をしているのである。

一度湯船に浸かる心地よさを知れば、もう蒸し風呂には戻れない。その言葉は彼の弁ではあるが、事実、輝夜はもちろん、翁夫婦も愛用することになってしまふ。当初は輝夜に説得された翁夫婦も抵抗感を抱いてはいたが、それもすぐにお湯に溶けてしまった。

風呂の水も彼の編み出した上半身をぶらせない走法によって、必要量は一瞬で用意出来る。沸かすのも、威力を最小限にまで抑えた衝撃波によって、水の分子を高速振動、及び衝突させることで発熱させる。なので、沸かす為の薪が必要ない上に、短時間で湧かせられる。

最近ではお風呂のおねだりを輝夜以上に翁夫婦からされてしまふ為、そのことに輝夜が焼き餅してしまふ。常日頃、慎みを持って輝夜に口を酸っぱくする彼ではあったが、そのたびに機嫌を悪くした輝夜に連れられて、その白魚のような白い肌を強制的にくまなく洗わされてしまふのが、彼の最近の悩みだったりする。

炊事洗濯もそうだが、屋根の補修とて、馬鹿にしてはいけない。この時代、屋根一つ補修するにしても、それこそ目が飛び出る程の御金が掛る。それは材料となる木材を切り取ってくる労力もそうだが、なにより妖怪に襲われる危険性が高い。切り取っている最中もそうだが、それを都に運ぶまでも大変で、途中で襲われることもしばしば起こっている。なにせ、小さな材木を運ぶ程度なら、それを持っている木こりも身軽いので、妖怪からも逃げられやすいが、建築等に使う材木は違う。長さもあるし、重量もある。それこそ4人がかりで運ぶこともあり、それを狙って現れる妖怪も出現することもある為、都に入る材料は常に不足しているのが現状なのである。

小さな材木をつなぎ合わせて補修することもできるには出来るが、この時代、とにかく豪華絢爛、という考えで作るのがほとんど。建築等に使われる材木は常識的に、それに見合ったサイズでなければ

ならないという、ある種の固定観念がある為、小さな材木をつなぎ合わせて使うのは、貧乏人である証なのである。その為、小さな材木を用意して大工に頼んだとしても、貧乏貴族と思われて、建築を断られてしまうのである。

しかも、それらの苦難を経て都へ入った大きな材木も、屋根の補修などにはなかなか使われることはなく、多くは帝の装飾品の材料として使われる。使われなくて余分が出たとしても、それらは帝の側近の貴族達に使われる。後に残るのは小さく、短い材木ばかりで、多くは薪や小さな装飾品として使われる。

その為、財力のある貴族達の間では、材木が欲しい時は、都に入ってくるものを買うのではない。個人的に人を雇って材木を取ってきてもらうのが普通だ。材木が大きければ大きいほど人も時間もお金も掛る為、一般的な貴族には注文出来ないのである。木こり達も命がけで木を切り取ってくるので、自然と料金も高くなる。

その点、彼は違う。木こり達のように命がけというわけではなく、御得意の衝撃波で妖怪を蹴散らせる。その上、鍛えた肉体は切り出した材木どころか、大木一本担いで移動することが可能なのだ。

おまけに、翁夫婦は高齢だ。いくら普段から身体を動かす生活をしているとはいえ、何が切っ掛けで怪我をするか分からないし、病気だつて引くかもしれない。古びて埃どころか霞んで見えなくなりかけた、古い記憶を呼び起こし、家のいたるところにバリアフリーを意識したものも設置している。無いよりはマシというものだが、それでもあれば便利で、普段から翁夫婦の身体を気にしていた輝夜も、このときはばかりは晩酌をしたのであった。

「……お前、毎日嬉しそうに風呂に入る爺さん達の顔を見たことがあるか？ あんなの見たら、とてもではないが、放つてはおけん」  
ありがとう、ありがとうと頻りに頭を下げる夫妻。ある種の脅迫である。

離れたところでほくそ笑んでいる輝夜の顔を、彼は忘れない。

「はあ、なによ、それ？」

当たり前だが、風呂と言われても、少女の知識にあるのは蒸し風呂だ。蒸し風呂なら少女とて入るし、輝夜達でも入ることを想像する必要すらない。なので、彼女の疑わしげな声色は、むしろ当然のことであった。

「いや、こつちの話だ。それより、いかげん君の名前を聞きたいのだが……」

「……そ、そう、そういうえば、名乗っていなかったわね」

ピクリと肩を震わせる少女を見て、彼は首を傾げた。なにゆえ、自分から視線を逸らしたのか、彼には皆目見当がつかなかった。

少女はモジモジと着物の裾を揉み合わせた後、キツと鋭い視線を彼に向けた。

「私の名前は藤原妹紅『ふじわら・の・もこう』。本来なら、貴方とは話すことなんてあり得ない、高貴な身分なのよ。それをわざわざ格下の民草である貴方に声を掛けてあげているのだから、感謝しなさい」

どうだ、分かったか、と胸を張る少女……妹紅を見て、正直、彼はどう対応していいか分からなかった。こういった手合いは何度か相対したが、そのどれもが彼よりも見た目は年上だ。今のような、見た目すら彼よりも年下の子供に言われたことは無い。しかも、今度は女の子だ。

これが男なら皮肉の一つや二つは言えるのだが、さすがに女の子相手に言うのは彼にとってはおとなげない。それに、眼の前の少女は憎たらしいというより、どちらかというところ可愛らしいと、彼には思えた為、なおさら対応に悩んだ。

ただ、沈黙は金なりとは言いが、その沈黙は時に相手の不評を買う。今回も同様で、妹紅の頬を膨らませる結果を招いた。

「ちよつと、何か言いなさいよ！」

妹紅の手が彼の襟元を掴む。と、抵抗する間もなくグイッと引張られた彼は、目と鼻の先にまで顔を近づけられた。

「貴族に向かって黙」

「臭っ」

思わず口から出た彼の内心。それは彼自身言わないように意識していたことで、妹紅と出会った当初から我慢していたことであった。気付かれないよう呼吸を止めたり、さり気無く一定の距離を保っていたが、いきなり掴まれてしまったせいだろう。驚いた彼は、飛び込んだできた悪臭に、我慢していたことも一瞬忘れて、思わず本音を漏らしてしまったのである。

まるで成長していない。

言い終わってきっかり三拍後に、彼は勢いよく突き飛ばされる。たたらを踏んで妹紅を見つめる。その顔には、やってしまった、とはつきり書かれていた。

そして、正面から、最悪の言葉を投げられた妹紅はというと……。

「……………」

「うつ……………そんな目で見ないでくれ」

じわじわと、涙で潤んだ瞳を彼に向けていた。潤んで見える黒目は、傍目から考えてもその役割を果たしてはいなさそうで、おそらく彼の姿を正確には認識出来ていないのではないだろうか。

唯一輝夜と違うのは、妹紅は鳴き声を上げなかったことだ。だが、それが良いか悪いかと問われれば、別の意味で悪いことには変わりなく、結局泣いていることには変わりなかった。

ぐす、ぐす、と鼻を嚙り始めた妹紅の鼻先が、ツンと赤くなる。

固く噛みしめた唇から、抑えきれない嗚咽がこぼれ始め、遂には潤んだダムから涙が決壊した。

「……………」

「いや、あの、その、そういうわけじゃないから、ね、ないからね……………じゃ、じゃ、どう、びう、ばげ？」

途切れ途切れの返答。当然のことに、発音は完全に涙で壊れていた。

いかん、あぶないあぶないあぶない。彼は滝のように噴き出した汗を拭いながら、妹紅に挑んだ。

「いや、あのね、実は、その、俺の国……あ、俺はこことは違う場所から来た人間で、都に住んでいるわけじゃないんだ。それで、ここでは臭いってというのは綺麗ってこ」

「くさっ……っつううう……!!!!」

「あああ、違うよ、臭いって言ったわけじゃないからね、そうじゃないからね、ね?」

「……、ひつく、ひつく、くさっ、臭いって、ひつく、ひつく」  
早くも限界が近い。既に噛みしめられた唇は、力のあまり白色になっており、ポトポトと地面に水滴を落としている。遂には目も開けられなくなったのか、目を瞑って俯いた。そのせいでさらに涙の量は増していき、さらなる罪悪感を彼に与えた。

駄目だこりゃ。そう悟った彼は、輝夜に対する言い訳を考えながらも、妹紅に輝夜が愛用している風呂の話 시작했다。

特性風呂は、離れに建設された石室の中に設置されている。これは、湯船から蒸発する湿気等を考慮して、カビや雑菌が出にくい岩石を彼が削って建てたものである。広さは5畳分、高さはおおよそ3メートル。

その建築にあたっての苦労は並大抵ではない。いくら彼とて、広さ5畳分、高さに至っては3メートル程にもなる岩石を運んでくるのは至難の業。しかも、使用する岩を見たいとかで輝夜も同行したいと言いだし、おんぶすること一時間。

衝撃波を使って谷間にある巨大な岩石を、あれでもない、これでもない、と輝夜いわく類まれな眼力によって選別される。ようやく決まったかと思えば、疲れたとのたまる輝夜が岩石の上に座る始末。

滝のような汗を流して岩と輝夜を屋敷まで運び、輝夜に励まされ、駄々を捏ねられながら衝撃波を駆使すること幾ばくか。通算、ほぼ二日不眠不休働き続けて完成したのが、件の石室である。

外観もこれまた輝夜曰く類を見ないセンスによって装飾され、内

装に至っては輝夜の手が入っていないところを探すほうが難しいくらいだ。ただ、手を入れたのは彼で、輝夜は指示を出すだけだったのだが。

ともかく、その石室は輝夜のセンスがふんだんに盛り込まれており、つまり同じ時代を生きる妹紅にとつても、思わず圧巻してしまう程に豪華で手間が掛ったものであった。

そして、その石室の中で何が行われているのかということ……

「馬鹿じゃないの、あんた。常日頃そう思っていたけど、今回のことではつきりしたわね。あんた、少しは女心というものを学んだ方がよろしいんじゃないか？ 初対面の女性に身体のこととで文句言うとか、もう死ぬべきね。いや、死ななければならないんじゃないかしら。でも、それだったらあんたは何も知らない内に死んでしまうわけだし、そう考えたらあんたはまだ死ぬのは早いのかもね。でも、だからといって、許されたわけじゃないわよ。本当なら、あんたは私の足を舐めながら、100万回ぐらい額を地面にぶつけて、卑しい卑しいボロ屑同然の手に負えない馬鹿めをお許してください、とか言わなければならぬ立場なのよ。そこらへん理解しているの？ それぐらい理解出来ているわよね？ まさかそんなことすら理解出来ない頭じゃないわよね？ まあ、そこらへんのウジ虫に食われている妖怪の死体から捻り出たうんこ以下の頭しか持っていないあんたでも、同じ過ちを繰り返さない程度の学習能力はあるわよね？ ああ、でも、実際に学習出来るかは別よ？ 私が言っているのは、繰り返さないってことを、頭では理解出来るでしょってことで、あなたのその割ったら西瓜の種が出てきそうな空っぽの頭でそこまで理解出来るなんて、私はこれっぽっちも思っていないからね。二度あることは三度あると言うけど、三度も起こしたら、もはや故意になっちゃうわよね。そう考えたら、あんたもう三度目に手が届いている状態なんだけど、あんたわかってる？ どうせ分かっているじゃないよ、いちいちそれを説明するのよ」

「ほんと、すみません。はい、私が悪かったんです……もう、本当

に、すみません。ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」  
輝夜の息継ぎ無しの終わらない説教が彼に行われていた。ひたすら皮肉をぶつけられている彼を尻目に、輝夜に頭を洗われながら妹紅は思った。なんだ、この空間は、と。

彼に連れられて来た、輝夜の屋敷。最初は抵抗感を持っていた彼女だったが、屋敷の主である輝夜が愛用していると聞けば、多少の興味は湧いてくる。そのうえ、事情を聞いた輝夜の、唸るようなテンブルショットを彼の米神に放つ姿を見て、元々持っていた印象はどこへやら、輝夜に手を引かれて、彼の言う特性風呂へ案内された。そして、悶え苦しんでいる彼を手加減なく足蹴にし、水を用意させ、衝撃波でお湯を沸かせさせる。もはや喜劇のような信じられない出来事の連続で、彼が当たり前のように使っている衝撃波に大して、驚く余裕すら、妹紅にはなかった。

そうして湯気立つ湯船に歓声が混じった溜息を漏らした妹紅を尻目に、輝夜はごく当たり前のように衣服を脱ぎ捨てて彼の頭に投げつけると、そのまま妹紅にも脱げと言った。

その言葉に思考が停止していた妹紅が復活。了承は出来ないと言ったが、このまま彼に臭いと言われて平気なのかと問われれば、妹紅は首を縦に振らざるをえない。

せめて、彼だけはこの場から退出してほしいと輝夜に懇願するが、途中で御湯が温くなったり、またお湯を張りかえるときや、また自分の身体を自分で洗えるのかという輝夜の質問に、妹紅はしぶしぶ、本当にしぶしぶ頭を縦に振った。

しかし、恥ずかしいものは恥ずかしい。例え、唯一の男である彼が輝夜の衣服によって全くこちらをうかがいしれない状況であっても、それは同じ。正座していても一緒。堂々と風呂の淵をまたぐ彼女を輝夜に、妹紅は何度も何度も彼を見つめながら、紅葉よりも紅潮した身体を両手で隠しながら、ゆっくりと湯船に両足を入れた。

「あ……」

思わず漏れた言葉は、妹紅の率直な感想であった。蒸し風呂では到底味わえない、御湯の沁み込み、包み込んでくる温かさ。じんわりと足さきから熱が上がってくるなんとも言えないその感覚に、妹紅は緊張で鉄のように固くしていた四肢を、ほうつと緩めた。

「ほら、そんなんじや、身体が温たたまらないわよ。しっかり肩まで浸かりなさい」

先に首まで湯船に浸かった輝夜が、妹紅に言う。

妹紅は、始めての体験に胸を高鳴らせながらも、じれったい速度でゆっくりと湯船の中に腰を下ろした。そして、今度は目じりと頬まで緩んだ。

「ほあ……」

「いいでしょ、これ」

そう尋ねられた妹紅は、もはや彼女に対して悪意的な感情が持てるはずもなく、素直に感想を述べた。

「うん、凄いな、これ……」

「一度これに入ったら、もう病みつきよ。一日一回は入らないと、我慢出来なくなるわ」

「ええ……それは……困る……」

緩みに緩んだ頬が、かろうじて返事を返す。ポカポカと温まっていくなで四肢、全身を優しく揉むお湯の温かさ、身体の中に溜まっていた疲れがお湯に溶けて行くような、言葉に出来ない感覚。

もはや、妹紅はお風呂に完全にはまってしまった。

「さあ、身体を洗うわよ。妹紅、後ろを向きなさい」

「ええ……後ろ？ いいよ、そんなの……頑張って自分で洗うよう……」

「そんな緩んだ頭じゃ、滑って怪我するだけよ。ほら」

彼が浸かっていた特性風呂は存外大きく、その広さは輝夜と妹紅の二人が入って足を延ばしても、まだ少し余裕がある程。なかば強引に妹紅をひっくり返した輝夜は、風呂場に常備してある特性の手



ぬぐいを使って、妹紅の背中を擦り始めた。

蒸し風呂でされるのと、お湯の中でされるのは、違う。そのことに妹紅が気付いたときには、信じられないぐらいに柔らかい手ぬぐいで、身体中を洗われていた。

「ほら、立って立って、今度は下を洗うから」

「い、いや、そこは、自分で洗えるわよ」

「ここまでできたら、全部同じことよ。それに、次は妹紅が私を洗うんだから、一緒のことよ」

「え、私が？」

「他に誰が洗うのよ。それに、そんなに恥ずかしくていたら、あんたいつまで経っても身体を洗えないわよ……ほら、片足上げなさい」

言われるがいなや、妹紅の片足が高く上がった。突然のことにバランスを崩した妹紅は、壁に捕まった。本来なら秘密の時にしか晒されることのない乙女が、ひんやりと外気に触れる。ただでさえ紅潮していた四肢がさらに赤く紅潮し、妹紅は甲高い悲鳴をあげて、片手で乙女を隠した。

「ちよ、ちよっと、いきなりなにするのよ！」

妹紅の視線が彼へと向かう。だが、懸念していた彼は輝夜の罵倒に力尽きたのか、ぐったりとこちらに背を向けて横になっていた。なので、というのも変だが、妹紅はとりあえず彼を後回しにして、輝夜に怒鳴った。

「なにつて、洗うのよ」

露わになった膨らみが、何時起き上がるか分からない彼の視線に入らないように必死に肩を寄せて隠す。けれども、輝夜はそんな妹紅の努力を嘲笑うかのように、あっけらかんと返事をした。

輝夜は風呂の淵に備え付けられていた薬箱から粉末状に解された薬粉を一つまみ取り出し、薬箱の中に入れてあった椀に入れた。それを取り出して薬箱に蓋をし、少量のお湯を椀に注いで、指で軽くかき混ぜる。

すると混ぜられたお湯が次第に粘り気を持ち始め、あつという間ににちやにちやと糸を引く程にまであつた。

その光景を見ていた妹紅は、頬を引きつらせた。

「……な、なによ……その緑色のネット」

「いくつかの薬草を煎じて、混ぜ合わせたものを水に溶かしたものでよ。これを使うと汚れも落ちるし、消毒替わりにもなるから、私も使っているのよ……ほいっと」

たっぷり薬水を付けた指が、妹紅の乙女に張り付いた。ぷにゃ、ぷにゅとした感触に、輝夜はほう、と声を上げた。

「うひゃ!？」

だが、付けられたものは堪らない。粘着液の思いがけない温かさ、始めて乙女に自分以外の指が触れたことに、猿のような悲鳴を上げた。もはや押さえる必要が無いと判断した輝夜の手が離れると、妹紅の足がぼちゃんと湯船に降りた。離れようとしても、既に指は乙女に深く食い込んでいる。どう身じろぎしても、輝夜の指はピタリと妹紅の乙女に張り付き、ぷにぷにと柔肉を押しした。

輝夜の細い指が、ゆっくり、静かにぬるりと乙女周辺を這いまわる。驚きと羞恥に身を固くした妹紅は、犬のようにはっはっ、と乾いた喘ぎ声を漏らした。空気にほとんど触れたことのない無垢なクレバスが、輝夜の指を呑みこむ。にゆるにゆると敏感な粘膜を擦られる感覚に、妹紅は立っていられないとばかりに輝夜の肩に捕まった。

「……ほら、見なさい。けっこう汚れているわよ。ここは敏感な場所なんだし、汚れやすいから、気をつけなさい」

「はあ、あ、あ、え、えっ?」

視線を下ろすと、輝夜の指が、コレを見なさいと人差し指を妹紅に向いた。

そこには小さな白い固まりが幾つも纏わりついていた。

「なに……それ……」

「何って、汚れよ、汚れ……ほら、あんたも何時まで寝ているのよ。」

さっさと起きて、妹紅を洗うの手伝いなさいな」

「…………え？」

妹紅の呆けた声と共に、彼は静かに身体を起こした。その顔にはいつの間にか手ぬぐいが巻かれていて、彼の視界をきっちり塞いでいた。

「…………なぜバレた」

「あなたの考えぐらい読めるのよ。どうせ寝たふり決め込んで、やり過ぎそうとしたんでしょ。そうはいかないわ。私はもう、洗うの疲れたし、後はあなたが洗いなさい」

「…………あの、俺は今、目隠ししているんだけど…………」

「外せばいいでしょ」

「外したら見えるだろうが…………」

「見ればいいでしょ！」

「なぜ怒る！？」

「なぜ嫌がる！？」

「嫌がりもするだろう！」

「好き嫌いするな！」

「どつという意味だ！？」

「そつという意味よ！」

「慎みを持ってよ！」

「あなたの前以外では持つわよ！」

…………えつと…………私はどうしたら？

突然目の前で起こった掛け合いに目を白黒した妹紅は、前を隠すことも忘れて二人を見つめた。

なにせ、怒鳴っているのである。あの、輝夜が。あの、なよ竹の輝夜姫が、だ。名のある貴族達が挙って求婚し、帝ですらその存在に注目しているという、あの輝夜姫が。

子供のように言い合いをしている二人を見て、妹紅は、はあつと溜息を吐いて、肩の力を抜いた。というより、力が抜けた。

…………なんだか、どうでもよくなってきた。馬鹿みたいだと、妹紅

は思った。

元々妹紅は、実のところ輝夜に難題を取りやめるよう直談判する為に、彼に問い詰めただけのことであった。輝夜の屋敷は知っていたが、場所が場所で自分一人で行くにはあまりに心ともないし、だからといってそんなことで従者を連れて行つては、それこそ大目玉を食ってしまふ。その為、輝夜の召使らしき彼を利用しようと肩をいからせて行けば、今の有様だ。いったい、何をどう間違えたら、憎い輝夜の手で身体を洗われ、その彼女が喧嘩をする場面に立ち会えるのだろうか。

噂でしか知らない女に嫉妬し、その女に恋焦がれて相手をしてくれなくなった兄。

難題に四苦八苦して、日々難しい顔をするようになった父。

その二人の姿を見て、般若のように顔を歪ませることが増えた母。来る日も来る日も女友達と輝夜の陰口を言い合っている姉。

もやもやと霞がかつていた頭が晴れ渡る。そうして考えてみると、自分はなんてつまらないことを考えていたのだろう。

そっぽを向いた兄を見るたびに怒り、話を聞いてくれなくなった父を見るたびに怒り、般若の顔をした母を見るたびに怒り、悪口を言い続ける醜い姉の姿を見るたびに怒り……そうして流されて来てみれば、今だ。

何が、なよ竹の輝夜姫。

何が、帝も焦がれる姫。

誰も、誰しもが、輝夜、輝夜、輝夜、輝夜……輝夜姫。右を向いても輝夜、左を見ても輝夜、どこもかしこも、皆同じことを口にする。

だが、実際はどうだ。誰もが知って、誰も知らない輝夜姫が、妹紅と同じように笑い、怒り……妹紅以上の、お転婆だ。

何も変わらない。何も変わらないじゃないか。私と、輝夜。どこも変わらない。同じだ。私と輝夜は……同じなんだ。

そう思い至った妹紅は、笑った。腹の底から、思いの全てを吐き

出すように笑った。その声は、彼と輝夜の喧嘩を止め、石室を揺らさんばかりに反響した。

涙すら流して笑い続け、胸に痛みすら感じたとき、ようやく妹紅は笑うのを止めた。

「はははは、はは、はあ……ああ、おかしい」

「……あの、妹紅？」

目を白黒している輝夜を見て、妹紅は、にんまりと笑みを見せた。その妹紅の姿を見て、輝夜はくりんと、小さな顔を傾けたが、すぐに妹紅と同じように意地の悪い笑みを浮かべると、彼には聞こえないように、そつと唇を妹紅の耳に近付けた。

いい顔するようになったわね。

輝夜、あんたには負けるよ。

最後に互いはくすつと笑う。輝夜は薬水が入った椀を彼の手に持たせる。ピクつと肩を震わせる彼の横で、妹紅はお湯でクレバスの汚れを洗い流すと、クイツと腰を差し出した。

「そつね……輝夜の言葉に甘えてみようかしら」

湯気立つ石室に、彼の呆けた声が響いた。

もこたん、inしたお（後書き）

お……ま……け

ああああああ……ああ……あつあつー！あああああああ！……ううう  
あわああああ……！！

ああクンカクンカ！クンカクンカ！スーハー！スーハー！スーハー！スーハー！  
ーハー！いい匂いだなあ……くんくん

んはあつ！あいつの髪をクンカクンカしたいよ！クンカクンカ！あ  
ああ……！！

間違えた！モフモフしたいよ！モフモフ！モフモフ！モフモフ！髪髪モフモフ  
！カリカリモフモフ……あうあうあーうー……！！

寝顔かわいかったああ気持ちいいよう……！！ああああ……ああ……あ  
つあああああ……！！ふあああああんっ……！！

うふふここが気持ちいいんだね！あああああああ！かわいい！やつ  
ぱり！かわいい！あつあああああ……！！

あの鬼に抱かれている顔がまた……いやあああああ……！！にやあ  
ああああああん……！！ぎゃあああああ……！！

ぐあああああ……！！あんなの現実じゃない……！！あ  
……神具で見てるあいつも今ここには……

ここ……には……いな……い？にやあああああ……！！はあ  
ん……！！うあああああ……！！

そんなあああああ……！！いやあああああ……！！はあ  
あああああ……！！鬼どもめええあああああ……！！

この……ちきしょ……！やめてやる……！！神様なんかやめ……て……え……？見  
……てる……？いま……見て……く……れて……いる……？

照れてそっばむくあいつが見てくれている……！うとうととして涎を垂らす  
可愛いあいつが見てくれる……！笑っているあいつが私を見てるぞ……！！  
身重の私を気遣って、遠くから私に話しかけてるよ……！！よかった

…世の中まだまだ捨てたモンじゃないんだねっ！

いやっほおおおおおおお！！私には君がいる！！やったよ神奈子！！ひとりでできるもん！！！！

あ、ああああああああああああん！！いやあああああああああああああ！！！！！！

あっあんああっああんあい、いいようううう！！イイようう！！イクうううあああああ！！！！諏訪王国うううう！！

うううううう！！私の想いよ届け！！遠く離れたあいつへ届け！

神奈子は、そつと襖を閉じた。疲れた顔で、晴れ渡った空を見つめた。

「……………私では……………無理だったよ……………」

背後から聞こえる嬌声に、神奈子は目頭を押さえた。

以上、諏訪子さまが見ていた、最終回です。

軍神神奈子の活躍にご期待ください。

ある日の話（閑話）（前書き）

……ちくしょう、おっぱい触りてええええー！！！！！！



## ある日の話（閑話）

平安時代とは、一般的に貴族の文化と言われている。それは何より政治の中心がそこであり、文化の中心がそこであり、後世にて、様々な書物が残され、愛されることになる場所が、貴族社会なのであったからだ。

後の国宝に指定されることになる絵巻物も存在し、多数の絵巻物が書かれたのも、この平安時代末期頃以降と言われている。その中でも4つの絵巻物は、後世では国宝として保管されることになり、日本四大絵巻物と称されている。

その内の一つが、『源氏物語絵巻』。平安時代中期に設立した日本の京都を舞台とした物語、源氏物語を題材にした絵巻物である。この話の主人公は題名の通りに光源氏で、紫式部が著者とされている。内容は一言でいえば、主人公、光源氏の生涯に渡る女性経歴である。源氏は、今で言う文武両道で容姿に優れ、お金持ちの家に生まれ育ったという王子様である。しかし、一般的なイメージの王子様とは違い、決して素行が良かったわけではない。むしろ、とてもではないが王子様と呼べる代物ではなく、生涯渡って様々な女性の元を渡り歩く呆れるほどに生粋の好色家であった。また、重度のマザコンであり、好色家になったのも、死んだ母親の面影を追い続けた結果である。

その執念にも勝る性欲は、亡き母の面影を持った皇妃に子供を産ませ、側室・愛人には、六条御息所、空蝉、夕顔、末摘花、朧月夜、花散里、明石の御方などの恋人を作った。さらには皇妃の縁者である女子を幼少の頃から自分好みに育て上げ、理想の女性にしてから正妻にするという、なんとまあ、大したスケベ男なのである。

「……………という話を書こうと思っっているんだけど、どうかしら？」  
「いや、どうと言われても困る」

輝夜の率直な意見に、彼は率直な感想を述べた。

季節は巡り、緑一色だった山々が赤く萌えていく。紅葉とはよく言ったもので、普通の赤よりも鮮やかな、紅という文字がその山々には似合っていた。

秋とは実りの季節。長いようで短い雪の季節を乗り越える為に、植物も動物も、あらゆる方法で栄養を蓄えて残そうとする。それらは実という形になったり、旬という形で現れたり、様々で、あまり変化することがない食生活に、色というものが付き始める。

しかし、その色を目で、鼻で、舌で堪能出来るのはごくわずかであり、それらは高級貴族であり、帝達であった。なにせ、栄養を蓄えた食物を狙っているのは人間ばかりではなく、妖怪も動植物を狙う。人間も同様に実りを手に入れようとしますが、数回に一回は妖怪の餌食に会い、またこのときでは毒物の判別が食べる以外になく、結果的に下級貴族以下都人の口に入るのは、ごく少量であった。その少ない実りも我先に奪い合いが始まり、普通であればまず食べられない代物であった。

それは貴族達の注目の的であるなよ竹の輝夜姫も、藤原の名を引く藤原妹紅ですら例外ではなく、彼女達もごく一般の貴族同様、庭で栽培された野草や比較的大量に手に入る筍などを手に入れて、それを親しいものと一緒に突いて過ごす季節であった。

彼が来るまでは。

ここにも、彼の便利さが発揮される。慣れた足取りで山中に入り、経験から食べられる野草類、茸類を採取する。輝夜と妹紅の遠慮しない我が儘に怒りを覚えながらも従うことで鍛えられた俊足によって、海までひとつ走り。衝撃波を駆使して新鮮な鮮魚を捕まえて、それを特性の器に入れて厳重に蓋をする。上半身を一切ぶれさせない走法によって、およそ数百キロの往復をなんとかこなすこと3時間。

それを待っていた輝夜と、屋敷に入り浸って自分の家に帰らなくなった妹紅によって、美味しく調理され、ほくほくと湯気を立てる焼き魚が食卓の上に飾られた。

彼がこれまた走って手に入れた荒塩を使って妹紅が菜っ葉を塩もみすれば、輝夜が味噌と筍と茸類をじっくり時間を掛けて煮込み、味噌汁を作る。

最近、輝夜と同じくらいに妹紅を可愛がるようになった翁夫妻が、食器を用意したり二人の手助けをしたりする。彼はというと、疲れ切った身体をなんとか動かし、石室で汗を流す。戻ってきたときには、机の上には秋の味覚がふんだんに盛られていた。

全員が集まって食事を始める。姦しくおしゃべりしながらご飯を食べる輝夜と妹紅を尻目に、翁夫婦と彼はゆっくり秋に舌鼓を打つ。そんな時だった。輝夜がふと、彼に尋ねたのは。

「あなた、話を聞いていなかったの？」

輝夜の言葉に、妹紅も首を縦に振って加勢した。彼に加勢する援護は今回居ない為、彼は聞いていないと答えた。呆れた溜息を返された。

そんなこと言われても、彼には何の話が分からない。なにせ、姦しく次から次へと変わる女性の話題に、女心に疎い彼がついていけないわけがない。せいぜい、呼ばれたときに返事を返すのが関の山で、細かい内容まで把握することなど彼には到底無理な芸当であった。

「仕方ないわね。次は無いから、ちゃんと聞いていなさいよね」

「そうよ。女の話に耳を傾けない男は、嫌われるわよ」

二人の一方的な説教に、彼は苦笑した。

妹紅が屋敷に入り浸るようになって、しばらくが過ぎた。最初は輝夜の部屋で寝泊まりしていた妹紅だったが、いつのまにか彼女の部屋が用意され、気付いた時には当たり前のように寝食を共にしていた。

いったい、どのような経歴で妹紅を屋敷に住ませたのかは、彼には分からない。ただ、気になった彼がそれを妹紅に尋ねても、家との折り合いが悪くなったと答えるばかり。輝夜に尋ねても、男が細かいことをいちいち詮索するなど怒鳴られてしまったのは記憶に新しい。一人増えたことだし、そろそろ屋敷を御暇するかと輝夜に

話を切り出したとき、輝夜が無言で彼の袖を掴んで離さなかったのは、もっと新しい。その日、彼の傍から一時も離れようとしなかったのは、つい先日のこと。今しがたのように、妹紅が彼に気安い口調で話すようになったのは、その後だったか。

このままいくと、俺ってもっと肩身狭くなるんじゃないかな、と彼は内心思いながらも、輝夜に話の続きを催促した。

「……で？」

「随分前に、私にしつこく求婚してきた男を元にして、書物として書き記そうと思ってるのよ。名付けて、源氏物語。内容は、貴族の家に生まれ、文武両道の容姿端麗なスケベな男が主人公が、目に入る女の尻を追っかけて、子供を産ませる物語よ」

「……随分と、こう、生々しい物語を書くんだな。それってどこまでが本当なんだ？」

「全部」

「そうか、全部か……いや、ちょっと待て」

何時の間に用意したのか、輝夜の傍には小さな机が置かれていて、そこには硯と墨、文鎮に押さえられた和紙が用意されていた。

その横で、妹紅がふう、と溜息を吐いて御茶を啜っていた。ああ、そうかと彼は妹紅とは別の意味で溜息を吐くと、意気揚々と筆を執った輝夜を止めた。

途端、不満そうに輝夜の頬がぷくぷくと膨らんだ。上目づかいで睨まれた彼は、切れ長の妖しさに目を逸らした。

「全部つて、輝夜よう……事実でも、そういうのは書かない方がいいんじゃないか？」

「別に嘘なんて何一つ書いていないんだから、いいでしょ」

確かに、嘘は書いていない。書いていないが、真実だからとて、書かない方が良くとも往々にしてある。とくに今、輝夜が話した男の話など、その典型だろう。

彼は残っていた野草を口の中へ放ると、そつと筆を持っている輝夜の手を握った。びくん、と輝夜の肩が震えた。びくん、と妹紅は

頬を釣り上げた。

「なによう」

「それに、下手に何か書いて文句言われても嫌だろ。せめて違うのにしろよ」

彼の言葉に、輝夜は目をつぶって頭を捻って、書物が与える影響を考えた。今の輝夜の地位、立場、翁夫婦の立場、妹紅の立場、彼の立場……それら全部をひっくりくるめて……。

「……分かった、やめる」

「いいの？」

考えを改めた輝夜に、妹紅は目を見開いた。一緒に暮らして分かったことだが、輝夜はとてつもない頑固だ。一度コレと決めたらあらゆる手を使って味方を増やし、目的を達成させるぐらいに融通が利かない。

そんな輝夜が、いくら彼の言葉とはいえ、やろうとしたことをあつさりやめたことに、妹紅は信じられない気持ちで姫を見つめた。

「ええ、別にかまわないわ。後で知り合いの歌人に原案を渡すから」

「おい」

彼はポンと輝夜の頭に手を置いた。輝夜は小さく舌を出して、ペシッと手を叩いた。

「あら、それなら私が書くわけではないからいいでしょ。それに、その歌人は学に優れた優秀な人だから、危険な部分はぼかして書くでしょうしね」

そう言われてしまえば、彼には何も言えず。元々輝夜に対する強制権なんて持っていない彼は、まあ、いいかと頭を搔いた。

「それじゃあ、代わりの話の資料に、都で騒がれている怪物の調査をお願いね。ある時は虎、ある時は鬼、ある時は炎、ある時はよく分からない何か。あらゆる形に姿を変える正体不明の怪物だから、気を付けてね」

「……ああ……いちおう聞くが」

「わざわざあなたをお願いを聞きいれたんだから、それぐらいはい

いでしょ。それとも、あんたはわざわざお願いを聞いてくれた相手  
のお願いを、無下にするような男かしら？」

……開いた口が塞がらないとは、このことを言うのだろう。彼は  
引きつった笑みを浮かべて、背後に花が咲きそうなぐらいの笑顔  
を浮かべた輝夜を見つめた。

「諦めなさい。初めからこれが目的みたいよ」

ぼんと彼の肩に手を置いて、妹紅は彼を慰めた。

恐るべし、知略。さすがは帝すら惚れる、なよ竹の輝夜姫。元々  
の目的を譲ったかと思えば、それは囷。しかも良心に訴えて断れな  
い状況にしたうえで本命を達成し、さらには囷の目的まで相手の了  
承を得たうえで達成する。

悪魔のような手口。いや、外見が麗しい分、悪魔より性質が悪い  
かもしれない。なにせ、相手に騙されてもいいと思わせるのだから。

輝夜の満面の笑みを見て、彼は立ちあがった。

「……はあ、分かりました。行きます、いけばいいんだろ」

「うふふ、ありがとう」

輝夜の声援を背に、彼は都へと足を進めた。手を振って見送る妹  
紅の傍を通り過ぎたとき、彼の耳にこんな会話が入った。

「ところで、その原案を渡す相手はどんな知り合い？　もしかして、

紫式部？」

「あら、知っているの？」

「いちおう、同じ藤原の一族だからね。噂もかねがね耳に入ってい  
るけど、よく彼女の了承を取れたわね。あの人、見た目は優しく  
大らかな感じだけど、ものすごく自尊心が高い人よ」

「女の好きなものなんて、いつの時代も同じものよ。この話を持ち  
かけた時は、転げ笑って了承してくれたわ」

「ふ〜ん。でも、いつの時代も……って、あんたも私とそう違わな  
いでしょ。何を年上ぶっているのよ」

「……ええ、そうね」

はて、紫式部？

彼は頭を傾げながらも、止めていた足を動かした。

## ある日の話（閑話）（後書き）

さて、次からは星蓮船に登場するキャラクターの話絡めたいと思います。

さつさと、聖のぽんぽんおっぱいを出したいけど、まずはあいつから出そうと思います。



たどり着いた場所は（前書き）

さすがにおっぱい分は追加できない。無理やり追加すると15禁だし、この話は健全だから。

## たどり着いた場所は

都に着いた彼は、早速……というわけにもいかず、途方に暮れていた。なにせ、情報が無い。それはもう、有益な情報が全くないのである。

時折、通りを進む牛車を止めて従者に尋ねるも、大概是鬱陶しく追っ払われる。かといって、屋敷の門番に情報を聞いても、顔をこわばらせるばかりで、何も答えない。

ならば、一軒ずつ訪ね歩いて、誰ひとりとして話を聞いてくれないし、話さない。中には話そうとする素振りを見せる人もいたが、すぐに口をつぐんでしまった。せめて理由だけでもと問い詰めると、皆一様にこう言った。

あの妖怪は、話してはいけない。話せば、命を取られる。誰もがその姿を知っているが、誰もがその正体を知らない。私達が言えるのは、それだけだ、と。

むう、と彼は持ってきた竹筒から、水を飲む。少し温くなっている。

困った、と彼は思った。情報が無いのもそうだが、なによりも、都の様子がおかしい。いつもなら人気が無いなりに、さり気無いところで転がっている死体に目を瞑れば、静けさの中の命が見え隠れしているのが分かる。だが、不思議な事に、今は全く感じない。

どんよりとしているというか、こう、空気が淀んでいるというか。悪臭云々は元々あるが、それとは別の、こう、恐怖の霧が蔓延し、都銃を覆っているような。目に見えぬ魑魅魍魎が知らないうちに蔓延っているというか、なんとというか……焦燥感にも似た何か背筋をぞぞぞつと走っている。

ステータスを確認すると、思っていた通り、常に獣の本能が働いている。つまり、彼にとって悪影響を及ぼしかねない何かの存在を、常に感じているということだ。

誰しもが知っていて、誰しもが知らない怪物。

輝夜の話していた通りだ。しかし、このまま収穫も無く帰っても、それを種にネチネチと輝夜に言われても堪らない。

どうすれば……と、彼は唸った……そのとき、くいつと袖を引かれる感触に、彼は顔をあげて、そちらへ見やった。

「なにか探し物かい？」

そこには少女が居た。一瞬、少年かと思ったが、部分部分を見ると、はつきりと少女だと分かる顔立ちだ。声色は高く、どう聞いても少女の音だが、小生意気そうな雰囲気、そう思わせなかった。おそらく先天性の異常なのか、赤色の髪をスリスリと弄っている。身につけている衣服もところどころ破れた麻の服で、そこから飛び出した四肢は、驚くほど細い。袂から覗ける浮き上がった鎖骨は、医学の知識がない彼から見ても、栄養状態が良くないということがうかがいしれた。

「……君は？」

彼は少女の目線に合わせて腰を下ろした。一瞬、妖怪かと思ったが、彼はすぐにその考えを捨てた。

ここ都では、周囲4方を基点とした結界が張られている。その結界の力は凄まじく、並みの妖怪では、足を踏み入れるだけで消滅しかねない程だ。さすがに鬼や天狗を抑えることは出来ないが、その力を削ぐことは出来る。

その為、都には結界の力すら作用しない弱小の妖怪か、せいぜい驚かせる程度の小物ぐらいしか現れない。鬼や天狗が現れたら一大事で、往来を白昼堂々と姿を見せていけば、大騒ぎになることは必ず。下手をしなくても、陰陽師が押し掛けてくる。

それこそ、今のように少女が彼と話す間もなく来るぐらいだ。それら騒動の跡が少女から見られないのと、辺りが静かなのを考慮して、彼は少女を無害と判断した。

ちなみに、最初に疑った最大の理由が、少女の身体から異臭が出ていないという、少女が聞いたら憤慨しそうなことだったとは、知

る由もないだろう。

「えっと……君は？」

返事がないので、もう一度訪ねる。

「……私、知っているよ」

「……え？」

ぼそりと囁くような声。少女特有の高い音は、鈴のように心地よく、彼の耳にもはつきり届いたが、内容までは聞き取れなかった。

「……お兄さん、アレを探しているんですよ」

「……アレって、誰もが知っていて知らない怪物？」

少女は答えなかったが、目と口元がかすかに釣り上がったのを、彼は見た。

物静かな子だ、と彼は思った。大人しいというより、物静か。ほとんど表情が見えない少女の内面はうかがいしれないが、おそらくなかなか気性が激しいのではないかと、彼は推測した。

「知っているなら、教えてくれないかな？ お兄さん、その怪物を探しているんだよ」

「……知っているよ」

「それなら」

スツと少女の手が差し出された。土汚れて、ところどころ亜麻色になった、小さな白い掌。その手が、小さく指を揃えて彼へと差し出されていた。

「……ん」

反応を見せない彼に焦れたのか、ずいっと少女の手が彼の胸元を突いた。

そこにきて、ようやく彼は少女の言いたいことが分かった。

催促する手を優しく握って押さえつつ、彼は懐を探る。取り出した銭を、その手に握らせた。

「……ん」

すると、今度は反対の手を彼に差し出す少女。彼は苦笑しながらも、懐からもう一度銭を取り出し、その手に握らせた。

「……ん」

次に少女が取った行動に、彼は呆氣にとられた。

少女は、袂をキュツと握ると、それをグイツと前に引つ張ったのである。露わになった小さな膨らみと、陥没気味の乳首が彼の視界に入る。色濃い赤褐色の乳首がぽつんと頂点に添えられており、脂肪の全くない肌は、肋骨を浮き立たせていた。

「……うん」

見てはいけないものを見た。まさに、今の彼の心境は、それだった。彼に少女嗜好はないので、興奮はしない。それに、似たようなものを二名ほど、彼は普段から見ている。つまり、見慣れているのだが、今回は少し状況が違った。

見慣れている方は安心出来る場所、屋敷の石室で、脱いでいても可笑しくない場所な分、そこに背徳な空気は無かった。だが、ここは日の当たる外。本来なら、間違わないかぎり視線にさらされることのない場所。

そんな場所で、不意打ち気味に少女の性を見せられた彼は、照れてしまったのだ。

「……ん、ん」

だが、少女には容赦の二文字はない。というより、その行為がどういうことなのか、分かっていないのだろう。

少女は彼の手を取ると、その手を一息に胸元の中に押し込んだ。手のひらに広がる、温かさと柔らかさ。温かい体温が肌を伝わり、浮き出た肋骨からは想像も出来ないくらいに柔らかな蕾。反射的に握ってしまった彼の手に、ふによっとした感触と、その中にあるコリとした固さが広がる。

「……………あゝ、うん、分かった。払う、払うから、ちょっと離して」

真つ白になった思考を再起動しながら、彼は少女にそう懇願して離してもらう。すぐさま懐から銭を取り出すと、少女に差し出した。これが最後の銭だ。

「……ん」

入れる、と言わんばかりに胸元をくつろげる少女。彼は乞われるまま、そこに銭を落とした。

途端、ちゃりんと音を立てて、麻服に隠された股部から銭が落ちた。

……真ん丸に見開かれた少女の顔を見て、彼は一瞬、可愛いと思っただ。

「……」

「……いや、そんな顔されても困る。手で持てばいいだろ」

「……」

「いや、だから」

「……」

「……はあ、分かった。負けたよ。ほら、両手を上げな」

言われるがまま両手を上げる少女。その両手がいまだになつてギョツと握りしめられているのを見て、彼は内心笑いをこらえながらも、少女の腰に巻かれている紐を、そつと解いた。

途端、びくと少女の身体が震えたが、彼は気にせず解いた紐をぐるりと少女の腰に回すと、懐から滑り落ちないよう、きつめに紐を縛る。そして、少女の袂から銭をぽとりと入れた。

「ほれ、これでいいだろ」

「……ありがとう」

ぼそりと囁かれた言葉に、彼は少女に目線で問いかけた。

「……丘の上」

「丘？」

「うん」

少女は細い腕を伸ばして、西を指差した。

「ここからまっすぐ行ったところに、妖怪の縄張りがある。そこに大きな湖があって、その近くに丘がある……多分、居ると思う」

「怪物が？」

「……うん」

「それ、誰から聞いた？」

「……………この前、貴族が話しているのを、聞いた」

ふむ、と彼は頷いた。少女の話の真否を考えているのだ。

少女の言う内容は、正しいというのが彼の判断だ。だが、それが目的の怪物なのかどうかは分からない。もしかしたら噂が噂を呼んで広まっているだけで、実際は別の場所という可能性もある。あるいは、正しいのかもしれないが、他の妖怪やら何やらが住み着いている可能性もある。そこらの妖怪に負けるとは思えないが、鬼なんかの例外だって、あり得なくもない。最悪、逃げ切れない可能性も考慮しなくてはならない。

そう彼がつらつらと考えていると、またしてもクイツと袖を引かれる。見ると、少女が眉根を下げて彼を見つめていた。

「……………危ない」

「ん、ああ、そうだな、危ないな」

「……………行かない方がいいよ」

「あ……………そうしたいのはやまやまだが、いかんせん、行かないと後で小言がなあ……………対価として行くわけだし、行かないわけには……………な」

「……………」

「……………いや、だからそんな顔するなって……………ああ、大丈夫、大丈夫だよ。俺は逃げ足が速いから、そんじゃそこらの妖怪から襲ってきてても平気さ。すぐに逃げられるから」

「……………本当？」

「ああ、本当だ……………ほら、離しな」

彼の言葉に、少女はしぶしぶ手を離れた。だが、その表情からは不満の色がありありと浮かんでいて、はっきりと彼を心配しているのが分かった。

なんで俺ってこんなに心配されているのかねえ……………と彼は思いつつ、懐から子袋を取り出した。口紐を解き、そこから嚴重に封をされた器を取り出した。

器を落とさないようにゆっくり封を外す。その中には、半透明な蜂蜜色の液体が盛られていた。

「……………なに？ 変な臭い……………」

興味を引かれた少女が、液体に鼻を近づかせる。ぷにょんと肋骨と胸の二つの感触が彼の腕に広がる。さっき彼女の紐を縛ったのがきつかけなのか、最初の頃の警戒さは見えない。

「ん〜、水飴……………ていうやつなんだけど、甘い食べ物だよ。ほれ、一口食べてみな。高いやつだが、心配してくれたお礼だ。輝夜達にだって教えてない、俺のとおっておきなんだぜ」

「……………」

「遠慮するな……………ほら」

だが、少女は怖がるように彼の腕にしがみつくと、器から顔をそらした。

変だな、これぐらいの女の子なら、甘いものには目が無いはずなのに……………と考えた時、彼は思いついた。

……………もしかしたら、甘いつてこと自体が分からないのかもしれない。それなら、水飴を見てもただネトネトしたものにはしか見えないし、そんなものが食べられると言われても、食べたいとは思わんか。彼は指にそつと飴を付けると、それをぺろりと舐めた。途端、少女の目がぱちりと開かれた。

「ほれ、大丈夫だ。毒じゃないよ」

「……………」

「……………一口、舐めてみな。それで嫌なら、俺も謝る。でも、これって本当に美味しいんだぞ」

もう一度指に飴を付けて、今度は少女にそつと差し出した。少女は彼の顔と指へ交互に首を振ったが、しばらくして、小さな唇をかすかにあげた。そこから血のように真っ赤な小さい舌をそつと伸ばすと、指先へそれを近づけ……………ちよん、と指を舐めた。

出したときとはケタ外れの速度で舌を引っ込めて、一秒、二秒。固く縮こまっていた少女の肩が脱力し、そして眉根が釣り上がり、



ギョツと閉じられた瞳がゆっくり開かれる。

そして、彼の顔をジツと見つめると……水飴がついた指に吸いていた。

「おお!？」

突然の行動に驚いた彼が離れようとするが、それよりも早く少女の両手が彼の腕を掴む。唇が指の付け根にまでつかんばかりに近づき、指は少女の口腔の中へ深く吸い込まれた。

ぬめぬめとした弾力溢れる舌が指先を這いまわる。先ほど胸元に感じた体温よりもはるかに温かい粘膜が指全体を包み込む。ざらざらした舌の腹が、最後の欠片まで残さないと言わんばかりに指銃を這いまわる。さらには頬の内側に擦りつける様に指を押し込むと、少女は指の付け根にちゅうっと吸いついた。

「ちよ、ま、まで、落ちつけ、そこにはついてない、ついていないから」

「……………」

ちゅぽ、と音を立てて彼の指が離された。指の付け根どころか、指の腹にまで伝った少女の唾液が、日の光にきらりと煌めいた。獣を思わせる少女の瞳を見て、彼は器を少女に差し出した。

だが、少女は黙って彼に器を返すと、涎が付いた彼の手を掴んで、器へ向けた。

「……………」

「……………ああ、もう、分かった。分かった、だから落ちつけ」

再び指に水飴を付けた彼女に差し出す。すぐさま食いつく少女。

彼は、今日中に件の場所へ行けるかな、と思いつつ、嬉しそうに指をしゃぶる少女を見つめた。

上半身を一切動かさずに全速力で走る。長い年月を掛けて編み出した走法を駆使して彼が少女の言う場所へ到着したとき、既に昼をとうに過ぎていた。

少女の言うとおり、そこには大きな湖があった。少し違うのは、周りを囲うように色とりどりの花が咲き誇っていたこと。

湖も綺麗だ。透明度が高く、底の底まで良く見える。光に反射する小魚が、ゆらりゆらりと水の中を泳ぎ回っていた。ここが妖怪の縄張りであるのが、信じられない光景だった。

へえ、いいところじゃないか。

そう彼が考えた時だった。彼の背後から声が届いたのは。

「ごきげんよう、私の花畑に何か御用かしら？」

「!?!」

反射的に、彼は振り返ると同時に身構える。

そこに居たのは女性だった。明るい緑色の珍しい髪。花をあしらった彩色溢れるスカート……麻とは違う素材のようだが、彼には分からない、それがふわりと踊った。うりざね顔と温和にはほ笑んだその顔は、彼の美感的感覚から見ても、思わず見とれてしまう美女で、胸元を押し上げる膨らみは、彼でなくても前かがみになってしまっただろう。

だが、その顔に浮かぶ二つの深紅色の瞳と、凍えるような殺気がなければ、だ。それがなければ、彼も構えを解いてにこやかに挨拶しただろう。

「……………」

彼女の動きに注意しながら、彼は慎重に距離を取った。

「聞こえなかったかしら、ごきげんよう」

そんな彼を尻目に、彼女はにこりと笑って彼を見つめた。

だが、彼はそんな彼女の言葉には耳を貸さなかった。そうするにはあまりにも目の前の美女は禍々しく、あまりにも恐ろしく見えた。見た目とは裏腹の、圧倒的な存在感。旅を共にした鬼とは違う、戦慄にも似た迫力。あれが身震いしてしまいそうな力なら、こちらは

凍えてしまいそうな力だ。その力の前には、彼が長年かけて鍛えた力が、あまりにも小さく思えた。

……強い！　なんだ、こいつは！？

流れる汗が、目に入る。痺れるような痛みが眼球を巡り、脳裏を駆け廻る。彼は目の前の美女を見つめたまま、ステータスを確認した。

|       |   |            |   |
|-------|---|------------|---|
| 【レベル  | ： | 780        | ┌ |
| 【体力   | ： | 7777/7777  | ┌ |
| 【気力   | ： | 2800/2800  | ┌ |
| 【力    | ： | 6000 +990  | ┌ |
| 【素早さ  | ： | 1000 +260  | ┌ |
| 【耐久力  | ： | 3000 +1330 | ┌ |
| 【装備・頭 | ： | 花の髪飾り      | ┌ |
| 【　・腕  | ： | フラワーハンド    | ┌ |
| 【　・身体 | ： | フラワースピー    | ┌ |
| 【　・足  | ： | フラワーシューズ   | ┌ |
| 【技能   | ： | 花をあやつる・激怒  | ┌ |
| 【スキル  | ： | 美感力　レベル47  | ┌ |
| 【     | ： | 妖術　レベル7    | ┌ |
| 【     | ： | 自己回復　レベル4  | ┌ |
| 【アイテム | ： | なし         | ┌ |

……ああ、これは勝てん。彼は衝撃波を放つ用意をしながらも、そう悟った。

そんな彼の顔色を見たのだろうか、美女は嬉しくてたまらないと言わんばかりに笑みを深めた。

「そういえば名乗っていなかったわね。いやね、せっかちはよくな

いわね」

美女はぼんぼんとスカート状の衣服を叩くと、その外見に似合う綺麗な指先で、静かにスカートを摘みあげた。

「私の名前は風見幽香。しがない妖怪よ、人間さん」

「……………」

「やあね…………だんまりかしら？ まあ、どうでもいいわね、そんなこと…………」

瞬間、妖怪…………風見幽香の力が跳ね上がるのを、彼は感じた。膨れ上がった妖力は爆発的に膨張し、彼方に居た鳥達が一斉に飛び立つていった。

「とりあえず、養分にでもなりなさいな」

凄まじい速度で幽香が彼の眼前へ迫ると、細い腕が轟音と共に彼の顔面へ放たれた。

たどり着いた場所は（後書き）

さあ、登場しました、花の妖怪。彼の運命や、いかに。

次回、 決戦！ 風見幽香！

決戦！ 風見幽香！（前書き）

今回はちょっとエロいよ。久しぶりに15禁だよ。ただし、短いよ。

## 決戦！ 風見幽香！

岩と岩がぶつかったかのような、鈍い音が周囲に響いた。

「あら？」

幽香の表情に困惑の色が浮かぶ。腕の伸ばした先をみると、そこには彼女が想像していた光景は無い。あるのは、彼女の腕を掴んで止めた彼の姿だった。

瞬間。瞬きよりも早く幽香の身体が飛んで左足が跳ね上がり、音も無くふわりと彼の頭上で停止する。と、同時にその足が彼の脳天を砕かんと風を切り裂き、爆音と共に地面に大穴をあける。大量の土砂が周囲を飛び散り、その威力を物語る。

「あら？」

真つ赤なお花が咲いた光景。それを思い浮かべていた彼女は、またしても手ごたえのない踵の感触に、ぱちぱちと瞬きした。

「……いきなり何しやる」

幽香は声のした方向へ視線を向ける。そこには、冷や汗を掻いた彼がいた。彼は衝撃で痺れる左手をぶらぶらと振っていた。しばらく、左手は使いものにならないと、彼は痛みを幽香に見せない隠しながら、理解した。

なんとという衝撃。彼は思った。今の一瞬の邂逅で、彼は改めて目の前の美女、幽香の強さを思い知った。勝てる、勝てないの問題ではない。あまりにも差がありすぎて、もはや勝負にすらならない。

しかも、片手を使用不能にまでされている。衝撃波を放つ程度には大丈夫だが、少なくとももう幽香の剛拳を受け止める自信はない。それこそ、掴み切れずに直撃してしまうだろう。

そんな彼の焦燥を他所に、幽香は楽しくて仕方ないと言わんばかりに頬を緩め、彼に掴まれた腕をさすった。

「ふふふ、あなた……強いわね」

「話を聞け。それに、俺よりもはるかに強いあんたに言われると、

嫌味にしか聞こえないぞ」

「あら、本当よ。私の初撃を耐えたり避けたりしたやつはいたけど、追撃を避けたやつは初めてなのよ。そう考えたら、あなたは十分凄いわ。人間としては……ね？」

油断なく身構えている彼の動きを注意しながら、幽香は彼を心から褒め称える。

前述した通り、幽香の力は凄まじい。並みの妖怪など一撃でけし飛び、跡形すら残らない。試したことはないが、天狗や鬼などの妖怪の中でも破格の実力をもつものでも、ただではすまないだろう。しかも、今回は人間だ。場合によっては雑魚の雑魚よりも脆弱な肉体を持つ人間が、自身の放った渾身の一撃を受け止めた。あまつさえ、今まで避けた者は一人もいない追撃すら、眼の前の男は避けた。それだけでも、彼女の生涯においては始めてのことで、それは彼女にとって十分に称賛してもいいことであつた。

それに……。

幽香は掴まれた腕をチラリと見据えると、彼へと一歩踏み出した。

「ふん！」

パチンと乾いた音と共に放たれる斬撃。彼の放った衝撃波は音速に達すると同時にエネルギーの一部が音に変換し、ヒュンと鳴つた。普通なら直撃のタイミング。だが、幽香にはそのタイミングですら遅すぎて、腕の位置、指の角度、その他もろもろの動きを瞬時に観察し、研ぎ澄まされた直感によって不可視の一撃を、首を傾けることで交わす。見えない閃光が幽香の頬を掠めて、深紅の模様が瑞々しい頬にパツと花を咲かせた。

「……あら？ 避けたと思つたのに、当たっちゃったわ。以外と範囲が大きいよね。切れ味もいいし、驚いたわ」

余裕綽々。悠悠自適。人間一人を切り裂く威力を、切れ味がいいで済ませる度胸。決して浅くはない頬の傷からは、絶えず血の滴を垂らし続けているのに、幽香の表情から全く焦りの色は見えない。

それどころか、ますます頬を紅潮させる。流れる血を指で拭くと、



その血と同じくらいに赤い唇に這わせた。まるで紅を塗るように小指を立ててくるりと塗り終わると、ペロリと指に付いた血を舐め取った。

「ねえ、あなた……けっこうやるじゃない。人間だと思っただけだ、本当は人間じゃないとか？」

「……自分でも時々疑問に思うが、いちおうは人間だよ。少なくとも、お前さんのようには化物じみていない程度にはな」

ニヤリと幽香の唇が歪んだ。血と唾液で滑る舌が、塗られた血液を舐め取るようにゆっくりと滑る。紅潮した頬と切れ長の顔立ちに、その行為は似合っていた。

「うふふ、そうね、あなたと比べたら、私は十分化物ね」

再び、放たれる斬撃。今度は連続して煌めく閃光が幽香を襲う。

だが、彼女は変わらぬ涼しい顔で、ゆらり、ゆらりと彼の一撃を避ける。まるで日向をゆっくり散歩するかのように、一步、一步、彼へと近づいていく。

さらに、さらに、さらに、さらに、放つ、放つ、放つ、放つ。

大地が、空が、湖が、斬られていく。しかし、そのどれもが幽香を狙ったもので、本命にはかすりもしない。

らちが明かない。そう悟った彼は、腰だめに溜めた衝撃波を、一気に凝縮する。異音と共に辺りの大気を動かし、彼を中心とした突風が吹き荒れる。

そして、解き放つ！

「でやあ！」

強大な衝撃波が渦を巻いて、幽香を薙ぎ倒さんと殺到する。大地を削り、大気を飲みこみ、空間を飲みこんでいく。それはもはや光すら飲みこみ、黒い風となって、幽香の身体を食い破ろうと牙を向き、遂には幽香の身体を貫いた。

腹の底まで響く重い轟音。それが舐めるように地面を滑っていく。大量の土煙りと埃を舞い散らせ、彼の眼前は完全に塞がった。音は次第に遠くなっていき、そして……爆風と共に、辺りを吹っ飛ばし

た。

……やったか？

倒せたとは思っていない。しかし、せめて逃げ切れる程度にはダメージがあつてほしい。その希望に絶える思いで、周囲を覆う土煙りを払おうと、衝撃エネルギーを充填し。

「はい」

「っ!？」

始めた瞬間、突然眼前に広がった姿……幽香の顔に、彼は目を見開いた。と同時に、彼は目の奥に光が走った、と感じた瞬間、地面を転がっていた。力の入らない四肢、腰に感じる柔らかくもズシリと感じる重圧。ぼやけた輪郭が目の中の光景を二分し、焦れつたくなるような速度で焦点が合う。

胸に置かれた細い手、前かがみになったことで重力に垂れ下がった双山、その頂点に色づく桃色の実。あ、裸だ、と頭の中で思った瞬間、風にゆらめく緑の髪を見て、彼はようやく自分が押し倒されたことを悟った。

押し返そうと身体に全身に力を入れるが、幽香の身体はびくともしない。それどころか、押し掛かるようにその豊満な肉体を倒すと、ギョツと彼の首に腕を回した。熱くすら感じる体温から香る、芳醇な女の汗。乱れた衣服の合間を縫うように、膨らみが滑りこんでくる。挟まれた太股に感じるざりざりとした感触と、その中にある滑りと、信じられない程の柔らかさ。

ギョツと、と言つても、一般的な女子の力ではない。鍛えた彼の腕力を一時的に奪う程のパワーで、だ。そんな力で抱きしめられたら、どうなるか。彼ですら、万力に締められたように、息を止めざるをえなかった。

「っ、お、お前！」

「驚いたかしら？」

舐めるような囁き声。視線だけで幽香を追うと、そこには触れんばかりに唇を近付けた、女の顔があつた。幽香は硬直する彼の耳に、

ちゅつと接吻すると、唾液で滴る舌を耳の穴へ押し込んだ。

「おお！？　おい！？　な、なな、なにを！？」

狼狽する彼を尻目に、幽香は垢をほじくるように舌をぐるりと回し始めた。ぼっ、ぼっ、と舌が耳を塞ぐたびに、寒気が走る不快音が脳を襲う。顔を背けて嫌がる彼をさらに追い詰めるように、耳に溜まった唾液を音を立てて啜ると、幽香は顔を上げた。

「うふふ、しょっぱくて、とっても苦いわぁ」

戦闘による高揚とは違う。それよりももっと甘く、もっと熱く、もっと粘っこい何かをその両目に宿らせながら、彼女は彼の頬をちゅつと吸った。

何が起こったのか分からない。今まで命を掛けた殺し合いをしてきた相手が、いきなり久しぶりに再会した恋人にするような情熱的すぎる愛撫に、彼は首を振って怒鳴った。

「いきなり何しやがる！　何が目的だ！？」

「うーん、目的は無いわね」

あっけらかんとした答えに、逆に質問した彼が口をつぐんだ。横一文字になった彼の唇を幽香は、ゆっくりなぞりながら、問い返した。

「あなた、私に何かした？」

……？

「……なんのこと、うー！？」

腰に感じる違和感に、彼は奇声をあげた。しよりしよりと滑った髪の毛が太股を擦っていく感触と、突き立ての餅がぶにぶにと胸を転がる感触。彼が首だけをなんとか持ち上げてみると、しゃくるようにして動く、張りのある肌色桃が見えた。

「あんなのこと見ていると、なんだかおかしくなってきたやうの」

「……う、何、うう、は、離せ、や、ヤバい、これ以上はヤバい」

命の危険にさらされていたからだろう。彼の敏感な部分は、経験からは信じられないスピードでエネルギーを充填し始めた。

いくら相手が凶悪な存在だとはいえ、見た目は一度はお目に掛りた

い美女だ。しかも豊満な体形には無駄なぜい肉はほとんどなく、それでいてどこもかしこも程良く柔らかいという、反則みたいな肉体だ。そんな身体がいやらしい部分を、自身のいやらしい部分に擦りつけるように振っていたら、例え枯れていたとしても、復活してしまっただろう。

彼は、次第に本気を出し始めた分身をなだめつつ、原因である妖怪を見つめた。

「俺は、なにもしていない、ぞ」

「ふう、ん……ん、そ、そう、でも、なぜか、私は貴方に対して凄  
い興味を抱いているわ」

「な、なに？」

「最初はどうでもよかったけど、なんていうのかしら……ん、あ、あ、えっと、そうね、ふと気付いたら、あなたのことを友人だと感じていたわ」

「……は、はあ？」

「うふふ、意味が、あ、あ、ん、そ、そんなに動かないで……響くからあ……とにかく、気付いたときには貴方のことが敵に思えなくて……なんていうか、長年連れ添った友人みたいに思えてきちゃったのよ……あ、はあ」

粘膜がこすれ合う、卑猥な音が彼の耳に届く。

「本当に、つい今さつき出会ったばかりなのに、あなた、の、うん、あなたのこと、好きになっていて、それがあまりに突然過ぎて、不思議、い、あ、あ、ん、だ、だけど、不思議と、それが、不思議に、思え、なくて……貴方に頬を切られたことすら、あ、ん、う、嬉しくて、全然悔しくないのよ」

悶える幽香の言葉に、彼は困惑した。もちろん、彼には何が起きているのかさっぱり分かっていなかった。ただ、眼の前の女から、もう敵意というのが無くなっているということには分かった。

「ね？ だから、ね？ そういうことだから……よくわかんないけど、とっつてもいい気持だから……ちゃんと静めて、ちょうだい」

大きく広がった幽香の瞳。そこはとろんと潤んでいて、それが視界いっぱい広がったと同時に唇に感じる柔らかい粘膜。頬に当たる幽香の鼻息に、彼は思わず息を呑む。

静かに閉じられていく幽香の瞼を見て、彼は困惑しながらも、とりあえず拘束された手足を動かした。

**決戦！ 風見幽香！（後書き）**

さて、ここにきて、ようやく主人公の能力の伏線らしきものが見え隠れします。

前回、おっぱい書けなかった分、今回は少し出すぎたかもしれませ  
ん。

ですが、後悔はしていません。

## 面影（前書き）

久しぶりの更新。基本的に、一話5000文字前後を目安にしています。

## 面影

日が暮れてどれほどの時間が経っただろうか。彼は掠れた呼吸音を発しながら、思った。辺りの様子も変わり、咲き誇った花々こそ無事ではあるものの、それ以外のものはあらかた破壊されていた。彼が美しいと思った湖は土砂で濁り、泳いでいた小魚は絶滅しただろう。

身体が重い。全身に流れる体力を根こそぎ絞り出して、とどめにプレスしたかのような気分だ。筋肉繊維の一本一本、残さず全力を發揮した影響で、上手く力が入らない。

下着一枚実に付けていない素肌が、夜風に当たって寒い。本当なら今すぐ服を身につけたいところだが、幽香に破られてしまつて、無い。おまけに汗も多分に掻いたせいで、全身水浸しになつたかのような状態だ。油断すれば崩れ落ちそうになる下肢を意思の力で抑えつつ、彼は目の前の美女、幽香を見やる。

彼女も、その瑞々しい肌を惜しげも無く彼に見せつけていた。実に実つたたわわな膨らみ、キュツと絞られた細腰は、はたして内臓が収まっているのかどうか疑つてしまうほどに、細い。それでいて、女の魅力をこれでもかと詰め込んだ柔尻は、逆ハート型にふるんと張りの良さを視覚からも訴えている。時折誘うように左右に揺れるおかげで、ふるんふるんと突き出される尻たぶが、男の彼には、あまりに目に毒。彼が幽香の視線から逃れるように要所要所を隠しているのに対し、幽香はむしろ見ると言わんばかりに魅力をふるんと震わせていた。

これがもし、細切れに破かれた彼の衣服が辺り一帯に散乱し、幽香の衣服が皺くちやに脱ぎ捨てられていなくなつたら、事態はもつと単純に運んでいただろう。

しかし、現実はなかなか無情。単純には運ばない状況からさらに拍車を掛けるように、飢えた獣のような身震いしてしまいそうな



目つきで、幽香が彼を見つめている。ふんふん、と鼻息荒く、紅潮した肌からうっすらと浮き上がる汗の滑りは、遠くから見れば精通を迎えていない少年に性の訪れを予感させてしまう程に淫妖だ。

ただ、幽香の放つ異様な雰囲気さえなければ、の話だが。

「さすがに、疲れたわね」

問いかけるといふより、独り言に近い話し方。幽香の唇から零れた一言に、彼は頷いて同意した。

「……そうだな」

最後の貞操を守り切り、彼がようやく幽香の腕から逃れることが出来たときには、空の彼方が赤くなっていた。そして対峙し合ってから早幾ばくか。片方は爛々と鈍く輝く瞳を。片方は時折感じるおぞましい気配と殺気、そしてなぜか性的に興奮している女に困惑の瞳を向けながら、生まれたまの姿で睨み合いを続けていた。

甘酸っぱくも、生臭い。女の発情臭ともいうのか、むせ返るような蜜花の甘い匂いが幽香から漂ってくる。汗で解れた一筋の髪が、横一文字に描かれた傷痕に、へばりついていていた。さすがは妖怪というべきか、傷口は完全に塞がり、傷痕も目を凝らさなければ分からない程度にまで回復していた。

「それで？」

今度は彼が切り返す。

「それで、って？」

幽香のとぼけた返答に、自然と彼の声も陰しく低い声になる。普通の一般人ならば、おもわず声を失ってしまいくらいの迫力だったが、幽香は喪失するどころか、むしろうっとり目じりを下げる。

ああ、低い声も魅力的だわ。なんでか分からないけど、お腹に響く。これって、私の中の女が、彼に反応しているからなのかしら。それだったら、ちょっと、恥ずかしい。

トロリと太股に垂れる愛液に、幽香はぶるりと肩を震わせる。さすがに発情の証を彼に見られるのは恥ずかしいのか、彼女はそっと身体の向きをずらして、彼の視線に入らないように横身になった。

しかし、そのおかげで今度はぶるんと実った双山が跳ね、桜色の頂がより彼の目に映るようになり、より自身の裸体の素晴らしさを見せていることに、幽香は気付いていなかった。

「いつまでこうして睨み合いしていればいいってことだ。お互い、いつまでもこうしているわけにはいかないだろう？」

「貴方が大人しくしていてくれれば、すぐに終わるわよ」

「……いや、そういうことじゃなくて」

「大丈夫。星の数を数えている間に終わるから。その頃には貴方も私もとっても気持ちよくなっているはずよ」

ジツと、幽香は彼を見つめる。鍛えられた胸筋、六つに割られた腹、幽香の首よりも分厚い太股、盛り上がった両腕……そして、反り上がった雄。先ほど行った深い接吻によって、彼の体内には興奮性の花毒を流し込んでいる。戯れに作ったもので、心臓が停止する直前まで勃起を持続させるもので、その効力は見えての通り。いくら幽香が魅惑的な艶姿を見せているとはいえ、この極限状態で勃起し続けている程だ。その威力は、彼とキスをした際、体内に取りこんでしまった淫毒によって、幽香の身体はかつてなく燃えあがっていた。

「……………」

鼓動が煩い。身体中を巡っている血液が沸騰しそうで、身体が内側から爆発してしまうような感覚を覚える。涎が止まらない。敏感になった肌が、ほんのわずかな空気の流れに、ピクンと鳥肌を立てる。噴き出した汗が盛り上がった双山の谷間を流れ落ちていく。疼く乳首が刺激を催促し、見れば見るほどに不思議に思える雄の姿に視線が止まるたび、トロリと胎内が蕩けた。

逞しい、と幽香は思った。知識として知ってはいたものの、現物をここまですっきりと眺めたことは無い。今まで何度かここを訪れた人間を襲ったりはしたものの、いちいち男性器を拝見することはないし、そもそも興味も無い。殺した相手が倒れた拍子に見たことはあったが、今の彼のように力強く振り返っていたことなどない。

それこそ幽香の指よりも小さくなっているのがほとんどで、稀に大きいのもあったが、それだけ。死に掛けの小魚のように垂れ下がったそこには、雄の強さを思わせるものは何もない。

だが、今回は違う。幽香の指よりも圧倒的に太く、茎には幾重にも血管が脈立っている。長さもあり、指を精いっぱい伸ばしても、亀頭まで届かない。その亀頭もパンパンに張っており、匂い立つような力が充填されていることがうかがい知れた。

フツと、油断なく構えていた彼が、緊張を解いた。突然の行動に内心驚きながらも、幽香は彼を見据えた。彼の眼差しに崩れそうになる頬に力を入れることは、忘れない。

「あら、どうしたの？ 疲れた？」

「別に疲れたわけじゃない」

「疲れたなら、私の家で優しく介抱してあげるわよ。とりあえず、小股に溜まった毒素を絞り出してあげるから、こっちにいらっしやい」

「疲れたわけじゃないと言っているだろう。後、目が怖いぞ」

「目が怖いだなんて、女に言う言葉じゃないわね」

「鼻息も荒いぞ」

「あんだだけ暴れたら、鼻息も荒くなるでしょ」

「そういう次元の話ではなくて……だから、目が怖い。ただでさえ眼の色が赤いのに、充血したせいでなんか血が滲んでいるように見える」

「充血しているのはそこだけではなくてよ」

駄目だこりゃ。隙あらば下ネタで返答する幽香に、彼はふう、と溜息を漏らした。

既に日が落ちていくらかの時間が経過している。このあたりは幽香の縄張りな為か、魑魅魍魎が近寄ってくる気配は感じない。それどころか幽香の放つ異様な気配から逃れるように、隠れ潜んでいた妖怪達が離れていくのが彼には分かった。その気配と対峙している彼は、とりあえず強襲される危険が無くなったことに、安著した。

しかし、基本的に夜は妖怪達の時間だ。例外はあるものの、昼と比べて活動的になるものが多く、中には飛躍的に力が増しているものもいる。強力な結界が張られている都内でも夜の間は外出を控えるぐらいだ。その結界の無い外では、いくら彼といえど昼間のような余裕は無くなる。しかも、都周辺の妖怪は、諏訪王国周辺にいる妖怪よりもはるかに種類が多様で、実力がある猛者が多い。出来ることなら夜が明けてから都に戻りたいところだが、こんな場所で夜を明かしたら、明日の朝、幽香の隣で目覚めることは間違いない。

一瞬、もうそれでもいいかな、と煩惱が湧き出ることもあったが、そのたびに背筋に走る悪寒に思いとどまったりしている。

「……とにかく、俺はもう帰る。元々、誰もが知っていて知らない怪物というやつが目当てで、お前じゃない。目的の怪物も居ないことが分かったから、長居する必要はなくなっただよ……」

ステータス画面からアイテム使用を選択し、予備の衣服を取り出す。突然現れた服に目を見開く幽香を尻目に、彼はさっさと着替えた。もちろん、いつでも反撃出来るように視線は逸らさなかったが。そして、最後にギョツと腰紐を縛って身支度を整えると、彼は踵を翻した。

「それじゃあな。次に会いたいとも思わないが、さよならだ」

瞬間、一瞬で背後に迫った幽香の身体が、フワツと動きを止めた。そしてゆっくりその身体が動いたと思ったら、轟音と共に夜の闇へ吹き飛ばされていった。

「……倒すのは無理だが、距離を取るぐらいは出来るんだよ」

その言葉と共に、彼は走り出した。衝撃波を使って加速しつつ、足跡を消す。下手に残せば後をつけられるし、何より瞬発力は相手の方が速い。今のようにある程度距離を稼いでいないと、あっという間に距離を詰められてしまう。加速が終われば幽香の素早さを上回る分、まだ救いはあったが。

はるか後方から木霊する女性の叫び声に、彼はいつそう汽配を隠して闇の中を走り続けた。

「臭い」

「ええ、本当、あなた、臭いわよ」

命からがら屋敷に到着した彼に放たれた言葉は、辛辣なものであった。言うまでもなく、輝夜と妹紅の二人だ。遠くの空には朝日が見え隠れし、辺りは大分明るくなってきている。そつと屋敷の中に入り、翁夫妻を起こさないように自室へ戻った彼を待ち構えていた二人。普段なら起きている姿など決して見れない時間。目の下に出来た隈とどこかやつれた様子を見て、夜通し待っていてくれたことを知った。

そつとして感謝の言葉を言おうと思った矢先にコレだ。

「……いや、それが夜通し働き続けた相手に対する言葉か。汗臭いのは自覚しているが、お前ら鬼か？」

そんな言葉が出てしまうのは仕方ない話だ。しかし、その彼の言葉に二人は一瞬だけ申し訳なさそうな表情を浮かべただけで、また眉根を釣り上げた。

「別に、貴方が臭いと言っているわけじゃないわ」

「そつよ、確かに汗臭いけど、私は別に嫌いじゃないし」

輝夜の言葉に、妹紅が賛同する。私は妹紅よりも嫌いじゃない、と張り合いつつも、輝夜は彼を指差した。

「女臭い」

「……はあ？」

首を傾げる彼を尻目に、妹紅も私もそつ思ったと言った。

「なんか、あんた女臭いわよ。体中からこつ、モワツと、女の臭いがするわ」

「そつそつ。厭らしい臭いね。まだ発情した獣の方が良い臭いだと思っぐらいだわ。腐った乳の臭いがするわ」

あまりの物言いに、彼の頬が引きつった。

「ま、まあ、どんな臭いかはさておき、相手は女の妖怪だったから、その臭いが移ったんだらう。そ、そんなに気になるものでもないんじゃないかな？」

「いいえ、臭いわ」

「鼻が曲がるはこのことね」

ほぼ同時に返された言葉に、彼は今度こそ目に見えて頬を引きつらせた。そんな彼を尻目に、輝夜と妹紅はどこか色が抜け落ちた瞳で、彼を見つめた。

「あら、私は腐った花ビラの臭いかと思ったけど、そうね、輝夜の例えも合っているわね」

「妹紅の例えも的を得ていると思うわ。腐った花ビラ、というより、熟れすぎて腐乱臭を醸し出した梅の花が近いのかしら？」

「ああ、それは近いかも。精いっぱい見た目を繕っても臭ってくる腐敗臭……そんな感じの香りね。きっとその臭いの主はたいそう年月を重ねた婆なのかもね」

「うふふ、婆とは、言い得て妙ね。きつと、年を考えないで発情したのでしょね。さぞ醜い姿だったでしょうに……ねえ、あんたもそう思うでしょう？」

「貴方もそう思うわよね？」

「臭いわよね？」

「酷い臭いだよね？」

ね、と念を押す二人の姿を見て、彼は背筋を震わせた。怖い、と心底思った。こんなに怖いと思ったのは、昔女性の話相手との会話を見た永琳が、浮気と勘違いして女性を殺し、彼と心中しようとしたとき以来だ。どこか焦点の合わなくなった濁った瞳とか、放たれるドロドロと凝り固まった寒気とか、どこか抑揚の無くなった言葉とか、永琳を想像させる。

下手に口答えすれば、どうなるか分からない。そう思った彼は、素直に首を縦に振った。生きる為には、時に理由が無くとも誰かを

見下す言葉に同意しなければならぬことを、彼はこのとき知った。いつまでここに居ても始まらない。彼はそんなに臭うなら身体を洗うと二人に告げると、そそくさと箆笥へ向かった。とにかく場の空気を変える意味でも、逃げる意味でも、何かしておきたい。そんな思いで彼は着替えを抱えると、それじゃあ、と二人に手を振って風呂場へ向かおうと

「待ちなさい、私も行くわ」

して、輝夜の手で止められた。小さな手で武骨な手を握られれば、無下に振り払うわけにもいかない。面倒なことになりそうだと思いつつも、彼は頭一つ分以上小さい少女を見下ろした。眉上に切りそろえられた輝夜の前髪が、さらりと揺れる。枝毛一つ見えない黒髪から、ふわりと香の涼しげな香りが鼻孔をくすぐった。

「……なんでだ？ 輝夜も風呂に入りたいのか？」

「あんたが面倒臭がつて手を抜いたら、私はこの後もその屍みたいな悪臭を耐えなければならぬでしょう？ そうならないように、私たちが隅々まで洗ってあげるわ」

「輝夜、準備出来たわよ」

掛けられた言葉に顔を上げれば、そこには輝夜と自身の衣服を抱えた妹紅が、早くしろと目で訴えていた。阿吽の呼吸とはこのこと。何時の間に意思の疎通を図ったのかは分からないが、恐ろしい手際の良さで準備を終えている。

終いには妹紅も加わって彼の手を握って引つ張った。いつの間にか、彼が悪者のような構図になっているあたり、もはや彼が出せる答えは一つしかないだろう。

「……はあ、分かった。一緒に入るよ。だが、変な事はするなよ」

「あら、お風呂に入ることのどこがおかしいのかしら？」

「変な事ってなに？」

「……いや、気にするな」

面影（後書き）

まだ、東方熱は冷めていない。ただ、時間がない。



## 次の目的地は（前書き）

今回、ちょっとレイアウト変更しています。見にくかったら、また戻します。

## 次の目的地は

さすがに疲労困憊になった彼は、翌日、翌々日は休むことにした。といつても、屋敷での仕事は相も変わらず多く、疲れたので今日は何もしませんというわけにはいかない。

しかし、彼の疲労を察した輝夜と妹紅によつて、彼はしばらくぶりの骨休みを経験した。力仕事関係は二人がかりとはいえ、女の中でも華奢な二人ではどうにもならないので、それだけは彼が担当したが、それ以外は目を見張るものがあつた。

食事関係も人知れず練習を続けていた二人によつて、舌鼓を打ち続けることになったり、翁夫妻の入浴手伝いも二人が率先して行つた。夜、翁夫妻が寝静まつてから、彼の部屋に押し掛けてきた二人によつて晩酌も行い、この時も決して彼に酌をさせなかつた。

そして三日後。完全に回復した彼は、無理をするなど小言を繰り返す二人を尻目に、都へ向かつた。決して調査を止めるとは言わないあたり、二人の性格が見て取れる。

そして都に入つてから幾ばくか。これまた前と変わらず、件の化物が現れる気配も無く、有益な情報が手に入るわけでもなく、彼は漂つてくる悪臭を気合いで我慢しつつ、都中を歩き回つた。

しかし、分かつたのは怪物が確かに存在すること、その怪物は見る人によつて姿を変えるところのこと、二つだけ。外と中を隔てる外壁に背中を預けて腰を下ろしつつ、昼食用に持ってきた特性水飴団子を頬張る。この辺りはほとんど人通りが無い為、物珍しさから近寄ってくる盗賊や乞食が居ないおかげで、こうして落ちついて食べられる。

「……うん、美味い。自分で作つておいて何だが」

口内に広がる甘みに笑みを浮かべながらも、彼は情報を整理することにした。

見る人によつて姿を変えるあたり、神のように信仰が全てと言える

存在ではない。おいそれと姿を変えれば、信仰が分断してしまう可能性があるし、最悪の場合、行き場を失った信仰の力が形となって、新たな神を生み出しかねない。

人間の可能性も考えたが、すぐに捨てた。怪我をした人が何人もいたらしいが、それらは全て、怪物の姿に驚いて転んだり、頭をぶつけた程度で、死人が一人も出ていない。特定の誰かを狙った線は薄い。

仮に、私怨か何かで陰陽師辺りが行っていたとする。しかし、それならば同じ陰陽師に分からないはずがないし、何より全て悪戯レベル。仕事を増やす為に行ったとしても、それも一時的だ。

やることがいちいち大げさで、しかもバレれば間違はなく都から追放される。そうなたらいくら陰陽師であろうと、野たれ死ぬのが関の山。高すぎるリスクの割に、あまりに見返りが少ない。

ならば、残る手段は妖怪だろう。何の目的があって行動しているのかは分からないが、探すとなれば妖怪が活発になる夜の方が見つけやすく……ん？

ふと視線を感じた彼は、顔をあげた。

「……………」  
視界いっぱい広がった少女の顔が、そこにあつた。反射的に攻撃しなかったのは、彼にとっても少女にとっても幸いだっただろう。パチパチと将来を予感させる大きな瞳を瞬かせると、ゆっくりと顔を引いた。同時に見えてくる、少女の貧相な姿。

くりんと傾けた顔に掛った赤色の髪を見て、彼は眼前の少女が、先日水飴を食べさせた少女であることに気付いた。ポロポロの麻服から飛び出ている四肢を見て、ああ、やっぱり細いな、と場違いなことを思った。

「……………」  
「……………」  
「……………」

返事が返ってこない。見れば、少女の視線は団子に固定されている。試しに団子を揺らすと、それに合わせて少女の眼球が動く。試

しに串に刺さった団子を食べようと口元に運ぶと、少女はその手をしっかりと握りしめた。それはもう、力いっぱい。

何のつもりか、と一瞬考えたが、すぐに理由は分かった。目は口ほどに物を言うという言葉があるが、なるほど、確かに、この目には口で語るよりもはるかに思いを語っていると、彼は思った。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

無言の間が続く。これが輝夜ならば、彼はいくらでも耐えられたが、今回は駄目。キラキラと、それはもう、目から光線を発射せんばかりに催促の眼差しを向ける少女が相手では、あまりに分が悪い。しかも、ぐぎゅるぎゅる、と、少女の腹からも派手に催促される。チラリと少女の腕を見ると、細い。枯れ枝、という程のものでもないが、記憶の中に他の女性と比べると、目に見えて細い。筋肉で覆われた彼の腕と比べれば、丸太とタンポポの茎ぐらいに差がある。唇の端から涎すら出始めている少女を見て、彼はそつと、少女が着ている服の裾を、持ち上げた。なんとなく、こんなに細い腕が繋がっている胴体は、どういう状態なのか興味を抱いたから。

裾を摘まんだ指を、グイッと上げる。抵抗されるだろうな、と、冗談交じりに考えていたが、少女は特に羞恥心を覚えた様子はなく、至って平然とした様子で、彼を見つめていた。そこには驚いた様子もなければ、彼を非難する色も無い。ただ、何をしているのかな、程度の、小さな疑問しか、そこにはなかった。

「……………」

「……………」

思っていた以上に細い太股の上、間につるりと走る亀裂。どことなく鋭利な印象を覚えるその亀裂はピタリと固く閉じられている。その上に視線を向けると、僅かに張り出した腹と、浮き出た肋骨と、赤褐色の陥没気味の乳首があった。少しだけだが、胸には脂肪が付

いており、乳房と思える外観を形成していた。

こんな手足がやせ細っているのに、本来真っ先に消費される部分である乳房が最後まで残っている。この子は将来、無事に成長することが出来れば、男が放っておかないスタイルになるだろうな、と彼は思った。

軽く、腹を押す。指が肌に触れた瞬間、ピクリと少女の肩が震えたが、嫌がる様子は無く、ただ、ジッと彼の目を見つめていた。

……何度か押すが、指先に感じるのは、脂肪の感触というより、内臓の弾力。栄養失調になった際の、典型的な体形……ということだろう。絶対的に栄養が足りてないのは、明白だ。

そして、駄目押しにもう一度、派手に腹が鳴った。今度は指が触れている分、ダイレクトに彼の手にそれが伝わった。そつと裾を下ろすと、先ほどよりもさらに力がこもった瞳が彼へと向けられていた。

「……………」

「……はあ、わかった、やるよ」

「……………うん」

袋から落とさないように気を付けつつ、団子を少女へ渡す。そのままどこかへ行くだろうな、と彼は思ったが、少女はトテトテと彼の隣に腰を下ろして、団子を食べ始めた。

小さく細い指が団子を摘まむ。少女は小さな口を大きく開けて、パクリと団子を頬張った。目に見えて喜ぶ少女の笑顔を見て、彼はふう、と一息ついて……息を噴いた。

頬を内側からパンパンに膨らませた少女。その少女は、踵を地面に付けたまま、大きく股を開いて座っていたのである。つまり、うんこ座り、というのか、正面から見れば、少女の乙女が丸見えの体勢だったのである。

この時代、下着を履く習慣はほとんどない。ご多分にもれず、少女も下着を見つけてはいないようで、一本の筋と、プクツと飛び出した肉芽が、彼の位置からもはっきり見えた。

(そういえば、永琳も最初の内は履いていなかったな。いつの間にか履くようになっていたけど、何が切っ掛けだったんだろうな)

まあ、俺は履いている方が好きかな、と考えつつも、彼は少女の両脇に腕を入れて、音も無く持ち上げた。

クルリと水飴で白く汚れた少女の顔が、彼へ向けられる。食い意地が張っていることに注目すべきか、それとも無頓着である部分に注目すべきか彼には分からなかったが、何か反応をされる前に、苦しくない程度にそつと膝の間に少女を下ろす。ちようど横向きに三角座りになった状態で、アイテム使用から手拭いを取り出して、太股にかぶせた。

「……なにしているの？」

さすがに気になったのか、少女が彼に尋ねた。

「気にするな。ただ、お前が寒そうだったからこうしただけだ。後、ちよつとは慎みを持って……って、言っても分からんか」

「……つつしみ？」

「ああ、気にするな。ただの独り言だ。いいから、お前は団子でも食べていろよ」

「うん」

そして再び団子を頬張り始める少女。もきゅ、もきゅ、と団子が少女の口内に放り込まれる直前、細い喉がゴクンと鳴る。時折彼が持っていた竹を加工して作った水筒を手渡しつつ、黙って少女を見つめる。どこからどう見ても、やせ細った少女にしか見えないし、思えない。仮に都の中においても平気な程度の弱小妖怪であったとしても、少女から感じる気配は明らかに人だ。

(……なにか、なにかあるな、この子)

しかし、彼にはどうしても、それ以外に何かがあると、完全にこの子の位置付けを結論付けることが出来なかった。今のように団子を食べたり、無邪気に近寄ってきたりする辺り、性根は人に害をもたらず類のものではないのだろうと、彼は思う。

あまりに、気配が人間そのものだ。人が時には鬼にも菩薩にもな

れるように、その時々においてその気配は変わる。妖怪よりも邪な考えを持つ人間が居ることを、彼は長い時の中で知っている。

しかし、眼の前の少女。この子は、あまりに揺れが無い。あまりに自然体、あまりに変化が無く、あまりに静かだ。いや、静かというより、むしろ周りの気配とほぼ同じ。まるで、周囲の景色から溶けだしたかのような、不可思議。

はてさて、どうしたものか。

何が切っ掛けか彼には分からないが、懐かれている……というより、集られている、に近いのかもしれないが、マイナスよりは高いだろうことは分かる。彼自身、短い時間とはいえ、こつも無邪気にされては、無下にするには随分と心に辛い。彼にとって、少なくとも団子を譲る程度には少女を気に掛けているあたり、なかなか複雑だ。

しばし、静かな一時が流れる。彼は、少女が団子を食べ終わるのを見届けてから、話を切り出した。

「なあ、先日、お前に教えてもらった怪物の話だが、覚えているか？ 湖近くの丘にいる妖怪のことだ」

水飴が付いた指を舐めていた少女は、顔をあげた。

「うん、覚えている」

ちゃんと水飴が全て舐め取られたのを確認してから、彼は少女の口元と手を手拭いで拭いた。されるがままな少女のおかげで、スムーズに拭き終わった。

「妖怪は、居たには居たんだが、別の妖怪だったよ。結局、その妖怪は怪物とは全く関係なか、って、なんだ、その顔は？」

「……別に。それで？」

「……で、だ。団子も食べたことだし、あれ以外にお前が知っている情報があつたら、教えてもらおうかと思つてね……何か、心当たりはあるか？」

「……ある。けど、ちょっと思い出せないから、少し待って」

彼の言葉に、少女は首を傾げる。そのまま、ゆっくりと俯くと、

右に左に首を振った。

「そんなに急いでいないから、ゆっくり思

「思い出した」

「早いな、おい」

「この前、大きな屋敷に貴族が集まっていたことがあって、覗き見していたら、東の山に宝があるって貴族達が話していた。そのときぐら

いだと思う。怪物が都に現れ始めたのは」

「……覗き見や宝云々は置いといて、その東の山ってのは、あそこの山か？」

他の山よりも一回り高い山を指差すと、少女は小さくうなずいた。  
「……なんでも、火鼠裘とかいうものを入れる為に、山へ向かったみたい。たしか、怪物が現れ始めたのは、一度、山の天辺から竜巻が見えた後だったと思う」

「……竜巻、ねえ。妖怪の仕業か、はたまた神の御怒りか。何の目的があつて、その火鼠裘とかいう良く分からんものを探していたのかは知らないが、その貴族の行いで怪物が誕生したかと考えたら、八丈迷惑な話だ」

「……私は良く知らないけれど、どうも、なよ竹の輝夜姫っていう、たいそう綺麗なお人から出された難題に答える為……らしい」

あいつのせいだ。怒鳴りそうになった自分を褒め称えたいと、彼は心底思った。

ふと、ジツとこちらを見つめる少女の視線に、彼は首を傾げた。  
なんとというか、先ほどとは違う、何かがあるように彼には見え

「どうした？」

気のせいだと無視しようとも考えたが、あまりの目力に根負けする。もしかして、俺って女に強く出れない性質なのだろうか、彼は内心、冷や汗を流した。

「……………」

「黙っていても分からん。俺には心を読む力はないからな」



「……………その」

「うん？」

「……………そのなよ竹の輝夜姫のこと、あなたは知っているの？」

「……………ん、まあ、知っているといえば、知っている、のかな」

キュツと、少女の目じりが上がったのを、彼は見逃さなかった。

グイツと身を乗り上げてくる。そのせいではだけた胸元から、小さな粒が二つ見えた。鼻と鼻がくつききそうなくらいに顔を近づけると、少女は彼の眼球を見つめた。

「美人？」

「ん？」

「その人、美人？」

……………なんか、最近こんな風に女性から問い詰められることが多いような気がする。一度、厄払いした方がいいのかもしれんな。

「それじゃあ、厄払いする為にも家に帰るべきだと私は思うよ」

「いや、帰るにしてもここからどれくらいあると……………って」

背後から返された質問に、彼は素早く振り返った。何をしているのかと首を傾げる少女を横目に、彼は背後の壁をジツと見つめた。

怪しい気配は、ない。居た形跡ももちろん、無い。少女に目をやると、ただただ不思議そうに彼を見つめていた。

……………この子ではない。ならば、今のは……………気のせいかな？

背筋に走る悪寒を我慢しつつ、彼は引きつる頬をそのままに少女に答えた。

「凄い美人だよ。それはもう、貴族たちが通い詰める程度にはな」

少女の肩を掴んで離れようとするが、その細い両腕のどこにそんな力があつたのか、多少距離が出来るだけで、少女の身体が離れることは無かった。

始めて見せる抵抗に彼は驚きつつ、下手に頑張られると貧血を起こされそうなので、離れることは諦めた。

「ただ、性格は悪いぞ。顔が良い分、性質が悪い……………いや、良い分、まだマシなのかな？」

彼の答えに、少女はしばらく俯いた。時間にして15秒後、小さく彼の名前を尋ねた。なんでこのタイミングで、と彼は思いつつも、名を告げると、少女は先ほどよりも少し大きな声で彼の名を呼んだ。「……………ううん、なんでもない」

……………何を言おうとしたのだろうか。彼には分からなかったが、とりあえず東の山に何かがあるということは分かった。彼はそつと少女を下ろす……………意外なことに大人しく離れた少女の頭をぼんと撫でると、彼は大きく伸びをした。

ここから行けば、すぐに着くだろう。彼は最後にもう一度少女の頭を撫でると、目的の場所へ走り出した。

さてさて、彼が東の山に突入してから既に一刻。山といってもその範囲は大きく、また見通しが悪い。木々が生い茂る山中は、日の光をしつかり遮って、昼間なのにどこか薄暗い。針葉樹の落ち葉が、時折靴を貫通して足に刺さり、そのたびに立ち止まって葉っぱを抜く。頬に感じる風には緑の臭いが

遭遇するのはここら一帯を縄張りに行っているという妖怪ばかりで、それらしい妖怪は見つからない。

幸いにも迷うことは無かったが、いつまでも発展が見えない作業程、疲れることはない。彼はふう、と溜息を吐いて、自身の右手を握っている妖怪を見つめた。

「……………なあ」

「はい、何でしょうか？」

グイグイと手を引っ張っていく妖怪。うなじが軽く隠れる程度に揃えられた黒髪と、その背中に生えた大きな黒翼が、はずみでさらり、ばさばさと揺れた。勝気そうな顔立ちから描かれる笑顔と程良く育った肢体からは、彼女が妖怪であるとはとても思えない。背中の翼と彼女の身体から放たれている妖気以外、ほとんど人間の女性

と変わらなかつた。

健康的な美少女、というのがしっくりくる。けれども、なんとなくその笑顔に胡散臭い何かを感じるのは、果たして彼の気のせいか、それとも目の前の妖怪の気性からなのだろうか。

妖怪の正体は烏天狗。名を、射命丸文<sup>しゃめいまるあや</sup>。最初、空から凄まじい爆音と共に着地した彼女に反射的に攻撃しようとした彼だったが、警戒心ゼロの笑顔で。

「山に入った命知らずな人間は貴方ですか？」

と人懐っこく来られれば、毒気も抜けるというもの。しかも、自分に向けられた手を掴んだと思つたら、いやあ久しぶりに人間を見ました。本当に昔と変わらずひ弱なんですね、と失礼にも程がある第二声。攻撃の起点となる両手を掴んで笑う辺り、どんな状態でも対処できる自信があるからなのか。

とにかく、彼女がそう名乗ってきた為、彼も名乗り返した。本当は射命丸の前に、長つたらしい前口上があつたが、それが役職なのか実名なのかは分からない。しかし、わざわざ偽名を名乗る必要もないだろうし、とりあえず彼は妖怪の名前を射命丸文と覚えた。

そうしてお互いに自己紹介をしてから早一時間。烏天狗と聞くと、妖怪の中でもかなり高位に当たる妖怪である。その翼から放たれる暴風は家を吹き飛ばすとも聞き、千里を一晩で掛けるとも聞く。

そんな高位妖怪である文が、わざわざ人間と連れ添って歩く。彼女にその理由を尋ねたとき、命知らずにも山に一人で入ってきた男に興味を抱いたとの返事だったが、本当の思惑はどうなのやら。けれども、敵対心というもの文からは感じず、伝わってくるのは子供のような好奇心のみ。

彼にはそこら辺りの考えは全く理解出来なかつたが、気付くと、文に手を引かれて山の中をあっちこっち歩きまわっている状態になっていた。おそらく、人間である彼のことなど何時でも対処できると思つているのだろう。文の話だと、普段人里に下りることはほとんど無いらしく、彼女からしたら、彼は恰好の暇つぶしなのだろう。

おそらく、それは辺りではないかと彼は思っている。

事実、ステータスの数値は、耐久力と力を除き、軒並み文の方が高かった。とくに素早さの値は桁が違っているので、例え彼が不意打ちしたとしても、避けられる可能性が高いだろう。

人間にしては強いから、あんたは大丈夫だと文の一方的な言葉と共に、行動することになった次第だが、なぜ、わざわざ文と一緒に行動しているのだろうか。文に手を引かれて歩く彼は、首を傾げた。「俺はどうしてお前と」

「文と」

「……文と一緒に行動しているんだ？ 妖怪だろ、お前」

「はい、妖怪ですけど……妖怪以外に見えますか？」

「いや、見えない」

「それは安心しました」

「……いや、そういうことじゃなくて……俺が、怖くないのか？」

「え、怖い？」

「……その顔止める。なんか、むかつくから。怖い、というより、俺を警戒しないのか？ 仮にも名前しか知らない人間が傍にいるんだぞ。俺が何時、お前を倒そうと札を取り出すか、分かったものじゃないだろう？」

「……？ あ、ああ、いくら私が可愛くって魅力的だとはいえ、襲おうなどと考えるだけで無駄ですよ。私に指が触れるよりも早く、あなたの身体が百個以上の肉片になるだけですから」

「……お前……何から突っ込めばいいのか分からんが、サラッと恐ろしいことを言うなよ……」

「いやん、突っ込むだなんて、そんな……」

「頬を赤らめるな」

ニヤニヤと気持ち悪い笑みを浮かべた文は、赤くなった頬に手を当てて、身体をクネクネと蛇のようにしならせる。見ていて気持ちの悪いものではないうえに、見た目美少女である文がするのだから、

その異様さはウナギ登りだ。

永琳や幽香程ではないが、服を押し上げる十分な膨らみは、さぞ揉みごたえがあるだろう。ふりふりと振られるお尻を眺めつつ、こういうところが警戒心を抱けない理由かと、彼は悟った。

「いやんいやん、にとりからは何度か人間の話は聞いていたけど、けっこう可愛いじゃないですか。前に会った臭い髭男とは雲泥の差ですよ。うんうん、きつと連れて行ったら喜ぶだろうな、うん、絶対喜ぶ。あいつ、人間は盟友だとか事あることに話していたし……ああ、そういえば、椀も人間に興味があるとか話していましたね。ついですし、椀も呼びましようか。あいつも髭男を見て人間はこんなものしかないのかとか話していましたし、ちょっと人間の個性差というものを勉強させましようか。あ、でも、そうしたら、はたてのやつも呼ばなくちゃならなくなるし、いったいどうしましようかね。うゝん、悩みま」

とりあえず、俺の目的を説明するのが先か……。

時間が掛りそうだと思いつつも、彼はしっかりと握られて片手を眺めて、もう一度深いため息を吐いた。





「……」  
「いや、あの、別に、無理に話す必要はないよ。ただ、ちょっと気になっただけで」

「見ている」

「え？」

「私、あいつを見ているの」

「……え、あ、あの、神具も何も使っていないように見えるけど……」

「愛があれば、心の力で千里を見通せる。今、私は愛を持って、神を越えようとしている」

「……そ、そ、そうか、あ、あは、あはあは、で、でも、なんでそんな怖い顔しているんだい？」

「……娘子は一人でいい」

「……え？」

「小さな女は私一人で十分だ！ ただでさえあの糞鬼が気に入らないのに、これ以上増えてたまるかああああ……」

「小さなって……ちよ、おま、それ崇っていないか！？ 誰だ！？ 誰を崇ろうとしているんだい！？ 止め、ちよ、止める……」

「……」

「離せ！ あの子に父親の顔を見せるんだ。第二子を産むんだああああああ……」

「ちよ、子供産んでからまだそんなに経っていないのに、この力！？ 第二子って、お前何人産むつもりだよ！？」

「諏訪王国を私とあいつの血縁で埋めてやる……」

「ヤメテ！ 事実を知ったら、あいつ自殺するから！ ちよ、ま、まで、駄目、駄目だって……止めるおおおおおお……」

「……」

軍神の悲鳴が毎日のように響く諏訪王国は、今日も平和です。



## 女の子（前書き）

妖怪も人間も、年頃の女の子は皆同じ。ほんの些細なきっかけで暴走する、そうしたら最後、彼女たちを止められるものは誰もいない。

## 女の子

文に連れてこられた場所は、大きな滝の裏にある洞窟の中。入り口から見た時、クマか何かが住んでいそうに見えたが、奥に行くと、使い道の分からない雑多な道具があちらこちらに置かれていた。

そして、そこに居た文を除く三人の妖怪を見て、彼は思った。

……なに、これ。

「げげ、人間!? ど、どうしよう、どうしよう!？」

見ているこっちが慌ててしまいそうなくらいに慌てふためいている少女。転がっていた壺を頭に被っては捨てて、文の後ろに隠れたと思ったら、文の盟友じゃなかったの、という発言に慌てて飛び出したと思ったら、手足をバタつかせて。傍目には何をしたいのかさっぱり分からない。何をそこまで少女を慌てさせているのかは彼には分からないが、とりあえず安心させるつもりで手を振ってみる。途端、少女の動きがピタリと止まり、今度はモジモジと両手の指を絡めて、俯いてしまった。どうしろというのだろうか。

その少女の名は、河城かわしろにとり。緑色の帽子に、背丈からは考えられない大きな袋を担いだ姿に作業服……みたいな衣服を身に付けた、水色の髪が目に優しい、どこにでもいそうでない女の子だ。彼にはそう見えなかったが、文曰くれっきとした妖怪で、河童であるらしい。

垂れ目が可愛いその可愛さに騙されるべからず。かなりの力持ちらしく、鬼には劣るが、その力は強大で、人間一人を物理的に引きちぎるのは簡単にできるらしい。思わず身構えてしまった彼は、決して悪くは無い。

次に、彼は物騒な大剣とお手製であろう小楯を背中に背負った白髪の少女を見た。名を、犬走いぬはしり椀もみじ。見慣れた麻服には、不可思議な模様を描かれており、それは白狼天狗という種族を現す文字らしく、文とはまた違う天狗とのこと。よく見れば、髪に隠れるように犬耳

が生えており、本来耳が生えているであろう場所には何もなかった。千里先まで見通す能力を有しており、文字通りどこに隠れていても、すぐに見つけてしまうらしい。

彼の視線を感じた椀は、ふむ、と一度頷いてから、彼の傍へ寄った。文とほほ同じ長身である彼女は、当然彼よりもかなり背が低い。自然と見上げる形になった椀は、ほう、と溜息を漏らした。

「ほほお……貴方が文様が連れてきた人間ですか……ふむ、いい体つきをしていますね」

「褒めていただいて光栄だ」

「しかし、少し背丈が高すぎると思います。これでは首が疲れてしまいそうです」

「それは俺のせいじゃないだろう」

その彼の返答が気に入らなかったのだろう。唇を尖らせた椀はググツと踵を上げて、背伸びをした。それでも天辺が彼の唇にも届かない。それがさらに気に食わないのだろう。別に、女の子だからいいんじゃないのかな、と彼は思ったが、少女はさらに足を尖らせて背筋を伸ばした。

プルプルと足指が震えるのを堪えつつ、顔を真っ赤にして背伸びしている様は、どう見ても妖怪には見えない。ちよつとでも背を伸ばそうと顎を上げているせいで、ハラリと椀の前髪が横に流れる。露わになったおでこはツルンと白く、皺一つない。

そつとそのおでこに手を当てると、椀ははふう、と息をついて踵を下ろした。と、思ったら、両手を上げて指先を伸ばす。その先端は、彼の頭よりも高いうちにある。

むふう、と、してやったりという表情になっている椀を見て、彼は何を張り合っているんだろうな、この子は、と思った。口には出さなかった。

そして最後の一人。部屋の隅に置かれた壺の後ろから顔を出した少女を見つめた。少女はというと、彼と目が合った瞬間壺の後ろに隠れてしまった為、その顔立ちは良く分からないが、文をどことな

く引つ込み思案的な顔立ちにしたというのが近いのかもしれない。  
壺の両端から二本の髪束が見えている辺り、おつちよこちよいの  
一面もあると、彼は睨む。

「へ、へん、人間がこんなところに何の用よ！」

姫海棠ひめかいとうはたてが、壺の後ろから威勢の良い声を彼に放つ。どれだ  
け威敵を出そうとしても壺の後ろの隠れているせいで妙に迫力が無  
い。声も甲高いうえに、姿が完全に隠れていないので、なおさらだ。  
「何の用も何も、そこにいる烏天狗に連れてこられたただけだ。文句  
なら、そこで笑っている女に言え」

声が止んだ。

「……ふ、ふん、どうやったか知らないけど文を誑すことが出来て  
も、私は騙されないわよ！」

「はたて、私は別に騙されていないわ。私が面白そうだから連れて  
きただけよ」

文の援護攻撃。再度、声が止む。今度の沈黙は先ほどよりも長い。  
いつの間にか彼の手を握ってニマニマ笑っているにとりの頭を撫で  
つつ、彼はジツと展開を見つめた。

「……え、えつと……」

「もしかして、あんた怖いのか？」

「怖くない！」

なんて単純な子なのだろう。侮られていると思ったのか、それと  
も彼に腹を立てたのかは分からないが、はたては思いの他あっさり  
壺の前に躍り出た。鋭く横に伸びた目が、どこことなくセクシーな少  
女は、ずん、ずん、ずん、と荒々しく地面を蹴って彼の目の前へ近  
寄って……椀の後ろに隠れた。

……どうしようもない何かと共に沈黙が、辺りを包む。さすがに  
その沈黙には耐えられなかったのだろう、はたては椀の肩口から、  
ひよいつと顔を出した。

「……」

「いや、俺なんで睨まれているの？」

別に怖くは無いが。睨んでいるというより、赤くなつた頬から見るに、ふくれているというのが正しいのかもしれない。顔立ちそのものは、キリツと鋭く、少し目に力を入れれば、迫力が出るだろう。しかし、はたてから放たれている雰囲気、その迫力を中和していた。

「……はあ、仕方が無い。ほら、ちよつと両手上げて」

文の指示と共に、右手からにとりの手が外れる。言われるがまま両手を高く上げて万歳をすると、にとりと椀から、驚嘆混じりの歓声が漏れた。彼女達の背丈から相まって、まるで女子中学生に囲まれた大学生みたいだ。

はたても二人と同じく、デカイ、と零す。その背後に迫つた文には気付く様子はなく、文が素早くはたてを羽交い絞めにして、彼へと突き飛ばした。

きゃん、と可愛らしい悲鳴。さすがの天狗も対応出来ないようであたらをふんで彼の胸元へ飛び込んだ。彼も予想していなかった状況に驚き、慌ててはたてを抱きかかえて体勢を整える。それはもちろん、はたても同様で、彼女も倒れないよう彼の背中に細くも小さな両手を回し、踏ん張つた。

小さい。最初に彼が思つたのは、それだった。この場で一番背丈が低いにとりより、少しは高いが、何分比較対象が低すぎる。背伸びしても彼の顎にすら届かない。背中に当てた掌に感じるはたての背骨の細さに、は改めて実感した少女の小ささに、目を見開く。顎を落とせば旋毛が見え、何か香を使っているのか、花の香りがそこから漂い、彼の鼻孔をくすぐつた。

驚いたのは、はたても同様だった。ひ弱だと教えられていた人間の胸板の厚さに、触れた指が自然と強張つた。

固い……岩のように固いけど、ちよつと柔らかくて、変な感触。最初に思つたのはそれで、次に感じたのは温かさだった。父親の裸は何度か見た事はあるし、抱きかかえられたことも幾度もあるが、ここまで固くはなかった。麻服の上からでも分かる、盛り上がった筋

肉の弾力。ひ弱であると聞いていた人間が持つ、意外な強靱性に、はたては先ほどまでも気恥ずかしさは鳴りを潜め、好奇心が鎌首を持ちあげ始めた。

ほんぽんと、胸を叩く。はたての語彙では言い表せられない不思議な弾力が掌に広がる。グツと押ししてもビクともしない。目を輝かせ始めたはたてを見て、嫌な予感を覚えた彼が離れようとするが、少し遅かった。

グイツと、彼の裾が大きく捲くり上げられ、田の字が積み重なった彼の腹筋が視線に晒された。途端、湧きあがるとよめき。言わずもがな、彼女達である。アリのように群がって来たら最後、玩具にされるのは時間の問題だった。

「うわ、変な形！ はたて、触っても大丈夫なの？」

「うん、大丈夫みたい」

先ほどまでのビクつきようはどこへやら。彼の肌に顔を赤くした文が、恐る恐る腹へ指を伸ばしているのを尻目に、はたてはベタベタと指紋を付けるように遠慮なく撫でまわし、きゃっきゃとはしゃいでいる。

椀は紅潮した顔を手で隠しつつも、大きく広げられた指の間からジツと見つめ続け、呆けた様子でいたにとりも、盛り上がった腹筋を摘まもつとしているが、摘まめず、そのたびに、うわ、うわ、と小さく歓声を上げる。

……こいつは、いったいどういう状態なんだ？

彼の疑問は、当然ながら答えは返ってこない。おまけに唯一冷静な対応をしていた文ですらはたてに倣って弾けてしまった為、事態を收拾出来るのは彼しかない。

「……なあ、俺も用事があるし、そろそろお暇させて」

「せー、の」

「よいしょ」

「おい！？」

暴走した女子は誰にも止められない。息の合った天狗二人が一息

に麻製ズボンを下ろすと、露わになるのはパンパンに張りつめた太股と、男の武器を収めた白禪。きゃあきゃあと更に燃えあがるボルテージに椀にとりも釣られて暴走していく。

太股に生えた産毛を引つ張ったり、太股を叩いたり、抓ったり、摘まんだり、撫でたり。固い、太い、でこぼこしてる、とどこまでも上昇していく彼女達のテンションに、彼はもう、彼女達が満足するまで大人しくすることにした。

しかし、大人しくしたところで事態が良くなるはずも無く、大概は悪くなるだけであることを。彼は改めて思い知ることになる。

「うわあ、大きいな。ねえねえ、にとり、私と全然違いますね」

顔を赤くした椀が、膝までであった麻服の裾を捲くりあげる。健康的に日焼けした二本の細足が、彼の眼前に晒される。顎の辺りまで捲くり上げているせいで、なだらかなお腹とちよんと膨れた双山が見え、バサツと捲くられたことで、椀の匂いが周囲に広がる。乙女の亀裂を守るように僅かに生えた白毛は、花開く前の蕾を連想させた。

「違うね。私とも全然違うし、お父さんよりもずっと大きいよ。ほら、私とも違う」

ぺちぺちと椀の太股を触っていたにとりも、椀に見せる為に麻製ズボンを脱ぎ捨てて、裾を捲くった。ぽこつと飛び出したお腹と、成長の兆しを感じられない二つの実がぽつんと量胸の中央に鎮座していた。固く閉じられた亀裂は幼さしか感じられず、見た目相応の造形で、ぽつんと皮被った塊が亀裂の頂上で大人しくしていた。

「ねえねえ、見てみて。お尻の形も私たちと違うみたいよ」

「ええ、本当？」

「本当だつてば。それじゃあ、確認してみてよ」

「いやいなや、はたては自身の裾をぺろんと捲ると、前かがみになって、クイツとお尻を突き出した。ちょうど彼の方へ向いたそれは、ぷるんと水分と脂がたっぷり詰まっていた。肩幅程度に足を開いているせいで、乙女亀裂が僅かに開き、乙女穴がくぱあっと広が

る。他の部分よりも僅かに黒ずんだ窄まりが、左右に開かれた尻たぶによってその姿を彼に見せた。突然思わず咽そうになった彼は、決して悪くない。

「おお、確かに、全然違う……それに、はたてのは柔らかいけど、こいつのはなんか筋があるみたい」

「こら、叩くな、ひゃん、冷たい」

「あ、ごめん。私の手、冷たかった？」

文の手が、彼の尻とはたての尻を交互に叩く。ぺちん、ぺちん、と音がするたび、はたての柔らかな尻肉がぶるんと震え、文の掌を優しく受け止めた。同時に、きゅ、きゅ、と締りを見せる窄まりが動く。お尻から伸びた両足はあまりに白く、ひざ裏の筋が、妙に色濃く見えた。

「文のはどうなの？ 私よりも背丈あるし、近いんじゃないの？」

「うーん、分かんない。ちよつと見てみて」

遂には文までお尻を出した。この中で一番背丈がある文の尻は、この中で一番成熟しており、椀よりも花が開いていた。乙女亀裂の周りには申し訳程度に生えた黒毛は椀と同じだが、亀裂を押し上げるように飛び出した乙女唇が違う。椀よりも下付きなのか、同じ態勢でも彼女の場合は乙女核が僅かに見える。

ぺち、と片手で自分の尻を叩いた文は、首を傾げつつ、はたてを見やった。もちろん、その体勢は膝を伸ばした前かがみ。肩幅程度に足を開いているおかげで、彼の目からはピクピクと震える乙女穴と、色の沈着がほとんどない窄まりが良く見えた。

「ちよつと待って、今確認するから」

ぱちん、とはたての掌が彼と文の尻を往復する。大した力は込められていないように思えたが、はたてと比べて肌が敏感なのだろう。文のお尻は3回目の平手で、赤くなっていた。そして、最後に自身のお尻を揉むと、文のお尻を労わるように撫でた。

「どつ？」

「うーん……私よりは弾力もあるし、固い方だと思うけど、やっぱり



りこいつの方がずっと固いし、筋があるわね。文のは平気だけど、こいつの尻は、叩いていると私の手が痛くなってきたちゃうもの」「ん、そっか。まあ、そいつは男だし、ちよっと違うのかもね」裾を戻した文とはたてが、互いに首を傾げる。あれや、これやと言いつつ合っていたにとりと椀もとりあえずの満足はしたのか、すこし落ち着きを見せ始めているようだった。

……………あ、終わりですか、そうですか。

泥人形に徹していた彼は、怒涛の波状攻撃が終わり始めたのを確認して、ようやく意識を取り戻した。何度も触られ、抓られ、時には齧られた太股は指紋と唾液でベトベトだ。お尻も手加減しているとはいえ、妖怪の腕力。物の見事に赤くはれ上がっており、お風呂に入った時の地獄を予感させる。

……………はあ、えらい目にあつた。

不幸中の幸いにも、禪には手を付けなかったようで、そこだけ着衣の乱れはなく、きっちりと収納されていた。さすがにそこになにがあるのか少女達も分かっているらしく、ちらりちらりと視線を投げかけては、恥ずかしそうに眼を逸らしたりしていた。

とにかく、酷い有様だ。彼は手拭いで汚れを拭くと、溜息をもらしつつズボンのすそを上げようとした。

その瞬間。

「おいつす。お前ら、人間を攫ってきたって聞いたけど、どんなやつ……………なの……………か、い……………」

ふらりと顔を出した一人の女。額に伸びた一本角が、その女性を人外であることを知らしめ、薄く赤らんだ頬が色気に溢れる、手櫛で髪を梳いている様は、とても艶やかだ。

「にははは、あんまり激しく遊ぶなよ。死んだら色々と面倒……………だか……………」

その美女の後ろから顔を覗かせたのは、一人の少女。頭に対角に生えた二本角、にとりよりも一回り小さいその姿は、例え妖怪であったとしても、脅威には見えない。しかし、身体よりも一回り大き

い獣を担いでいるあたり、にとりと同じく強大な力を持っているの  
だろう。

「……ああ……その、うん……また会ったな」

彼の諦めに満ちた言葉と共に、二人の妖怪が彼の名を呼んだ。

「ああ、久しぶりだな、勇儀、萃香」

かつての鬼友達が、彼に飛びかかったのはその後すぐだった。

女の子（後書き）

また、ちょっと間が空くかと思われます。

展開が速い（前書き）

展開が速いって？ 仕方ないんだよ。私の情熱が終わったら、そこで終了だもの。

## 展開が速い

酒の飲み比べで、鬼に勝てる生物は存在しない。かつて勇儀から聞いた話を、彼は思い出していた。いまや洞窟の中は酒の匂いで充満し、酒に弱い者なら匂いだけで酔い潰れてしまう程だ。

酒豪と言える量を呑んで、酔い潰れた河童が寝入ったのに続き、椀、はたても、にとりを追う形で地面に頬をくつつける。

それからしばらくして、こう見えても天狗の中では一番酒に強いと豪語していた文も、鬼の尋常じゃないペースに付いてこれず、呂律がまるで回っていないうめき声と共に力尽きる。

その頃になつたとき、彼の恰好は酷いものになっていた。酒を飲むときはたいてい酷い格好になつてしまふ彼だったが、今回は特に酷かった。

笑い上戸らしいにとりが、何がおかしいのかケラケラ笑いながら、縁まで入った升に酒を注いでは彼の身体に酒を零す。

甘え上戸らしい椀が、お酒が勿体無いと、彼の肌を舌を這わせて酒を舐め取り、時には彼の升に口づけて、横から酒を啜つたり。

鳴き上戸らしいはたてが、ぐすぐす鼻を啜りながらも、酒を舐めるように飲み続けたり、時には彼の足を蹴つたり。

文に至っては、鬼二人に限界以上に飲まされたせいで嘔吐してしまい、おかげで服一式が駄目になつてしまふ惨事となつてしまった。着替えをする羽目になつた。飲ませた鬼二人は着替える彼の裸を見て、生唾を飲み込んだりしていた。

そして、酔い潰れた屍を隅にまとめて、ようやく場に落ち着きと言つものが戻つてきたとき、彼は話を切り出した。ちなみに、彼は結局一口も酒を飲めていない。

「そいつは、おそらく鵜の仕業じゃないのかい？」

「そうだね、多分、鵜だと思うよ。人によって姿が変わる妖怪なんて、そいつ以外知らないし」

飲もう飲もうと騒ぐ鬼娘二人を宥めつつも、件の話を尋ねたところ、帰ってきた答えはそれだった。餅は餅屋というが、妖怪のことは妖怪に聞くのが一番確実であるらしい。

といっても、鬼の中でも上位に当たるらしい鬼二人の情報網であつてもその程度しか知らないとのこと。

鵜というのも、もともと本人の名前であるのかどうかも疑わしいらしく、能力そのものもほとんど分かっていないらしい。探してはいるものの、相手によって姿が変わる為、これといった目印が無く、出現する場所も変わる為、足取りが掴めていないとのことだ。

なんで鬼達がわざわざ足取りを探すようなことをしたのだろうと、彼が尋ねると、理由は単純。好き勝手に行動しているのが気に食わないのだという。

その鵜というのがどのような力を有しているのかは彼には分からないが、新参者のくせに、挨拶も碌にせず好き勝手暴れまわっているのが我慢ならないらしい。言われてみれば、確かにと彼は思った。

人間の彼からしたら、心底どうでもいいことだが、鬼達にとっては面子に関わる話なのだという。それはそうだ。彼女達からしてみれば、自分達の縄張りの中でデカイ顔をされているのと同じで、言いかえれば、なめられていると言っている。ある意味人間以上に面子を気にするらしい上位妖怪からしてみれば、我慢出来る話ではないのだということだ。

「それと、もうひとつ気になることがあるんだ」

つらつらと彼が鬼達の知られざる苦勞に思いを馳せていると、酒臭い息を彼に嘖きかけながら、胡坐をかいた彼の胸元に萃香が転がり込んだ。角が当たって痛いと思っただが、彼は黙っておくことにした。

「ねえ、命蓮寺って知っている？」

聞き覚えのない単語に、彼は首を横に振った。

「最近、ちらほら耳に入るようになった寺なんだけど、どうもそこ

の僧が変なんだよ。あんたもそう思うだろ」

そう思うだろと問われても、何も知らない彼には何とも言えない。いくら鬼といえど、ついに酔って来たかと思いつつ、彼は何が変なのかを尋ねた。

萃香はうく、と後ろ頭を彼の胸板に擦りつける。酒とは別の、萃香のものらしき少女の香りが彼の鼻孔に届く。右回りの旋毛と、開いた胸元から二つの桃色が見える。今更気まずいと思う程純情じゃない彼は、そつと萃香の胸元を隠した。さすがにコレが勇儀であつたならば顔を背けるぐらいはするが、相手が見た目幼女の萃香だから判断が速い。

頬が緩んだだらしない笑みを浮かべる萃香に、何か思うところがあつたのか、先ほどまでにこやかに笑っていた勇儀のまなじりが釣り上がる。味わうように飲んで清酒を、音を立てて飲み干すと、これまた派手な音と共に、投げつけるように地面に置いた。傍目にも不機嫌に見える勇儀は、彼の視線に気づいて僅かに頬を膨らませると、萃香の頬を抓つた。

痛い痛いと言ひ萃香が、勇儀の指から逃れようと、慌てて彼の胸元から逃れる。

と、同時に勇儀がするりと彼の懐に腰を下ろした。思わずのけ反るが、勇儀は素早く彼の両手を掴むと、グイツと両脇に腕を通して眼前に引つ張ると、お臍を隠すように手を置いた。自然、お互いの身体が密着し、互いの体臭が混じり合う。

彼は勇儀から匂う大人の匂いと、服越しとは思えない、太股に感じる柔らかくも弾力のある勇儀の太股と尻たぶの感触に。勇儀は背中に感じる体温と男の匂い、自分にはない固い胸板の感触と、お尻に感じる固い感触に、顔を赤らめた。

……お互いの動きが止まる。彼は突然の勇儀の行動と、憎からず思う女の柔肌に。勇儀は、自身が起こした積極的な行動に。彼はわずかに頬を赤くし、勇儀は赤を通り越して、汗まで噴き出した顔を俯かせて。見ると、髪束から覗く両耳が真っ赤になっており、俯い

たせいで露わになつたうなじも、紅潮していた。

……えっと。

高鳴る鼓動に彼は目を瞬かせつつも、こちらの様子を見ている萃香に顔を向けた。見ていて腹が立つてくるような笑顔を浮かべた萃香が、一つ頷いてから、酒に口づけると、一つ、喉を鳴らした。

「一つ聞いておきたいんだけど、僧って何をしているか知ってる？」

「……妖怪退治とか……修行……とか？」

「だいたい合っているよ。僧は妖怪退治が主な仕事。他にも色んな仕事があるけど、やっぱり一番といえば、それ。中には妖怪退治じゃなくて、治療を専門にするやつもいるんだけど……まあ、それはいいや。で、本題はそこから……ほら、勇儀」

酔って気恥ずかしさを誤魔化そうとしているのだろうか。萃香から手渡された杯に口づけると、ゴクリと音を鳴らして……すぐに、舐めるように飲み始めた。見下ろすと、勇儀の潤んだ瞳と視線が重なる。途端、勇儀はさらに顔を俯かせて、ちびちびと唇を湿らせ始めた。

そんなに恥ずかしいのなら、離ればいいのに、と思いつつも、彼は勇儀から離れられない。杯を受け取った腕の反対の腕が、彼がきている衣服の裾を握りしめて、離れないようになってくるからだ。試しに何度か引つ張ると、逃さないと言わんばかりに握りしめられた指に力が入り、潤んだ瞳で下方から見つめられる。

……まあ、いいか。と彼は思い、大人しくしておくことにした。

「で、本題は？」

「焦らない、焦らない。どうもね、その僧は、たいそう腕が立つらしいんだよ」

「萃香達にとつては辛いことだが、俺にとつてはいいことだな」

「私達にとつてもうれしいよ。強い奴がいるってことわね……って、そうじゃない。その僧なんだけど、霊力とは別に、法力にも精通しているみたいで、妖怪退治と法力を使用した治療も出来るみたいなんだよ」



「ますますいいことだ」

「でね、私が言いたいのはここからなんだけど……どうも、その僧は、妖怪退治の傍ら、退治した妖怪を治療しているみたいなんだよ」  
「……なに？」

意味が分からない、と彼は思った。妖怪退治をしている僧が、退治した妖怪を治療する？ 何の意味があるのだろうか。退治した妖怪に傷つけられた人間を助けるなら話は分かる。だが、わざわざ退治した妖怪を治療する……それでは、退治した意味が無い。

彼は萃香に詳細を聞いた。帰ってきた答えは、僧は妖怪と人間の共存を考えているらしい。むやみやたらと退治する必要はない、更生させ、共に歩んで行こうという考えらしく、よほど凶悪な妖怪で無い限り、退治した妖怪を秘密裏に治療しているとのことだ。萃香がその情報を知ったのも、治療された妖怪から話を聞いたからとのことだ。

「でね、ここからさらに続くんだけど」

「まだあるのか？」

「ある。その僧はね、信じられないことに、助けた妖怪から見返りに妖力を吸いとっているみたいなんだよ」

「妖力……を、か？」

「そう」

「そんなもの吸いとってどうするんだ？ 下手すれば、そいつ自身が妖怪になるだけでなく、そいつ自身が討伐されるんじゃないのか？」

「……そうなんだよね。そいつがどんな目的が妖力を集めているのかは知らないけど、使い道なんて限られているし、使い過ぎれば……」

言い淀んだ萃香に、彼は続きを促した。しばらくの間、萃香は口を噤んで、新たな杯に酒を注いで喉に流し込んでいたが、それを呑み終えると、ポツリと呟いた。

「……そいつが妖怪になる。厄介だよ。人間であると同時に妖怪だ

なんて、妖怪の弱点を持たない妖怪みたいなものさ……いや、あるいは人間の弱点を持った妖怪……になるのかな」

「……人間が妖怪になるのか？」

彼の言葉に萃香は、でもね、と言葉を続けた。

「大抵の人間は、妖力に耐えきれず発狂したり、死んだりするんだ。だから、普通なら人間が妖怪になることはまずない。人間は最後まで人間。妖怪も最後まで妖怪。それは人も、人ならざる者も同じさ」

「……だったら、その大抵じゃない人間は、どんなやつだ」

「高い霊能力や法力を持った人間……あるいは、生まれつきそういう因子を持つているか……って、ところかな。私は会ったことがないし、聞いたこともないよ。どっちも可能性の話だし、そういう可能性がある程度のもものなんだと思う」

「萃香」

彼の一言に、萃香は口を噤んだ。赤ら顔の少女は、彼の視線から逃れるように彼から顔を背ける。彼は構わず、ジッと萃香を見つめて、口を開いた。

「お前、何をそんなに恐れているんだ？」

言った瞬間、彼は後悔した。

瞬間、彼は自分の身体が押しつぶされたと思った。それほどの威圧感。いつの間にか噴き出した汗が、頬を滑る。顔を上げると、普段浮かべている眦の下がった目つきは無く、あるのは最強と謳われている妖怪の顔。さすがは、鬼の眼力。ただ睨むというその行為だけで、彼の動きを完全に封じていた。

見ると、彼の懐でまどろんでいた勇儀が、彼を守るように背筋を伸ばし、萃香を敵しい目つきで睨んでいた。鬼と鬼の睨み合い。互いの間にたったたやつは、2秒で廃人になるだろうな、と彼は場違いにも考えた。

「萃香」

勇儀の普段の優しい声が、今は鋭い。

「……恐れている？ 私が？ 鬼の私が、恐れているって？」

「萃香！」

床に腰を下ろしていた萃香が立ちあがろうとして、勇儀に止められる。萃香は何も言わず、その場に再び腰を下ろした。

「……萃香、少し、言い間違えた」

身体が重い。気を抜けば、そのまま寝入ってしまいそうな、疲労感。さすがに本気になりかけた鬼の眼光が凄まじく、彼の体力はかなり削られていた。冷や汗を拭いつつ、彼は深く呼吸を整える。

息も絶え絶えになった彼を、心配そうに勇儀が彼の背中を撫でる。萃香もやり過ぎだと感じたのか、小さな声で彼に詫びると、また杯に酒を注いで、一息に飲み干した。

「……なあ、萃香。鬼のお前を侮るようなことを言ったことは謝る。済まなかった」

「……いいよ、別に」

そつぽを向いたまま、返事を返す萃香に、彼は続けた。

「だが、一つ聞かせて欲しい。鬼であるお前が……いや、お前達は……なぜ、それほどまでに、そいつを警戒するんだ？ そいつは、お前達でも手も足も出ない程のやつなのか？」

「まさか」

返事は背中から返ってきた。答えたのは、勇儀だった。彼女は彼を安心させるように、眼前の大きな背中にもたれかかると、ぼんぼんと彼の膝を叩いた。柔肉の感触に彼はどきまぎしつつも、萃香を見つめた。

「……そいつの強さそのものは、大した話じゃない。鬼がその気になれば、いつでも倒せる相手……けど、問題はそこじゃないんだ」

「……それじゃあ、いったい……」

「なあ、あんたは、人間と妖怪の一番の違いって、なんだと思う？ そつぽを向いたままな為、萃香の表情はうかがいしれない。誰に言うでもなく質問する萃香を想い、彼は黙って付き合うことにした。しかし、一番の違い、か。彼には思いつかなかった。最初に思いついたのは容姿、次は寿命、次は力、次はそのあり方……と、色々

思いつくが、コレ、といった答えが見つからない。というより、納得出来る答えが無い。

なので、彼は素直にそう答えた。萃香はその答えを予想していたのか、ふん、と一言頷くだけだった。

「私が思うに、人と妖怪を分ける、一番の違いはね……『成長』、だとおもうんだ」

「……成長？」

萃香は一つ、頷いた。

「妖怪はそれこそ、一年、二年ぐらいでは変わらない。それこそ、1000年、2000年ぐらいで、ようやく少し変わったかな、と思える程度にしか変わらないんだよ……だけど、人間は違う。一年なんていらぬ。それこそ、三日で見違えるように成長を遂げることだつてある。それは、妖怪には無い、他の生物にも無い、人間だけが持つ、人間だけの能力なんだと、私は考えているのさ」

「……成長……ねえ」

「あなたには想像付かないだろうけどね……私は、そう……あなた言うとおりに、怖いんだと……思う」

ピクリと背中中の体温が身じろぎするのを、彼は感じた。萃香は自嘲するように、苦笑すると、一口酒を呑んで、また口を開いた。

「そう……怖いんだよ。同じ妖怪ならいい。強い妖怪なら、それでいい。けれど、人間の成長力を持った妖怪なんて……私は怖い。怖くて堪らないんだ。今は弱いのもかもしれない。今はどうにでもなるのだろうと思う。けれども……けれど、人間から妖怪に成り果てた存在を、私は知らない。だから怖いんだ。妖怪は永い時を生きる。それこそ、1000年、2000年は生きれるやつだっているさ……そんな永い時を生きるやつが、成長する。そんな妖怪が、もし存在するとするならば……私は、恐ろしいんだ」

そう言って押し黙った萃香を見て、彼はそつと彼女の肩を掴んだ。小さい。見た目通りの小ささに、彼は今更ながらに感じつつも、そつと手を引いて彼女を懐に戻した。萃香も引かれるがまま大人し

く、胡坐をかいた彼の太股に腰を下ろすと、静かに彼の胸板に鼻先を擦りつけた。震えている萃香の両腕が、静かに彼の胸を掴む。彼が優しく萃香の頭を撫でると、音も無く少女が笑う気配を覚えた。

「……勇儀、どうしてお前達鬼は動かないんだ？」

静かに勇儀へ問いかける。

「……私達ぐらいになると、色々面子を保たなくてはならない場面も多くてね。仮にも妖怪を助けてくれる相手を殺したとなったら、下手すれば鬼一族が妖怪側からはみ出しかねない。だから、動けないんだよ……」

なるほど、と彼は思った。いくら鬼が強く、万夫不当の力を有しているとはいえ、数の力には敵わない。人間から敵視され、妖怪からも敵視されれば、遅かれ早かれ鬼の勢力は衰え、そして消滅する。戦いは数というが、確かにそうだ。数の力は凄まじい。かの軍神ですら、信仰の数によって力を得ているのだから、最強とは言えないの妖怪にすぎない鬼が、太刀打ち出来るものではない。

「今はスキマ妖怪が監視しているんだよ。今のところ、それほどスキマのやつも警戒していないみたいだけど」

聞き慣れない単語に、彼は首を傾げた。

「……スキマ？」

「ああ、あんたは知らなかったね。萃香の友達で、スキマを操るスキマ妖怪なんだよ。あいつは色々な場所を覗いているから、その内会えると思うよ。あいつはあいつで忙しいみたいだし、何を企んでいるか分からないやつだけだね」

そういうと、勇儀も萃香に倣って彼に身体を預ける。萃香と勇儀がどうして彼にそんな話をしたのか、その目的は完全には知ることが出来ない。彼は萃香ではないからだ。

しかし、ある程度は予想が付く。おそらく、それが辺りだろうと、彼は思った。

……はあ、仕方が無い。彼はため息をこぼしつつ、萃香の頭を撫でた。

「回りくどい言い方しないで、素直に調べてきて欲しいと言え。面子が大切なのが分かるが、ここには俺とお前らしかないだろうに」  
その彼の言葉に、小さく、ごめん、と萃香が返したのは、それからすぐの後だった。

展開が速い（後書き）

そろそろ、聖ばいが出せそうです。

## 命蓮寺

なんでも、命蓮寺というのはその寺の僧が話している俗称であるらしく、外観そのものはちよつと豪華な掘立小屋らしい。おそらく謙遜の部分も大いにあるのだろうが、少なくとも都で威張っている僧どもが住んでいる寺よりはみずばらしいのは確かなのだろう。

といっても、都の住居と外の住居を比べるのが間違いなのだろう。というより、アッチが異常な程に豪華絢爛なだけで、むしろ装飾過多なのかもしれない。

萃香曰く、僧は女性。年齢も適齡期をとくに過ぎているようで、いわゆる嫁き遅れらしく、また子供はいないとのことだ。伴侶も居ないみたい。しかし、胸はたいそう大きいらしく、屈んだとき、それはそれは暗い谷間が形成されるとのことだ。

そして、その僧の周りには、不特定多数の協力者……つまるところ、仲間がいるらしい。詳細は把握できていない。いまのところ分かっているのが、なかなか力のある妖怪が僧の下に就いているとのことだ。

とくに胸が大きいらしく、歩きたびに服の上からたゆんたゆんと揺れるとのこと。お尻も大きく、安産型だという。とくに胸が注意。お尻にも注意。あと、胸にも注意。

お前、何回胸を連呼するんだと萃香に言っではいけない。彼も言わない。それはもう、苦々しく胸を連呼する萃香の表情は、まさしく鬼であり、迂闊なことを口走れば、彼とてどうにかされていたであろうことは想像に容易だ。勇儀ですらそっぽを向いて関わらないようにしているあたり、萃香から放たれる持たざる者の気迫は凄まじいものがあったということなのである。

その怨念にも似た気迫は一晚経っても変わらず、どことなく頬がこけた彼が発してからも、しばらくそのままだった。

桜、はたて、にとり、文はその気迫に耐えられず、一瞬で失神。



さすがに止めねばならないと思ったのか、妙に艶やかな頬に苦笑いを作りつつ、勇儀は萃香を宥めた。

もちろん、そんなことで萃香の機嫌が良くなるはずもなく、それどころか勇儀の充実した腰回りと、妙に気だるそうな姿に、さらに怒りを燃やしたことは言うまでも無い。

その怒りも、結局は勇儀の、彼が眠るまで恥ずかしがっていたのが悪いという言葉に、鎮静化したのは、それからすこし経ってからであった。

件の寺は、都から離れ、山からも離れた、森林の奥にあった。むせ返るような緑の匂いが常に付いて回るその場所は、絶えず生物の鳴き声が聞こえ、人里よりもよつほど五月蠅く思える。想像していたよりもはるかに辺鄙なところにあると彼は思った。そこから少し離れた場所にある村で彼は命蓮寺に関しての情報収集を行ったが、いくつかの事項がすぐに分かった。

命蓮寺。表向きは、その寺の主である僧が一人で切り盛りし、近隣の村を襲う妖怪を安い報酬で退治し、また時に村を訪れては説法を説いている。僧特有のどこか上から見た目線も無く、あくまで対等に接する彼女は、近隣の住人からの信頼が厚い。それは見た目山賊と見分けがつかない厳つい男ですら、命蓮寺の話をするあたり、その信頼の強さがうかがいしれた。

聞く限りでは、お手本を体現したかのような僧だ。弱きものを守り、時に助言し、時に道を正す。報酬も他の僧に頼むよりもはるかに安く、中には無報酬で行ったこともあるみたいで、中には僧を神聖視している者もいた。

聞いた話ではたいそうな美人らしく、近隣の男連中全員から惚れられているみたいだ。といってももある種の、神聖的な何かに対する気持ち大部分らしく、アプローチを掛けるつもりはないらしい。

そして、ここからが村人には知らされていない、知ることが出来

ない情報。命蓮寺の僧が、人間のみならず、妖怪も助けているという話。見返りに妖力を手に入れて、いったい何をしようと考えているのだろうか。

……考えたところで、彼には答えが出せるはずもない。妖力等、そういった知識は多少諏訪子のところで勉強はしたものの、元々そういう才能を持ち合わせてはいないのは、永い年月で悟っているので、彼はさっさと考えるのを止めて行動することにした。

そして、情報を頼りに村を出てから歩くこと一時間。もしかして迷ったかと不安に感じ始めたとき、眼の前に目的地が見えてきた。

……あれが萃香の話していた命蓮寺か。掘立小屋と言っていたが、けっこう大きなお寺じゃないか。まあ、多分判断基準が都の屋敷なのだろう。

彼は寺の関係者に気付かれないうち注意しつつ、草陰に隠れるようにしゃがむ。そつと木陰から様子をうかがった。

その寺は思っていたよりも大きく、かといって、それほど大きな材で囲いしており、見れば至る所に札が貼られている。実際に体感してみなければ効果の程は分からないが、おそらく妖怪除けの結果だろう。開かれた正面入り口にも、分かりにくいように札が貼られているあたり、何も考えずに正面から入ったら、そこで終わるだろう。

目もそれなりに行き届いているようで、目立って汚れた個所は見当たらない。探せば見つかりそうだが、探したところで仕方が無い。チチチチ、とどこかから鳥の声が聞こえる。声のした辺りを見ると、青色の羽が美しい、小さな鳥が、小枝に数羽止まっていた。

こういうとき、動物の声が逆に隠れ蓑になる。多少の物音を立てたところで、相手に気付かれにくい。大抵の動物は人間等に見つかれば逃げ出すので、それに倣って逃げれば相手がかつてに動物と勘違いしてくれるのである。

そうして大人しく様子をうかがい続けるが、寺には人の気配は感

じられず、動物の立てる物音しか、聞こえてこない。

困った。彼は思った。萃香からの情報では、本丸である僧以外にも多数の仲間がいる。その仲間ですら全く姿を現さないで、情報を集める手段が無い。村人の話では、今日は僧が下りてくる日ではないので、すれ違いになったことも考えにくい。よしんばすれ違いになったところで、いつも僧が一人で説法を説きに行くので、寺には仲間が留守を預かっているはずだ。

このまま待ち続けるのも良いが、ここは人里離れた森の中。動物ならば対処は出来るが、妖怪がやってくれば、戦闘は避けられない。そうなれば、寺の関係者に気付かれることは必至。萃香から頼まれた仕事は、寺を調べてくれということだけで、倒してくれというわけではない。目的は一つ。寺の僧が何故妖怪を助け、妖力を集めているのかということ。

監視し続けるのも駄目、乗り込むのも駄目、となれば、出来ることはただ一つ。

「潜入するしかないわね」

その言葉に、彼は一つ、頷いて……ハッと我にかえり、振り向いた。

途端、視界が闇に閉ざされる。同時に、むにょん、と顔面がとてつもなく柔らかい何かが覆い、次にむせ返るようなあまやかな匂いが鼻孔をくすぐり、最後にまどろんでしまいそうな温かい弾力を知覚した。

……え？

「あら、大胆ねえ」

声……女性の声が、頭上から彼の耳に届く。少女……よりも少し低い、成熟した女性を思わせる艶やかな音。彼は全身から冷や汗を一気に噴き出すと、傍目にも慌てているのが分かる動きで、背後へ飛びのいた。

視界に光が戻る。大きく茂った大樹達。葉の影から見え隠れする鳥の羽先。うっすらと湿った土の感触。そして、彼に声を掛けた女

性の全貌が、露わになった。

あ……。

そして、呆けた。眼前に優雅に佇む女性の美しさに、彼は見惚れた。金色の髪。久しく見ることが無かったその色の美しさは長く、尾てい骨あたりまである。彫の深い顔立ちには決して西洋特有の極端さは無く、下品にならない程度に、それでいて上品に整った造形。瑞々しい唇には真っ赤な紅が塗られており、それが女性の魅力に妖しさを足していた。

なにより彼の視線を釘づけたのが、ドレス……というのだろうか、彼には分からなかったが、着物とは違う、ゆったりとした衣服を押し上げる、二つの大きな膨らみ。大きく開かれた胸元からは、はち切れんばかりに白い柔肌が盛り上がり、男の情欲を誘った。腰紐は女性の細さを強調し、スカートの内に隠された水桃の張りを彼に想像させる。

今まで何度か、永琳が知れば激怒して心中してしまいそうな話だが、女性と関係を持ったことはある。彼の心には今も変わらず永琳が居て、それは彼の心の奥の奥に静かに根を生やし、幾月の月日が流れたとて変わることはない想いである。

それなのに、彼は見惚れてしまった。目の前の女性……名前は知らないうえに、女性から感じる気配はまぎれも無く妖怪の証。本来ならば、彼は瞬時に体勢を立て直し、攻撃に移れるようにしていただろう。

油断。いうなれば、それは油断でしかなかった。永い時を生きてきた彼は、思わず、本当に思わず、口をついで出ってしまった。

「綺麗だ……」

「うふふ、そう、綺麗……え？」

上品に、それでいて静かに、口元に手を当てた女性……その手は絹の手袋で覆われていたが、しなやかな細い指が、ピタリと動きを止めた瞬間。

白かった女性の頬が、目に見えて赤く色づいた。音も無く、スー

ツと、静かに、鮮やかに。

その紅潮は頬だけに留まらず、耳を赤くかえ、首筋に色を付けて、胸元まで肌色に色づく。しまいにはうつすらと汗を掻き始めた女性は、両手で真つ赤になった顔を覆い隠すと、その場にゆっくりとしゃがんだ。膝頭に手の甲を当てている様は、まるで思春期の少女を想像させた。

その女性の姿を見て、ようやく自分が口走った言葉に気付いたのだろう。彼は普通の姿からは想像もつかない程に狼狽し、慌てて弁解を始めた。もちろん、彼の頬は女性に負けず劣らず色づいていたりする。

「い、いや、あの、すまん、いきなり背後に現れたもんだから、驚いてしまって、き、気に障ったのなら謝る、すまない」

「……………」

返事は返ってこない。だが、僅かに身じろぎをしたので、声は届いているのだろうことは、彼にも分かった。

「本当、うん、すまん。初対面でいきなり綺麗とか言われても警戒したり、恥ずかしく思ったりしてしまうのかもしれないが、別に悪い意味で言ったわけじゃないんだ。ただ、本当に綺麗だと思っただけで……か、髪も黄金のように輝いて綺麗だし、顔立ちも整って、思わず見惚れてしまったし、体つきも……あ、い、いや、別にそんな、悪い意味じゃな、ああ、い、いや、そういった目線で見たわけではなくて、純粹に美しい女性だと思っただけで、なんというか、こんな綺麗な女性がいるんだな、と思っただけで、でも、そういう、性欲とかそんな目線じゃないぞ、ただ見惚れてしまっただけで、綺麗な人に綺麗と言っただけで、魅力がある人に魅力があると云っただけだから、決して悪い意味じゃない。さっきあなたに触れたときも良い匂いがして、こう、胸が高鳴ったというか、なんというか、あ、いや、これも、そういう意味じゃないからな。ただ、お前が凄く魅力的だっただけで、だからといって、俺がそういう意味で言っただけじゃないからな……そ、それに」

「ねえ」

小さな声。女性の口から出たとは思えない、可憐で儂いそれは、彼の墓穴を掘りまくった言い訳をピタリと止めた。

言い表せられない不可思議な罪悪感に彼は胃をキリリと痛ませつつも、次の言葉を待った。

女性は、変わらず両手で顔を覆って膝に押し付けている。そのま  
ま、女性は消え入るような声を出した。

「……ねえ」

「な、なんだ」

「……私って、本当に綺麗？」

「少なくとも、俺にとっては見惚れる程度には綺麗だと思う」  
きゅう、と良く分からない鳴き声が女性の方から聞こえた。

「で、でも、さっき貴方も見た通り、私ってこんな顔よ。彫だって  
深いし、化物みたいな顔なのよ。身体だって変にやせ細っているし、  
腰回りだって全然肥えていないのよ。胸もお尻も極端に大きいし……」

「……」

何を口走っているんだ、この女性は。と彼は内心思ったが、元々は自分の発言でこの事態を招いてしまったので、耐えるしかない。

「……他のやつはどうかは知らないが、俺は好きだぞ、そういうの。  
彫が深いって言うが、俺はあんたみたいな人の方が好きだ」

ただ、妖怪でなければ。

「……本当？」

「本当だ」

「本当の本当に？」

「本当の本当だ」

「本当の本当に？」

「本当の本当の本当だ」

「……私って、綺麗？」

「……何度も言っているが、あんたは綺麗だと思うぞ」

きゅう、とまた変な声が女性の方からした。どこことなく、さっき

よりも身体を縮めているようにも見える。そんなことしたせいで、腕の間から乳肉が盛り上がり、ただでさえ見えそうだった頂きが完全に露わになっており、これまた以外にも桃色の先端が二つ、彼の視線に捉えられた。プリツと少し大き目で、しゃぶりがいのあるそれを見て、彼は顔を赤らめて首を逸らした。

「……………」

女性はそのことに気づいていないのか、無言のままジツとしている。彼もどう言葉を掛けたらいいのか分からず黙って女性を見守る。気まずい空気がお互いの間を流れる。このままでは埒が明かないと思った彼が口を開こうと思った瞬間、その声が静かに響いた。

「……嬉しい」

ポツリと咳かれたその言葉。ほんのわずかに顔を上げた女性の、両手の間からこれまたわずかに見える、弧を描いた唇。

彼は思わず息を呑んで顔を赤らめると、気恥ずかしそうにそっぽを向いた。

> (罪) ( ) >  
< たゆん たゆん

又 ( ) (ノ) 罪 ( )  
 ( ) ( )  
 < 少女乳

< ( ) (罪) ( )  
 ( ) ( )  
 > < 少女臭

/ ( ) ( ) (罪) ( ) ( )  
 ( ) ( ) ( ) ( )  
 < ゆかゆかゆかりん

< ( ) (罪) ( ) ( )  
 ( ) ( ) ( ) ( )  
 < ゆかゆか

< ( ) ( ) (罪) ( ) ( )  
 ( ) ( ) ( ) ( )  
 < ゆかりん

命蓮寺(後書き)



又 ( ) ( )  
( ) ( )  
、 ( )

<  
> ( )

< ゆっ  
かりんりん

## スキマ

しばらくして、ようやく我に返ることが出来たのか、ナイスバディの美女は、自身を八雲紫と名乗った。大妖怪……とまではいかなくとも、妖怪の中ではかなり実力が高い方らしい。おまけに妖怪の中でも上から数えた方が早いくらいに頭も良く、一度人間に化けて都に居る囲碁の天才と呼ばれた棋士を圧倒的な差で勝ったこともある。

様々な事象の境を操る程度の能力も有しており、空間の境をあいまいにすることで、空間と空間を繋ぎ移動することが出来、スキマという俗称は、移動するときに現れる空間の境が、まるでスキマの中に入っていく姿から取られたものとのことだ。ちなみにその俗称を最初に読んだのは萃香らしく、前々から紫は彼に強い興味を抱いていたらしい。

萃香がスキマと呼んでいたのは、この人のことか。と、彼は目が合うたびに顔を俯かせて頬を赤らめる紫の姿を見て、思った。

それだけの情報を集めるのに1時間も掛った。途中、自身の胸の頂きが見えていることに気付き、涙目でこちらを見あげること40分。いったい何が彼女の琴線に触れたのかは彼には分からないが、息が荒くなり始めた彼女をわけが分からないまま宥めること15分。果たして彼の責任なのかは分からないが、どこことなく拗ねた雰囲気や醸し出し焦らされるのはあんまり好きじゃないわ、と零す紫の姿に彼はそれ以上の溜息を零しつつ、さっさと行動を開始することにした。

「で、萃香から聞いた話だと、紫はこの寺のやつを監視しているらしいけど、何か分かったこととかあるか？」

寺から見えないように茂みの中に腰を下ろしつつ、彼は紫へ尋ねた。

「そう……ねえ」

彼に倣って腰を下ろした紫が、顎に手を当てて首を傾げた。そんな何気ない動作が妙に可愛く見えるのが、美人の特権かな、と彼は場違いなことを思う。

しばらくうんうん唸っている紫の動きが止まる。ニヤリ、擬音にすれば、こんな言葉が似合いそうな表情が、紫の顔に現れる。一言で、ちよつと意地悪なこと考えましたよ、みたいな。

その笑顔を見て、彼は、ああ、なんか面倒な奴だな、と内心思った。なにせ、こういう笑顔を浮かべた奴は、大抵面倒な何かをし始めるからだ。

そのことを、彼は髪の毛の長いお姫様との経験から知っている。下手に返答すれば、とんでもない約束事をされてしまうので、彼は顔に出ないように気を付けた。

「私が話す前に、まず貴方が持っている情報を提示してくれないかしら」

「なぜ？」

「私、二度手間ってやつが嫌いなものよ。お互いの情報にも差異があるだろうし、こういう面倒な事は、一回で済ませたいのよ」

……言葉に不自然な部分は無い。紫の言つとおり、確かに二度手間は面倒だし、萃香からある程度話を聞いているとはいえ、直接監視している紫の方がはるかに知っている情報は多いだろう。

「……まあ、そうだな」

「そうよ」

「それじゃあ、まずは俺から話そう」

その瞬間、ニヤリと紫の顔に例の笑みが浮かぶ。瞬時に隠されたその一瞬に、彼は気付かなかった。

「俺が今のところ把握しているのが、僧が女性であり、人間だけではなく妖怪も助ける変わり者であり、助けた妖怪から妖力を集めていることであり……おそらく、僧は人間から妖怪になるうとしてい、ってところかな」

もっとも、最後のは、あくまで憶測で、具体的に集めた妖力を何

に使うとして、いるのかは分からないが、な。

そう最後に締めくくった彼は、目で紫に答えを催促する。自然と見つめ合った形になり、ほんのり頬が赤くなっている紫が、瑞々しい唇を開いた。

「……ありがとう。だいたい分かったわ」

「そうか、それは何よりだ」

「でね、ひとつ残念なのが、あなたの知っている情報は、全部私も知っているのよね」

「……それがどうかしたのか？」

何を言い出すんだ、こいつ、みたいな視線を、紫は華麗に受け流す。

「なにか、割に合わないのよね。だって、私が見る分が無いじゃない。少しは私にも得する部分が無いと、どうも納得できそうにないわ」

「……どうしろというんだよ」

なにかもう、色々面倒になった彼は、さっさと続きを促した。

「ふふふ、話が早くて助かるわ。でも、今はいいわ。特に思いつかないから、また今度何かお願いするから」

「……好きにしてくれ」

はあ、と彼はため息を吐いた。

「うふふ、話を戻すわよ。さっきの、少し、訂正よ。最後の件は違うわ。彼女は、妖怪になろうとしているのではないわ」

「それじゃあ、なんだよ」

ツイット、伸ばされた細い指が、彼の唇に触れる。見ると、紫は何処となく胡散臭い何か、言葉に言い表せられない何かを、体中から放っていた。

その何とも言えない気配を感じて、彼は、ああ、なるほど、鬼と友達になれるわけだ、と思った。

「あ・せ・り・は・だ・め・よ」

ぷに、ぷに、ぷに、と指で唇を押される。まるで子供扱い。その

ことに思い至った彼は、一瞬、煮えたぎる怒りが背筋を上ったのを実感した。しかし、これぐらいで怒るのも大人げないかな、と考えて、されるがまま、大人しく指を受け入れた。

実際、何百年、何千年を生きれる妖怪からしたら、見た目20台後半にしか見えない彼は、子供以外の何者でもないだろう。まるで先走る弟をたしなめている美姉のような姿は、見た目の違いや種族の違いを除けば、傍目からは、中の良い姉弟にしか見えなかっただろう。

ただ、紫達が知らないだけで、彼の年齢はそれこそ万単位。彼からすれば、紫達の方が年下であり、むしろ彼からすれば、子供扱いされるのは屈辱以外の何者でもない。そういつた対応をされる方が喜ぶ男も居るにはいるが、彼は違った。

自然と険しくなる目つきに、紫は柳のように笑って受け流すと、彼の唇から指を離す。と、同時に、紫の瞳に力が入った。

「妖怪になろうとしているのではないわ。彼女は、もう既に妖怪になっているのよ」

「……なに？」

「以前は確かに妖怪になろうとしていたけど、今は違う。今、妖力を集めている理由は、妖怪の状態を保つ」

紫が言い終わる前に、彼は寺へと向き直り、気配を探る。すぐに理解した。

寺には、変わらず人の気配は全く感じられない。初めから人が住んでいなかったと思える程、寺からは名残すら無い。当たり前だ。この寺には元々人はいない。あるのは、妖怪だけ。改めて気付けばどうして分からなかったのか理解できないくらい、寺の中からは数体分の気配が漂っていた。

「なるほど、いくら気配を探ったところで見つからないわけだ。初めから人が住んでいないのだから、人の気配がするはずがないな」  
「分かるの？」

驚嘆に満ちた紫の視線に、彼は首を縦に振った。

「これでも、一人旅は長くてね。ある程度の距離なら、気配で位置と人数と実力が分かるんだよ。ただ、場所にもよるが、同じ所にいると、気配が混ぜ合った正確な人数が分からなくなるけどな」

なんとなく、ステータス画面の事は黙っておく。なにか、面倒なことになりそうだから。

「へえ、便利ね。今まで色んな妖怪や人間を見てきたけど、そんなことが出来る人を見たのは、貴方が始めてよ。私でも、そんなこと出来ないもの」

感心した瞳で見つめてくる紫に、彼は妙な気恥ずかしさを感じる。見てきたというだけあって、おそらく事実。そこらの妖怪や人間よりもはるかに目の肥えた紫が言うのだから、気配を探れるのは本当に凄いことなのだろう。

……なんとなく、自分でも出来ないと言った紫の言葉に、彼は考えた。本当に、本当にこれまた何気なく、紫のステータスがどういうものか気になった。

「なあ、ふと思ったんだが、紫はどれくらい強いんだ？」

「なに、急に？」

脈絡のない彼の発言に、紫は不思議そうに首を傾げた。彼も、別に深い理由があったわけではなく、なんとなく、紫のステータスがどういうものか、気になったただけだ。

決して、仮に敵に回った場合の対策として、実力を知っておこうとか、そういうことだけが理由ではない。決して時折、胡散臭い雰囲気醸し出すから、相手がどういふ妖怪なのか把握しておこうと思っただけという事は無い。

「なんとなく、だよ。あの萃香の友達っていうんだから、その実力がどれほどのものなのかって考えただけだよ」

「……ふ〜ん。ま、いいけど。実力なんて、所詮は他所の誰かが決めることだから、何とも言えないけど、まあ、能力無しなら、萃香から逃げ切れる程度の妖怪……ぐらいかしらね」

「……いや、鬼から逃げれるあたり、かなりのものだと思うけどな

……」

そう言いつつ、ステータス画面を確認。

|        |   |             |   |
|--------|---|-------------|---|
| 【レベル   | ： | 860         | 】 |
| 【体力    | ： | 9990 / 9999 | 】 |
| 【気力    | ： | 7500 / 7500 | 】 |
| 【力     | ： | 3000        | 】 |
| 【素早さ   | ： | 2550 + 20   | 】 |
| 【耐久力   | ： | 1888 + 30   | 】 |
| 【装備・頭  | ： | なし          | 】 |
| 【　・腕   | ： | なし          | 】 |
| 【　・身体  | ： | とある南蛮の服     | 】 |
| 【　・足   | ： | とある貴族の靴     | 】 |
| 【技能    | ： | ???程度和能力    | 】 |
| 【スキル   | ： | 美感力　レベル650  | 】 |
| 【      | ： | 妖術　レベル788   | 】 |
| 【特殊スキル | ： | 自己回復　レベル4   | 】 |
| 【アイテム  | ： | 寂しがり・甘えん坊   | 】 |
| 【好感度   | ： | 観測不能        | 】 |
| 【好感度   | ： | 目が合つてドキドキ   | 】 |

やはり、総合的に高い。日々鍛錬している彼より高いのは想定していたが、ここまで差があると、対策云々したところで、到底どうにかなるものではないだろう。

技能のところが？になっているのは、おそらく、能力事態が酷く曖昧なもので、概念的な能力なのだろう。境を操るといったところで、どういう能力なのか分からないあたり、それが正しいのだと彼は思った。

そう考えて、ステータス画面を閉じようとして……増えている項目に目をやった。

……なんだ、特殊スキル……寂しがり、甘えん坊？　なんだ、それ？

始めて目にする項目に、どういった意味があるのか頭を働かせ……  
……ようとした瞬間、彼の耳に年若い、少女の声が届いた。

「ここで何をしているんだい？」

声と共に感じる妖怪の気配。またもや油断してしまったと唾棄し  
たくなるような事態に彼は舌打ちして、振り返った。

「おや、見ない顔じゃないか。ふむ、どうやら人間のようだ、が……  
……なに……か……」

そこにいたのは、灰色というべきなのか、くすんだ白髪の少女だった。頭に生えた丸い耳は、少女が人外であることを証明し、なにより少女が放つ妖怪の気配が、それを裏付けしていた。

薄汚れてはいるが、上等な着物を実に纏っており、裾から灰色の尻尾が見え隠れしていた。手には、武器なのかどうか彼には分からないが、先端が曲がったL字型の鉄棒が、左右一本ずつ握られていた。

彼は素早くステータス画面で少女の能力を把握し、いかなる状況にも対応できるよう、距離を取ろうとした瞬間。

|       |   |           |   |
|-------|---|-----------|---|
| 【レベル  | … | 85        | 】 |
| 【体力   | … | 777 / 844 | 】 |
| 【気力   | … | 150 / 150 | 】 |
| 【力    | … | 120 + 70  | 】 |
| 【素早さ  | … | 444 + 30  | 】 |
| 【耐久力  | … | 252 + 15  | 】 |
| 【装備・頭 | … | なし        | 】 |
| 【…腕   | … | ダウジングロッド  | 】 |
| 【…身体  | … | 上等な麻の着物   | 】 |
| 【…足   | … | 麻製の靴      | 】 |



|        |                  |
|--------|------------------|
| 【技能    | ：探し物を探し当てる程度の能力】 |
| 【      | ：美感力 レベル18       |
| 【      | ：妖術 レベル20        |
| 【      | ：自己回復 レベル2       |
| 【特殊スキル | ：素直すぎる           |
| 【アイテム  | ：燻製肉             |
| 【好感度   | ：一目ぼれ            |

ガシツと彼の手が少女に掴まれて。

「初対面でこんなことを言うのもなんですが、好きです。是非、私の胎にあなたの子種を注いで、孕ませてください」

彼は足を滑らせてその場に転倒した。

同時に、彼は、横に居た紫の顔から一切の色が無くなり、次いで鬼のような……いや、まだ鬼の方が可愛らしい、そんな顔になったことに、彼は気付かなかった。

外録・そのころの諏訪子さま（前書き）

ちょうど30話ですので、外伝的な話。

読んでいなくても、本編にはまったく影響は無いです。

## 外録・そのころの諏訪子さま

諏訪王国の朝は早い。

日の出とともに国民は起床し、一日を始める。

そして、それは王である諏訪子も例外ではないのだが、お休みの日。

つまるところ、国民に姿を現さない日は、少し違ったりする。

休みの日の、諏訪子の朝は、まず目覚めのストレッチから始まる。「ううううわああああああああああああああああああああああん！！！！ ああああああ……ああ……あつあつー！ あああああああ！！！！ うううあわああああ！！！！ ああクンカクンカ！ クンカクンカ！ スーハーハー！ スーハーハー！」

彼女はまず、独特の呼吸法を行いつつ、特殊な液体が染みついた布（とある液体が付いた下着。永久保存版）に鼻先を擦りつけて、腰を並みの人間では捉えられないスピードで振る。このとき、片手を股の間にある、湿っていてキツくて不思議な臭いを放つ穴へ指を差し込むのがポイントだ。

そうして日の出から始まって、1時間程ストレッチを行い、とある軍神が来るまで続く。

「……ああ、もう、朝っぱらから五月蠅いよ」

その言葉と共に、甘酸っぱくも生臭い香りで充滿した室内を換気し、軍神曰く頭が狂っている諏訪子の頭をひっぱたく。

「ふは、な、なにが!？」

元来、諏訪子は低血圧で、今のように突然外部から刺激が入ると混乱してしまうという癖がある。その為、朝は血圧を上げる為に、布に鼻先を擦りつけながら起きるのである。

「いつまでもパンツしゃぶってないで、起きろ。もう朝食も出来ているぞ」

その言葉と共に部屋を出た軍神を追う為、諏訪子は運動によって

濡れた衣服を着替え始めた。

……つと、諏訪子は、ハッと思いだしたように目を見開くと、部屋の隅に置かれた蛇の石像に目をやる。最低限の身だしなみを整えつつ、いそいそと蛇の前に腰を下ろし、静かに両手を合わせた。

「帰ってきますように、帰ってきますように、帰ってきますように」  
毎朝欠かさず行っているお祈りである。神様である諏訪子が、願を掛けるといっても可笑しい話なのかもしれないが、神様とて、時には何かに縋りつきたいこともあるのだろう。

「あの雌豚が死にますように。あの小娘が死にますように。あのネズミが悶え苦しんで、生きていることを後悔して死んでいきますように……」

諏訪子はそれはもう真剣に。噛みしめた唇から血の滴が流れるぐらい真剣に、石像へ祈った。煙が立つほどに掌を擦り合わせているその姿は、どこから見ても神様には見えなかっただろう。誰が見ても魔物以外の何者でもない。

諏訪子の身体から放たれる凄まじい神気に、部屋全体がギシギシと揺れる。事前に軍神が周囲に结界を張っている為、この程度で済んでいるのである。もし、结界を張っていなかったら、放たれている神気によつて王国全土を覆う祟りが発生し、とんでもない事態になっていただろうことを、ここに記しておく。

これが、朝の一幕である。続いて、朝食。

諏訪子の朝食は、まず口づけから始まる。

「おはよう。そんでもって、おはようのチュウ」

王国一の絵師によつて描かれた肖像画に、それはもう目を背けてしまつくらいに激しく、情熱的に接吻する神様。文字にすればそれだけだが、どこか目の色が妖しい見た目女の子が、大人顔負けの深いキスをしているのである。肖像画に描かれた男の顔へ、舌を縦横無尽に這わせ、太股を擦り合わせている姿を見て、いったいどれだけの人間が、彼女を神様だと思えるだろうか。

だが、諏訪王国を舐めてはいけない。諏訪王国を束ねる諏訪子の

奇行など、既に見慣れたもの。女官の中には諏訪子に感化されて、特性の人形相手に悶える者もいるぐらいだ。肖像画に接吻するなど、諏訪子に仕えると決まった時に、誰もが通った道だ。

とくに諏訪子に仕える巫女など、気にも留めていない。目の前の情事紛いの一時が終わるのを静かに待ち、あまつさえ、今日の接吻はいつもよりも控えめですね、と呟くものがある始末。これには軍神も苦笑い。この王国でなにより凄いのが、誰ひとりそれが、忌避するものではないと考えていることだということを、軍神は知らない。

下品な音を立てて二次元の男へ唇を捧げる。そんな神様のイメージを粉みじんにする行為が始まってから、きっかり5分。紅潮した頬が絵から離れて、乱れに乱れた息を整えつつ、諏訪子はようやくひと段落した。

それを待つていた二人の巫女が、新しい衣服と手拭いを持って諏訪子の傍へ寄る。諏訪子がゆるゆると両手を左右に広げると、二人の巫女は失礼しますと頭を下げながら、諏訪子の模様直しに取りかかった。

朝食を終えれば、諏訪子の顔から幼さは消える。昼食までの時間、諏訪子は王としての責務を果たす。

基本的に、諏訪子の仕事は、信者から受け取った信仰を元に、民へなんらかのお返しをするのが主だが、王様である以上、それ以外の雑事もこなさなければならぬ。

女官や巫女が選考した、民からの要望を吟味し、可否の最終判断を下すのも王としての役割。ある程度は女官や巫女が処理するが、判断に困るものなどは必然的に諏訪子へ回ってくる為、諏訪子へ回ってくる要望はかなり多い。

その要望は多岐にわたる。誰それが女を寝取った、だの、誰それが娘を殺された、だの、誰それが病気で助けてほしい、だの、妖怪

が増えたので、どうにかしてほしい、だの、数え上げれば切りが無い程ある。

諏訪子に回ってくるのは、その中でも拗れに拗れたものばかり。女官や巫女が処理することも出来るには出来るが、何かしらのしこりが残るし、中には逆上して襲いかかるものも居る為、必然的に諏訪子が処理をするのである。

さすがに王である諏訪子に刃向うものはおらず、諏訪子様の判断なら……と民も納得してくれるので、今のような形になっている。

そのほかにも様々な雑事があり、諏訪子の午前は矢の様に通り過ぎていくのが常であった。

そして、昼食。諏訪子の昼は、まず口づけから始まり、基本的には朝とほとんど変わらない。ただ、時折恐ろしい形相を浮かべる時があり、その時には接吻も何も行われず、静かに食事が始まる。

以前、巫女の一人が軍神へ尋ねたことがあったが、返ってきたのは遠い目だけであったことから、こういうときの諏訪子には極力近づかないよう、暗黙の了解になっていたりする。何時の時代も、王様へ仕えるときには、そういったルールが必要なかもしれない。

夕食までの間、諏訪子から、今度は軍神へと王の玉座に座る者が代わる。管轄する諸国から来客してきた諸侯への挨拶周り。隣国との外交が、軍神の主な役割である。

以前は諏訪子と軍神が雑事を半々にしていたが、こういった外交の分野では軍神の仕事だ。内政面では諏訪子に分があるが、外交面では逆立ちしたところで軍神には勝てず、自然と内の仕事は諏訪子、外の仕事は軍神という形に収まっている。

軍神が王として午後を過ごす間、諏訪子は神殿の奥に籠ってひたすら祈祷するのが、ここ最近の日課である。

祈祷といっても、大したことはしていない。せいぜい、座禅を組んで祈り続けるだけで、後は長い間集中し続けているだけだ。

「……………」  
そして、今日もいつもと同じように、目を瞑ってひたすら手を合わせている……はずだった。

ピクリと、諏訪子の瞼が動いた。と、同時に、小さくも形良い唇から、とてつもなくおぞましい……聞いたモノを震え上がらせる声が漏れた。

「……………あの、ど畜生があ……………」

神殿の奥、私室兼祈祷室の内壁が、音も無く軋んだ。次いで、今度ははつきり分かるぐらい、激しく部屋が軋んだ。部屋の隅に置かれた花瓶が、ひとりでに割れた。甲高い破壊音と共に活けられた花が飛び散り、辺りが水浸しになった。

ふわり、諏訪子の髪が逆立つ。まるで重力から解き放たれたかのようにゆらゆらと揺れるその姿は、ある種幻想的ではあった。ただ、諏訪子から放たれるとてつもない怒気が無ければ、の話だが。

目に見えて震えている諏訪子が、再び唇を開いた。

「また、また!？」

思わず竦んでしまいそうな、破裂音。先ほどまで座っていた床が円状に陥没する。諏訪子は静かにその場所から浮き上がる。

「あの反吐よりも汚らしい鬼や、乞食娘に続き、ネズミの妖怪だと……………ふざけるな……………ふざけるなよ……………ふざけるなあああああ  
あ……………あ……………」

怒声と共に放たれた力。それは祟りとなって荒れ狂い、部屋の四方に張られた護符を一瞬で塵にかえた。その力がさらに猛威を振るおうと部屋を飛び出そう……………として、事前に軍神が張っていた別の結界によって、祟りは行き場を失くし、溶けるように消えていった。さすが軍神。俺たちに出来ないことをやってのける。やっぱり、御柱ないと駄目か。すごいな、憧れちゃうな。

後には、怒りの持って行き場が無くなって歯ぎしりしている、童顔の雑魚が居た系の話が合ったりしたらしい。

「これ以上私と同じような子供体形が増えんじゃねえ……………!!」

！ これ以上増えたら、としいかない子供にウフフなことされちゃっているぞ、みたいなことしても、あいつが興奮してくれないだろうがああああ！！！！」

もう、祟り神は終わっているのかもしれない。結界が作動したことを知覚した軍神が駆け付けたときの言葉。諏訪子を見て、そう思わずに、そう言わずにはおられなかった軍神を、せめてはいけない。出荷されていく豚を見るような軍神の瞳もなんのその、諏訪子は構わず吠えた。

「畜生、畜生、畜生畜生畜生畜生！！ 次から次へと雌豚どもめ！ 私の男を寝取るうとしやがって！ 寝取っていいのは私だけだ！ ていうか寝取るな！ 寝取られ反対！ 私の旦那様で、もう子供だって産んでいるんだぞ！ はいはいだって出来るんだぞ！」

「いや、それはお前が寝込みを襲っただけだろう」

さすがに聞いている方の耳が痛くなってきたので、軍神はため息を吐きながら部屋へ入った。そして、振り向いた諏訪子の頭に、固く握りしめた拳を落とすと、潰れた蛙のような悲鳴が上がった。

部屋の惨状に頭痛を感じ始めた軍神を他所に、諏訪子は這いつくばったまま、ぶつぶつと呟き続ける。

「うぐぐ……たとえここで私がやられても、第2、第3の私が、あいつとの子供を生むだろう。今、ここで私を倒しても、何の意味もない……ふふふ、次にあいつが眠ったとき、この地上にまた新しい命が生まれるのさ」

「ぶつぶつと小さな声で、なんて物騒な言葉を吐いているんだい。ていうか、お前、どうして寝込みを襲うことしかない。正面から、抱いてほしいって言えばいいだろう」

足蹴にされた諏訪子の頬が、目に見えて真っ赤になる。身を隠すように身体を丸めると、今度はさっきよりもさらに小さな声で呟いた。

「だって、恥ずかしいんだもん」

「……そうですか」



寝込みを襲う方が、よっぽど恥ずかしいんじゃないか？  
そう、思った、軍神、神奈子であった。

外録・そのころの諏訪子さま（後書き）

小町こまちち。

もう一個、外伝的な話を書くかもしれん。

修羅場（前書き）

今回はいつもよりも短いよ。

## 修羅場

寝起きというものは、えてして、思考を停止している場合が多い。まあ、中には違う人もいるだろう。起床と同時に数式の世界に入る数学者だとか、軍人だとか、はたまたそういう癖を持っている人とか、寝坊した場合とか、色々あるだろう。

けれども大抵の場合、寝起き直後は、ただただ襲いかかる眠気と特有の気だるさに脳の機能を謀殺され、ほとんど機能していないのではないだろうか。

朝起きてトイレに行く、飲み物を飲む、テレビを点ける。これらの行動は、全て頭で考えているだろうと思われる人も多いが、少し待つてほしい。生理現象などの肉体的欲求は、往々にして無意識に人を働かせる。いちいち物を食べる時に、これはどのようにに噛もうか、どのように舌を動かせばよいか、どのように口を動かせばよいかを考えないのと一緒に、長年の習慣（あるいは本能）から、思考をせずつに行えるのである。

……閑話休題。冒頭から、良く分からない話を長々と行つたが、それには深いようで、あまり深くない訳がある。このような言い回しなもの、主體的な目線から見れば、非常に深い内容で、客観的な目線から見れば、どうでもよい内容だからである。

つまり、どういふことかと言つと……。

「……なあ、紫」

「いや」

恐る恐る問いかけた彼の言葉は、否定の一言で切り捨てられた。問いかけられた紫はと言えば、彼の右腕を恵まれた谷間に挟んで、ぶう、と頬を膨らませていた。ほんのり赤くなつた耳たぶと、どこか不貞腐れているように見えるその表情は、妖絶な見た目とは裏腹の可愛らしさを彼に感じさせる。

どうしたものか、と彼は悩む。しかし、紫は彼を尻目に抱きしめ

た腕に絡めた両腕に力を込める。無言の抗議。そのおかげで、抱えた逞しさに心臓を高鳴らせつつ、紫は頬をほんのり赤く染めた。その姿に思わず彼も胸を高鳴らせたが、下手に何か行動すればどうなるかは想像すらしたくないので、平常心で耐える。

「……………はあ、仕方が無いが、いったい、何が紫をここまで怒らせているのだろうか。」

それが分からない彼は、とりあえず右腕に感じるとてつもなく魅力的な感触と甘い匂いから文字通り首を背ける。反対側の腕を掴んでいる少女、ナズーリンを見つめた。

ナズーリンは、抱きしめた腕に頬ずりしていた。身長の関係から自然と見下ろす形になったおかげで、赤く染まった肌が胸元からうかがえる。ふと、旋毛から、何とも言えない、涼しげな香りが漂ってくる。香の匂いとは違う……………なんというか、夏の風を思わせる、清涼な香りだ。

ふと、彼の視線に気づいたのか、ナズーリンは顔を上げた。陶酔しているような、それとも泥酔しているような、どこかうるんげな瞳が、彼を覗いていた。

「……………なあ、ナズーリン」

「ナズと呼んでください。私はもう、あなたのものです」

声を掛けた瞬間、後悔した。なぜならば、ナズーリンとは反対の腕が、きつく抱きしめられたからだ。それだけなら良かったが、かすかに聞こえた歯ぎしりが、腕に感じる柔らかな体温を恐怖に変えた。

体温とは、時に狂気になる。なんだか、後世に語り継がれそうな名言が浮かんだような気がしたが、彼にはそんな冗談を考える気力もなければ、話す元気は無い。とにかく、降って湧いたこの修羅場をどうにかせねば、という一念それだけであった。

まず、紫からどうにかしよう。

「なあ、紫」

「なによ」

半眼になった瞳が向けられる。お世辞にも機嫌が良いようには見えない。凄まじい勢いですり減っていく精神力に気合を込める。

「どうしてさつきから抱きついてるんだ？」

「貴方の右腕が寂しいって私に泣きついてきたからよ。寒いよ、あつたかい谷間で温めてよ〜って、あんまり私に嘆いてくるから、仕方なくこうして温めてあげているのよ。感謝しなさい」

いつから俺の右腕は発声器官になったんだ？

「腕が話すわけ無いだろうが」

「話すわよ」

「そんなわけ」

「話すのよ」

涙目でそう言われれば、男は黙って首を縦に振るしか出来ない。もちろん、彼も例外ではなく、溢れんばかりに涙を溜めこんだ瞳で見つめられれば、不本意でも同意するしか選択肢は無い。

ギュツと、ただでさえ密着していた肌がさらに密着する。回された腕に力が籠り、湯気すら立ちそうなくらいに熱い。見れば、僅かに見える腕と谷間の境目が、汗で滑っていた。この分では、内部は彼と紫の汗でベタベタだろう。

触れている部分がほとんど動かない為、不快感等の感覚はないが、敏感な部分に触れている分、紫ははつきりそのことを知覚しているはず。なのに、紫はもつと濡れると言わんばかりに僅かに身体を揺り動かし、腕に汗を塗り付け始める始末。その何とも言えない感触と女性の香りに、彼の腰奥がにわかには熱を持ち始める。

ああ、気持ちいい。そう思った瞬間、彼は腹部に走った鋭くも柔らかな快感に、思わず声をあげた。

「……失礼します」

見れば、先ほどまで蕩けていたナズーリンが、見た目相応の小さな左手を彼の衣服の中に差し入れていた。もぞもぞとズボンの中を探っていたかと思うと、彼の敏感な男をキュツと握りしめた。これには、彼もさすがに息を呑み、ナズーリンを制した。

「し、失礼しますじゃな、いだ、ろうが」

その言葉に、ナズーリンは顔をあげた。目に見えて興奮に満ちた瞳が、彼へ向けられる。

小さな彼女の唇が、ゆるやかに弧を描く。唾液で濡れた舌が、唇を静かに舐めた。見た目とは裏腹の、淫らさが見え隠れする女性の仕種。あまりの色気に、彼は思わず息を呑む。

そんな彼を尻目に、この騒動の原因でもある少女は、静かに瞼を閉じた。そして、分かっているでしょ、と言わんばかりに顎をあげて、唇を突き出した。

どこからどう見ても、それは接吻を求める女だった。唾液で濡れそぼった桃色の唇が少しずつ大きくなっていく。

吸い寄せられるように背筋が丸まり、少女もそれに合わせて背筋を伸ばす。ゆっくり、ゆっくり、音も無くお互いの唇が距離を縮めていく。

いかん、危ない危ない危ない。

普段、輝夜や妹紅と一緒に風呂に入ったりしていて、結構素肌のスキンシップみたいなことはしているが、彼にはそういった性癖は無い。どちらかといえば、彼は年上が好きなタイプであり、多少ドキツと動悸を速めてしまうことはあるものの、それだけだ。

間違つても、この女を抱きたいと感じたことはないし、考えたことも無い。その為、彼は苦笑しつつ、ナズーリンから離れようとして……。

首にかけられたダウジングロッドによって、その動きを封じられていることに気付いた。

……あれ？

それは、ひどく巧妙なものだった。強すぎず、弱すぎず、本人が自ら背中を丸めていると錯覚させてしまうくらいの絶妙な力加減で、彼の首を引っ張っていたのである。

もちろん、引っ張る方向は下方。目的は……お互いの唇。そのことに思い至った彼と、彼に気付かれたことを悟ったナズーリン。動

くのは、ナズーリンの方が早かった。

「あ」

短い驚愕の声。グイツとダウジングロッドが下へ引っ張られる。紅潮した頬がより鮮明に視界へ映る。見る間に広がる肌色に、ナズーリンは至福を予感し、彼はこれから起こる騒動に血の気を引いて、その瞬間を待った。

時間にすれば、まさに一瞬。瞬きしてしまえば、見逃してしまいそうな、わずかな時間。これから起こるであろう接触は、アリですら想像出来たであろう。

それは、彼も、ナズーリンも、同じ。

「駄目」

ただ、それは起こらなかった。

位置がずれた？

彼が避けた？

ナズーリンが躊躇った？

全て違う。真実は、彼の隣に居た女性が、白魚のように細くしなやかな白い掌を、間に差し込んだというものだった。

二人の唇が、チュツと音を立てて止まる。突然の事態に目を白黒させる彼を尻目に、ナズーリンはゆっくりと瞼を開いて……彼を戦慄させた。

「……おやおや。何をするかと思えば……」

先ほどまで頬を紅潮させて蕩けていた少女が発したものとは思えない、低くおどろおどろしい声。ゆるやかに自身の口元を覆う紫の掌に寒気を覚えつつ、彼はそつと振り返って……後悔した。

「……………」

そこには夜叉がいた。

これは一種の拷問ではないだろうか。そう思った彼を、誰が責められよう。

「……あの……そろそろ、話を……」

すっかり忘れ去られていた、そもそもの原因であり、妖怪に成り



果てた僧……聖と名乗った女は、居心地悪そうに口を開いた。  
もちろん、返事は返ってこなかった。

修羅場（後書き）

次はひじパイ

## ナムサン

聖に通された部屋は、なかなか豪華な部屋であった。とはいえ、さすがに貴族の屋敷や輝夜の部屋と比べれば劣るが、それでも大人8人ぐらいいは落ち着いて寝られる程度に広く、細やかな壮美を随所に感じられた。

ナズーリンのことは、驚いているようだったが、本人が望んだことならばと、何も言つてはこなかった。お茶を用意してまいりますと退室し、待たされること数分。お盆を手にした聖が部屋に入り、各自にお茶を配る。一息ついてから、話し合いが始まった。

時間にすべりたいして長くは無いが、それでもけっこうな量を話しあつた。

噂というものは、人が考える以上に真実から遠いものである。そのことを、彼は聖と名乗る僧と話して強く痛感した。

話をしてみて分かつたが、聖はとても聡明であり、また心が広い女性であつた。突然押し掛けてきた普通の妖怪とは思えない妖怪と、普通の人間には見えない人間を相手に、聖は快くもてなしてくれたのである。

もちろん、二人に対して警戒はしていたが、それも敵意と呼べるものではない。見知らぬ人に対する人見知りに近い程度のものであり、むしろ都からやってきたという彼の言葉を喜んだ節すらあつた。しかも、僧は萃香の話通り、たいへんなボディの持ち主であつた。それこそ、紫や勇儀と並んでも劣らぬ体つきであり、適齢期を過ぎたという話ではあつたが、それでもせいぜい二十台後半程度にしか見えなかつた。

萃香は聖の何処を見て適齢期を過ぎた女性であると判断したのか、彼は一つ首を傾げる。そして、都中の貴族から結婚を迫られている輝夜のことを思い出して、納得した。この時代は、彼女ぐらいいで結婚が当たり前なのである。

おまけにこの時代は平均寿命も短く、十代で死ぬなんて掃いて捨てる程ある話。三十代まで生きれば十分で、四十代まで生きたら長生きに入る。その為、二十代で男の一人も居ないのは、行き遅れでしかないのだろう。

ナズーリンの姿を見た聖の、どこか悲しげな顔。彼女自身、何か思うところがあるのだろう。

人間から妖怪に成り果てた存在。つまり、全く別の生物（概念的な意味も含めて）に生まれ変わったのである。その方法に関してや、どういった経緯でそうなったか彼は知らないが、並大抵の努力では成し得ないことであることは、十分に予想出来た。

それこそ、人としての全てを費やしたのだろう。全てを捨てて、何かを成し得ようとして、あるいは、何かから逃れる為に、彼女は全てを代償にして、妖怪に転生したのであろう。

それは、人間としての、女性としての幸せを捨てることなのではないだろうか。それこそ、子供を作ろうなんて考えもしなかったし、男を作ろうだなんて彼女にとって、はるか離れた恒星に住むアオミドロ程度のものであったのかもしれない。

それほどの代償を払って手にした命。その命を始めから持っていたナズーリンが、聖が捨て去ったものを手にしているのだから、運命とは皮肉としか言いようが無い。

聖本人も、言葉には出さないものの、心のどこかでそのことを考えているのだろう。彼の腕に抱きつく紫とナズーリンに驚きを覚えつつ、瞳にはどこか羨ましさと寂しさを滲ませていた。

実年齢が見た目相応であるとは思えないが、おおよそ異性と接する機会が無かったのはうかがい知れる。拳動一つ一つに、緊張感にも似た羞恥を感じているのは、彼の目から見ても明白であった。もつとも、そんな聖の事情を知らない彼からしてみれば、こんな美人な女性でも緊張するんだな、ということではしかなかったのだが。

聖本人の口から、妖怪に転生したのは思うところがあつたことと、妖怪を助けたのは妖力を分けてもらう為であり、他意は無い。鬼に

対していらぬ警戒心を抱かせてしまったことに対する謝罪を聞いた彼は、ふう、と溜息を吐いた。

出だしから色々あったが、とにかく当初の目的……という程のもでもないが、萃香の知りたいと思っっている事柄は知ることが出来た。

聖の話していることが嘘である可能性も考えられるが、嘘をついたところで意味は無い。鬼に対して嘘を吐いたことが露見した場合の事を思えば、素直に話した方がマシだろう。

とにかく用は済んだ。

鉛の帷子を着込んでいるかのような倦怠感に、自身の疲れを自覚する。まるで、ラッキースケベを体験した直後、修羅場に遭遇した男のような気分だ。パンツかブラかは知らんが、もう少しエロスを抑えるべきではないだろうか。

閑話休題。

彼はいまだ両腕に抱きつく二人を引きはがしつつ、聖へ頭を下げた。

「いまさらですが、本当にすみません。本当はもっと静かに話をつけたかったのですが、少々面倒なことになりました……」

何が、とは言わない。

「ほら、ネズミさん。面倒ですって……彼も迷惑しているみたいだし、さっさと腕を離れたらよろしいんじゃないかと」

「ははは、人の振り見てなんとやら。最近の年増妖怪は面の皮が厚いからよろしくない。もう少し薄くしないと、白粉が映えないよ」

年増、の言葉に胸を押さえる僧が一人。涙目がこちらへ向けられるのを彼は視界の端に認識しつつ、彼は首を横に振った。

誰か、とは言わないが、その人はちよつと安心したらしく、頬を紅潮させた。

「うふふ、確かに私の身体は熱いわ……こんな風にね」

その言葉と共に、既に空気すら通れないんじゃないかっていうぐらいに密着していた谷間が完全に塞がった。もはや、気持ちいいを

通り越して痛みすら感じそうな圧迫感だ。さすがは妖怪というべきか、桶一つ持てないのではなからうかという細い腕からは想像だに出来ない力が込められていた。

もはや怪力といっていいそれは、彼の腕を青白くさせる程だった。冷や汗が出始めた彼を尻目に、紫は勝ち誇った顔で少女を見下ろした。

静かに、ナズーリンの額に静脈が浮き出る。それはもう、擬音にすればビキビキとはつきり浮き出ている。それなのに顔に出ているのは笑顔でしかなく、なまじつか美少女な為か、鬼すら裸足で逃げ出しそうなおどろおどろしさが見え隠れしていた。聖はどうしていか分らず、おろおろと涙目になっていた。

「あんまり彼に抱きつくと、加齢臭が彼に移っちゃうから離れてほしいかな。僕も彼も若いんだから、あなたみたいな年増臭は毒だよ」若い僕たちは、若い匂いを移し合おうね。そう言くと、ナズーリンは彼の左腕をギュツと抱きしめた。左腕の骨が軋む音を、彼は聞いた。彼の額からまた一筋の汗が流れる。

ビキビキ。そんな心の中でしか聞こえない効果音と共に、紫の額に血管が浮き上がった。パキン、という乾いた音が室内に響く。

見ると、机の上に置いてあったナズーリンの湯のみに一つ、ヒビが入っていた。誰も触っていないのに、どうしてヒビが入ったのだろうか？

熱いお湯を入れても飲めるよう、湯呑自体、かなり分厚く重く作られているはずだ。それこそ、落とした角度によっては割れないくらいのものだ。

最近の湯呑は、脆くていけない。そう考える彼の前で、聖が腰を上げてかけては下ろすのを繰り返していた。彼を一人にしたら、被害が寺に行く可能性を示唆したのだろう。逃げるわけにもいかず、かといって加わればどんな事態を引き起こすか分からない。ある意味、彼女も被害者である。

「うふふ、御免なさい。私、気付かなかったわ。貴方のような乳臭

い小娘には出せない色気だものね。そんな肋骨が見える胸で気を使わせて御免なさい」

乾いた音。今度は紫の湯呑にヒビが入る。ヒビから、中に入っていたお茶が静かに滲み出ていく。彼の額からは脂汗が滲み出る。

「あはは、いいよ。そんな肥えた身体では、頭に栄養が回っていないのは明白の理。これから年相応に減量したら、いい話だし」

破裂音。見ると、ナズーリンの湯呑がまるで溶かされたかのように、泥状になっていた。お茶の匂いと、泥の臭いが混じり合った異臭が室内に広がる。

お気に入りが……と落ち込む聖に、彼はステータス画面からお金を取り出し、聖の手元に出現させた。聖の瞳が見開かれる。幸いにも二人の夜叉が気付いていないので、彼の行動が露見することは無かった。

「……おほほ、そうね、やせ過ぎて男にしか見えない女もどきに心配されちゃうんだから、私も少しは減量を考えないといけないかも。でも、大丈夫。彼と布団の中で運動するから、すぐに痩せられるわ」破裂音。見ると、紫の湯呑がまるでミキサーに掛けられたかのように粉みじんになっていた。さつきとは別の意味で涙目になり始めた聖の手元に、彼は所持金を全て放った。彼も涙目だ。

紫から凄まじいオーラが放たれる。それは妖力でも何でもなく、ただの気配なのに、まるで勘弁してくれと言っているかのように、寺そのものが軋んだ。

それに呼応するかのように、ナズーリンから放たれるオーラ。これでは寺の体力が持たない。もう、寺のライフはゼロである。

うふふ、ははは。文字にすればずいぶんと賑やかなものだが、現実とは違う。もはやサバトと言わんばかりのおぞましさで室内を充滿する。

「……聖」

「ひゃい！」

消え入りそうな、ナズーリンの呼び声。ポツリと零した音を、聖

は背筋を立たせて答えた。声が震えているのは、この際仕方が無い。「地の利は生かすもの、人は利用するもの。二人でこの年をわきまえない婆さんを黙らせましょう」

婆さん、の言葉に瞳から色が消えるスキマ妖怪と、胸を押さえる僧が一人。

「へ、へ、あ、あの、どう、どうすれば!？」

「考える」

「ひゃい! 考えましゅ!」

ライオンに睨まれたチワワのごとし。もはや、完全に委縮した聖に反論する力も気概も無く、あーでもない、こーでもないと言を悩ませる。悩ませたが、パニックを起こしかけている聖の頭では妙案が浮かぶわけもなく、時間だけが過ぎていく。

次第に高まっていく室内の威圧感に、聖マジ涙目。見ている彼はマジ虫の息。もはや両腕の感覚など無いに等しく、二つの胸元に抱えられた両腕がどうなっているか、想像したくもない。

傍目にも可哀そうに見えるぐらい、聖の落ち着きが無くなっていく。右に左に視線を向けるも、助けになりそうな物や者はなく、唯一返ってくるのはどす黒い怨念が籠った視線が二つ。

「あの、その、あの、その、あの、その、あの」

真っ赤になつた頬に滝のような汗を流し、冷や汗で衣服を濡らしていく聖が、結局行ったことは……彼に抱きつくことだった。

「すみません!」

誰に謝っているのか彼女以外……彼女自身、分かっている。聖は勢いよく立ちあがると、衣服を一息に脱ぎ捨てた。反動で、ぽよんとたわわに実った果実が二つ踊る。その下には果実を彩る細い腰と汗できらめく桃尻と、ふささと繁茂した草原が三人の眼前に晒される。ツンと尖った赤色先端は、はたして羞恥からくる勃起か、あるいは生理的なものか。

「は?」

「え?」



聖の突然の奇行に呆気にとられる二人の妖怪。もはや両腕の激痛によって半分気絶しかけている一人の男。

「し、しちゅれいしまつ！」

噛みかみである。しかし、彼女にツツコミを入れる人（妖怪含め）がいるわけもなく、聖は両腕を広げて、一言。

「な、ナムサン！」

そして、茫然としている二人を尻目に、聖の両腕が彼の頭を掻き抱き、豊満な双山の谷に彼を抱きしめた。

それは、とても柔らかかった。

その柔らかさは、何に例えるべきなのだろう。男には無い、安心感を与える柔らかさが、目を、鼻を、口を塞ぐ。鼻先に感じる肋骨の感触すら心地よく感じ、顔中を覆い隠す弾力は、彼の意識を優しく涅槃へと運ぶ。

それは、とても温かかった。

今しがたまで衣服によって込められていた体温が、ほんのりと顔中を温める。熱すぎず、冷たすぎない、非常に心地よいその温度は、なるほど、赤ちゃんが安心して寝入るわけである。

それは、とてもいい匂いだった。

男の汗の臭いはあんなに酷いというのに、どうして女性の匂いはこんなに男を掻き立てるのだろうか。しかも、それが美人が発したものであるのだから、その力は凄まじいものがある。

しかも、聖は汗をかいていた。それは巨乳を持つ女性特有のもので、彼女の谷間は汗でとても滑っていたのである。つまり、にゆるにゆる、ぽよぽよ、むにゅにゅ、ぬちゅぬちゅ、だった。

そして、それは激痛によつてただでさえ虫の息であつた彼の小さな呼吸を完全に阻害するのと同意であり……とどめをさすことと同意であつた。

どこからか、鳥の鳴き声が聞こえる。二度、三度。耳を澄ませてみるが、鳥はまるで妹紅を焦らすかのように鳴くのを止めた。

あれは何の鳥だろうか。頭を捻るが、答えは出てこない。もともと妹紅には鳥を愛でる趣味は無いので、考えたところで答えが出るはずも無いのだが、考えずにはいられなかった。

日差しが暖かい。穏やかな風が太陽の温かさを十分に含んでいるかのような、心地よい優しさ。普段の妹紅であれば、俳句の一つや二つ、短歌でも歌つていただろう。

しかし、妹紅はそうしなかった。なぜなら、彼女は今、猛烈に不機嫌だつたからだ。彼と輝夜に会うまではこのような不機嫌は幾度となく感じたが、今みたいな気分は彼女新、久しぶりに思えるくらい久しぶりだつた。

「……はん」

ため息がこぼれる。なんとなく、庭に設置された池に、小石を投げ込む。音を立てて小石が水の中に沈んでいき、波紋が静かに、それでいて幾重にも広がっていく。その波紋も次第に頼りないものになつていき、遂には音も無く消えた。

……静かだ。妹紅は思った。耳を澄ませれば、虫の鳴き声やら鳥の鳴き声は聞こえるが、それでもいつもよりは小さく感じる。

意識を外した瞬間、狙い澄ましたかのように鳥が鳴きはじめてたのには苦笑が漏れた。なるほど、よくわかつていらつしやる。

ふう、ともう一度溜息を吐いてから、妹紅は一つ欠伸をした。

輝夜に見知らぬ客が訪ねてきてから一時間が過ぎた。長い黒髪の女だ。まるで墨汁で髪を染めたかのような、黒髪の女が、輝夜を訪

ねてきた。最初は貴族の回しものかと思っただが、輝夜の一言で警戒心は無くなった。

御免なさい、妹紅。その人は私の知り合いなの。

……知りあい？ いったい、どこなの？

……古い、古い知り合いよ。ずっと、ずっと前からの……ね。

そう言い残し、女と部屋に入ってから一時間。普段は何から何まで一緒に行動しようとする輝夜が、始めて妹紅を拒絶したのも、一時間前。

済まなそうに、申し訳なさそうに、それでいて、とても寂しそうに女を連れて部屋に入って行った輝夜の横顔が、妹紅の頭には焦げついていた。

あの女は何者だろうか？

女の顔を思い返してみるが、心当たりは全くない。一つ一つ順番に貴族仲間の顔と識別していくが、女の面影を感じさせる人は、妹紅の記憶にはいない。

考えて見れば、妹紅が知っているのは、女が輝夜の知り合いだということだけ。女の名前すら知らないのだから、妹紅がいくら考えたところで意味は無い。

けれども、妹紅は考えられずにいられなかった。女に対する警戒心から来るものなのか……いや、違う。

不安。妹紅にあるのは、ただそれだけだった。何か、何かが始まるうとしていて、女はそれを輝夜へ伝えに来た。そんな妄想が、妹紅の脳裏を何度もよぎった。

ばかばかしい。そう、吐き捨てたい……けれども、考えれば考えるほど、妹紅は胸の奥から焦燥感が湧き出てくるのを止められなかった。

……そういえば、あの女。どこことなく、雰囲気は輝夜に似ている気がする。

そう思った妹紅は、すぐさま首を振って、再び池に小石を放り投げた。

ナムサン(後書き)

「おっぱいが増えるよ。やったね、葛城さん！」

だ  
i i l : : : : :  
、 ; | — や —  
ノ : : : : :  
う !  
、 . . . | , , , . . .  
” ’ : : : : :  
、 . . . | , , , . . .  
! も —  
—

## 赤毛さん、再び

日数にすれば、大した時間ではない。せいぜい、十日ぐらいだろう。十日と言え、彼にとつてはもはや刹那でしかない。なにせ、単純な年齢から考えれば、彼はとうに万を超えて生きており、一人旅もとうに万を超えている。

いまさら十日ぐらいの旅なんて、慣れ過ぎてもはやちょっと買い物に行く程度の間隔でしかないのである。もちろん、体力、精神力、両方の面から見ても、彼にとつては同じ意味。

なのだが、今回ばかりは彼も疲労困憊だった。主に、精神面で。

世の男性から見れば、ナニこいつ？　と言わんばかりの役得だった彼ではあるが、当人からすれば地獄の宴というやつで、どこまでも付いていきますと潤んだ瞳で懇願するナズーリンをなだめ、当然のように腕を組もうとする紫を引きはがし、真っ赤な顔で俯いている聖に謝って解散した後、その足で妖怪が住む東の山へ。

えっちらおっちら汗を流して住みかへ向かえば、そこには見事なぐらいに泥酔した酔っ払いの鬼が二人。臭いだけで酔い潰れそうな酒気に辟易しつつ、タコのように絡んでくる鬼を介抱しながら、部屋の様子をうかがう。

見れば、部屋中の至る所に空き樽が捨て置かれており、中身は全一滴残さず飲み干されてしまっているではないか。漂う酒気から考えれば、ここらにある酒は全てここ数時間以内に飲まれたのは明白で、彼は今更ながら、鬼の酒に対する強さに溜息を吐いた。

高斟を掻いている二人に水やら何やら介抱して、ようやく会話出来る程度にまで正気になった時には、もう彼は帰って寝たい気持ちでいっぱいであった。

「ふん。それじゃあ、そいつは警戒する必要性は薄いつてことではないんだね？」

十分に呂律が回るようになった萃香が、瓢箪に口づけながら、話を纏めた。瓢箪を傾ければ、中に入っている酒が音を立てて萃香の喉を通っていく。あれだけ飲んだというのにまだ酒を流し込む様はまさしく飲兵衛。その横で私の分も残しておけよと喚いている鬼を見て、飲兵衛が二人もいやがると彼が思ったのも至極当然なのだろう。

「ああ、それでいいと思う。ただ、俺の主観で判断したことだから、それでも気になるなら、別の奴にでも頼め」

「いや……信用するし、もう十分だよ」

「そいつは良かった……さて、帰って寝よう」

疲労が籠った溜息を吐いて、立ち上がる。首を左右に捻れば、こきり、こきりと関節が鳴った。鈍い違和感を両腕に覚えるが、はやく帰らなければ、また布団の中に引きずり込まれかねない。前回は酒に酔っていたこともあるが、最後の最後で受け入れたのは彼だ。

もし、本当に彼が嫌がれば、二人は決して無理強いはいしないだろう。結局のところ、彼とて男である。目の前に据え膳があれば、食べたいと思うのは男ならば仕方が無いのかもしれない。

だからといって、見境なく尻を追うというわけでもないのではあるが。

「俺は疲れた……もう帰るよ」

「疲れたんなら、ここに気持ちのいい寝床があるよ。今なら溜まった膿ももれなく出してもらえる、特性だよ。どうだい、お代はおつ立ててくれるだけでいいよ」

「そんな酒臭い布団で眠れるかよ。二日酔いでこっちが倒れる」

何時の間に用意したのか、動物の毛皮で作られた布団の中から、

艶やかな手をひらりひらりと振って呼びとめる勇儀。酒とは別な意味で紅潮した頬、毛皮から零れた大きな片乳は、手を振るたび、ぷるん、ぷるんと弾んだ。

疲れていなければ、一発で飛び込んでいただろうその頂点は、傍目にも分かるぐらい、大きく膨張していた。

横で抜け駆けされた、と喚く萃香の姿は、彼の疲れを倍増させるには十分過ぎる力があつた。

「いいのかい？ 今なら熱々の穴で好きなだけ出せるんだよ？」

「さすがに、俺も疲れているんだよ。だから、横で真つ赤になつている子鬼は大人しくしている」

そう言い残すと、彼はさつさと出口へ向かつた。後ろからは、意気地なし、と喚く鬼二人を残して。

彼が本来の自分の目的のことを思い出したのは、結局都に着いてからだつた。引き返す労力と、輝夜と妹紅のことを天秤にかけたが、彼は結局一度屋敷に引き返すことにした。

体力云々もそうだが、なにより今鬼達の元へ戻れば、今度こそ布団の中へ引きずり込まれかねない。それこそ、明日の朝は黄色い太陽を拝みながら、腰を振り続ける羽目になるだろう。

それに比べれば、輝夜と妹紅を相手にする方が、幾分気が楽だ。あの二人はちゃんと相手の努力を分かる人間だ。たとえ成果が出なくても、しっかりと頑張っているようなら、何も言わないので、彼は疲労が溜まつた両足を動かして、都の中を進んだ。

既に、太陽も地平線の彼方に消えかけており、空は真つ赤に染まつている。夕暮れ時な今、屋敷へ向かえば、到着するのは真夜中だ。行けることは行けるが、疲労が溜まつた今、無理をするのは危険だ。その為、彼は今晚だけ、てきとうな場所で一夜を明かそうと思ひ、



ちょうどよい寢床を探し歩いているところであった。都の中であれば、少なくとも妖怪に襲われる危険性は減るし、野党ぐらいならいくらかでも相手が出来ると判断した。

しかし、太陽もその姿を完全に隠した頃。

「……うーん、ちょうどいいところが見つからん」

彼はいまだ、寢床を見つけないことが出来ず、都の中を彷徨い、疲れた身体に鞭を打って歩いていた。煌々と燃える松明が、彼の身体と眼前をぼんやりと照らす。かれこれ、4本目の松明だ。

なぜ、彼が今もこうして探し歩いているのだろうかと言え、理由は単純。

臭いである。彼がここだと思った場所は、まず先住者達があり、そして彼ら彼女らは、共通して酷い体臭である。およそ衛生的な生活をしているとは思えないのだから、それは当然のことで、彼は彼らが発する臭いに耐えることが出来なかったのである。

そもそも、都の表道、裏道問わず、浮浪者がごまんといる。そんな彼らにとって、寝やすい場所はとつくの昔に押さえられているわけで、そういう場所には彼らの臭いが染み付いているのである。

もちろん、都の中は狭いようできて意外と広いので、彼らがまだ見つけていないスポットはあるだろう。

しかし、そういった手が付けられていない場所は、えてして理由がある。

一つは、貴族が出した糞尿やら何やらの汚物が埋められている場所。大抵のものは川に流してしまうのだが、川から離れた地区に住んでいる貴族は、けっこう適当な場所に埋めていたりすることがあり、そういった場所は地面から異臭がするので、もはや近づきたいとすら思わない。

もう一つは、死骸が埋められている場所だ。陰陽道に使った獣の死骸やらが埋められた場所があり、そこも彼らは手を付けない。

さすがに彼も、死骸が埋められている地面の上で寝たいとは思わず、こうして今もえっちらおっちら歩いているのである。

松明を片手に都の裏道を行ったり来たりしている姿は、傍目から見たいそう怪しく映っただろうが、幸いにも、まだ誰にも見咎められてはいない。表道で寝ようかとも考えたが、見回りで起こされるのがみえていたので、それも出来ない。

けれども、いつまでもこうして彷徨い歩いても見つかる兆しは無い。

いつそ無理してでも帰ろうかと彼は5本目の松明を取りだした……その時だった。

「……………」

赤毛の少女が彼の袖を引っ張ったのは。

「　　っ!?!　　うおお!?!??　　吃驚した!」

比喩ではなく肩が跳ねる。反射的に攻撃しようと思えば、そこに居たのは赤毛の少女。瞬間、彼の脳裏に少女との邂逅が蘇る。何時の間に近寄って来ていたのか、彼には分からなかった。

なんだ、お前か。そう呟いて肩の力を抜く彼を見て、赤毛の少女は首を傾げる。少女にしてみれば、顔見知りか歩いていたので呼び止めた程度のことだったのだろう。

しかし、こんな夜更けにいきなり袖を引かれれば、驚くのは無理も無い。というより、普通なら妖怪の類か何かと疑われて、一刀されてしまっても文句はいえない。そんな意味を込めて彼は少女を見つめるも、肝心の少女は何が嬉しいのか、モジモジとはにかんではいた。

その様子を見た彼は、ため息を吐いて少女の頭を軽く叩いた。不用心を咎める意味だったのだが、少女は特に気にした様子は無かった……というよりも、叩かれていると思っていないのだろう。

言うなれば、なぜこの人は私の頭に手を置いているのだろうかという、疑問しか、少女にはないのだろう。事実、少女は自身の頭に置かれた手を、不思議そうに眺めている。

相変わらずな少女の姿を見て、彼はもう一度溜息を吐いた。夜盗を警戒して周囲の気配を察知しながら歩いていたが、どうやら少女一人の気配を見落としてしまっぐらいに消耗しているらしい。

「やれやれ、こんな状態で帰っていたら、妖怪にやられていたかもしれないな」

「……………」

「いや、こつちの話だ」

「……………」

少女の頭から手を離し、そろそろ持つのが辛くなってきた松明から、新しい松明へ火を移す。先端に沁み込ませた松脂がパチパチと音を立てる。

見る間に大きくなる炎を確認し、残った松明を地面に捨てる。彼と少女の居る場所は家々からは少し離れているので、放っておいても火事になることはないだろうが、念の為だ。

軽く足で地面を削り、そこに松明を蹴り飛ばす。砂を上から掛けると、目に見えて松明はその輝きを失くし、すぐに消えた。

通行人が火傷しないように念には念をいれ、十分に砂を盛る。燃えた断面が見えなくなったのを確認してから、彼は少女へ声を掛けた。

「それで、今回は何用だ？ あいにくと、今は団子も無ければ、水飴も無いぞ」

「……………」

「んん？」

「……………」

「……まあ、探しているけど、なんで俺が探していることが分かったんだ？」

「……同じ所、グルグル回っているから、なんとなく」

「……同じ所、回ってた？」

「……うん。あっちに、こっちに、そっちに、ぐるっと何周もしていたよ」

少女の言葉に、彼は頭を抱えた。見つからないわけだ。既に探した場所を延々とグルグル繰り返し回っているわけなのだから、見つかるはずが無い。

「ちくしょう。だいたい、都は見えた目同じな建物が多すぎなんだよ。昼間ですら油断すれば迷うのに、夜になれば迷うのは当たり前だろうが」

「……………?」

「ああ、こつちの話だ。だからその、私は迷ったこと無いよ、みたいな瞳を俺に向けなくてくれ。地味にへこむから」

無駄な努力とは、まず真っ先に心の体力を奪っていく。ズシリと重さを増した両肩を揉みつつ、彼は少女に頭を下げた。

「すまん、どこか寝る場所教えてくれないか？ お礼ならまた後日出すから、今はとにかく休みたいんだ」

その言葉に、少女は首を振った。

「……お礼より、また甘いのを頂戴」

「……それをお礼というんだが……まあ、いいや。甘いのなら、また今度持っていくから、今日はお願いするよ」

「……お願いされた」

少女は、むふん、と鼻息を荒くすると、踵をひるがえして歩きはじめた。ついてこいという事なのか、足取りはそれほど早くは無い。彼は一つ欠伸をしてから、少女へ続いた。

少女に案内されたのは、都の端に位置する、小さなボロ屋敷だった。元はそれなりに豪華だったのだろう。そこはしこに名残が見え隠れしていたが、半壊した門に、雑草が伸び放題の庭が、哀愁を誘った。

グルリと屋敷全体を囲う壁は、ところどころ穴が開いたり欠けたりしており、少なくとも数年は人の手が入っていないことがうかがい知れた。

少女は慣れた様子で屋敷の中へ入っていく。月明かりがあるとはいえ、屋根一つ潜ればそこは闇。松明で照らそうにも、万が一屋敷に引火すれば、えらいことだ。

アイテム欄から提灯を取り出し、内部の小さな火種に火を灯す。松明の火を消すと、さすがに松明よりは暗い。

もはや門の役目を果たしていない正門を抜け、屋敷の中に入れば、その痛み具合が見て取れる。廊下にはいくつもの穴があり、壁の至る所に傷が付いていた。

廊下の奥の方では、少女が振りかえって彼を待っていた。正門前で準備をしていた彼に気付いて、待っていてくれた。彼は小走り少女に追いつくと、少女は興味深そうに提灯を見つめた。

「ああ、これか？」

少女によく見えるよう、軽く持ち上げる。小さくうなずく少女を見て、彼は説明した。

「これは提灯といってな……まあ、松明よりも暗いが、室内でも使

える便利な、小さい松明と違ってくれたらいい」

その説明に少女は納得したのか、ジロリと提灯を見つめた後、すぐ近くの部屋に身体を滑り込ませた。彼も、倣って後に続いた。

「……」

「……」

「……」

部屋の中は、屋敷の中では不釣り合いなくらいに損傷が少なかった。といっても、注意深く見ればいくらかでも見つかるが、一晩寝るだけなら十分過ぎるぐらいにお釣りがくる部屋だった。

「あ、囲炉裏がある」

思わず声が零れた。部屋の中央には囲炉裏……に近いものが設置されており、これならば松明で明かりが取れそうだ。再び松明を取り出してそこへ突き刺し、衝撃波で火を灯した。途端、ぼんやりと松明の明かりが室内を照らす。

おまけに、この部屋は屋敷の中でも外側に面しており、向かい側には塀で囲まれた小さな庭があった。おそらく、屋敷の中では一番最奥にあたる場所なのだろう。これならば、アレを使っても大丈夫だろう。

「よし、とりあえず、風呂に入って身体を洗うか」

「……お風呂？」

彼の言葉に、少女は首を傾げた。一般的な庶民にとって、お風呂というのは全て蒸し風呂であり、普通は集落に一つが基本だ。

それ以外に身体を洗うと言ったら、川に入るか、濡れた手拭いで身体を擦るかのどちらかしかない。

貴族の屋敷なのだから、蒸し風呂ぐらいは備えていても不思議ではないが、使うには薪がいるし、水も必要だ。なにより老朽化しすぎて蒸し風呂としての役割を果たせないのは想像するまでもない。それが分かっている少女は、何をするのだろうか、彼を見つめた。

「まあ、見ていろよ」

彼は早速アイテム欄から特性の石風呂を庭へ取り出した。傍目からすれば、不気味以外の何物でもないだろう。

音も無く出現した石風呂に目を白黒させる少女を尻目に、彼は水を取り出して石風呂の中へ注ぐ。十分に溜まったのを確認してから、片手を突っ込み、衝撃波で一気に水温を上昇させる。

「……………」

瞬く間に湯気が立ち上っていく水……………湯船に、少女は口をポカんと開いたまま、黙って彼と石風呂を見つめた。

「よし、これぐらいかな」

湯船を掻きまわして、湯温を一定にする。石風呂と湯温が程良く均等に温まったのを確認してから、彼は着ている衣服を脱ぎ捨て……………  
…よつとして、止めた。

「お前はどつする？」

「……………え？」

彼の言葉に、少女は顔をあげた。

「お前も入るか？ 入るんだったら、先に入れ。俺は後でいいから」

「…………えっと」

少女は頭を悩ませた。目の前で信じられないことが起こったばかりで、上手く頭が動かない。しかし、彼の言っていることを理解する程度には起動しているので、問題は無い。

「…………いい」

「入らないのか？」

「…………うん」

「入るのは嫌か？」

「…………入ってみたい…………けど…………」

「…………けど？」

本音を言えば、入ってみたい。でも…………。

「もしかして、怖い？」

「…………うん」

俯いて黙ってしまった少女に、彼は頭を掻いた。

「…………一緒に入るか？」

「………………………うん！」

返事は、大きかった。たった今怖がっていたのはどうなったのやら、促すよりも早く衣服を脱ぎ始めた少女に、彼は大きく笑った。

この後、少女が湯船にはしゃいでお湯を二人の衣服に掛けてしまいい、ついではかりに衣服を洗濯することになるのは別の話。

その後、彼が用意した衣服を暑いから嫌、と彼の懐に滑り込む、



裸体をしっかりと彼に巻きつけて、彼に溜息を吐かれるのも、別の話。

赤毛さん、再び（後書き）

お風呂シーン？ そんなのありませんよ。だってこの話は、KEN ZENですから。

（そう言っておかないと、規制されるから、黙っておこう）

でも、きつとこの話は、下手すれば18禁に入ってしまうのでしょ  
うね。世知辛い世の中です。

でも今は、そんなことはどうでもいいんだ。重要なことじゃない。  
いやあ、こんなに私と運営との意識に差があるとは思わなかった。

嵐の前触れ（前書き）

スーパー急展開が続きます。

## 嵐の前触れ

朝食は身体の資本というが、それは当たり前のことだが、何時の時代も変わらない。とくに、彼のように鍛えられた肉体を持つ男にとっては、いかに朝食が大事であるかを知っている人は多いだろう。もともと、朝食の大切さが証明されるようになるのはそれから千年以上後の話なのだ。

やはり、一人で食べる食事よりも、大勢で食べる食事に限る。彼はほんのり焼き色がついた魚の身を解しながら、そんなことを考えた。

赤毛少女と別れ、屋敷に帰る途中の河川敷で捕まえたその魚は、新鮮なだけあって、とても美味しいものであった。

翁夫妻はもちろんのこと、輝夜や妹紅も頬を膨らませる程度だったのだから、彼にとっても、その美味はひとしおだろう。

「そうそう、私、次の満月がきたら、月に帰るから」

「……は？」

食事も終わり、各々がくつろいでいる中、諸々の報告（ただし、余計なところは省く）をした彼に、輝夜が返答したのはそれだった。何を言っているのか分からない。そのときの彼の顔に浮かんでいたのはそれで、輝夜の横でお茶を啜っていた妹紅も同様に、目を点にしていた。

その横で、翁夫妻はさつさと食器を持って行ってしまったのは、輝夜との長い付き合いからくる慣れからだろうか。夫妻にとって、輝夜の突拍子な発言や行動は、もはや朝起きたらトイレに行くぐらい当たり前のことなのだろう。

それじゃあ、わしらが食器を持っていこうかの？

ええ、お願いします、お爺様。それと、ちょっと話が長くなると思いますから、席を外しておいてくれないかしら？

それは構わんが、わしらにも話せないことなのかい？  
うふふ、お爺様。若い者同士のお喋りに口を出すのは、無粋とい  
うものですよ。

おやおや、これは一本取られたわい。

そうにこやかに談笑し合う夫妻と輝夜を他所に、妹紅は四つん這  
いで彼へと近寄ると、胡坐をかいた彼の膝に、お尻を落とした。

「ねえ、今さつき、輝夜は何て言ったか分かる？ ちよっとよく聞  
き取れなかったのよ」

「大丈夫だ、問題無い。俺もよく聞いていなかった。それと、お前  
は何食わぬ顔で俺を座布団がわりにしていやがる。重いから離れる」

途端、妹紅の腰が持ち上がり、彼の顎に衝撃が走る。仏頂面の彼  
は、自爆して涙目になっている少女の頭を撫でた。キメの良い、手  
入れの行き届いた黒髪だ。お風呂に入っているおかげで、指には垢  
が付くことも無いし、異臭もしてこない。

「痛い……乙女の身体に何て事をするのよ」

「自分からやっておいて、なぜ俺が怒られるのか、完全に理解不能  
なんだが」

「乙女に向かって重いと云った罰よ」

「……だが、都では貴族の女性はある程度太っている方がよいと聞  
いていたのだが？」

彼の言葉に、妹紅はため息を吐いた。

「太ることと、重いつてことは別なのよ」

「……どう考えても一緒だろう」

「違うわよ。そこらへんは、女心ってやつよ」

「分かん」

「分からなくて当然よ。男には万年掛ったって理解出来る代物じゃ  
ないもの」

やれやれ、と首を大げさに横に振る妹紅を、じっと見つめる。

そつえば、ちよっと前に赤飯炊いたな。

とくに誰からも何も言われなかったし、言わなかったが、ほんのり顔を赤くしている妹紅の様子から、だいたい彼女の事情は分かっている。その日からそう経ってはいないのに、もう一端の女になつたかのような言葉だ。

現代とは違い平均寿命が低いこの時代では、自然と結婚適齢期が早くなるのも仕方ないのだろう。彼からすれば、妹紅など子供で、むしろ子供が背伸びをしているようで、微笑ましさすら感じた。

確かにこの時代、妹紅の年齢ならば、男と通じてもおかしくはない。むしろ、妹紅ぐらいから他所の貴族から求婚話が出てくるのが普通だろう。しかも、妹紅は貴族の中でも力のある、藤原の一族だ。本人いわく、私は妾の子だから父とも仲良くないし、結婚してもあんまり意味は無いと口にはしている。だが、妾だとしても、藤原の名を有する者と関係を作れるというのは、野心を持つ者にとっては魅力的だ。

本当なら、妹紅はこうして彼の膝の上でじゃれあう場合ではないのだろう。一刻も早く有力な一族と婚姻し、藤原の力をさらに高める定めを果たさなければならぬのは、妹紅自身分かっているのだろう。事実、結婚、という言葉に、彼女は寂しそうに、申し訳なさそうに視線を落とした。

……まあ、妹紅が望んでここにいるのだから、俺が口出しする話でもあるまい。せめて、ここに居る時だけはそういったことは考えさせないようにしてやろう。

そう考えを纏めた彼は、妹紅の腹に手を当てた。肌触りのいい白生地が滑らかさと共に、柔らかな脂肪の感触と体温が伝わってくる。体勢から考えれば、腹周りの脂肪が前に張り出すようになるはずなのだが、軽く力を込めれば、すぐに固い腹筋の感触が伝わってきた。都で出会った時のような金の掛つたものではなく、生活性を重視したものである為、かなり薄めに作られている。それを考えても、妹紅の腹周りには肉が付いていないのがよく分かった。

パチン、と、彼の手が叩かれた。ついでに、手の甲を抓られる。

「ちょっと、なにいきなり発情しているのよ。まだ朝よ」

「……どこから突っ込めばいいか分からんが、とりあえず、そういうつもりじゃない」

「じゃあ、どういうつもりよ。私、始めてだから、優しくしてよね」唇を尖らせてそっぽを向く妹紅の首筋は、まるで湯に2時間浸かったかのように赤くなっていた。彼の位置からは首筋しか見えないが、おそらく顔も同じような状況だろう。

「いや、だから、そういうつもりじゃない……っというか、お前は何を口走っているんだよ……そうじゃなくて、貴族は確か太っている女性の方がいって話を思い出しんだよ。それで、同じ貴族なのに妹紅はずいぶんと痩せているなって、疑問に思ったただだよ」

「あんなの、短歌と口説きと自慢に一日を費やしている貴族どもの常識でしょ。まあ、太っている方が触り心地はいいし、柔らかいから人気が出るのは分かるけど、私はあんな風にはなりたくないわ。始めては布団の上で、接吻から始めてよね」

「そういうもんなのかね……まあ、多少太っているぐらいは許容範囲だけど、さすがに目に見えて太っているのは……俺も駄目だな」

その彼の言葉に、妹紅の目がきらめく。何時の間に夫妻と話を終えたのか、傍に寄っていた輝夜が、そつと彼の手を抱きしめた。

しまった、面倒なことになったぞ。そう、口に出さなかつたことを、彼は自画自賛した。口に出していれば、口に出すのも嫌になるぐらい面倒なことになるのは明白だからだ。

彼はふと、酒に酔った諏訪子と神奈子のことを思い出した。あの二人は元気にやっているだろうか。今度、里帰りするのでもいいかもしれない。

「そうよね、太っているよりも、痩せていて、程良く肉が付いたくらいが一番いいわよね。私も始めてだから、接吻から始めてね。もちろん、最初は優しく唇によ」

「輝夜もそう思う？」

「ええ。妹紅も？」

「うん。だって、太ったら動きにくくなるし、すぐに汗が出るわ身体が臭くなるわ、あんまりいいことがないんだもの。着物だってその分大きいものを買わなくちゃいけないくなるもの」

「そうよね……なんであんなに人気が出るのかしらね……そういうえ、妹紅は知っているかしら？」

「今は知らないわ」

「まだ何も話していないじゃない……えっとね、つい先日耳に入っただけ、一部の貴族では、今は……男色が流行っているんだって」

「え、それって本当？」

輝夜の言葉に、妹紅の瞼が大きく開かれる。そのまま静かに彼へ視線を向けた。

「なぜ俺を見る？」

「あんた、まさか……」

「本当に何から言えばいいかわかんが、俺は男より女が好きだぞ」「そうよ、こいつは男の穴より女の穴の方が好きなのよ」

「何を人聞きの悪い事を、お前は何を口走っていやがる」  
振りおろした拳が輝夜の脳天を直撃する。ふおお、と男には見せられない苦悶の表情で頭を抱える少女を、彼は呆れた眼差しを向けた。

これが、都の中でも力のある5人の貴族から求婚されていると思うと、彼は外見に騙されている貴族達に憐憫を禁じえなかった。本当に、見た目はいいのである。見た目は。

ただ、中身があまりにも残念なだけ……いや、むしろ、年相応なのである。天真爛漫というか、お転婆というか、とにかく自分のしたい事はする、したくないことは絶対しないという、骨の髄まで生まれついてのお姫様なのである。

けれども、それが妙に似合っているあたり、さすがは、なよ竹の輝夜姫なのだろう。これが妹紅なら、ここまではいかなかっただろう。



「……でも、男同士で……どうやって……その、するの？」

妹紅の台詞に、彼の動きが止まり、輝夜のうめき声が止まった。見れば、妹紅は自分の台詞に羞恥心を抱いたのか、恥ずかしそうに彼の胸元に顔を埋めていた。

「そんなことは三回ぐらい死んでから考えて、とにかく妹紅は俺の膝か」

「お尻よ」

「え？」

「お尻を使う」

「なにそれ卑猥」

顔を真っ赤にした妹紅に釣られるように、輝夜の頬も紅潮していく。どうやら、想像してしまっただらしく、お尻に手を当てて、太股を擦り合わせていた。

「お前ら人の話を聞けよ」

彼の言葉は、悲しいぐらいに二人の頭をすり抜けていった。

「……え、でも、お尻って、その、不浄が出てくるところでしょう？　そ、その、汚くないの？」

「馬鹿ね、使う前に綺麗にしておくに決まっているでしょ」

「そ、そうよね」

「なんでも、薬草を煎じて溶かしたお湯をお腹の中に流し入れて、中に入っている不浄を全部出してからやるみたいなのよ」

「へ、へえ、凄い、ね」

想像したのだろう。妹紅は恥ずかしそうにお腹に手をやった。彼女には全く想像できなかったが、お腹の中にお湯が溜まっていくというのは、なんとなく感覚的に想像出来た。

お腹いっぱい水を飲んだ時みたいになるのかしら、と一人妄想を続ける妹紅に、輝夜の瞳に喜色が浮かぶ。自分の話にこうやって反応を返してくれるのは、何時見ても気持ちがいいものだ。

「しかも……それって、女相手でもやるらしいわ」

目に見えて、妹紅の頬が赤くなる。パタパタと手と首を振った。

「え、えええ!？」

「おまけに……慣れると、すつごく気持ちいいんだって」  
「き、気持ちいい……」

二人の視線が、自然と一つへ向かう。もはや、血液を塗りたくったかのような顔色になってきた二人を見て、彼は早く終わらないかな……と、遠い青空を眺め続けていた。

「あ、あのさ」

「お、お尻に興味はない？」

「少なくとも、お前らにするつもりはない」

この騒動は、結局お昼を過ぎるまで続いた。

「それで、結局のところどうなんだ？」

お昼過ぎ。翁夫妻が用意した握り飯を食べ終わった彼と輝夜と妹紅の三人は、お茶を啜っていた。朝と同じように、席を外した翁夫妻を見送った彼は、輝夜にそう話を切り出した。

「ん？ お尻の話？」

「違っつていうか、もうその話は止める」

「五つの難題の話じゃないの？」

「あれはもう終わったでしょ……あれ、あんた知らなかったっけ？」

「俺は知らん」

「あれは傑作だったわ……わが父親だけど、あんなに顔を真っ赤に恥じ入っているのは始めて見た。おかげでしばらくお腹が痛くて堪らなかったわ」

「あのときは妹紅、半日笑っていたものね」

「それじゃない。いいかげんにしろ」

これ以上の脱線は沢山だと言わんばかりに、彼は輝夜を睨んだ。ああ、そういえば、元々はそういう話だったわね、と呟く妹紅がいたとかいなかったとか。

さすがに輝夜もこれ以上茶化すつもりはないのか、湯呑に残って

いたお茶を一息に飲み干すと、彼と妹紅を順に見つめた。

「……………」  
無言の一瞬。トン、と机の上に置いた湯呑が、合図だった。

「まず、結論から言うわ。私は、地球の……というより、人間じゃないの」

「地球？」

首を傾げる妹紅に、輝夜は首を振った。

「この世界全部のことよ……私は、この星の人間じゃない……私はね、あの夜空に浮かぶ、月からやってきた、月人なのよ」

……輝夜のその言葉に、深い、深い沈黙が流れた。いつもなら、妹紅も彼も、何をまた冗談をと輝夜に言っていただろうが、今回はかりは言えなかった。

輝夜の瞳が、あまりにも真剣だったから。いつもの余裕綽々としたものではなく、どこか高みを決めた瞳でもない。

迫力が違った。真実を話しているということが、言葉ではなく、心で伝わってきた。だから、妹紅も、彼も、黙った。黙ったまま、静かに輝夜の言葉をかみ砕いた。

……静かに、ゆるやかに、妹紅の瞳に、困惑の色が浮かぶ。それはそうだ。見た目は完全な人間がいきなり、私は月からやってきた人間じゃありません、なんて話したところで、信じてもらえるわけがない。

輝夜はそれを見て、無理もないと思った。話した輝夜自身、信じてもらえるとは思っていない。むしろ、一笑されなかっただけ、妹紅も彼も真摯に受け止めてくれていることに、感動すら覚えた。

ふ、と輝夜は違和感を覚えた。妹紅の困惑に満ちた瞳は理解できる。想像していたとおりだ。

しかし、彼の方は、想像とは違っていた。そこにあったのは、困惑でもなければ嘲りでもない。輝夜の語彙では表現出来ない……なにか、深く、激しくて、それでいてとても穏やかな、見ているだけで心をかき乱されそうな何か、その瞳には浮かんでいた。

なんだろう、あれは。

不思議に思えた。今まで見た人々の中に、彼と同じ瞳を持った人は一人も居なかった。そんな瞳を、彼が今、自分に向けているということに、輝夜は心底不思議に思えた。

……そういえば。

輝夜は彼と出会った日から毎日を思い出す。色々あったし、驚かされた。見た目は筋肉隆々の男だが、意外と繊細で、流されやすい少女の自分に頭から命令されているのに反抗せずに従うし、狼藉を働くことも無い。文句はよく口にするが、それも不快に感じる程ではなく、それが彼の性格なのだろうと、むしろ好意的にすら感じた。衝撃波を自在に操るだけでなく、身体能力もずば抜けている。貴族の男どものようなでかすぎる自尊心も無いし、かといって卑屈というわけでもない。不思議な男だ、と、輝夜は思う。

そして、彼のことを回想しようとして……気付いた。彼の好きなご飯、嫌いな物、苦手な物、好きな遊び、彼の能力、知っていることは色々ある。それこそ、片手ではとうてい足りない程度に彼を熟知しているつもりでいる。

しかし、それだけだった。彼がどうしてそんな力を身に付けたのかも、以前はどんな場所で生活していたのかも、何も、輝夜は知らなかった

結局のところ、私はこいつのことを、まだ何にも知らないんだな……。

そのことに思い至った輝夜は、なんだかとても寂しく思えた。なぜならその結論は、妹紅にも通じるから。

「……私は、月から来た」

仕切り直すように、輝夜は呟く。

「話せば長くなるから、省略するけど、私がこの星……あんたと妹紅が住んでいるこの大地だけど、この星に来た理由は、私が禁句を……犯してはならない罪を、犯したからなの」

「罪？」

「ねえ、妹紅。あなたは、私が幾つに見える？」

彼の眩きを遮ったその質問に、妹紅は首を傾げた。

「……幾つって……まあ、せいぜい私と同じくらい……かな」

「私、これでも今年で3097歳なのよ」

「……………は？」

ポカン、と開かれた口を見て、輝夜は笑った。

「うふふ、普通はそうよね……でもね、事実なの。私はこう見えて、3000歳を超えているのよ」

「……………えっと、本当に？」

「嘘をついても意味はないわ。見た目は妹紅と同じでも、中身はしつかり年を取っているのよ」

それが良い事なのか悪い事なのか、私には答えを出せないけど。

そう、呟いた輝夜は、一つ、溜息を吐いた。

「……………私の罪はね……ある薬師の力を借りて、ある薬を作り上げてしまったこと。そして、それを私が飲んでしまったことなのよ」

「……………その薬って？」

「……………不老不死の薬よ。厳密に言えば違うけど」

「ふ、不老不死って、老いない、死なないっていう、あの？」

「私から言えば、老えない、死ねない、が正しいわ。そう、その不老不死。その薬の名は、蓬萊の薬……月の頭脳と謳われた薬師と、ただただ狭い箱庭で日常を生き続けることに飽いた馬鹿な女が作り上げた、碌でもない代物よ」

ピクリ、と彼の肩が震えた。

「罪を犯した私を、月は許してくれなかった。私は罪人として地上……ここへ落とされ、そして輝夜と名付けられた……そして、つい先日、私の元に使者が訪れた」

「あの人？」

「ええ、そうよ」

話を通じ合っている二人を尻目に、彼は首を傾げた。どうやら、出かけている間に尋ねてきた客らしい。もつとも、今はそれは重要

ではない。彼にはもつと、知らなければならぬことがあったから。  
「その使者は私に言ったわ。私は地上にいて、もう十分過ぎる程に罰を受けた。だから、月へ帰る許可が下りた、とね」

「そ、んな……そんな話がある!？」

バン、と机を叩いて、妹紅は立ち上がった。烈火のごとく燃えあがった激情が、その瞳に浮かんでいた。

「輝夜! あんた、まさかその話を、はいそうですか、わかりましたって言ったんじゃないわよね!？」

「そんなこと、私が言うわけがないでしょ!」

珍しく、本当に珍しく輝夜が声を張り上げた。滅多に見せない輝夜の怒声に、妹紅はピクンと肩を震わせた。

その様子を見た輝夜は、あ、と声を漏らすと、申し訳なさそうに頭を下げた。それに合わせて、妹紅も一言謝った後、その場に腰を下ろした。

気まずい沈黙が流れる。輝夜も妹紅も、どうしたらいいかわからない、そんな表情で、床を見つめている。

「脅されたのか？」

ポツリと響いたその言葉に、二人は一斉に顔を上げた。見れば、今しがたまで黙って様子を伺っていた彼が、自身の湯呑に残っていた最後のお茶を飲み干しているところだった。

「……どうして、そう思ったのかしら？」

「月での日常を捨て、罪人になってまでこの星に来たんだ。ようやく最近友達も出来て楽しく過ごせていたところを、はい分かりました、帰ります、とはいかんだろ、普通。せいぜい考えられるとしたら、ここ以上の何かか月で待っているか、あるいは月に帰らざるを得ない理由が出来たか……そのどちらかだろう?」

彼と妹紅の瞳が輝夜へ向けられる。視線の先にいた少女は、はあ、と溜息を吐いて、頷いた。

「ええ、そうよ。脅されたの。大人しく月に帰らないと、お爺様や妹紅達を皆殺しにするって」

「っ！！帝に言おう！」

堪えられない。そう言わんばかりに激情を胸に耐えた妹紅が、再度立ち上がった。

「無理よ」

それに答えた輝夜は、反対にどこまでも冷めていた。まるで、こうなることが分かっていたかのように。事実、分かっていたのだらう。

「大丈夫よ。帝も輝夜のことを気に掛けているわ。貴方が命を狙われているとでも言えば、帝は喜んで軍を動かしてくれるわよ」

「そんなもの、何の意味もないわ」

顔を上げた輝夜の瞳に、妹紅は目を見開いた。

「ねえ、妹紅。あなたには想像出来ないでしょう。五つ数える間に20人を殺せる武器を。千を超える弓矢を防ぐ盾を。万を滅ぼせる爆弾を、あなたは想像出来ないでしょう？月の奴らは……その想像出来ないものを当たり前のように駆使してくるのよ。こちらが一人あいつらを倒す間に、こっちは500人ぐらい殺されるわ。いえ、まず間違いなく、手も足も出せないまま、全員なぶり殺しにされるでしょうね」

「っ、そ、そんな馬鹿な話……帝直属の軍は、精鋭部隊。そんなじゃそこの山賊とは……」

「妹紅」

たった一言が、妹紅を黙らせた。

「あなたの気持は嬉しいわ……でも、無理なのよ。どうにもならないことなの。どうにもできないことなの。もう、私が月に帰るのは決まったことで、これが一番丸く収まるのよ……お願い、分かって頂戴」

「……そ、そんな……そんなのって……」

目に見えて妹紅の瞳から激情が消沈していく。

「妹紅……」

潤みを含んだ、輝夜の呼びかけを最後に、再び、沈黙が流れた。

静かに、静かに妹紅が輝夜の傍へ寄る。輝夜が両手を広げると、妹紅はそこへ自身を滑り込ませた。そして、静かに身体を震わせた。それに合わせるように、輝夜の瞳に涙が滲む。音も無く零れた涙が頬を伝って、妹紅のうなじに流れ落ちた。

途端、輝夜の胸元から嗚咽がこぼれ始めた。

「ねえ、妹紅。あなたは怒るかもしれないけれど、私は今、幸せよ」  
返事は返ってこなかった。ただただ、胸を締めつけられるような鳴き声だけが室内に響いた。

「私は今、幸せを感じているわ。月にいた頃の日常では決して感じなかった、背筋が奮い立つような幸福が、私の全身を駆け廻っているのが分かるの」

「ねえ、妹紅。あなたは、私がいなくなることに泣いてくれているわね。私と離れ離れになることに涙を流してくれているわね」

「それが堪らなく嬉しいの。それがどうしようもなく嬉しいの。今すぐ外に飛び出して、この喜びを青空に叫びたいぐらいに」

「私は今まで全てがどうでもよかったわ。生きることも、死ぬことも、全てどうでもよかった。何時死んでも良かったし、何時月に、返っても良かった。どこ、に行っても良かったし、どこで暮らしても、よかった。日常なんて、唾棄すべきものだった」

「死を望んだこ、ともないけど、生きたいとも望んだ、こともない。ただただ、過ぎ去っていく、今日を、眺、めて、欠伸を、していたわ」

堪えていた涙腺が、決壊する。輝夜の瞳から滝のように涙が零れ落ちていき、妹紅の身体を濡らしていく。鼻の頭が赤くなり、噛みしめた唇は白くなっている。

「今頃になって！」

「ここまで来て！」

「貴方達と離れ離れになることを、悔みでる！」

「離れたくない！」

「ずっと一緒にいたい！」



「生きていたって、思ってる！」

「いまさら……今頃になって……日常が、惜しいのよ……」

その言葉を最後に、輝夜から嗚咽が漏れ始め、遂には子供のよう  
に激しく泣き出した。それにつられるように妹紅も鳴き声をあげ、  
二人の悲鳴が響いた。

二人をジツと見つめていた彼は、音も無く立ち上がって、そつと  
部屋の外へ出た。そして、ふう、と一つ溜息を吐いて、首を鳴らし  
た。

「……………」

ふと横を見れば、翁夫妻が静かに彼を見つめていた。

「……………」

「……………」

会話は無い。夫妻は静かに頭を下げると、彼の視界から姿を消し  
た。

「……………ふう」

もう一度、溜息が零れる。そのため息は、背後の鳴き声にかき消  
されるように溶けて消えた。

「……………人生、ままならないもんだよな……………そう思うだろ、永琳？」  
握りしめた拳の中で、彼は一つ、決意を固めた。

## 嵐の前触れ（後書き）

はいはい、テンプレテンプレ。といっても、私にとって、こういうテンプレなだけであって、万人がテンプレとは思わない展開なのかもしれない。

今回はオツパイ分はありません。この話はKENZENだから。  
次回か、その次ぐらいには、あの人を出そうかな。

時の流れは無情にも(前書き)

シリアス注意、グロ注意。あと、今回はオツパイは無いよ。

## 時の流れは無情にも

秘密とは、何時の時代も本人の知らぬ間に漏れるものである。それは平安の世でも変わることはなく、輝夜姫の美貌を一目見ようと盗み見していたある貴族によつて都中に話が広がり、遂には帝の耳にも入ることになった。

真偽の程はさておき、輝夜姫を月に返してはならぬ。なにより、我ら貴族に対して断りもなく領地に侵入するのはまかり通らぬ。

そう思ったのは、果たして帝か、それとも貴族か。日に日に落ち込んでいく輝夜姫のことを知った帝は、もしかや本当のことなのでは、と考え、さつそく、軍を屋敷へと派遣した。

何事かと騒ぐ民衆の中にちらほらと聞こえる輝夜の名前。それはいつしか声援となり、軍隊の背を押していく。軍の士気は否応にも上昇していく。

都を出発した軍隊は、物珍しさに近寄ってきた魑魅魍魎を一撃のもとに葬り去る。何度かの休憩をはさみつつ、夕方頃には屋敷に到着した。

挨拶もそこそこに軍は屋敷を包囲するように散開。瞬く間に陣が組まれていく。屋敷の奥から輝夜が様子を伺おうとしたときには、布陣は完成していた。

屋敷の周囲一帯を屈強な兵士が囲み、外からの襲撃に備える。内壁に沿うように弓隊と陰陽部隊が警護し、輝夜の部屋の周囲には選ばれた歩兵と弓兵と陰陽師が、二名ずつ配置された。

弓隊、剣隊、陰陽師、都から召集したのは、計150名の精鋭部隊。さらに、外から腕に覚えのあるものを集め、その数は37名。計、187名の輝夜姫防衛隊が結成された。

これには翁夫妻も感謝のあまり、涙を流した程だったが、輝夜と妹紅と彼は苦い顔をした。輝夜は、全く無駄なことをしたという思いから。妹紅はその倍の数が用意出来なかったのかという思いから。

彼は、犠牲者が増えかねないという思いから。

……すまん、今回ばかりはお前らを盾にするかもしれん。

士気も高らかに、鼻息荒く動き回る兵士達を見て、彼は舌打ちをした。

彼の知っているかつての時代でさえ、眼の前の兵士達を鎮圧することなど造作も無い科学力を持っていた。キラーマシンもあれば、ノンキラーマシンもある。恐竜すら蹴散らせることが可能な、あの時代から幾万年。

いまの月の科学力がどれほどのものであるのか分からない。月の連中がどれほどの戦力を用意してくるのかも分からないだけでなく、こちらが抵抗することなど、月の連中には……永琳には、筒抜けであるだろう。

ポツと、庭の一角が明るくなる。見れば、何時の間に用意したのか、竹製の支えに松明が取り付けられていた。見渡せば、そこらかしこに似たようなものが用意されている。

ふと顔を上げると、先ほどまで赤く染まっていた大空が、真っ黒になっていた。ポツポツと輝く星の光の中に、一際輝く星……満月が、遠い彼方でゆっくりと高度を上げていた。

ポツ、ポツ、と次々に明かりが灯されていく。これが祭りであったならば、さぞ見応えのある光景だっただろう。光が一つ灯るとともに兵士たちの顔から緊張の色が見え始める。もうすぐ、月の連中が来る事を予感しているのか、それとも別の意味からか、彼は察することが出来なかった。

兵士達から、隣で黙ったままの輝夜と妹紅へ目を向ける。

「……」  
「……」

そこには、ジツと夜空を……満月を見つめ続ける二人が居た。お互いの手をしっかりと握り合い、片時も離れないと言わんばかりに繋がった部分には、じつとりと汗が湿っていた。

輝夜も、妹紅も、酷く緊張していた。妹紅は傍目にも不安を覚え

るぐらいに落ち着きがなく、あの輝夜でさえ、何度も生唾を飲み込んで、着物の裾を握りしめていた。

そして、その後ろには、翁夫妻が静かに二人を見つめていた。何を言うでもなく、ただジッと、二人の後ろに腰を下ろしていた。

.....

彼の視線が、自然と翁夫妻に留まる。それに気付いた夫妻が、彼へと顔を向けた。翁夫妻の瞳には、確かな悲しみがあつた。だが、それしかなかった。月の人達に対する怒りは無い。

「.....」

「.....」

夫妻は、静かに居住まいを正すと、彼に向つて深々と頭を下げた。俯つて彼も頭を下げようとしたときには、夫妻は何事も無かつたかのように彼から視線を外し、お互いの手を握りしめている少女達に目をやっていた。

なぜ、夫妻は怒らないのだろうか。それが彼には理解出来なかつたが、夫妻には夫妻なりの理由があるのだろう。そう思った彼は、問いたださそうとは思わなかつた。

それよりも、まず自分に出来ることを考えねばなるまい。

少しずつ高く昇つていく満月を見れば、タイムリミットまでそう、時間は無い。それまでに、何か対策を思いつかねば、間違いなく輝夜が連れていかれ、場合によっては反抗したこちらの人間全てを皆殺しにされかねない。

そう判断した彼は、ステータス画面を呼び出した。

|      |   |   |   |   |       |   |   |   |   |
|------|---|---|---|---|-------|---|---|---|---|
| 【レベル | ： | 4 | 7 | 2 | 】     |   |   |   |   |
| 【体力  | ： | 1 | 8 | 5 | 0 / 1 | 8 | 5 | 0 | 】 |
| 【気力  | ： | 1 | 9 | 0 | 0 / 2 | 2 | 1 | 0 | 】 |
| 【力   | ： | 7 | 4 | 0 | +     | 5 | 0 | 】 |   |
| 【素早さ | ： | 8 | 0 | 0 | +     | 4 | 0 | 】 |   |

|       |              |   |
|-------|--------------|---|
| 【耐久力  | ：500 +10     | 】 |
| 【装備・頭 | ：なし          | 】 |
| 【     | ・腕           | 】 |
|       | ：諏訪子ガントレット   | 】 |
| 【     | ・身体          | 】 |
|       | ：高級な服（機能的重視） | 】 |
| 【     | ・足           | 】 |
|       | ：諏訪子ズボン＋諏訪子靴 | 】 |
| 【技能   | ：獣の本能・踏みとどまる | 】 |
| 【     | ：衝撃の称号・心眼    | 】 |
| 【スキル  | ：洞察力         | 】 |
|       | ：レベル85       | 】 |
| 【     | ：美感力         | 】 |
|       | ：レベル28       | 】 |
| 【     | ：逃げ足         | 】 |
|       | ：レベル245      | 】 |
| 【     | ：自己再生        | 】 |
|       | ：レベル6        | 】 |
| 【     | ：毒解能力        | 】 |
|       | ：レベル92       | 】 |
| 【     | ：フラグ         | 】 |
|       | ：時々発動        | 】 |
| 【アイテム | ：アイテム使用      | 】 |

あの時代から、彼の实力は桁違いに跳ねあがっている。それは彼自身、よく理解していたが、やはり妖怪に比べてあらゆる能力が低い。それでも並みの妖怪相手には瞬殺出来るレベルなのだが、今回の相手は月の連中だ。例えば倍のレベルがあったとしても、負ける可能性の方が大きかったらうと、彼は推測した。

紫や鬼達のような種族的な強さとは別に、何か能力を持っている。まだ対策を取れたのかもしれない。しかし、使えるのは鍛えた四肢と衝撃波、何処からともなく取り出せるアイテムのみ。相手が何の装備もしてこなかったならばともかく、パワードスーツ、あるいはプロテクトスーツを着てくる可能性がある。

アームズスーツと呼ばれていた、かつての武装兵器を、彼は思い返した。あの時代ですら、最新式のスーツを衝撃波で切り裂くことが出来なかったのである。あのときよりもはるかに高性能のスーツが開発されているのは予想するまでも無い。

そして何よりも。

「永琳……」

思わず零れたその言葉に、彼は慌てて口を噤んだ。幸いにも、彼の呟きに気付いた者はいなかったらしく、誰も彼に気を留めていなかった。

はあ、と溜息を零してから、彼は再び思考を始めた。

何よりも注意が必要なのは、永琳だ。彼女にとって、これら全ての事態は想定内。しかも、想定外を想定出来る彼女だ。例えば妖怪を集めて団結したところで、対妖怪用の武装を用意しているだろうし、それは彼にも想定出来た。

しかし、だ。彼は唇を舐めた。

唯一の想定外。それは自分だろうと、彼は思った。

もしも、永琳が彼の存在を知っていたならば、なにかしらのアクションを起こしてくる。既に万年が経過しているのだから、とつくに自分の事は吹っ切れているであろうことは彼にも予測がつく。

けれども、例え過去の男といえど、死んでいたと思っていた男が生きていたと分かれば、様子ぐらいは見に来るだろう。永琳の性格を熟知している彼は、それが全く無いことに注目した。

おそらく、永琳は俺が生きているということを知らない。そこに起死回生の勝機がある。そう結論付けた彼は、アイテムから深紅の生地を取り出すと、それをグルグルと顔に巻きつけた。外れないように、何重にも巻きつけた後、固く結んだ。

視界が真っ暗になる。同時により研ぎ澄まされた聴力を頼りに、周囲に気配を伺った。

心眼、発動！

視界情報とは別の、聴力、嗅覚、触角を頼りに気配を探り、擬似視覚を作り出す技能。平常時はほとんど使う機会がなく、氷河期時代で重宝したその技能を、彼は久しぶりに行使した。

おそらく、輝夜を迎えるのは永琳だ。そして、永琳はどちらかと言えば、物事を穏便に済ませるタイプだ。こちらが抵抗することな



ど百も承知である彼女が行う行動は、まずこちら側の兵士を無力化することだろう。

しかし、いくら永琳とはいえ、一度に全員の武器を取り上げ、拘束等を行うことなど出来るはずが無い。かといって、全員を撃退出来るだけの武装をしてくるとは考えにくいし、乱戦にでもなれば、肝心の輝夜に飛び火しかねない。

永琳としても、それは避けたいのではないか？

おそらく、輝夜は月世界では、それなりの地位にいたのだろうと彼は推測する。輝夜自身の口から聞いたわけではないのだが、わざわざ永琳が地上に出張ってきたり、追放したものをもう一度月へ戻すというのだから、だいたいは近い回答だろう。

つまり、月側としては、極力輝夜に被害がいかない手段を取る必要がある、言いかえれば、輝夜に対して手荒な行動は取れない、輝夜に被害が及ぶ兵器の使用が出来ないということになる。

ならば、考えられるのは限られてくる。永琳が最も得意とする薬で兵士達を無力化するか、鎮圧用兵器などを使った無力化だろう。

永琳の性格からして、他人が作った兵器よりも、自分が作った薬の方を信用しているのではないだろうか。

まず、薬を用いた無力化を行い、それでも完全に無力化出来なかった場合に限り、鎮圧用兵器を使用する。月の作戦としては、それが一番無難で、確実な作戦だろう。

ただし、その作戦に彼の存在が無ければの話だが。永琳のことを知る彼は、使われる薬は睡眠剤か、あるいは幻覚剤か、彼には判断出来なかったが、衝撃波で薬を飛ばす事が出来るので薬は問題ないし、鎮圧用兵器として使われるであろう閃光弾は、スタングレネード目を隠してしまえば防げる。

ゴクリと、唾を飲み込む音。位置関係から、それは妹紅の喉から発した音であると推測する。正確な時刻は指定されていないが、雰囲気で察したのだろう。早鐘のように鳴り響く心拍音が、妹紅の心情が彼に伝わってきた。

トクン、トクン、と自身の心臓の音が木霊する。耳を澄ませば、輝夜と妹紅の鼓動、翁夫妻の鼓動、兵士達の鼓動が聞こえてくる。一つ、一つ、静かに聞き分けていきながら、ゆっくりと意識を研ぎ澄ませる。

トクン、トクン、トクン、トクン、トクン、トクン。

静かに、静かに、静かに、静かに。

兵士たちの押し殺した呼吸が聞こえてくる。

トクン、トクン、トクン、トクン、トクン、トクン。

静かに、静かに、静かに、静かに。

「あ、あれは何だ!？」

兵士の叫び声。途端にざわつく周囲に、全員の視線が、兵士が指差した先を見据える。

彼もさらに検索範囲を広げる。衝撃波を生み出し、輝夜と妹紅を重点にバリアを張り、翁夫妻を背後に庇う。そして検索して捕まえたのは、空に浮かぶ塊だった。

「な、なんだ……ありゃ」

ポツリと零したのは、いったい誰であったか。それは兵士にしか分からなかったが、皆同じことを考えたのは、兵士以外の誰にも分かった。

夜空に、円盤が浮かんでいた。円盤としか、言いようが無かった。奇妙な旋回音を立て続けているそれは、夜の闇を滑るように黄金の尾を引きながら、屋敷へと向かっていた。

一際強く高鳴った鼓動は、輝夜の鼓動か。

あるいは、彼の鼓動か。

瞬間、円盤から一つ、黒い塊が落とされた。兵士たちの視線が塊に集中する。輝夜も、妹紅も、翁夫妻も、彼の意識も、全てがそれへと向かう。

そして、その塊は音も無く夜の闇を落下していき……地面に着地した瞬間、凄まじい衝撃波が爆散した。

.....?  
気付いた時、彼は自分の状況がよく分からなかった。先ほどまで視界を覆っていた暗闇が無くなり、美しい天の川が夜空に広がっていたのである。

「.....なに？」

零した言葉に、返事は返ってこない。静かだ。恐ろしく静かだ。先ほどまで聞こえていた虫達の声も、兵士達の息遣いも聞こえない。静かに、ただただ静かに彼の言葉が夜の闇にかき消されていった。

「.....輝夜.....妹紅.....？」

呼びかけるも、これが自身の声かと耳を疑ってしまうぐらいに小さく、頼りない。

何が、何が起きた？

輝夜と妹紅は？

何をされたんだ？

兵士たちはどうなった？

輝夜と妹紅は？

何が起きたんだ？

俺はどうなっているんだ？

ようやく動き始めた脳が、次々とエマージェンシーを鳴らし始める。しかし、指一本動かすのが億劫に感じる程の倦怠感が、彼の意識を陽炎の彼方へ溶かしていく。

「.....輝夜！ 妹紅！」

.....何秒たったのかは分からない。ふと、ああ、今、俺は仰向けになっているのかと自身の状態に思い至った瞬間、飛び跳ねるように身を起こした。

途端、凄まじい吐き気が彼を襲う。一気にせり上がってくる鉄臭い臭いから逃れるように、彼は衝動を吐き出した。

べちゃ、と亜麻色の木目が真っ赤に染まる。刺すような身体の痛

みを見無視するかのように次々に吐き出されていく血液に、彼は飛びそうになる意識を抑えた。

5度、口の中に溜まった血液を吐き出した彼は、乱れた呼吸をそのままに、顔を上げた。瞬間、彼は眼の前に広がった惨状が、いったいなんなのか、理解出来なかった。

「……………あ？」

呆けた掠れ声が唇から零れる。その瞬間だけ、彼は自分の状況を他所に、呆けることしか出来なかった。

目の前に広がっていたのは、地獄だった。

兵士は例外なく血反吐を吐いて、固い地面に横たわっていた。

先ほど真つ先に円盤に気付いた兵士は、ぼつかりと開かれた両眼の洞窟からおびただしい血液を垂れ流していた。傍には、その兵士のものであろう眼球が転がっていた。

口からミンチ状の液体が垂れ流されている者もいれば、蛸のように手足の関節が無くなっている者、中には原型が分からない程になっているモノもいた。

ふと、隣に目をやる。そこにあつた翁夫妻だったモノを見て、彼は喉元からせり上がってくる酸味を堪えなければならなかった。

そして、彼の視線が、ようやく目的の二人を捉えた瞬間、彼は震え立つような感情を抑えることが出来なかった。

「輝夜！ 妹紅！」

眼前に転がる瓦礫と柱を飛び越えて、二人の元へ駆けつける。そこで、彼は二人の状態に息を呑んだ。

「……………妹紅」

妹紅は、輝夜に庇われる形で仰向けになっていた。耳を澄ませば、微かにヒューツと掠れた吐息が妹紅から聞こえてくる。見れば、ほんのわずかながら胸が上下しており、虫の息ではあつたが、かろうじて死を免れていた。閉じられた眼からは血が伝っており、鼻、耳、口からは鮮血が噴き出していた。他の兵士達のように直視できない状態ではなかったが、それでもさっきまで見ていた妹紅の姿を思う

と、涙が込み上げてきた。

「……………輝夜」

輝夜に至っては、もはや一目で即死であることがうかがい知れる状態であった。妹紅に向かい合う形になった輝夜の後頭部は完全に粉碎され、頭髪の間から白色の大脳皮質が零れていた。見事な装飾が施された着物は無残に細切れになっており、元の美しさが見る影もない凸凹だらけの紫色の素肌が露わになっていた。

「妹紅……………輝夜……………」

唇が発した言葉は、驚くほどに小さく、震えていた。思いだす。二人の悲しみに木霊する泣き声を。ただ友の傍に居たいと願う少女達の叫びを。帰りたくないと願う言葉を。行かないでと願う言葉を。彼は、全てはつきりと記憶している。

「……………ちくしょう……………」

体中が熱い。頬を伝う液体が、二人の身体を濡らしていく。身体中の水分が排出していく感覚が広がる。ぼやけた視界の中で、モノに変わり果ててもお互いの手を握り続けている小さな手が鮮明に映る。

「……………ちくしょう……………」

地獄の業火ですらこの熱さを現すには生ぬるいと思えるほどの、巨大な熱意が臍物を駆け廻っていく。

これは何だろう。この気持ちは何だろう。この五臓六腑を燃やし尽くさんとするこの灼熱の感情はなんだろうか。

「……………ぶっ殺す」

自身の唇が発した言葉に、灼熱が意思を持つ……………その名前は……………。

「あら、生きていたのね」

背後から掛けられた言葉。この惨状を生み出した一味とは思えない、動揺の欠片も感じられない女性の声。赤と青の特徴的な服をまとった銀髪の、その女性の傍に感じる、幾人もの気配。おそらく、永琳の部下だろう。

彼が、彼の生涯の中で、もっとも好きだった声。

「しかも、けつこう動けるのね。驚いたわ。でも、その怪我じゃ、あんまり動くと早死にするわよ。あと数分の命だとしてもね……よく見たら、その女の子……輝夜が庇ったのかしら？ その子もまだ生きているみたいね」

ゆらりと、彼は立ち上がった。途端、女性を除く気配がにわかにな殺気立つ。それを、女性は手を払って落ち着かせた。

「全く、いくら不死とはいえ、無茶するわね。貴方も安心するといいわよ。輝夜なら、あと数分もすれば傷も治るから……なんたって、不死身なんだものね」

「……どうして、こんなことをした？」

自分の出した声に、心の冷静な部分が驚く。ここまで低く、聞いた者を震え上がらせる声が出せたのかと、彼は奇妙にも目を見張った。

「こんなこと？」

対して、女性は何を言っているのか分からないと言わんばかりな、無邪気な問い返し。爆発しそうになる感情を必死に抑えつつ、彼はもう一度問う。

「どうして殺した……お前達なら、無傷で輝夜を連れ出せただろう」

「……貴方が輝夜から何を聞いたのかは知らないけれど……」

そこで、彼女は一拍置いて。

「だって、面倒じゃない」

今日買物に行くのが面倒だ。その程度、その程度の重みにしか感じられない、軽い返事。

その言葉を、彼は理解出来なかった。彼の知っている彼女が発した言葉だと、彼は思えなかった。

「……めん……どう？」

「そうよ。だって、いちいち全員を無力化するより、爆弾で全員まとめた方が、効率的でしょう」

「……関係の無いやつら全員を殺してもか？」

「……貴方が何を言っているのか分からないわ」

その次に発した言葉が耳に入った瞬間、彼は想い続けてきた感情が冷めていくのを自覚した。

「地上人が一人死のうが十人死のうが百人死のうが、大した違いはないもの」

確かに、おっしゃる通り。彼女の傍に立つ気配は、彼女に賛同して笑っている。何が面白いのか、眼の前の惨状を見て、頬を歪めている。

その言葉に、彼女が発したその言葉に、ぶちりと、何か千切れる音を、彼は聞いた。

「……永琳」

彼が発したその単語に、先ほどまで笑っていた女性……永琳は、ピタリと笑みを止めた。

「あら、私の名前を知っているのね。それも輝夜から聞いたのかしら？」

「……俺は、よう。前と比べたら、大分違うと思う。喋り方もそうだし、考え方も変わった。一人で生きてきたからなのか、どうも口が悪くなってしまっただけやがる」

「……あなた、何を言っているの？」

困惑に満ちた永琳の言葉を他所に、彼は腹から湧き上がってくる言葉を続けた。

「それは、お前にも言えるだろうよ。なんせ、ウン万年だ。考え方も変われば、趣向も変わる。性格だって変わるし、常識だって変わるさ」

「……ちよつと？」

「思えば、長い別離だったよな。生活も違えば、常識も違う場所なんだ。それが、お前達にとっては当たり前なんだろう……でもよ、俺は違うんだよ。俺は、俺にとっては、お前らの常識を受け入れることなんて、出来もしないし、したくも無い」

「……え、え……」

彼の言葉に、永琳の顔色が変わる。漏れ出る言葉を飲み込むよう

に両手を口に当て、大きく見開かれた眼が彼の背中へ注がれる。

「どうして、俺たちはこうなっちまったんだろうな。今でも時々考えるんだよ。あの時、俺はお前と一緒に行っていたら、今の俺には考えもつかない生活をしていたんだろうなって」

「……う、うそ……うそよ……うそよ、うそ、うそ、うそ」

ふわりと、彼の身体から放たれる怒気が広がる。突然の彼の行動に、どうしたらよいか分からない部下達を他所に、永琳の顔色が目に見えて青ざめていく。カチカチと歯を鳴らし始めた永琳を見て、部下達の顔から余裕が消えていく。

「永琳、聞いてくれよ。俺は、な。生まれて初めて、本当に殺した奴に出会ったんだ。そいつはよ、昔はそれは綺麗で、尽くしてくれた女なんだけど、今じゃすっかり変わり果てた屑野郎になっちまった。ああ、この場合、屑女か？」

固く握りしめた彼の掌から、幾重にも血が垂れていく。肌食い込む爪の激痛が妙に心地よい。

嫌、嫌、嫌、嫌、と被りを振る永琳を他所に、彼の中の激情が動き始める。

「ち、違っの、ご、誤解、ね、ねえ、誤解なのよ、ねえ、ち、違っ、違っ違っ違っ違っ」

「違わねえよ」

遮った彼の言葉に、永琳の肩が目に見えて震えた。

振り返る。そこに立っている懐かしい女性の姿。青ざめた頬に、零れ続ける涙、震える唇、かつての彼なら、慌てて宥めたであろう、その姿。かつての彼女よりも、さらに女らしさが増した、銀髪的美女。

しかし、今の彼には、そんなかつての妻の姿を見ても、何の感情ももたらさなかった。ただ静かに首を振り続ける永琳を見て、彼はゆっくりと構えた。

「てめえは、俺の知っている永琳じゃねえ……俺の知っている永琳は、あの時に死んだ……そう理解したよ」



「……あ、ああ、ち、違、違うの」

「違わねえって……言ってるだろうがああ!!」

激情が、爆発した。ありったけの力を込めた衝撃波が、永琳達へ発射される。

「待って!」

直前。背後から掛けられた言葉に、彼は攻撃を止めた。

慌てて振りかえった彼の前には、以前の姿のまま、何事もなかったかのように彼を見つめる、輝夜の姿が、そこにあった。

時の流れは無情にも（後書き）

再開して愛を確認して……そんな話だろうと思った諸君。  
残念、そんな都合よくハッピーとはいかないのだよ。

おっぱいを求める男が、そうやすやすと柔肌おっぱいを揉めないよ  
うに……ね（ドヤァ

平安編最終話・前篇（前書き）

今までのあらすじ。

「いったい何が始まるんです?」

「テンプレだ」

この話にはグロテスクな描写があります。注意してください。

## 平安編最終話：前篇

今まさに放たれようとする刃を抑えた彼は、静かに衝撃波を消失させた。余波によって彼の周囲には竜巻が現れたかのように砂埃が立ちあがっていた。

その砂埃もすぐにおさまると、辺りは静寂に覆われた。誰も、言葉を失くしてしまったかのような気味の悪い無音が静かに木霊する。人は、あまりに思考の範囲外の出来事が起こると、言葉を失ってしまうと言う。出来ごととは恐怖であったり驚愕であったり喜びであったり様々あるが、彼の口から言葉を奪ったのは、そのどれでもなく……憤怒であった。

それは、永琳達へのものではない。眼前で懇願する少女へ向けられていた。

「……おいおい、これって……。」

彼の脳裏によぎった言葉。想像してしまった事態。もし、それが事実であったならば、例え輝夜といえど認めるわけにはいかない。

出来るのであれば……考えたくなかった。目の前の少女に抱きつき、生きていることを喜びたかった。

「おい……輝夜よう」

「……………」

「それが、蓬萊の薬か……」

「……ええ」

チラリと、彼は倒れている妹紅へ視線を向ける。よく見れば、先ほどよりも頬が紅潮し、失いかけていた命の灯が少しずつ燃えあがっていくのが見て取れる。

「妹紅も……時期に目が覚めるわ。まだ、上手く力を操れていないから……再生に戸惑っているのよ」

彼の視線の先に気付いた輝夜が、彼の疑問に答えた。

「そうかい」

「……聞かないのね」

「何を？」

「何時、薬を飲んだってこととか、他の事とか」

思わず、彼は鼻で笑った。

「そんなの聞いてどうするんだよ。飲んだ日が一ヶ月前だろうが昨日だろうが今さっきだろうが、大した違いは無い。爺さんと婆さんにどんなふうにしたか話をつけたのかも興味は無いし、知りたくも無い」  
それよりも。

「重要なのは……輝夜。お前、こうなるって分かっていたな？」

ピクリと、輝夜の肩が動いたのを彼は見た。静かに彼は輝夜を見つめ、輝夜はそんな彼の視線から逃れるように俯いた。

ふわりと、もはや布切れとなった衣服が、彼女の細い肩から滑り落ちた。そこから見える素肌は、丹念に磨いたかのように白く艶やかで、立った今爆撃を食らったようには見えなかった。

余裕が無いのか、それとも気にしていないのか分からないが、輝夜は露わになった女性部分を隠そうともせず、黙って彼の視線から顔を背けた。

輝夜は何も返さなかった。何を返したところで、意味を持たないであろうとは、彼女自身理解していたから。何を話したところで、もはや遅すぎるであろうことを、彼女は重々承知していたから。

はあ、と思いたため息が彼の口から零れる。途端、輝夜と、永琳達の肩がピクリと震えた。

「もう、いい」

「……え？」

そう返したのは、果たして輝夜だったのか、永琳だったのか。あまりにも小さな返答だったため、彼を除く全員、自分がそう発してしまったかのような錯覚すら覚えた。

顔を上げた輝夜は、自身へ向けられた彼の視線を感じて、涙が出そうになった。そこにあったのは、かつての親しみが込められた温かみは一切なく、あるのは地面に横たわった虫を見るかのごとく色

が無かったからだ。

「もう、どうでもよくなった……俺はここを去る。後はお前たちだけが好きにやってくれ」

話すのも億劫だと言わんばかりに彼は痛みが走る身体に鞭を打つと、踵をひるがえした。

疲れた。彼は心底思った。脱力感とも倦怠感とも違う、言葉には出来ない無気力感の前に、彼はただただ帰りたくなった。

どこへ帰ろう。

どこで眠ろう。

どこで……ああ、そういえば、諏訪子の元を離れてから大分経つ。ここらで一つ、土産話でもしてやるうじやないか。

そうだ。自分はもう十分旅をした。鬼とも酒を飲んだし、天狗や河童とも酒を飲んだ。拳句の果てにはかつての同僚とも言葉を交わしたじゃないか……もう、十分だ。十分過ぎる。そろそろ……休まない。

そう考えた瞬間、右腕に感じた重みに、彼はたたらを踏んだ。見れば、そこには涙で顔をくしゃくしゃにした輝夜が、全身で彼の右腕にしがみついていた。

100年の恋すら冷めそうな顔になっている少女に、両腕で右腕を抱きしめられ、股の間に掌を挟まれている。腕から伝わってくる少女の感触に、普段なら多少動揺もしていただろうが、今の彼にとっては、ただ邪魔にしか感じなかった。

グイツと、左腕にも重みが走る。今度は何だと見れば、そこには輝夜と対になるように抱きついている妹紅の姿があった。怪我の痕すら見られない妹紅に、彼は振り払うよりも前に、ああ、本当に妹紅もそうなってしまったのだな、と思った。いいとこのお譲さんが台無しだな、と妹紅の顔を見て思ったことを、口には出さない。

「何だ？」

例え怪我をしていたとて、少女二人の体重などどうということはない。彼は全く歩くスピードを落とさないまま、二人に問いかけた。

「……どこ行くの？」

答えたのは、妹紅が先立った。

「何処つて、家に帰るんだよ」

「う、家は、ここ」

「ここは爆弾で吹っ飛んだ。そして、俺の家はお前達の行く場所には無い」

「ふえ」

彼の言葉に、妹紅のただでさえ緩んでいた涙腺が完全に崩壊した。ずるりと、妹紅と輝夜の身体が腕からずり落ちる。怪我をしないように微小の衝撃波でクッションさせる。縋りつくように伸ばされる手を振り払い、早くこの場を離れようと足早になる。

「待って」

よりも早く、腰に感じる重みに足を止めた。尻に感じる柔らかかな感触に、彼は振り返る前にそれが誰であるかを察した。

「……何だ？」

「妻を置いて行くなんて酷いじゃない」

「もう、妻じゃない」

「いいえ、妻よ。貴方が愛した、唯一の、絶対の、愛する女よ」

「俺の知っている妻はあの時にいなくなった」

「いいえ、貴方の知っている妻はいなくなっていないわ。昔も、今も、そしてこれからも、貴方を愛し続けるだけよ」

「……永琳」

そつと後ろから回された腕を外そうとするが、その細うでから考えられないぐらいの力が込められる。痛みすら感じ始めた彼は、一言謝ってから、その両腕を力いっぱい叩いた。

パン、と乾いた音と共に、両腕が硬直する。隙を見て外そうとするも、まだ外れる気配が無かった。

「もつと打って」

永琳の言葉に、彼は動きを止めた。

「貴方に怪我をさせた、悪い妻を、もつと打って。蹴って……躡け

て……」

ぎゅうつと両腕に力が込められる。背中に感じる熱すぎる吐息に、続々と怖気が走る。

興奮している。彼は察した。

こんな状況で、興奮している。

こんな状態で、喘いでいる。

こんな仕打ちを受けて……欲情している。

その事実にも、思わず身震いしてしまうことを、彼は止められなかった。

なんだ、この女は……何が、どうなっているんだ？

そう考えた時、彼の行動は早かった。衝撃波で両腕を弾くと、少しでも離れようと走り出し……その直後、両足に走った激痛に、転倒した。

熱い、熱い、熱い、熱い、痺れ、痺れ、熱い、痺れ、熱い、痺れ、痺れ、熱い……痛い！

目の前の光景がグルグルと渦巻いて変化する。泥が口の中に入るのも構わずのたうちまわり、体勢を整える。両足から広がる違和感が次第に形を変え、具現化し、自分が倒れていることを理解した瞬間……それは痛みが変わった。

「が、ああ」

激痛。涙すら込み上げてくるそこを手探りで探ると、固い何かに触れた。見れば、両足に一本ずつ、棒状の何かが突き刺さっていた。矢だ。矢で両足を打たれたんだ。彼は、一瞬にして自らの現状を把握した。

その二本は、見事なぐらいに両足の筋肉に突き刺さり、行動を阻害していた。

「な……んだ、これ」

は、という言葉と同時に、風を切り裂いて飛来した二本の矢は、寸分の狂いも無く彼の両腕に突き刺さり、無効化させた。

痛みで声すら出ない。駄目押しと言わんばかりに飛来したもう二



本の矢が、腹部に直撃し、鮮血が地面を濡らした。

「が、ぐうう!?!」

朦朧とする意識に活を入れ、矢の飛来した先を見て……彼はいい言葉を見失った。

「ごめんなさい……でも、貴方が悪いのよ」

そこに居たのは、永琳だった。片手には弓を。片手には矢を携えた彼女は、地獄の底のような淀んだ瞳を彼に向けた。

「ごめんね、ごめんね、痛かったわよね、凄く痛かったわよね、でも、貴方も悪いのよ、奥さんを困らせるようなことばかり言うんだもの。あんまり困ったこと言われちゃったら、私だって怒るわ」

一步、一步、永琳が近づいてくる。次第にはつきり見えてくる永琳を見て、彼は恐怖を覚えた。

知らない。俺は、こんな永琳を知らない。誰だ？俺の目の前にいる、永琳の形をした女は、いったい誰なんだ？

永琳が、彼の眼前に立つ。戦々恐々としている彼を尻目にその場で腰を下ろすと、あつという間も無く、腹に突き刺さっていた矢を一本抜いた。

「うああ!」

悲鳴が零れる。聞いている者が思わず眉をしかめてしまいそうなその悲鳴を聞いて、永琳は笑みを浮かべた

「痛い？お仕置きだもんね、痛くて当然よね……うふふ、大丈夫、私がちやんと消毒してあげるから……んん、んちゅ」

「ぐああああ!」

血が噴き出している傷口に躊躇いも無く口づけし、傷の内部にまで舌を突きこむ。喉を鳴らして飲んでいく血液。甘露と言わんばかりにもう一本の矢を抜き取り、そこへ舌を、鼻先を突っ込んで彼を楽しむ。

そのあまりの光景に、遠くで成り行きを見守っていた永琳の部下の一人がその場で嘔吐した。その部下を最初に、一人、また一人蹲っていく様は異様だったが、彼も、永琳も、気にも留めていなかった。

た。輝夜と妹紅でさえ、永琳の奇行に放心している有様なのだから。内部を舐めまわす異物感に鳥肌が立ち、痛みで視界がかすむ。三回程、彼の意識が飛んだあと、ようやく永琳は傷口から唇を放した。ベトベトに汚れた血を拭おうともせず、それどころか血の匂いに酔いしれたかのように頬を紅潮させた永琳は、ん、と唇を噛みしめて、身体を震わせた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、ああ、おい、美味しい、美味しいわあ」  
「……………」  
「はあ、はあ、うふふ、つ、ぎ、は……………」

恍惚とした表情で、永琳は今しがた抜いた二本の矢を彼の眼前に差し出した。

「痛かったでしょう？ 痛かったわよね？ でもね、安心して。ちゃんと私にも罰を与えるから」

その言葉と共に永琳は矢を持ちかえると、勢いよく自身の腹部に突き刺した。

「っ！？」

この日、何度目か分からない驚愕が彼を襲う。先ほどまで自身を傷つけていた刃は、確かに永琳の腹部に収まって、彼女の衣服を紅く染めていった。

ぐちゃり、ぐちゃり、皮膚と肉と内蔵と血液が混ざり合う音が響く。凄まじい異物感と激痛が永琳の身体を襲っていることは明白なはずなのに、永琳は痛みどころか快樂すら感じてるかのようにあまやかな悲鳴をあげた。

「あああ、分かる、分かるかしら？ 貴方と私が混ざり合っているのよ………… ああ、ああ、貴方が入ってくる、貴方の皮膚と肉と内臓と血液が、私の中に入って…………、あ、駄目、駄目、我慢出来ない、いや、もう、もう………… 駄目え！！」

ビクン、と永琳の四肢が痙攣した。四散した彼女の体液が彼へ降りかかる。

と、同時に、音も無く現れた巨大な岩石が、永琳を押し潰した。

「……え？」

嫌悪感も痛みも忘れて、彼は目の前の出来ごとに呆気にとられた。何が起きたのか、彼には分からなかった。輝夜達が何かしたのかと視線を向ければ、彼女達も何が何だか分からないと言わんばかりに呆けた様子でこちらを見つめていた。

「ぐ、く、い、いつたい、何が？」

「喋っちゃ駄目だよ」

その言葉と共に、起き上がろうとするのを制するように、小さな手が彼の頭を押さえた。

聞き覚えのある声に、彼は瞳を動かした。幼子のように小さな手足、蛙の模様があしらわれた服……山吹色の髪に、特徴的な帽子。

ああ、その姿は。

「……諏訪……子？」

「おう、そうだよ」

久しぶりに見た諏訪子は、思いの外大人びて見えた。振り返った彼女は、途端、眉根をしかめた。

「凄い怪我しているじゃないのさ。後は私に任せて、休んでいなさい」

「いや、で」

『あばびをあえいうえぶば』

その言葉とは思えない言葉に、彼は息を呑み、諏訪子は舌打ちした。

大凡人間が発したとは思えない声。辛うじて人の言葉として聞き取れたそれは、岩石の間から漏れていた。

直後、肉と骨のひき肉が這いずって出てきた。元の原型が分からないぐらいにぐちゃぐちゃになったそれは、血の跡を残しながら近づいてくる。

辛うじて頭部らしきところにへばり付いた銀髪によって、彼はその物体が永琳であることに気付いた。同時に、喉元にせり上がってくる胃液を呑みこむのに一苦勞だった。

諏訪子は彼を守るように立ちはだかった。

「女の嫉妬は醜いとは言うけど、ここまで来ると醜いを通り越して、すごく醜いわね」

『どげ、わだじぼはべはいろつびなうお』

「ははは、一つつて……寝言は寝て言えよ、不老不死の化物」

轟音と共に永琳が潰される光景を最後に、彼は意識を手放した。次に目を覚ました時、全部夢だったな、ということを期待して。

平安編最終話：前篇（後書き）

次回で、平安編は終了します。一度でいいから、大きなおっぱいを揉みたい。心行くまで揉みたい。おっぱいが頭から離れない。ちょっと病院に行ってきます。

平安編最終話・後編（前書き）

ひさしぶりのギャグ回。昨日は夢におっぱいが出てきたので、気分がいいです。

## 平安編最終話：後編

最初、彼は眼前に広がる模様が何なのか意味が分からなかった。身体は鉛のように重く、頭は泥の海に4時間浸かったかのように鈍く、まるで言う事を聞いてくれない。

首を動かすのすら億劫で、視線を右に、左にやっても、景色は変わらない。遠くで鳥の鳴き声と、囁くような声が聞こえてくる。

5分、10分。何かを口にするわけでもなく、ただただ静かに時間が過ぎ去っていく。何度目かの鳥の鳴き声が耳に届いた時、彼は見あげている光景が、天井の木目であることに気付いた……というより、思いだした。

「……………」

「ここは？」

そう口にしたつもりだったが、彼の喉は張り付いたように動かず、ただ唇を震わせるだけに終わった。

意識して見れば、身体に至る所から痛みが走っている。この分では、起き上がることはおろか、寝返りすら難しいのではないかと、想像させる。

「いったい、何がどうなっているのだろうかと内心首を傾げた彼の眼前に、突如、人の顔が現れた。

「起きた？」

その顔には見覚えがあった。不思議な縁で寢床を共にした、あの赤毛の少女であった。少女は彼の驚愕に気付いているのかいないのか、一つ首を傾げた。

「待ってて、諏訪子様を呼んでくるから」

消え入るような声で告げると、少女の顔が迫ってくる。チュツと、頬に生温かい何かが触れると同時に、少女は身をひるがえして視界から消える。タンタンタン、と軽やかな足音が遠ざかっていった、……もし、ここで身体が動けたならば、今頃激痛と引き換えに飛

び上がっていたぐらいに驚いていたところだ。幸いにも、身動き出  
来ないおかげで、彼はその激痛から逃れることが出来た……もしか  
したら、それはある意味不幸なのかもしれないのだが。

ほう、と息を吐いて、彼は身体の力を抜いた。といつても、それ  
は気持ちの面だけで、実際はピクリとも抜けた感覚がしない。

なので、出来ることと言えば頭を回転させることしか出来ない。  
膨らむ想像と、思いだすのは意識を失う前の光景。

……永琳。

目を瞑れば、まるで目の前にいるかのように鮮明に思いだされる  
かつての妻の姿。岩に押しつぶされ、もはや解れた雑巾のような有  
様になつても、自分を求めて迫ってくる姿を思い起こすと、胸が締  
め付けられる思いだった。

静かに、時間が流れる。

大抵の問題は、熱いお茶を一杯飲んでる間に解決すると言った  
のは、誰の言葉だったか。その言葉通りまではいかないが、少し立  
ち止まることは出来た。

あの時は頭に血が上って自分でも激情を制御出来なかった。もち  
ろん、今もその激情は胸の奥に強く根付き、抑制の愛情を今か今か  
と食い破ろうとしているのは彼自身、理解出来ていた。

……愛情、か……。

その言葉が脳裏に浮かんだ時、彼は不思議な気持ちでそれを迎え  
入れた。素直に、感情を受け入れた。

永琳に対する怒りはある。自らが築いてきた価値観から考えても、  
到底納得はできない。彼にとって、とてもではないが、人間の命を  
あのように思えない。

永琳が月でどんな生活をしてきたのか。離れていた年月は永久の  
ごとく、最早お互いもう一度会えるなど、考えたことも無かったで  
あろう。言つなれば、既にお互いは死んだと思っていた相手である。



嫌いか、と聞かれれば、嫌いだ、と答えるだろう。  
憎いか、と聞かれれば、憎い、と答えるだろう。

……けれども、好きか、と問われれば、彼は即答出来る自信が無かった。

愛しているかと問われれば、好きかと問われた時以上に頭を悩ませるのは、想像するまでもない。

不思議だった。この気持ちか、いったいどんな感情であるのか分からない。好きなのか、嫌いなのか。愛しているのか、憎んでいるのか。答えが出そうでない。酷く、もどかしい思いで、自然と溜息が漏れた。

かつての自分なら、こういうときどんな答えを出すだろう。彼は、思う。

何時だって永琳を見て、何時だって永琳は自分を見て、何時だって二人は一緒だった。あの時の自分が、今の自分を見たら、笑うだろうか。それとも、嘆くだろうか。

這いずってくる永琳の姿が臉から消えない。消えてくれと思う反面、消えるなど考えてしまう自分が、どうしてか堪らなく情けなく思えた。

ほう、と三度のため息を吐く。声を出そうにも、掠れ声しか出せそうにない。

（それにしても、身体感覚がほとんどしないなあ……やっぱり怪我が酷いのかな……うん？）

ふと、何気なく視線を足元へ向けた彼の視界に、自身の掛け布団が内側から膨らんでいる、異様な光景が映った。

（なんだ？）

ピクリとも身体が動かない為、その膨らみが何であるか探ること出来ない。膨らみの位置から、それは腰のあたりから足元に掛けて何かがあるのは分かる。大きさから見て、子供一人分ぐらいであ

るのまでは分かったが、感覚が鈍い為、重さ等はほとんど伝わってこなかった。

呼びに行った少女はまだ戻ってこないのかと視線を彷徨わせても、気配すら感じられない。

さて、これはどうしたものか……と様子を伺う。と同時に、膨らみが音も無く動いた。

(　っ!?)

ただし、上方へ。その膨らみはモコモコと無音の進行を続け……布団の袂がフワリと捲くれた。

「はあ、熱い熱い、のぼせちゃいそうだよ」

そこから、頬を上気させた見覚えのあり過ぎる少女……諏訪子が息を荒げながら顔を覗かせた。それなりに長い間布団の中にいたのだろう。諏訪子の前髪は汗で額に張り付き、顔中に玉の汗が浮かんでいた。

何故か口元が真っ白な液体で汚れ、服はおろか下着すら見に付けておらず、辛うじて見える胸元の頂点は汗でぬらぬらと湿っていた。「ふひひ、久々のお勤めだから、涎が止まん……あ」

(　あ)

奇しくも、お互いの視線が交差し、互いの呼吸が一つになった。

「……………」

(……………)

重い。コークタールのように、重油のようにへばりつく静寂が、どうしようもない沈黙を伴って室内を木霊する。

スツと、諏訪子の頭が下がる。スルスルとテープを巻き戻したかのように静かに諏訪子の頭が掛け布団の中に入っていき、音も無く膨らみが先ほどの位置に戻った。

(……………おい)

「……………」

(……………何やってんの?)

「中に誰もいませんよ」

(いや、この状況でそれは……)

「中に誰もいませんよ」

(いや、どう見てもいるだろ!)

「中に誰もいませんよ」

(だからどう見ても……って、なに、なんなの、そのジュルジュル  
って音!? ちょっと諏訪子さん!? あんた何してるんだよ!?)

「なふあひふあふえふおふいはえおお」

(ちょ、おま、何言ってるか分からんうえに、感覚無いから本当に  
何しているのか分からん! なあ、ちょっと本気で怖くなってきた  
から止めて……ねえ、ねえ、ちょっとおおお!!)

ああ、ここで力尽きてしまうのか。

「何やってんだああ!!!! 諏訪子おおおお!!!!!!」

飛び込んだできた軍神、神奈子によって、彼にとっては始めての、  
諏訪子にとっては4度目の放出は未然に防がれたのであった。

色々な意味でぐったりしている彼の横で、鬼すら裸足で逃げ出す  
怒気に苛まれた涙目の祟り神という異様な光景が広がるのも、それ  
からすぐ後のことであった。

「……粘つくくて生臭い」

しかし、そんな騒動の隅で、さり気無く彼の布団の中に潜り込み、  
漏れ出た白色粘液を啜っていた少女の姿に気づく者はいなかった。

「……でも、なんだろう、すごく癖になる」

人知れず、彼が四度目の放出を行ったのはもう間もなくであった。

「……苦くて生臭いけど……貴方の匂いが凄い……美味しい」

なぜか睨みあう少女と諏訪子にもう一度拳骨を落とした神奈子は、  
諏訪子の信者に介助されて食事をしている彼に、一つ一つ説明して  
いった。

まず、彼にとってつい今さっきだと思っていた出来事は、実際には  
三週間も前の話であるという事。今日までの間、諏訪子達が協力

して介抱していたが、まだ傷は癒えていない。怪我が治るまでしっかり静養しろとのこと。

是非も無い。彼は僅かに顎を下げ、感謝の念を伝えた。満足げに頬を緩める神奈子の後ろで、なぜかいそいそと精力剤を用意する諏訪子。即座に落とされる御柱。もちろん、彼の視界には一切入らない。

次に、永琳達のこと。あの後ひと悶着あったらしいが、永琳は輝夜と妹紅が引きずってどこかへ逃げていったらしい。行方は探しているが、今も見つからない。その騒動で屋敷一帯は完全に更地になり、永琳の部下達全員とばかりで死んだとのこと。

非常に複雑な心境ながらも、彼は一つ、頷いた。悩んだところで、もはやそれは三週間も前の話だ。今更ウジウジしたところで何も始まらない。そう悩む彼の後ろで、いそいそと布団を敷く少女。二つ枕を並べて、ジツと彼を見つめるも、彼は気付く気配を全く見せない。

少女は彼を見つめた。

少女は彼を見つめた。

少女は彼を見つめた。

なに三回連続で見つめているわけ？

……誰も見つめていないですし、おすし。

ウザいなお前、喧嘩売ってんのか？

……胸無し神様が喧嘩売ってきた。私の怒りは有頂天になった。

マジでかなぐり捨てンぞ？

「おい、やめろ馬鹿」

再び落とされる御柱。潰される祟り神と、拳骨を落とされる少女。なんであいつら喧嘩しているんだろと首を傾げる彼。早くも力オスな空間が出来始める。

ふう、と疲れが増し増しされたため息が神奈子の口から零れる。

「とにかく、お前はしばらく傷を癒せ。旅をするにしろ、止めるにしろ、怪我を治してからだ……一応聞くが、旅を止めるつもりなど

ないだろう?」

止めないなら、首を縦に振れ。そう言う神奈子の言葉を聞いて、彼は首を横に振った。

一瞬、目を見開く神奈子。ゾンビのように起き上がる諏訪子。布団の中でウトウトし始めた少女。反応は様々。

「……もう、旅は終わったのか?」

「いや、終わっていないさ」

「だったら……」

「少し、疲れた……」

「……………」

（それとも、俺がここにいるのは迷惑か?）

「……そんなこと……あるわけないだろ……」

ゆっくりと身体を寄せて、神奈子は彼を抱きしめた。柔らかく、服の上からでもはつきりと知覚できる柔らかい弾力が胸に潰される。ぷにぷにによした感触と懐かしい神奈子の匂いに、彼は安心感を覚えつつも、されるがまま、抱きしめられた。

きや、と頬を染める信者と他人の不幸で飯が美味いとメシウマ状態になっている諏訪子を他所に、少女は夢の世界に旅立とうとしている。

（……ただいま）

「お帰り」

そつと、彼は目を閉じた。

「あ、美鈴ちゃん寝ちゃった。さすがの妖怪でも、疲れるわな」

（……え?）

「うん、知らなかったの? この子の名前だよ。紅美鈴と書いて、ホン・メイリンと言うんだよ。いくら妖怪でも、異国の出身だし、こっちはまだ身体が慣れていないんだろ? 身体もまだ成熟してないみたいで安定していないみたいだし、流されてきたのかもね」

(……………そうなの?)

「ああ……………って、君、知らなかったの?」

(……………)

「……………今度、話をしてあげなよ。結構、気にしているようだったから」

(……………ああ)

「その後、必ず私の部屋に来てね。二人目を作らなきゃいけない」

「仏の顔も三度までという名台詞を知らないのかしら?」

三度落とされる御柱。マジでキれる五秒前になった神奈子が、諷  
訪子にお仕置きしたのは、もうまもなくのことであった。

平安編最終話：後編（後書き）

平安編はこれで終わり。いやあ、長い闘いでしたね。こんなに続くことになるとは夢にもお……やめておこう、場を混乱させてしまうだけだ。

次回はさらに時代は後世に進み、東方典型録・幻想郷想起編になるかと思われます。

まあ、それまでに閑話みたいなものをいくつか挟むとは思いますが、これからもよろしくお願いいたします。

番外編：八雲紫の朝は早い（パロディ注意）（前書き）

／（罪）／ 紫様に添い寝される夢を見たぜヒャッハー！

／（）／

ちよつとフェチ色強いかも



番外編：八雲紫の朝は早い（パロディ注意）

八雲紫の朝は早い。

日が昇り始めると同時に、紫は起きる。夏も終わり、季節はすっかり冬を眼前に迎え、動物に碎かれる霜の音が時折耳に入る。

八雲紫の朝は、貴重な時間であり、まず、隣で寝ている彼の観察から始まる。

身体中に感じる彼の名残に身震いしつつ、紫は張り出した膨らみを彼の右肩に押し付けて、そっと片手で彼の頭を抱きかかえる。敏感な部分が触れた拍子に走った快感に、思わず息が漏れる。

それを誤魔化すように、静かに鼻先を彼の頭に近づければ、濃厚な汗の臭いと、自分の臭いと、性の臭いが鼻についた。それだけで、昨夜の燃え立つような両胸の尖りが、残照を楽しむかのようにピクンと震えた。

「なんだか、息が荒いのですが、紫様？」

紫の向かい側……彼を挟んだ反対にて、左腕を抱きしめて横になっていた女、八雲藍は、主人である八雲紫の突然の行動に、半眼になった。

さらりと流れる金髪が、ゆるやかに広がる。100人中、99人が振り返りそうな美人だ。

「ここを疎かにすると、一日を通して張りが出てこないのよ……だから、一瞬の気の緩みも許されないわ。藍もそう思うでしょ？」

否定はしません。あと、何気なく人の心読まないください。九尾の狐である私もビックリです。

「あなた、妖怪でしょ。それに、深呼吸しているだけよ。一瞬の気

の緩みが命取り。今のうちに色々堪能しておかないと……藍もどう？」

昨日あれだけ腰を振ったせいで、もうお腹いっぱいです。喋るのだって億劫です。

「ふふふ、喋れないのは、喉が枯れるまでしゃぶったからでしょうに……」

そう言うと、紫は彼の黒髪に顔を埋めて、最後の一息とばかりに大きく深呼吸をした。

スーッと空気が紫の肺に吸い込まれていく。同時に蕩けていく表情に、傍で見ていた狐の妖怪、八雲藍は一つ欠伸をした。

障子越しに届く僅かな日光が、紫の豊満な膨らみを淡く照らす。白くも、体温の温かさが感じられる淡い紅潮の肌には、いくつもの行為の名残が見え隠れしている。

いったい、どれだけの量を出したのだろうか、胸の谷間にはこびり付いた雄が幾重にも重なって濁っていた。

そんな主人の姿を見て、藍は同性でありながら、眼の前で彼の頭を抱きしめている女に見惚れた。

勝てない、と思った。顔の造形だとか、身体の作りだとか、好みだとか、そういうものではなく、存在に負けているということを思い知った。

もちろん、藍自身、自分の身体には自信がある。顔の造形とて、かつては一国の王を虜にし、国を傾かせた傾国の美女とまで謳われた自負がある。

なのに、藍には、眼の前の女性に女として勝てる自信がまるで無かった。例え一国の王に愛されても、一国の王よりも金を持つ男に愛されても、

一国の王よりも金を持つ男を嫉妬させた美男子に愛されたとしても、藍は八雲紫という存在に、膝をつく以外の選択肢を選べそうにないと思った。

その姿はあまりに神々しい。それでいて、あまりに官能的。もし、自分が男であつたならば、きっと恋焦がれて、恋焦がれて、それで、指一つ触れる勇氣すら出せずにその姿を見つめる。そんな自分を想像させてしまふ、何かが紫にはあるのだと、藍は思った。

紫様、そろそろ。

見惚れていた自分を叱咤し、藍は心の中で念じた。わざわざ心の中を読むなんて面倒なことをしたのである。どうせ、今日一日はこんな話し方をしろということなのだろう。

その藍の推測を肯定するかのように、紫はうさんくさそうな笑みを浮かべると、静かに彼の頭を放した。

その所作一つ一つに感じられる確かな愛情に、藍はふと、自分の考察に納得した。

「……さて、着替えましょう」

ええ、あの祟り神が来る前に。

結界をぶち破ろうとしている気配を感じた紫は、スツと手を上げると、指をパチンと鳴らした。途端、音も無く彼女達の眼前が切り開かれた。

慌てて立ち上がろうとして、その場にへたり込んだ。昨夜の名残から、まるで足腰に力が入らなかつた。

顔を紅くして恥じらう藍を見て、紫は慣れた様子で切り開かれた空間のスキマに手を入れて、従者と自分の衣服を取り出した。

さらにスキマは無音のまま3人の身体を上から潜るように入り抜けて、閉じた。

後に残つたのは、名残一つ残っていない、玉の素肌だけであつた。雪こそ降らないものの、もはや寒さは冬といつていい。

布団から出なくとも張りつめた冷たさは手足を凍えさえ、布団から

出れば刺すような冷気が肌にまとわりついていた温もりを一瞬で奪い去った。

八雲紫はいまだ眠り続けている彼にひとつキスをすると、昨夜脱ぎ散らかした彼の衣服を大切にスキマの中に仕舞った。

「さあ、彼の臭いが染み付いた禪はしまっっちゃおうねえ」

諏訪子は寝起きの脇の味、美鈴は毎朝の一番搾りによる飲尿が健康の秘訣というけれど、私はやっぱりこれね。

そう話す紫の目は、童女のように穢れない輝きがあった。

空しいと感じた時って、あるんですか？

藍の言葉に、紫はピタリと動きを止めた。そして、寂しそうに微笑んだ。

「この性癖はねえ……新人の入れ変わりが激しいのよ。たいていは罪悪感を覚えて途中で違う性癖に目覚めたり、または中身に目を向けるあまり本質を疎かにしたり……ねえ。30年もこの道が続けている私から言わせれば、我慢が足りない、の一言だけどね」

でも、そう語る紫様は、どこか寂しそうだ。そう、藍は思った。

紫は、さらに続けてこう言った。

「この性癖を続けていく際、何より気をつけなければならぬのは、無茶をしないことよ。我慢が足りなくて脱ぎたてを手に入れようとして、その都度お仕置きされて脇フェチに逃げた悲しい神もいたわ」

その瞬間、紫の脳裏には懐かしい光景が映し出された。見ていて震えてしまいそうなくらい御柱に漬された祟り神を前に、言い仕事

をしたと言わんばかりに額の汗を拭う軍神の姿。さりげなく戦利品を履く美鈴を見て、戦慄を覚えたのは言うまでも無い。

フェチというものがどういうものか分かりませんが、凄いものなんですね。南蛮の言葉ですか？

「うふふ、そうよ……次に気を付けるのは、スリルを求め過ぎるということかしらね。下着フェチとしての勘が試されるわ」

基本的に彼の使用済みならば満足するけど、その時の気分に応じた生じやないと完全には満足してくれないのが、ベテランの悲しい辛さだけだね。そう語る紫の眼には、臭い職人としての誇りが見え隠れしていた。

下着フェチとして大成するにも、相応の苦しみがあるのですね……でも、辛くないのですか？

言われなくても分かっている。そう言いたげな表情を、紫は浮かべていた。

「……そうね……最初は誇りだとかそういうのが抵抗していたけど、一回、二回とやっていくうちに、これが大好きになっちゃったわ」

そう言いながら、紫は再びスキマを開くと、禪を取り出した。一部の無駄も無い、清流のごとく、流れるような所作で禪の香りを嗅ぐと、速やかにスキマの中へ戻した。

常人なら裏返したり生地を伸ばしたりといった動作が、紫にはまるで見られない。取り出すと同時に当てる位置を合わせる。手なれたその動作には、確かな技術があり、何気ない動作に職人の技が光る。

「好きで始めたことだから……自分で選んだ道だもの。後悔はしていないし、止めたいと思っただけではないわ」

下着フェチの灯火は弱い……でも、とても輝いている。そういうことですね、紫様。

結界をぶち破った諏訪子が轟音と共に乱入してくるのは、藍がそう言い終えた直後であった。

今までにも何度か見ましたが、いつも今日みたいな日に集めているのですか？

目つきが怖い諏訪子に受けた傷を手当しながら、藍は主人に尋ねた。激怒した神奈子と共に引きずられていった諏訪子の悲鳴が、耳に新しい。

どさくさにまぎれて下着を美鈴に奪われてしまった紫は、気にした様子も無く、質問に答えた。

「今日だけじゃないわよ。彼に気付かれないように下着を交換したり、服を取り換えたりもするわ。ご飯を食べているときとか、眠気でウトウトしているときとかが狙い目ね」

ああ、でも、前者は素人にはお勧めしないわ。スキマを応用した技だし、完全に会得するまでに5年は掛ったから。

そう話す紫は、美鈴から奪い取った黄色い液体を一口飲んだ。わずかに感じるアンモニア臭に、藍は、身を引き締めた。

紫様ともなれば飲むことも出来るようになるのですね。私はまだ、そこまでは至っておりません……お恥ずかしい限りです。

俯く従者に、クスリと笑うと、紫は目を細めた。まるで、昔の自分を見ているようで、不思議な気恥ずかしさを覚えた。

「大丈夫よ。だって、あなたは私の式……もつと自分に誇りを持ちなさい。世界中を探したって、私の式は貴方以外いないのだから」  
はい。

涙がこぼれそうになった自分を、藍は叱咤しなくなった。未熟な自分を褒められることに、未熟者ながらのプライドと、嬉しさがせめぎ合い、言葉が出てこなかった。

それすらも紫にとっては想定内のことで、ただただ俯いて涙を堪える藍を見て、紫は最後の一口を飲み干した。

「……うふふ」

紫の指が空を切る。指が通った後に出現するスキマから、紫は諏訪子の猛攻から守り抜いた禪を手に取る。時間が経過しているので温もりは無くなっているが、顔を近づければまだ十分な香りを内装していた。

「藍」

呼ばれて、藍は顔をあげた。鼻先は紅くなっており、目じりに溜まった涙が、いかに彼女が激情に耐えていたのが優に想像出来た。

「ほら」

折りたたまれた禪が、藍の顔を覆う。突然のことに、藍は反射的に禪を手で押さえた。

同時に、鼻孔を通して肺を満たす芳醇な香りに、藍は痺れるよう

な快感が背筋を走っていくのを実感した。

脱ぎたては良い。一度この味を知れば、確かにそれ以外で満足出来なくなるのは同意だ。

なるほど、幾人もの先人達が危険性を恐れて別の欲望に逃げたのが良く分かる。これは……。

「大丈夫」

我に帰る。禪から顔を上げれば、慈愛に満ちた主人の視線が向けられていた。

紫様。

「今はまだ、色々なモノが邪魔をして、素直に楽しめないでしょう。でも、それも時間が解決するわ。そのときが、貴方が一つ、妖怪としても、女としても、成長したときよ」

……はい！

「ふふふ、それじゃ、もうしばらくそれは貴方に預けるわ」

え、いいんですか？

「いいのよ。まだ72枚のコレクションがあるから」

紫様……一生付いています。

「嫌と言っても、貴方が一人前になるまでは、引きずってでも来てもらっわよ」

そう語る紫の横顔は、まさしく職人のそれであった。

今日もまた、紫は藍へ己の全てを教えていく。それは明日も、明後日も、変わらないだろう。従者が、彼女にとって一人前になったと思えるまで。

そう、八雲紫の朝は早い。



番外編：八雲紫の朝は早い（パロディ注意）（後書き）

私に変態だって？

HAHAHAHA、そんなバカな話があるわけがない。

閑話：彼の話（前書き）

久しぶりの更新。おっぱいパワーの充電が完了されましたので、そろそろ執筆を再開したいと思います、おっぱい。

ところで、今更ながら、私的には典型録はどう高く見積もってもR-15に達するか達しないかぐらいなのですが、皆さまはどう思うでしょうか？

ノクターンに移った方がいいのかな？

## 閑話：彼の話

うららかな昼下がり。遊びに来た萃香が珍しくも昼食を作り、それが以外にも美味かったのは今から一時間程前。

神社の離れに建設された私用の部屋にて、彼は紫と幽香に腕枕を強要されながら横になっていた。

温かな日差しが静かに室内を暖める。それだけでなく、両脇に感じる、己では絶対出せない、たわわな弾力がことのほか温かい。

紫はいつもの恰好で、目にはあまりに毒な巨乳を、ぽにゅん、と彼の脇に押し付けている。

幽香に至っては、流行の洋服だというカッターシャツに赤いチエツク柄の羽織物を見に纏い、彼を抱きしめて、

横腹にこれでもかとの二つの砲弾を押しつけていた。砲弾を抑えるにはあまりに薄く、むしろ服越しにしか成し得ない歪な柔らかさに、彼は鼻息が荒くなるのを必死で堪えた。

片方は潰れるぐらいに強く、片方は淡く触れるように優しく。

両手でこねくり回したら、さぞ柔らかいだろうな、でも、三回揉む頃には5回ぐらい殺されるだろうな、とか考えているのは、ただの現実逃避。

大好物のお菓子をたらふく平らげた子供のような、にんまりと締りの無い寝顔を左右に置きながら、彼はひとつ、溜息を吐いた。

正直、拷問だ。そう思った彼は、何も間違っではない。今までも何度かこんな場面はあった。

大抵は一人だが、今日みたいに二人の時もある。大抵はこちらがウトウトしていたりするとき、さりげなく腕枕の形にされている場合が多い。

それでいて、こちらが寝返りをうつまで気付かせない辺り、大妖怪の基礎能力の高さがうかがい知れる。

まあ、たまに正面から、突貫してくることもあったりする。

腕枕してくれ！ とかなら、まだ可愛い。

紫や萃香なんかは頬を赤くして、遠回しに催促してくるあたり可愛げがあるし、

膝を叩くと、それはもう嬉しそうに頬を緩めて傍に寄ってくるのは男では無くても、癒されてしまうに違いない。

問題は、他の奴だ。

抱きしめろ、ていうか抱いてくれ！ もう溜まりすぎ！

ムラムラしすぎて下着がべちゃべちゃだ、気持ちが悪い！

とか鼻息荒く突撃してくる鬼やら花妖怪がいるが、あれは例外中の例外だろう。

抵抗することが出来ない相手とか、無茶ぶり過ぎる。筋力的な意味でも押し倒されたら最後、抜かすの3連発になるのだから彼としては堪らない。

事の最中に永琳の顔が浮かんで離れないので、彼としては心苦しくて仕方が無いが、顔には見せない。

抵抗というわけではない。下手に表情に出すと、寝取りって最高ね、と叫ぶ花妖怪と、言葉には出さないまでも似たような顔を浮かべる鬼が鬱陶しいからだ。

最近では天狗やら河童やら、様々な妖怪が姿を見せるようになり、彼の私室には誰かがいることが多い。

今のところ、訪問回数トップは射命丸文、犬走椋、姫海棠はたての3人が争っている。

ちなみに、彼はその3人が現れたとき、速やかに姿を隠すことにしている。これは諏訪子達も進んで協力してくれるので、今のところ3人に見つかったことはない。

何故かと言えば、人伝に聞いた話で真偽の程は分からないが、今年は年頃の天狗が発情期に入っているらしく、

ちょうど3人がそのど真ん中なのであるらしく、見つかったらただでは済まないという話だ。

発情期がどういふものかいまいち想像がつかない彼ではあったが、襲撃を逃れた彼が自室へ戻ると、

衣服や布団が例外なく謎の液体で湿っぽくなっている辺り、よほど辛いものなのだろうと、彼は推測した。

どおりで、血走った眼の幽香によって、半殺しにされる天狗等をよく見かけるわけだ、と彼は自らの腰に乗って跳ねる幽香を見て思ったものだ。

いや、あるいは半殺しにされても再度押し掛けてくる三人の淫獣に戦慄するべきか。いまいち判断がつかないが、両方ともろくでもない事には変わり無い。

八工を払うかのように薙ぎ倒す幽香に寒気を覚えないわけではない彼だが、それよりも、頬に返り血を付けたまま、蕩けるような笑みをこちらへ向けて。

「きゃ、もう、怖かった……お願い、慰めて」

と、怯えて言葉すら出せない女性の顔で擦り寄ってくることに、言葉にならない恐怖を感じていたりするのは、幽香には秘密だ。

先ほどまで気味悪いぐらいの笑顔で天狗を半殺しにしていた女と誰が思うだろうか。きっと、よほど勘の良いやつしか気づかないだろう。

話を戻そう。

天狗の発情期の話だが、つまり、彼女達3人は、雄を探しているのである。彼女達曰く、後腐れなく、周りの嫉妬を受けない相手となると、彼がちょうどいいらしい。

ついでに、アレの具合が立派だから……らしい。先日、粉を掛けたらしい雄天狗が、女怖い、女怖いと連呼し続けている姿を見かけたのに関係があるのか。

男としての矜持をこれでもかと砕かれたらしく、背中が煤けていた。

幸いにも、発情期の最中でもある程度の分別はつくのか、紫や諏訪子など実力のある誰かが彼の傍にいたときは襲ってはこない。

なので、最近は裾の中に手を滑り込ませて来ない限り、誰かの傍にしているようにしている。

うとうと。うとうと。うとうと。

ただでさえ日差しが暖かいのに、それ以上に温かいモノが左右に二つ。興奮を通り越して安らぎを感じ始めた彼の頭は、次第に動きを止めていく。

(……眠い)

うとうと。うとうと。うとうと。

眠りに入る直前の、眠っているのか起きているのか自分でも分からない境目。色々な思考が千切れ千切れに飛んでいく。

(……そういえば)

なんとなく、本当になんとか、それは思い浮かんだ。

(俺って、こんだけ長く生きているのに、いまだ経験人数が3人なんだよな)

アホらしい、といえばそれだけだが、この時の彼にとっては、けっこう切実な考えに思えたりするのが眠気マジック。

眠気で歯止めが無くなった思考が、次々に新たな思考を生み出していく。

(永琳と、勇儀と幽香の3人。極上の美女だから、俺的には何の不

満も無いけど、こんだけ生きて3人って、男としてどうだろ。もつと積極的に行動した方がいいかもな、俺？)

諏訪子の耳に入っていればとんでもない事態になっていただろう、その言葉は、幸いな事に口に出ることは無かった。

(しかも、その3人も今まで相手から言外に促されて、あるいは押し倒されて……がパターンだったしな……それって、いわゆるヘタレってやつか?)

(けど、俺っていまだに場の流れとか、そういう空気への持つて行き方とか、全然分からないからな……いざその場面になっても、何もできないで終わりそうだな)

(……おまけに事の最中でも、基本的に俺って寝ているだけだし……ていうか、体力持たないし、あいつら絶倫すぎだろ)

(諏訪子も最近俺を見る目が怪しくなってきたりして、俺ってもしかして、意外とモテるのか……まさかな)

そのまさかである。何度も言うが、諏訪子の耳に入ったら最後、一週間は監禁凌辱パターンになることは想像するまでもない。

彼のアへ顔ダブルピースなど、誰が得をするというのだろうか。

(どうせ勇儀と幽香も発情期か何かだろう。でなけりゃ、俺なんか相手にするわけないもん……あんな美人、男どもが放っておかないわけがない)

これまた本人の耳に入ったら以下略。

(……そうだ、今度試しに俺の方から誘ってみよう。そんでもって、冗談でしたって、笑わせてもらおう。永琳には悪いけど、あいつらだって酒の席でなら笑って許してくれるだろ)

なにが試しに、なのかは彼でも分からないが、彼の中では起きたら行く決定事項として脳内に記憶し、睡魔に身をゆだねることにした。

その直後、淀んだ瞳で部屋を覗いていた祟り神によって、こつそりと口内に怪しい薬が流し込まれたことに、彼は気付かなかった。

目覚めると、傍には誰もおらず、夕日が眩しかった。一つ、大きな欠伸が零れる。

「……寝過したか？」

「いや、まだだよ」

意外な返事に目を見開いて声の方へ首を向けると、そこには、いったいどこで手に入れたのか、艶やかな着物を見に纏った勇儀が、静かに杯に口を付けていた。

「随分深く寝入っていたみたいだね……可愛い寝顔だったよ」

そう、勇儀はカラカラと笑った。目に毒だと思えるぐらいに着崩した胸元からは、零れ落ちそうな上膨らみが見える。

その豊かさがはつきりと知覚できるのと、普段の姿から来る違いのせいか、何とも言えない奇妙な色気がそこにはあった。

見れば、勇儀の傍にはいくつもの酒樽が転がっている。はたして勇儀一人で飲み干したのかは寝ていた彼には分からなかったが、夕日に照らされた勇儀の頬は、それ以上にほんのりと赤い。

杯の大きさから考えれば、長時間飲み続けているということと、かなりの量を召していることはうかがい知れた。

……うん、酒も十分進んでいるみたいだし、どうやら発情しているわけでもないから、今なら笑って許してもらえるな……あれ？



俺ってなんでこんなことしようとしているんだっけ？

考えると、途端に頭痛がしてくる。本当に寝過ぎだな、俺、と彼は思いつつも、早速勇儀に尋ねた。

「勇儀」

「ん、なんだい？」

「お前が抱きたくなかった。お前を抱きたい。こっちに来てくれないか？」

「……………」

あ、これ、どう見ても失敗だ。言葉に出さなくとも、分かる事はある事を、彼は改めて思い知った。

途端に言葉を失くす勇儀。頬笑みのまま凍りついた彼女を見て、彼はお詫びした。

「すまん、冗談」

「そうか、冗談か。性質の悪い冗談だ、いますぐ犯してやるから横になれ」

「……………本当にすまん。怒ったか？」

「怒ってはいないさ。火照っただけだ。いいからさっさと脱げよ、こっちはもう大変なんだから、おう早くしろよ」

「え、あ、い、いや、あの、冗談、ほんのじょう、って、ちょ、おい、脱が、脱がすな」

「大人しくしろよ、すぐに気持ち良くしてやるから」

「いや、その台詞、言う相手が」

「あゝあ、知らないよ、私は。お前がそんなこと言うから、明日の朝まで止まらないぞ」

その夜、彼は夢の中で何度も彼岸花を眺めた。およそ4回ほど鑑賞してから、彼は朝日の素晴らしさを噛みしめた。

その後、あまりにも激しい凌辱に記憶を飛ばした彼は、妙に気だるい身体に鞭打って、様子を見に来た異性の知り合いに片っ端から声を掛けた。

幽香の場合。

……勇儀同様、口にした瞬間に押し倒されて、朝まで搾り取られた。計23回。

このときは、妙に寒々しい川の畔で休んでいる夢を見た。起きた後、目覚めの挨拶ということで、口で2回絞られ、計25回。

神奈子の場合。

……口にした瞬間、頬を赤らめた軍神の拳骨が脳天に突き刺さった。

その後、初心な娘のごとく、始終恥ずかしがりながらも、事が終わるたび、もう一回……と何度も強請られて、計5回。

蛇のように全身を絡めてくるには参った。

諏訪子の場合。

……口にした瞬間、鼻血を噴き出してダウンするも、即座に復活し、妙に手なれた様子で布団に引きずり込まれる。計13回。

しゃぶり方が半端ではなく、8回絞られて、計21回。しまった、タイミングを逃した、の言葉の意味は彼には分からない。

萃香の場合。

……神奈子同様、始終恥ずかしがり、行為の最中、常に口を手でふさいで声を出そうとはしなかった。

抱っこされた状態でされるのが良かったのか、終盤では小さいながらも、はつきりと喘いでくれた。計7回。

紫と藍の場合。

……紫へ問うた瞬間、顔を赤らめながらも、首を傾げられる。会話がかみ合わない二人を見て、事態を察した紫の従者である八雲藍は、耳打ちして真相を打ち明ける。

その後、男女が布団に入ることが性行為であると思っていた紫のカルチャーショックを他所に、手本を見せませすという事で、藍が先行。

その後、石像のように固まった紫を藍と二人でほぐしながら、なんとか1回。きつと今頃、コウノトリが赤ちゃんを運んでいるわね、と零す紫に藍が現実を教えて、その日は終了。

美鈴……いいですよ、と軽い返事と共に、押し倒される。だが、夕焼けよりも赤い頬には冷静さは微塵も感じられず、少しでも想定外のことがあると途端に停止。

その後、にへらにへら締りの無い笑顔で、計3回。小さな頃よりも四肢は肉付き、女としての色香を見せ始めていることを、彼は身を持って体感した。

以外や以外、お尻の感度が常人よりも発達しており、前よりも後ろにハマったようだった。

ナズーリン……こちらから何か言う前に、探し物はここにあったようだね、という言葉と共に股間に吸いついて離れず、先ず2回絞られる。

もっぱら後ろからの方がよいらしく、押し掛かるようにガツガツ責められるのが弱い。結局こちらの腰が抜けても離れようとせず、計15回。

にとり……みんなには内緒だよ、とのことで、穴にも躊躇なく舌を突っ込んでくる献身さ。

対面でやられるのがいらしく、そこらへんは大雑把なのか、興味本位で色々な姿勢を取ろうとする。以外とむっちりとした腰回り

で、力強い腰つき。計8回。

彼は目を見開いた。起き上がって、辺りを見回す。見慣れた家具は、ひっそりと闇の中に消え、よく見えない。

周囲を見回しても、幽香と紫の姿は見えない。寝巻に変わった衣服と、身体を包む布団を見て、彼は事の顛末を悟った。

同時に、今しがたの自分は、寝ていたという事を思い出した。

「……………え、全部……………夢？」

そのことに思い至った彼は、あまりの罪悪感と羞恥に、その場で自害したくなった。いくら夢とはいえ、自分を慕ってくれている異性に、ああも無節操に手を出すのはどうだろうか。

抱え込みそうになる頭をどうにか持ち上げ……………て、彼は枕の隣に置かれた紙を見て、戦慄した。

なにせ、そこに書き込まれているのは、自分が今しがた見ていた夢の内容が簡潔に書かれていたからだ。思わず紙を丸めて胸元に押し込んでしまったのは、仕方が無いだろう。

慌てて下腹部を確認するも、濡れた様子も無ければ使用した形跡もない。いつもの息子がそこにあった。

「……………寝よう、そつだ、これも夢だ、ははは……………」

虚ろな笑みで布団にもぐりこむ彼。その様子を、ジッと見つめる幾重の視線に、彼は終ぞ気付くことは無かった。

閑話：彼の話（後書き）

まあ、今回の話ぐらいなら、高く見ても  $R - 12$  ぐらいかな。私的には  $R - 10$  ぐらいのレベルだと思っています。

おっぱいの単語がひとつ出ると共に、 $-1$  の計算方式です。

閑話：紅美鈴の考え事（前書き）

今回はまじめな話。まあ、まじめな話と思うかは、読んでいる人次  
第ですけど。

あ、エロは控えめね。

## 閑話：紅美鈴の考え事

鍛錬とは、突きつめれば苦痛との戦いである。そう悟るまでに、自分はどれぐらいかかっただろうか？

夏至をいくらか過ぎたとはいえ、早朝の空気はまだまだ涼しい。神社の離れに用意された中庭も多分に漏れず、信者によって整備された美しいその場所は、なおさら涼しく思える。

その中庭の一角で、美鈴は毎朝の日課である型の鍛錬を行っていた。

右に、左に、音も無く緩やかに流れ動く様には、ただ身体を揺らしているようにも見える。

だが、よく目を凝らせば、淀みなく動かされる四肢には一切の途切れは無い。

早く、遅く、突然変化する緩急に思わず瞼をしばたかせてしまう。

それでいて、静かに伸ばされる手足には傍目から見ても力が込められているのが分かり、

全身を覆うように掻いた汗が美鈴の足元に黒い円を作り出していた。

首元が古ぼけた衣服はすっかり汗で染まり、緩んだ首元からは、緩やかな膨らみを中心にが見えそうになっていた。

それどころか、長時間に及ぶ鍛錬の影響か、中心の蓄は目に見えて尖り、汗で濡れた衣服を内側から押し上げていた。

グツ、と美鈴の足が跳ねる。風を切って片足が頂点で止まる。予備動作無しの前蹴りは、素晴らしい柔軟性によってほぼ真上まで足裏が上がる。それによって腰巻がまくれ上がり、

亀裂を守るにはあまりに頼りない、薄く繁茂した草原が露わになる。

汗で滑る草原から、ポトリと汗が滴り落ちる。

もしも、周囲に殿方がいたならば、普段から羞恥心を持ってと言われる美鈴とて、慌てて踵を下ろしただろうが、

今は幸いにも周囲に人影は無く、美鈴の感覚からも周囲が無人であることを伝えていた。なので、美鈴は思う存分、足を持ち上げた。

水の中を泳ぐように、片足が宙を漕ぐ。露わになる谷間と窄まりを舐めるように、早朝の清涼さが通り過ぎていく。

蒸れた香りは誰にも知られることなく、大気へ四散していく。

一朝一夕では成し得ない錬度が、そこにはあった。

静かに、美鈴は足を下ろし、半歩踏み込んだ体勢……いわば、自然体になると、ひと息分、ゆっくり空気を吸い込んだ。

目に見えて美鈴の胸元が膨らんでいき、衣服にはつきりと二つの尖りが映ると、今度は音を立てて息を吐き出した。

「……………」

同時に、周囲に満ちていた気迫……張りつめた空気が四散していった。

はあ、と美鈴がダメ押しに息を吐くと、今度は見に見えて空気が和らいだ。それに合わせるかのように何処からともなく小鳥が飛んできて、美鈴の近くに生えている木に止まって、毛づくろいを始めた。

その様子を見ていた美鈴は、ごめんね、と小鳥に謝ると、小鳥は知ってか知らずか、再び枝から飛び上がると、軽やかに鳴きながら大空へ羽ばたいていった。

「……………ふう」

鍛錬とは、突きつめれば、如何に上手に自らを苛めぬかに至る。そう悟るまでに、自分は何度目の日課を終えただろうか？



「…………あゝ、あつちい…………」

火照った身体は、動く事を止めた美鈴を責めるように急ぎ立てる。温まった筋肉は、全力を出せと言わんばかりに体温を生み出し、それを宥めるように身体中の皮膚から汗が噴き出していく。

パタパタと衣服の胸元を摘まんで振る。途端、モワツと立ち上る臭いに、美鈴は眉根をしかめた。自らの出したものなので、大した嫌悪感はないが、鬱陶しいことには変わらない。

汗で濡れた衣服は思ったよりも肌に張り付き、また思ったよりもはるかに素早く冷えたそれは、思わず身震いしてしまうぐらいに冷たく肌に張り付いた。

いくら妖怪とはいえ、美鈴とて体調を崩すときは崩す。その辺りは人間とやら変わらず、むしろ人間に近い性質を持つ彼女にしてみれば、事後処理は大切であることは見に沁みて分かっている。

とりあえず、軽く湯船に浸かってから朝食をいただくかな。

そう思った美鈴は、一つ、くしゃみをしてから、足早に後片付けを始めた。

鍛錬とは、突きつめれば我慢の連続である。悲鳴を上げる四肢を鼓舞し、誤魔化し、煽って、いかに自らの無茶を押し通すのかということである。

そう悟るまでに、自分はどれぐらいの鍛錬を積み重ねただろうか？

美鈴が暮らす神社は、下働きが大勢いるせいか、共同のお風呂はそれなりに大きい。

大人15人程度ならくつろいで入れる程度はあり、美鈴は普段その共同風呂を利用していた。

しかし、風呂を沸かす薪はそれなりに値が張り、使用される水も大量である。

一人が入りたいからお湯を沸かすわけにはいかないし。日にちによって入れる日が決まっており、また、入れる時間帯も制限されているうえに、基本的に蒸し風呂で、桶に注がれたお湯で身体を清めるのが一般的。

その為、曜日以外で身体を清めたいときは、水で濡らした手拭いで身体を拭くのである。

唯一の例外は神社を束ねる二柱で、また彼や美鈴も同様なのだが、彼も美鈴もそこは信者に倣ってきっちり線引きし、曜日以外は自分たちのやり方で身体を清めている。

基本的に男連中はそうだが、女連中も毎日風呂に入る習慣はなく、いくら彼が衝撃波で湯を沸かそうにも、誰も彼も面倒臭がってお風呂に入ろうとはしない。

その上、大勢が入ればそれだけ湯は熱伝導で冷めやすくなり、また水の量が多ければ多いほど、その都度湯を沸かす彼の負担も大きいので、このような形に収まっている。

まあ、基本的に毎日風呂に入るのは神様二人と、彼と美鈴しかないなので、この4人用に離れに専用の風呂部屋が用意されているので、

美鈴が曜日以外で身体を清めたいときは、この風呂部屋を利用して

いる。  
もちろん、共同風呂が使用できる日は、そっちを利用して

使用する水は、美鈴が自分で川から汲んで来なければならないが。  
「寒い寒い、早く入って温まろう」

部屋に入ると、すぐに脱衣所になっており、奥にある扉を開けると浴場になっている造りになっている。

履物を脱いで脱衣所に上がり、壁に直接打ち付けられた棚に置か

れた籠に、ほいほいと衣服を脱ぎ入れる。

あつという間に生まれた姿になると、美鈴は大腿で脱衣所の隅に置かれている巨大樽へ近寄った。一步進むたびにプルプルと膨らみが揺れて、柔らかそうなお尻が左右に揺れる。

傍によれば、その樽の巨大さが見て取れる。美鈴とて小柄ながらも一端の女の子ではあるが、それでも美鈴の頭よりも高いそれは、とてもではないが女の子の細腕では持てそうにない。

しかし美鈴は、よし、と一つ気合いを入れると、樽を抱えるようにしゃがんで抱きつくくと、苦しげも無くヒョイと持ち上げた。

「あれ？」

重さにすれば大人二人分は楽にあるであろうそれを、美鈴はさらに右に左に傾ける。お尻も右に左に傾く。ぴちゃり、ぴちゃりと桶の水が跳ねる。くい、くい、と腰がくねる。

そうして、ようやく美鈴は違和感の正体に気付いた。

「ありやりや？ 水が入っていないなあ、なんでだろう？」

よいしょつ、掛け声と共に美鈴は桶を下ろすと、首を傾げた。毎日、お風呂に入れるように、美鈴が鍛錬がてら、川から水を汲んできているのである。

なので、桶にどれくらい水が入っているのかも知っているし、そもそも一昨日水を汲んで来たばつかなので、桶の中には後1回分の水が入っているはずである。

信者が使用した？

いや、それはない。この桶の水はお風呂用に使われていることは知っているし、使用するにしても、使用するときには必ず美鈴に報告が行くはずである。

そもそも信者は掃除の時以外はおいそれとこの部屋に入っていないので、そうそう使われることはないし、使ったとしても微々たる量なので、空になることはない。

桶の縁に飛びかかり、グツと身を乗り上げて中身を覗く。だが、そこには先ほどの違和感の通り、少量の水が底に残っているだけだった。

「あつれまあ……おかしいな……まだあつたはずなんだけど」

どうしようかな、と思いつつ、桶から飛び降りて、代わりの水は無いかと辺りを探る……と、顔を上げた美鈴の視界に、それはあった。

……？

籠を置いた棚の3段上、美鈴が背伸びしたうえで手を伸ばしても、ぎりぎり縁に指が届くか届かないかの高い段。

そこに、ポツンと人目から逃れるように置かれた籠があった。使われていない籠は、全てひっくり返されて隅に纏めて重ねられているはずなのだが、

その籠には衣服が載せられていて、既に誰かが使用しているのが遠目にも分かった。

「あらら……先客か……て、あれってどう見ても男物ですよね？」

男物、という時点で、既に誰が入っているか、検討が付いた。というより、この風呂を利用する男など、彼以外いない。

一応、不測の事態で身体を汚した者（あるいは療養の意味で入浴が必要な者）には事後報告で使用する事は出来るが、二柱が使用

する風呂など、恐れ多くて使う信者などいるはずもなく。

そうになると、消去法で答えは彼一人しか残らない。

改めて扉向こうの気配を探ってみれば、彼女の良く知っている気配がそこにはあった。耳を澄ませれば、わずかに物音が聞こえる。なるほど、彼が使っているのか。それならば納得が出来る。また、お得意の衝撃波で水を振動させて湯にしたのだろう。

それならば、話は早い。美鈴は頭を悩ませた駄賃代わりに飛び上がって、衣服の山から一枚引つ張りだすと、鼻先を突っ込んで大きく息を吸った。

男特有の汗臭さが鼻孔を充滿する。むせ返るような、言葉にできないその臭いはお世辞にも良い臭いではなく、肺を満たして全身の細胞へ臭いが溶け込んでいく。

「ん~~~~」

美鈴の四肢が小刻みに震える。顔に服を押しつけて、2度、3度、深呼吸する。グツと美鈴の背筋が伸びあがり、猫がそうするように、弧を描いてなだらかな背中が反り返った。

「~~~~っ、はあ、汗臭っ！」

そういう美鈴の表情には一切の嫌悪は見られない。それどころか、唇は弧を描き、傍目にも好感的な感情を抱いているのは明白だった。

「わっっ」

元の場所へ放り投げる。吸い込まれるように籠へと入った衣服を見届けると、美鈴は風呂場への扉に手を掛ける。

何の予告も無く、ガラリと扉を開いた。

そこには、湯船の縁にもたれかかってだらりと脱力した彼がいた。よっぽどくつろいでいたのだろう、手足をだらりと伸ばし、身体の一部が水面に浮かび上がる形で身体が漂っていた。

姿を現した美鈴の視線と、彼の視線が交差する。緩んでいた彼の頬が硬直し、視線が美鈴の五体を幾重にも往復する。

「おや、亀さんも随分くつろいで居らっしゃる」

そこは、不運にも隠しておきたかった場所であったが、それを彼に問うのは酷というものだろう。

失礼しますの言葉と共に、美鈴は後ろ手に扉を閉めた。今だ硬直する彼を他所に、足早に湯船に近寄り、転がっていた手桶で湯を掬って頭から被った。

少し熱めの温度が身体を滑っていく。自覚していたよりも冷えていた身体が身震いするように反応し、美鈴は軽く顔を拭った。

「ちょよ、おま」

「ちよつと入りますよ」

「あ、いや、待て」

「待ちません、寒いんですから」

再度お湯で掛け流し、手桶を置いてから片足を上げて湯船の中に飛び込んだ。

飛び跳ねるように彼の身体が湯の中へ消える。同時に、若干体勢が崩れかけた美鈴を支える為に伸ばされた彼の両手は、美鈴の尻をしつかりと掴んだ。

もにゆりとした、何とも言えない弾力が彼の掌に広がる。成熟した女性よりも硬く、熟す兆しすら感じられない童女よりは柔らかい。不思議な弾力に、彼はどきまぎしつつも、眼の前の少女をたしな

めた。

「おい」

「おっとっと、ありがとうございます」

「こら、もう出るから、それまで待て」

「そんなつれないことをおっしゃらず、私が温まるまで付き合ってくださいよ」

そう言うと、美鈴は彼の制止を振り払い、ぽよん、と尻たぶを彼の胸板へ押し付けた。その予想外に冷えた尻たぶの感触に、彼はピクリと動きを止めた。

そうなればもはや彼に勝ち目は無い。無理に立ち上がれば相手は前のめりになって倒れかねないし、いくら相手が妖怪であるとはいえ、普通の少女と変わらない姿である彼女へ無理やり行動を起こすのも引ける。

結局、いつものごとく彼は押しに負けてしまい、美鈴とお風呂を同伴することになってしまった。

足を曲げて場所を空けようとする彼の努力を、しっかりと身体を伸ばして浸からないと疲れが取れないという美鈴の言葉と行動にまたもや押し負け、

彼の身体にもたれかかる形で湯船に浸かってしまったのであった。

しかも、美鈴は男の弱点を包み込むように尻たぶを開いて隠すべき穴をさらけ出すと、器用に弱点を挟んで座ってしまった。

少女特有のもちもちとした弾力に弱点を挟み込まれると、弱点表側に皺穴の感触が伝わってくる。

色々な意味で顔を引きつかせる彼を尻目に、美鈴はグイッと腰を彼に押し付けると、肩まで湯船の中へ浸かった。

「ああ……気持ちいいですね」

「……もう、何も言わん。くそ、最近になってあいつらに感化され

やがって……いくら俺でも、理性の限界を突破するぞ……」

「んん、何か言いましたか？」

「何も言ってねえよ……」

「……そうですか」

妙に残念そうな表情を浮かべている美鈴の頬は、湯の温かさとは別の要因で頬を紅潮させているようだった。

「恥ずかしいのなら止めるよ、と喉まで出かかった言葉を、彼は寸でこのころで呑みこんだ。やぶ蛇になりそうだし、何か嫌な予感を覚えたからだった。」

「ていうか、いいかげん一緒にお風呂入ろうとするのやめろよ」

「なんですか？ 前は毎日一緒に入っていたじゃないですか」

「そんなもん、お前がもつと小さかった時の話だろ……今は違う」

「へえ、どこが違うんです？」

「そんなもん、決まって」

「身長以外でお願いします」

「……まあ、色々だよ」

「ほほう、色々と言つと、二ことか？」

そう言つと、美鈴は彼が反応するよりも素早く後ろ手に大きな両手を掴むと、自身の胸を掴ませた。

「もにゅ、むにゅ、言葉に表すなら、そんな言葉。何とも言えない弾力が掌に広がるのを彼は実感したが、されるがまま美鈴の胸に手をやった。」

「おやおや、嫌がらないんですか？」

「ニヤニヤと妙に癪に障る笑みを浮かべる美鈴に、彼はふん、と鼻息を鳴らした。」



「どうせ俺の力じゃお前には敵わん。されるがままでいるのが一番賢い方法さ」

「……あらら、そうきますか」

本当にされるがままなら、このまま押し倒してしまおうか。

胸中でうずき出した獣欲から目を逸らしつつ、美鈴は彼の手を自由にした。

鍛錬とは、言つなれば自己満足の世界である。どれだけの鍛錬を積み重ねても、どれだけの苦痛を乗り越えても、どれだけ肉体を研磨したところで、それそのものが称賛されることは決してない。

百万回の突きを行い、百万回の蹴りを行ったところで、だれが称賛してくれようか。せいぜい、それは凄いな、と一言で済ませられるのが落ちだろう。

いつの頃からか、そのことに思い至った美鈴はそのことから目を逸らし、それを無いものと思い続けてきた。

しばしの沈黙を破ったのは、美鈴からだった。

「あのさ」

「うん？」

「……私って、強いかな？」

「強いよ」

即答だった。もしかしたら言葉を濁されたり、弱いと言われると思っていた美鈴は、予想外の答えに目を瞬いた。

「お世辞言わなくてもいいですよ」

「世辞でそんなこと言う性格じゃねえよ。世辞以前に、俺を片手でぶちのめすようなやつが弱かったら、俺はあれか、毛虫か？」

衝撃波を出す毛虫って、どんな毛虫だよ。そう零す彼が、美鈴にはどうしてか、それが強がりでもなければ、諦めの意味でもない。

何の劣等感も覚えているようには見えなかった。

どうして彼はそう思えるのだろうか。それがとても、美鈴には不思議に思えた。

「……強くなりたいって、思った事、あります？」

「ありすぎて困るぐらいだ」

これまた即答だった。失礼な事を聞いたかな、と考えていた美鈴はまたもや予想外の答えに首を傾げた。

「強くなりたいって何度も考えたさ……隕石のときも、神奈子が来たときも……屋敷でのときも、何時まで経っても弱いままの自分を殴り倒したくなるぐらい願ったよ……強くなりたいって」

「……隕石？」

「昔の話だ」

昔の話。そう口にする彼を見るたび、美鈴は胸中を蠢く感情を自覚する。

時々、酒で酔ったときや、今のようなふとした時、ポロリと昔話を

美鈴は昔話をする彼が少し好きだ。昔の話をする彼は決まって、どこか懐かしそうで、どこか嬉しそうで、

どこか悲しそうで……どこか寂しそうで、年齢も体格も上の彼を、自分の胸に掻き抱いて慰めてあげたいと思えるから。

同時に、美鈴は昔話をするときの自分が嫌いだった。彼を喜ばせ、悲しませ、寂しがらせる記憶の奥にいる誰かを思うと、自分の胸を引き裂いてしまいたいと思うから。

「なんだ、強くなりたいのか？」

ハッと意識が浮上する。

「……強くなりたい……最近になって、考えるようになりました」「そうか」

「変ですか？」

「なにが？」

「強くなりたいって、考えることが、です」

「何かしらの武術なり鍛錬なりするやつに、そう考えないやつがいるなら一度お目に掛りたいものだ」

「……ただ、ただ強くなりたいだけでも？」

「強くなりたいってことに、理由なんてない。難しく考えたら、難しい答えしか出てこない……なに、理由なんて、時間が勝手に見つめてくれるさ」

そんなものなのだろうか？

美鈴にはよく分からなかった。

「俺は、そうだな……自分なりに、折り合いを見つけたよ」

「折り合い、ですか？」

「何て言うかな……自身の限界って、やつかな。相手の分野で張り合うんじゃないって、別のやり方でやっていこうって、考えるようになったな」

「別の、やり方？」

「力相手なら早さ、早さが相手なら技術、技術が相手なら力。まあ、

大まかに言えば、そんなところ。何時からか、相手と真正面から比べることを止めたってことだ」

合理的だ。自分の得意な分野で、相手の苦手な分野を攻める。とても合理的な判断だ。

けれども、美鈴がそれをするには、まだあまりにも若すぎた。

「……私にも、そう思える日が来るんでしょうか？」  
「逃げるみたいで嫌か？」

ピクリと、小さな肩が揺れた。

「い、嫌ってわけじゃないんです。そんなわけじゃ……」  
「まあ、そう考えるだろうな」

ポン、と頭の上に大きな手が置かれた。自分の手よりも一回り以上大きいそれは、ぐりぐりと彼女の頭を撫でまわした。

知らず知らずのうちに落ち込んでいた心が浮上していく。

こんなことで笑みを浮かべてしまいそうな自分に、美鈴はいつも頬を赤らめてしまう。

「そう考えられるうちは、まだまだ伸びる証拠だよ」

「そ、そういうもんでしょうか」

「そういうもんさ……まあ、これがもっと大きくなる頃には、答えの切れ端ぐらいは見つかるだろうよ」

そつと両手を伸ばして、美鈴の胸を揉みしだいた。むにゅむにゅと、将来を期待させる柔らかさと滑らかさが指先に伝わる。つい、流れて頂点に色づく二つを指先で解した。

ほんの茶目つけのつもりだった。彼にとってすれば、妙に落ち込

んでいる妹分の少女の気を逸らす程度の事でしかなかった。

「はあん」

だから、彼は数秒の間、それがなんなのか何も分からなかった。気付かなかつたから、そのまま指先をコリコリと動かした。

「あん、んん、うん」

美鈴の唇から、少女が出すにはあまりにも淫らな吐息が零れる。

「……………」

ピタリと、彼の動きが止まる。突然動きを止めた指先に、美鈴は振り返った。

蕩けた瞳が彼の目に飛び込んできた。ほんのりと色づいた頬には、いくつもの汗が流れ落ちていく。

半開きになった唇からは、一筋の涎がぼたりと垂れ落ちた。

……………どうしよう。

「さて、体も温まったし、俺はもう出るよあ痛ついてえ」

何時の間に持ち上げられたのか、彼の弱点は美鈴の太股に挟まれていた。

「……………あの、美鈴さん？」

「……………火、点けて置いて、それはないんじゃないんですか？」

細い指が、弱点の先端を舐めるように絡みつく。爛々と色づき始

めた少女の瞳を見て、昔は美鈴もこうじゃなかったんだけどなあ、  
と思うと同時に、遂にのぼせて意識を遠のかせた彼は、くたりと少  
女へ倒れた。

鍛錬とは……。

美鈴は、考えるのを止めた。考えるのは、何時だって出来る。考  
えるよりも、今、出来ることをしようと、彼女は思った。

「んぐ、んぐ、んぐ、むふふ、毎回思うんですけど、本当に濃くて  
飲みこむのが大変です。あんまり濃いのを飲まされちゃったから、  
すっかりこれの虜になっちゃいましたよ」

「……」  
「さて、腹の中は満たされましたから、次は胎を満たしてもらわな  
いと。運動しているから、しっかり食べない、と……ん、うん、ん  
あ」

「……」  
「ふふふ、おつきくて、硬くて、とっても美味しいですよ……うふ  
ふ、すっかり私のココ、あなたのコレに躡けられちゃった」

「……」  
「蕩けた顔しちゃって……いいですよ、私が気持ちよくして、あげ、  
ま、あん、しますから」

「種付けなら任せろ　　！！」  
「止めて……！」

のぼせて意識を失ってしまった彼を他所に、一部を湿らせた祟り  
神が乱入する事態になるなど、お風呂場は非常に混沌とした状況に  
なっていた。

閑話：紅美鈴の考え事（後書き）

ふと諏訪子と美鈴が扉へ目を開けると、扉の外からうねる注連縄とも御柱もとつかぬ、見るも恐ろしい軍神が私を見つめていた。

扉が音をたてている。何かゴツゴツした巨大なものが、扉にぶつかっているかのような音が。

その暴力はうごめくミシヤグジを蹴散らし、唾棄すべき御柱の一撃で扉をぶち破り、突如として現れた恐怖に美鈴は、名状しがたい悲鳴をあげた。

扉を押し破ったところでわたしを見つけれはしない。なぜなら私は湯の中に。

いや、そんな！ あの禍々しい御柱は何だ！ 扉に！ 湯船に！

「飛ぶながら御柱叩きこむぞ。こつちが大人の対応してれば、つけあがりやがって。謝れるうちに謝っておくんだな、おう早くしろよ」

狂気と戦慄の中、たちどころにわたしの意識は底知れぬ恐怖の深淵へと飲み込まれていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7769o/>

---

東方典型録

2012年1月2日00時44分発行